

マツド・トルネコ

トラネコ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

『トルネコの大冒険』が主な原作ですが、途中から『ドラゴンクエスト4』の世界観と融合します。

かなり残酷な表現、キャラの崩壊などがありますので、寛容な心をお持ちの方のみ、覚悟してから読み進めてください。



|      |                 |     |
|------|-----------------|-----|
| 2 9. | グレイト・ヴィレッツジ 2   | 441 |
| 2 8. | グレイト・ヴィレッツジ 1   | 413 |
| 2 7. | それぞれの陣営         | 397 |
| 2 6. | ダンジョン 50 階層にて 7 | 372 |
| 2 5. | ダンジョン 50 階層にて 6 | 358 |
| 2 4. | ダンジョン 50 階層にて 5 | 341 |
| 2 3. | ダンジョン 50 階層にて 4 | 327 |
| 2 2. | ダンジョン 50 階層にて 3 | 307 |

|      |                 |     |
|------|-----------------|-----|
| 3 9. | ダンジョンの深淵にて      | 646 |
| 3 8. | グレイト・ヴィレッツジ 1 1 | 625 |
| 3 7. | グレイト・ヴィレッツジ 1 0 | 600 |
| 3 6. | グレイト・ヴィレッツジ 9   | 582 |
| 3 5. | グレイト・ヴィレッツジ 8   | 558 |
| 3 4. | グレイト・ヴィレッツジ 7   | 543 |
| 3 3. | グレイト・ヴィレッツジ 6   | 527 |
| 3 2. | グレイト・ヴィレッツジ 5   | 501 |
| 3 1. | グレイト・ヴィレッツジ 4   | 482 |
| 3 0. | グレイト・ヴィレッツジ 3   | 463 |

## 1. そしてダンジョンへ・・・

——ダーマ職安にて——

一人のピンク色した鎧をつけた元兵士が、この神殿を訪れていた。

「何か……いい募集はないものなのか？」

「うーん……難しいですねえ、やはり年齢でほとんど引つかかってしまっんで……」

ダーマの担当神官も困り果てるのも無理はなかった。数年前、勇者がデスピサロを倒して世界は平和になった。だが、そのとき真っ先にリストラされたのは軍隊だった。魔物に破壊された町や村を復興させるにも莫大な費用がかかる。しかもライアンは40代後半の中間管理職。真っ先にクビになった……何の躊躇もなく。クビにされて真っ先に思い出したのは数年前にイムルの村の子供たちを助け出し、国王から報酬を受け、国中から期待されながら送りだされたあの時だった。あの時助けてくれたのはホイミンだけだった。他の臆病者は自分たちのことなのに、ライアンに全てを任せて、こうして用が無くなれば真っ先にお払い箱行きだ。

一体、自分は何をしてきたんだろう？

最近はいつもそう思う。勇者一行の中でも肉弾戦ではアリーナに劣ることもあって

か、ほとんど馬車の中でトルネコやブライと将棋をしながらベンチを温める日々が続いた。だから、今の平和が自分のおかげだとか言うつもりはさらさら無い。しかし、それでも死の危険を冒して戦ったことは事実であり、その報酬が今の現状では

「どっかで戦争でもやってやるか」

そう思うようになるのも無理は無かった。

そこまで考えていたところで、担当神官の求人票をめくる手が止まった。

「これなら一応は大丈夫ですね」

神官はそれをライアンの前に差し出すと、

「一応は」

と念を押すように言った。

見る前から大体予想はついていたが、見てからは目潰し草でも飲んでおけば良かったと思った。

『不思議のダンジョンに潜る冒険者募集中』

こんなダンジョンに潜る冒険者は、はつきり言って職業ではない。

こんなのは潜りたいヤツが勝手に潜っていればいいだけの話だ。何の保険も残業代も出ない上に実入りも少ない。

もつとマジメに探せよ、クソ神官が。誰のおかげでそこにいられると思ってるんだ……

だがここで暴れても仕方がない。目の前のとぼけた小動物みたいな顔をした老人の首をへし折ってやりたい衝動に耐えながら、

「他には何か募集はないのか？」

と必死に平静を装った。

「いいえ、今のところ、ライアンさんと条件が合うところはこれだけです」

何が条件だ。それは誰でもなれるんだよ！ 生きてさえいればな！

「では、また今度気が向いたときに来る」

そう言つて立ち上がろうとしたときだった。

「いえ、ちよつと待つてください」

早くも今日はどんな酒を飲もうか考えていた時、急に神官に呼び止められた。

「なんだ？」

「いえ、この事業主のところに『トルネコ商会』て書いてあるじゃないですか。詳しいことは書いてませんが、ここなら大企業ですから、少しはいい条件が見つかるかも知れないですよ」

「じゃあお前が行けよ」

と言いたいのを抑えながら黙つて求人票を受け取ると、ライアンはそのままダーマ職安を後にした。今日のところは家に帰つて酒だ。トルネコのところへはまた明日あら

ためていく事にしよう。

昼近くに目覚めたライアンは、少し頭が痛むのを我慢しながら『空飛ぶ靴』でバトランドからレイクバナへと飛び立った。

現地へついて驚いたのが村長の屋敷より何よりも大きなトルネコ商会本店の姿だった。住民を威圧する城のような外観でそびえ立っている。

だが待ち合わせ場所はトルネコ一家が前から住んでいた場所であり、以前と同じ、普通の2階建て一軒屋である。

扉を2度ノックして出てきた旧友の姿に2人とも驚きと歓喜の声を上げ、久々の再開を喜んだのだ。

「それにしても、随分と大きな店を持つようになったではないか」

ただ単に大きいだけではない。自らの名前を冠した店が、今や至るところに支店を持ち世界経済を支えているのだ。ちよつと前まで自分の店も持てなかつた一商人がここまで下克上を果たしたただけでも歴史に名を残すに値するだろう。

だが、店の規模に反して、今ライアンの目の前にいるのは以前魔王と戦ったときと比べて何か覇気の抜けた感じがした。ずんぐりむっくりな体型も、昔は愛嬌や貫禄を感じ



させたが今では何か病的なモノを想像させる。

「あれだけ大きいなら家ももつと大きくしたらどうだ？」

だがライアンはそう言った瞬間、ここは住居としては使われてなくて、どこかにもつと大きな屋敷か別荘でもあるのだろうという考えが浮かんだ。そしてこの男の命令でダンジョンに潜っていくのだろう、と。だがトルネコが言ったことはライアンの予想とは違った。

「勘違いするな。あれは俺の店じゃねえ」

俺の店じゃない？　じゃあ誰の店だ？　今はもう誰かに店を譲ったか売ったかしたのか？　それならトルネコの今のくたびれた様子も納得できるが。

トルネコはゆつくりと体の奥から搾り出すように言った。

「あれはネネの店だ」

「確かに、ネネ殿の商才はズバ抜けていたからな。そういっても、経営と全く無関係ということではないだろう？」

「そうだ」

「え？」

「全く関係ない」

「まことか？」

「ああ、本当だ。経営陣だったのは本当に最初の方だけだった。といってもガキの使いたくないなモンだったがな。それでも一応は経営陣だった。たとえネネのお情けだったとしてもだ。でもまあ、その後いろいろあつてな……で、結局は俺が追い出されたという訳さ」

話し終えると、トルネコは空を見上げた。そこに昔の輝かしかつた自分たちが映っているかのような目で。

「とにかく、積もる話は中に入ってからにしようや。今日はそれとは別の話もあるしな」  
そういうとトルネコは自室へとライアンを案内した。

トルネコの部屋に案内されて思ったことは、世界一の商人の家とは思えない程、予想以上に何の特徴もない普通の部屋だということだった。本棚には商売、ダンジョン関係の本が並べられている他は、部屋の中にほとんどモノがなく、整理されているというよりは使われていない部屋という感じがした。

「何か飲むか？」

「いや、のどは渴いておらん。それより先の話の続きを聞きたい」

トルネコは話した。平和になった後、不思議のダンジョンに潜り、幸せの箱を入手、ネ

ネの助けもあつて、店を大きくすることに成功した。そこで終わつていれば、ただの成功した仲睦まじい夫婦として語られるだけだっただろう。

だが、ネネはこれで満足しなかつた。

手始めに、レイクバナ周辺各地に支店を広げた。それが一通り終わると、今度は世界各地に進出し始めた。トルネコはいくら店が大きくなり支店も幾つか持つているからといって、それだけの資金力はどう考えてもないと考えていたが、ネネの巧みな商才はこのときも惜しみなく発揮され、フランチャイズという新しい方式を考案、各地に店舗を広げていった。

この頃から、トルネコは何かと『時代遅れ』呼ばわりされるようになり、店の実権はネネのものになつていった。それでも、トルネコにも一応、商人としての自負がある。無計画な出店の危険性を懸命に訴えてきた。特に、トルネコたちが経営している店は元の冒険者たちからの買取が主な商品の供給源となつている。そのため、各地で品揃えにも差が出るため、そのままでは、それ程大きな利益を上げられるとは考えにくかつた。さらに、平和になつて復興してきたとは言え、まだまだ各地の道路整備は完全には進んでおらず、馬車で運ぶには時間とコストが大きくかかる。

だが、ネネはすでに手を打つてあつた。

勇者の他にも世界各地を旅し、魔物たちと戦つていた冒険者は少なからず存在した。

そういった者たち（多くはライアンと同じく戦後は厄介払いされていた）を雇い入れて『ルーラ運輸』という子会社を設立したのだ。そのことによって、今までに無いような品揃えを全店でできるようになり、予約や目的地までの荷物運送など、他社には無い独自のサービスをも提供できるようになったのだ。

こうした冒険者たちは、世界中を旅していたこともあって、大抵の地域はカバーできたが、どうしてもできないところはLTA気球航空と提携することで補った。

つまり、店は『ハード』でそれを子会社という『ソフト』を使うことで相乗効果を挙げようとしたのだ。これは今までと比べると画期的なことだった。このことによって、今まで『商売の神』とよばれたヒルタン（ホテルを経営する大富豪）と並んで『商売の女神』とまで呼ばれるようになった。

しかしネネが儲けるほどにトルネコ一家は幸福から遠いところへ流されていった。普通、商売で成功すればちよつとは贅沢をしたり洒落た別荘なんかを建てたりするものだが、ネネはそういったものに全く興味がなかった。（もちろん、俺に会社の金なんか使わせなかったね）ネネは儲ければ儲けるほど、さらに大きな利潤を追求するようになり、やがて家庭をかえりみることもほとんどなくなっていた。ポポロはもちろん、トルネコにすら理解不可能なくらい金への執着を深めていったのだ。そして今や、ネネはほとんど家に帰ってこない。ポポロの教育もどうでもいいという感じで投げ出してしまっ

た。

名前をトルネコ商会にしたのも、夫への感謝の気持ちからではなく、純粋にイメージによるものだった。あの勇者の7人の仲間の内の一人であり、もともとの知名度と、最も庶民的な風貌、性格からそう名づけたに過ぎない。その後も徹底したイメージ戦略が続けられ、トルネコの人格はどんどん『欠点もあるがそれ以上の魅力を兼ね備えた憎めない商人』という方向で書き換えられていく。だがそれとは正反対に実際のトルネコはだんだんとそのような性格からは離れていった。

そしてイメージ戦略も終わると、最初に話したように、小遣い程度の給料を貰うだけの何の実権もない役職（と言えるのならね）へと落とされ、商人としての人生に引導を渡されたのだった。

「どうだ？ なかなか面白かっただろ？」

ヤケと自嘲気味に言い放つトルネコ。

「ハハハ…… しかしトルネコ殿、こちらもなかなか『面白い』ことになっておるのでな…… 正直いって、あまり笑えんな」

「ひよつとしてこれか？」

といってクビを切る（と言っても、太りすぎでトルネコにはほとんど首なんて無かつ

たのだが）ジエスチャーをする。

「さすが、洞察力は衰えておらぬようだな」

「嫌でもわかる。なんとつて、ルーラ運輸のメンバーを集めたのは俺だからな。あの時は他の冒険者と多少は面識があるつていうんで人集めの役目を引き受けたんだが、正直言つてそれ程苦勞しなかつた。だいたい、アンタみたいに、平和になつて厄介払いされていたららな」

「狡兎狩られて走狗煮らるか……互いに随分と『煮られた』ようだな」

「ああ。んで、結局はまた狩りにでる、いや、出ざるを得ないと言わわけさ」

そこまで言うのとトルネコは少し座つてゐる姿勢を変えた。また体重が増えたようだ。ライアンは少し前まで兵士を務めていたこともあり、それ程余計な肉はついていなかったが、このまま酒に溺れる日々が続けば早々にトルネコの二の舞を踏むことになるだろう。

「ところで、これから冒険に出る前に、まず準備を整えよう」

「ほう。では先の話に出てきたあの店に行くのだな？」

「そうだ。敵情視察というやつだぜ、軍団長さん」

レイクバナは特にこれといった産業がある訳ではなかつた。ただ、このあたりは魔物

が住むダンジョンが多く、少し北に行けば世界有数の大都市エンドールもあるため、冒険者達もたらした品物による交易で賑わっていた。

ライアンとトルネコは、そういった商店が立ち並ぶ広場を抜けてトルネコ商会本店へと向かっていった。

「おい」

トルネコが後ろから呼んでいるようだ。

「ん？どうしたのだ？」

「もう少しゆっくり歩いてくれないか。アンタ歩くの、速すぎるんでな」

確かに、家から少し歩いただけだというのに、トルネコの周りの空気だけ温暖化したかのように、全身から汗が噴出している。

「すまなかつた。それ程速く歩いたつもりではないのだが」

「やつぱり軍人と商人じゃ、人種が違うもんだな」

いや、そういう訳でないというライアンは思ったが、とりあえず頷いておいた。

「それより一つ聞きたいのだが、トルネコ殿。今日は平日の昼間だということにどうして広場にこんなに人がおるのだ？」

「ああ、今日は祝日なんだよ。だから、町のやつらがみんな集まって祭りの準備をしているのさ」

「今日は某がクビになった日だ」

(今日はやけに湿っぽいな……)

「その日……国王に呼び出されてな……今日と同じ、雲ひとつ無い快晴だ……退職金はいくら欲しいか尋ねられた」

「まあ、そう落ち込むなよ。いつものあんたは無口でもそんな湿気てなかったはずだ。俺なんて退職金もへったくれもねえ。しかも医者には糖尿病と診断されて好きなものも食べやしねえ。あんたはまだまだ健康そうだし家族に心悩まされることもねえだろ？」

「しかしいなければいけないで、寂しいものだ。特にこのような光景を見た時には特にな……」

(……せつかく話を逸らしたのに、そっちに持っていくなよ……)

だが、別にライアンもトルネコが思っている程、嘆き悲しんでいる訳ではない。長年の不遇な経験から、このように他人の幸福を不幸の淵から眺める仕打ちには慣れきっている。幸せなど所詮、マッチ売り損ねた少女が見ている一瞬の幻影で、明日にはこいつらこそ(無邪気にはしやぎ回る子供もそれを見守る老人も)が地獄に叩き落される運命にある、と自動的に考えるようになっていた。だから他人の幸せなんてもう怖くなくなつた。解雇されてからずっと付きまとっていた恐怖は、もうとうに克服している。



「ああ、ここだ。ハハハ、トルネコ軍団のご到着だぜ」

店は、遠くから見たときから大きいとは思ったが、近くで見るとさらに大きく感じられた。

店内に入ってみると、その広大さに驚いた。商品棚が地平線の彼方まで続いており、ありとあらゆる商品が取り揃えてある。ライアンはトルネコと一緒にフロア中を見て回った。在り得ないほどの品揃えだ。普通の店では絶対に売ってない『世界樹の葉』がエルフの里直送で販売されている。しかも無農薬だ。だが、二人ともそれ程予算に余裕はないから、とりあえず食料品や他の薬草類を中心にカゴの中へ放り込んでいった。

だがその食料品を見てライアンは呆れてしまった。ほとんど菓子パンばかりだ。これでは糖尿病になるのも頷ける。本人は「ダンジョンに行くときだけの贅沢だ」と言っているが、普段から食べているのだろう。今のネネが家族のために料理を作っているはずが無いだろうし、それならなお更、栄養も偏るだろう。

「それで、体の方は大丈夫なのか？ダンジョン内で倒れられたらかなわんからな」

「今は何とか発作を抑えて入院だけは避けてるって感じだな」

「ならば、ますますそのようなものを摂る訳にはいかんだろう」

「俺にとって砂糖は麻薬みたいなモンだ。甘いモンを摂らんことにはどうも調子が出な

い。なあに、心配しなくても発作なんて滅多に出るもんじゃないし、発作を抑える薬ももらってある」

「だが、ダンジョンでは予測不可能なことが発生する。万が一というのもあるかもしれない」

「まあ、別にその万が一で困る人間なんていりやしないよ。ネネにとつて、俺は完全に利用価値の無くなった人間だから、どこで野垂れ死のうが構やしねえ。息子のポポロは完全に愛想をつかしてそっぽを向いている。最近は学校をサボつて何かしているようだが、その『万が一』がおければ邪魔者もいなくなるって訳さ。それに借金だつて流石に天国までは負つてこないだろ」

そんな何気ない会話をしている内に、あらかた必要なものは揃つたと思われた頃、トルネコはおもむろに酒類コーナーに足を運んだ。

「ダンジョン内で飲むのか?」

「いいや、違う。まあ、使うこともあるが、ダンジョン内で飲むのはオートマ銃でロシアンルーレットをするようなモンだ。今買うのは、帰ってきてから飲むためだ」

そういうと、トルネコは棚からワインを取り出した。製造年はちようにど勇者が魔王を倒した年……

「無事に成功して帰ってきたらこいつで一杯やろうや。アンタもかなり好きなんだろ?」

「来たときから随分、酒臭かったからな」

こうして準備は整ったものの、トルネコは何の武器も揃えていないのが、ライアンにとつて心配だった（自分には愛用の破邪の剣がある）。だが、トルネコはすでに武器を用意していたようで、昔、取引先との接待で使った愛用のゴルフクラブ＋99（2番アイアン、錆び防止付）を持って行くことになった。

こうして遂に二人の冒険は幕を開けることとなる――

## 2. 大丈夫、トルネコのダンジョン攻略だよ！

「フフーん♪今日もいい天気だなあ♪」

ぼく（普通のスライムのスラ吉）は今日も上機嫌だった。これから何が起こるかも分からず、能天気にもいつもと同じく、ダンジョン内でピョンピョン飛び跳ねながらスライムベスのスラ美ちゃんの家遊びに行くのを楽しみにしていたんだ。今日こそは……いつも言いそびれていたことを言おう。そう思っていたときだった。

「あれ？ 何だろう……」

前方のフロア——それも真ん中の中途半端なところに——丸い物体が転がっているのが見えた。あのオレンジ色から判断してスライムベスか——ぼくには、何となくスラ美ちゃんに見えたし、その確信はあつたけど、それにしてもなぜこんなところにいるのか……日向ぼっこでもしているのだろうか……？ とにかく、近づいて分かったことは、それがぼくの思った通りスラ美ちゃんであったこと、そしてスラ美ちゃんは日向ぼっこをしていたのではなく、重症を負って息も絶え絶えの状態で倒れていた、ということだった……

「ど…………どうしたんだい、スラ美ちゃん?!」

「あ…………スラ吉」

スラ美ちゃんは朦朧とする意識の中で辛うじて相手を認識することができたみたいだった。でもすでに、全身から体色と同じ色をした（若干濃い）液体が体の至る所から流れ出している。

早く治療しなければ……

なぜこのような状況になったのかは、このときとても気になったが、今は治療が先決だ。

「待ってて…………すぐに薬草とって来るからね!!」

叫ぶようにそう言つて、走り出そうとしたそのときだった——

「スラ吉…………」

「え?どうしたんだい? 大丈夫、すぐに戻ってくるから——

「そうじゃないの…………逃げて、スラ吉…………今すぐこのダンジョンから逃げて!!」

もうほとんど、最後の力を振り絞った訴えだった。どんなことが起きたのかは、ぼくはまだ知らない。でも、それでもスラ美ちゃんを見捨てて逃げ去ることなど——何より出来るわけ無いじゃないか!

「聞いてスラ吉…………」

そんなぼくの心を読み取ったかのように、スラ美ちゃんが話を続けた。息もさつきより荒くなっている。死期が近づいている——一瞬そんな考えが浮かんだが、すぐに打ち消した。

「このダンジョンに……悪い人間がやってきたの……奴らはダンジョン中の仲間を殺して……アイテムを根こそぎ奪っていったわ」

信じられなかった。これはイタズラか何かで、誰かが物陰から見ているのではないか、そしてスラ美ちゃんの血も血糊か何かで、ぼくが慌てているのを見て、みんなで笑うのだ。このダンジョンの仲間達はそんなイタズラものばかりだが、それでもみんな根は優しい、憎めないものばかりだった……だがウソだと思いたい願望は、スラ美ちゃんの血の匂いが完全否定していた。

「ももんじやのモン太君は？」

ぼくは恐る恐る、尋ねた。

「頭を一撃で……」

「いたずらモグラのモツチーは？」

「スコップで首を刎ねられたわ……」

「おおなめくじのおばさんは？」

「行方不明、でも多分……」

ウソだ、こんなこと。

「スラ吉、私はもうどうせ長くはない。でもあなただけは逃げて！　そして下の仲間にもこのことを伝えて……！」

「嫌だよ、そんなの……　出来るわけないじゃないか！」

「だめよ……　お願い、逃げて……　奴らが……やつらが……すぐそこまで——

スラ美ちゃんがそのセリフをすべて言い終わることはなかった。背後から突然叩きつけられたゴルフクラブによつて、2度と喋れないようにされたからだ。

「うわあああああああ!!!」

ぼくは、気がつけば絶叫していた。自分の意志とは関係なく、体だけが別人のように絶叫していた。こんなに怖い思いをしたのは天変地異で大粒の雹が降つたとき以来だった。あのときは一晩中、恐怖でほとんど眠れなかった。

今、目の前にあるのは、上から凶器を叩きつけられ、破裂して地面のシミへと変わつつあるスラ美ちゃんだったものだ。ぼく自身も血飛沫を浴びて、ほとんどスライムベスのような体色になってしまっていた。このときの臭いは長い間取れなかったことを、今でも覚えている。

スラ美ちゃんを殺した男は、青い髪の毛をした、縞模様のシャツに赤い羽織を着てサ

ンダルを履いた、どこにでも居そうな、町の商人のようないでたちだった。一瞬、体が固まった。だが、スライム族特有のすばやさがあったおかげで、ぼくは幸運にも、その男の第2撃目をなんとか避けることができた。ぼくがさつきまでいた場所に、思いつきり振りかぶったゴルフクラブの一撃で、クレーターが出来ていた。

ぼくは恐怖でどうにかなりそうな頭を必死に鎮めて逃げ回ったが、あつという間に部屋の隅に追い詰められてしまった。どうやらこの商人は、ダンジョンでの戦闘にかなり熟練しているらしい。ジリジリとにじり寄る男……髭で一部隠れているものの、その口がこれから行われる殺戮の喜びに不気味な笑みを浮かべている……少なくともぼくにはそのように見えた。

(ごめん、スラ美ちゃん……逃げられそうにないよ……)

でも、それもいいのかも知らない。このまま生き延びてしまうよりは、早くスラ美ちゃんのもとへ逝ったほうが、このときはまだマシに思えた。商人の黒い影がぼくの全身を覆い、ゴルフクラブが振り下ろされようとしたときだった。

「グアツ!!」

商人は短い、なんとも言えない、意外に情けない声をあげると、突然地面に前のめりに倒れたのだ。そしてその倒れた商人の背中に乗っていたのは――

「おおなめくじのおばさん!! 生きてたんだね!!」



「さあ、今のうちよ、早く逃げて！ こいつは私が引きつける」

「おばさんは？ どうするの？」

「そんなことは気にしないで！ 今は一人でも逃げ延びることが先決よ!!」

それだけけいとおばさんは商人の背中を思いつきり、何回も噛んだ。

「いつてええ!! このドチクシヨウ共が!!」

「まただ……また、「逃げて」……モンスターの中なかでも最弱のスライムに誰も期待などしていないのが悔しかったし、そして悲しかった……もう仲間はいない……一緒に笑い、泣き、メダカを追いかけた、あの仲間も、あの時間も——もう帰ってこない。何もかも。そして今、ここで仇討ちすらできない自分に腹がたつた。自分なんて……逃げて何も出来ないじゃないか……い……せいぜい下の他のモンスター達にこのことを知らせるぐらい。それも仲間の犠牲の上に成り立つもので、自力ではない。」

ぼくが迷っている間に、大ナメクジのおばさんは顔面に裏拳を喰らい、5メートルほど吹っ飛んで、地面を何回か転がった。

「何……してるの。あれ程逃げなさいと言ったでしょう……こんなときに……おばさんを困らせないで」

痙攣しながら起き上がろうとするおばさんの口からは、緑色の血が幾筋も流れ落ちていた。ぼくは、みんなの期待を裏切らないために、そしてみんなの命を無駄にしないた

めに、心を決めることにした。

例の商人（らしき人間）は地面に落ちたゴルフクラブを拾おうとしている……  
（今だっ!!）

覚悟を決めると、隙をついて一気に逃げた。後ろは振り返らなかつた。また迷ってしまふから。だから、ぼくはこのとき、おぼさんを見捨てて逃げた、世界一の臆病者になつたんだ——その後おぼさんがどうなつたか、詳しいことは結局分からないままだ。あのときの状況から考えて、死んだと考えるのが自然だろう。でも、ぼくとは違って、勇敢に戦つて死んでいった——それだけは確かだし、そのことはずっと覚えていよう。ときどき夢に出てくるおぼさんは、優しくて——厳しくて——パンをつまみ食いしたときは怖くて——そしてやっぱりそれ以上に優しくかつた、あのときのおぼさんのままなんだ。でも、一つだけ違うのは——おぼさんの口から緑色の血が流れていて、それを見ると、ぼくはまた……逃げ出して　し　ま　　ま　　う……………

「くっそく絶対えぶつ殺す!!」

トルネコがゴルフクラブを手にして起き上がったときには、すでにスライムは走り去ろうとしていた。すぐに追いかけてやろうとしたそのときだった。

ドン!!　トルネコの側面を何かがぶつかったような衝撃が襲つた。

「あのクソなめくじが……まだ生きてやがったのかよ」

2回とも不意打ちにも関わらず、ほとんど致命的なダメージを与えられていないことからして、戦力差は圧倒的だった。しかしおおなめくじはそんなことに頓着せず、またしても勇敢に突撃していったのだ。だが、トルネコも何度も不意打ちされるような未熟者ではない。

「ウリヤアアア!!」

獣のような叫び声をあげると、突進してきた大なめくじへむかつて、愛用の2番アイアンをキレイに振り抜いた。スライムベスを叩き潰したときと同じ、嫌な打撃音だけ残して大なめくじの体は衝撃で二つに分かれ——別々の方向に緑の体液を撒き散らしながら、ゴルフボールを打ったときのように——キレイな放物線を描いて飛んでいった。

「ナイツしよ〜!! ヒヤハー!!」

本人にとつて、あまりにもキレイに飛んでいったので、標的のスライムのことも、今までおおなめくじに翻弄されて忌々しい思いをしていたことも——これまたキレイにトルネコの頭から吹き飛んでしまった。

「トルネコ殿、随分と調子がいいな。」

今しがた、通路から入ってきたばかりのライアンがそう呟いた。

「おう、アンタか。そっちにスライムが逃げていかなかったか？」

「いや、見かけなかった。きつと別の通路を逃げていったのだろう」

「くっそくもうちよつと楽しめると思ったのにな」

先の戦闘（というより一方的な虐殺）を忘れて、取り逃した獲物を悔しがる。

「随分とスライムにこだわってるようだが……すでにアイテムも全て回収したし、剣の切れ味も十分試させてもらった」

そういつて血まみれの破邪の剣を指す。

「もう、このフロアには用は無いだろう」

「スライムは形がボールに似てるから一番打ちやすいんだよ。それに死体も回収しなかったんだが……アイテムも全回収したなら、もうこれ以上ここにいる必要はなさそうだな」

そんなことを言いながら、フロアを立ち去ろうとしたときだった。

「じ……くに……ちろ……ねの……じやども……」

背後から幽かにそう聞こえる。振り向いて耳をすませてみて分かった。先の大なめくじの千切れた破片からだ。トルネコはこんな雑魚に（ダメージはほとんどなかったとは言え）不意打ちをくらったことを思い出した。ライアンの「そんなものは放っておけ」という制止を無視して、つかつかと、自らがばら撒いた体液の海に横たわる、大なめく

じの残骸に近づく。

「ぢごくにオチロ……金の亡者ドモ……………」

「うへえ。気持ち悪い。まだ喋れたのかよ。こういうゴミはチャツチャと片付けとかな  
いな」

そう言うのとトルネコは壺からおもむろに伯方の塩を取り出し、散らばった臍物にも満  
遍なく、執拗に、何回も、これでもかと、アメリカ軍の空襲の如く、ばら撒いた。きつ  
と奇襲されたことをまた思い出したのだろう。体中から水分が抜けていく中で大なめ  
くじが最後に見たのは、歪つな喜びに顔を歪める商人の姿だった。

「トルネコ殿!!」

「分かっているって。もう終わったから、そう急かすなつて」

「すでに風が強くなってきておる」

ピンク色の無頼漢の言う通り強くなってきた風に追い立てられるようにして、二人は  
そのフロアを跡にした。

そしてたった一つだけポツンと残された、塩で縮んだ大なめくじのミイラ（かつてこ  
のフロアに生命がいた最後の痕跡である）は、やがて塵のような小さな破片になり――  
強くなる一方の風に乗って、フロアの奥へと飛んで行った。

### 3. つかの間の休息

トルネコ達は下のフロアに降りると、毒キノコを見つけては撲殺、又は斬殺していった。といつても、キノコオムライスを作るためにこんなことをしているのではない。

例のゴルフクラブの一撃を受けて大きく凹んだ巨大毒キノコの傘を、毒粉が飛び散らないよう注意深く切り取ってゆく。そうやって傘を開けると、菌糸類特有のネバネバした糸が何本も引いた。グロテスクな見た目通り臭いも強烈で、消化しなかったオムレツのような、酸味がかかった腐敗臭が湿っぽい空気と一緒に鼻腔へと侵入してくる。

「クソ……焼いたらもうちよつとはマシになるんだがな……」

誰もいない空間……トルネコは一人そう呟いた。ライアンは頼まれた毒キノコ狩りに出て行ったから、今この部屋にはトルネコと、もはや動かなくなった化け物キノコたちの死骸しかない。

切り取った傘をその辺にゴミのように投げ捨てると、胴のテツペンには原始的な脳がのっかっていた。少し損傷を受けてはいるが、目的は脳みそそれ自体には無い。頭頂からナイフをぐつと差し込み、背中側から切開する。

「確か……ここにあって聞いたんだがな」

胴体でも、傘と同様に菌糸類特有の体液が糸を引いていて目的のものを発見しづらかったが、確かにそこに見つかった。

毒囊だ。

この内臓器官に毒キノコの全ての毒が濃縮されて詰まっている。

トルネコはそれを、赤子を抱くかのように優しく掴みながら、傷つけないように周囲の肉から切り離した。

ふうう〜ツ……

これでもうやく半分といったところか。まだまだ残っているとはいえ、もうだいたい毒を抽出し続けた。これだけあれば相当な量の毒を、もうすでに集めたことになるだろう。

そう思惑を巡らしているときだった。遠くから足音が近づいてくる。ライアンが帰ってきたようだ。

「はかどつておるか？」

他人が聞けばいかにも事務的な口調だが、二人の間ではこれで十分らしい。

「まあ、ボチボチつてとこだな。そっちはどうだった？」

「確かにお主が言ったように、このフロア全体はかなり広い。だが少なくとも、近くの敵は全て始末したし、アイテムも回収しておいた。あとは」

というと、毒キノコの山に新しい死体を投げ加えた。

「こいつが一匹だけ生き残っておった」

「おお、サンキュー。いつもキツチリ仕事をしてくれるから助かるぜ。こっちはまだもう少しかかりそうだ。アンタはしばらく、好きにしといてくれ」

それだけ言うと、また次の解剖実験を黙々と再開した。

「トルネコ殿、何ゆえここに来て……急にそのようなことをするのだ？」

ライアンはこのフロアに来てから気になったことを直接訊いてみた。

「決まってるだろ？ こうやって毒を練成してるんだよ」

「それは何となく分かるが……なぜここに来て急に、しかもそんなに大量に練成するのだ？ 到底、心進む作業には見えん」

「ふう〜」

もう一つの毒嚢を取り出してから、一旦手を休めて言った。例のキノコが発する腐敗臭が充満しているなかで。

「二応目的は二つある。一つは取引用だ。そしてもう一つはモンスター合成用だ」

「少し詳しく話してくれないか」

「オレの昔の知り合いで同じ冒険者だったヤツが、ここで闇商人をやってる。そいつとこの毒を取引して早い段階でより強力な武器を手に入れようって魂胆さ。もう一つが



今、合成の壺でヤツらの死骸を練成して新しい生物を作ろうとしてるんだが、そいつの隠し味に少し使おうと思ってるな」

「新しい武器が手に入るのは心強いが、なぜモンスターを練成にそのようなものを使うのだ？ それに、聞いたところによると生物の練成は出来ないと聞いたことがあるが……」

それは最もな疑問だったし、この時点でライアンはもう一つの疑問も思い出した。トルネコと冒険すると決まってるから、ずっと疑問に思っていたことだ。だが、それはここで話すのは適切ではない。この異臭漂う空間では、また後で改めて聞くとしよう。とにかく、まずはトルネコがなぜこのようなことをしているのかを知りたい。

「確かに、昔のエルリックとかいう錬金術師がいた時代はそう言われていた。物質と生物には超えられない大いなる壁——ヤツはそれを真理の扉とか言ってたが——があるとか無いとかいう話だ。だが、今はそれを乗り越える方法があるじゃねえか」

「何だ、それは？」

「よく考えてみるよ、ホラ」

考えても分からないから訊いているのだが……いや、そういえば……

「もしや、世界樹の葉か？」

「ピンゴ〜！ だからアイテムも取り逃しのないように入念にチェックしている。もち

ろん、多いほうが便利ということもあるけどな」

「だが、その毒物、かなりの毒性だろう。そんなものを一緒に合成してしまつたら、いくら世界樹の葉でも無理があるのではないのか……?」

「いや、うまく配合すれば世界樹の葉の生命力が毒性を取り込んで免疫を持つようになってしまうらしい。配合は難しいっちゃあ、難しいが、詳しい方法は全部モンスター爺さんから教えてもらつてるから大丈夫だ」

「成功するように思えないが……」

「どつちにしても、武器は手に入るんだから、そのためにも必要だしな。ま、オレは暫くこれ続ける。気が向いたら夕食の準備でもしといてくれや」

まだ聞き足りなかったが、臭いが不快だったので、ライアンはすぐにそのまま別の部屋へ立ち去ると、早速夕食の準備を始めることにした。

「よし、これでやつとお仕舞いだぜ」

もはや僅かな残光だけがあたりを照らす中、トルネコは毒キノコたちの死骸の山の隣で怪しげに壺を傾けながら、また独り言を漏らしていた。この癖も、もともとダンジョンに潜るようになってから発症し始め、ついに家庭でも孤立するようになるますます酷くなってゆくのだつたが……

一連の不愉快なこと極まりない作業が終わると、最後に合成の壺から保存の壺へ、ドロ口のおぞましい紫色をした粘質の液体を移し替えた。

ここまでできてようやく満足そうな表情を浮かべるとキノコの山に火を放ち、大事そうに壺を抱えてライアンのいる部屋へと急いだ。

トルネコが来てみると、もうすでに夕食の準備はできていた。

「なんとか日が暮れるまでに出来たのだな、あれだけの量を」

「ああ、アンタのおかげで作業に専念できたからな。それにこの夕食も、なかなかどうして——けっこううまいじゃねえか。」

開始5分で最初のカレーを飲み干すと、すでに2杯目を皿に盛っている。この光景にはライアンもビックリした。

「少し食べるのが速すぎないか？」

ライアン自身、早食いに自信はある。というのも、軍隊では作戦上、早く食事を済ませるように求められることもあるからだ。加えてカレーが食べやすいものだというところもあるのだろう——このペースは人間のなかで尋常ではなかった。

「昔つから言うじゃねえか、『カレーは飲み物』だってな」

2皿目を食す前に、トルネコはおもむろにマヨネーズを取り出し、皿全体に塗りつけ

た。その白い渦巻きは、何か悪意あるトグロのように、ライアンには見えた。

「やっぱ、1皿目はそのまま、で2皿目からはマヨネーズ、これが通の食い方だよな。」  
「そうなのか。某はあまりグルメには詳しくないのでサッパリ分かんがな……」

自らの趣味が理解されずに残念そうだったが、すぐにカレーとマヨネーズをかき混ぜるとまたもや飲み始めた。

必死にマヨネーズの魅力を語っていたが、ライアンがこのようにカレーを食べることはこれから先もないことだろう。

長年のストレスによりこのような奇食の習慣ができたことは想像に難くない。

ライアンがそんなことを考えている間に、トルネコは2皿目も平らげ、3皿目に移ろうとしていた。今度はマヨネーズのほかに卵も乗つけるらしい。これでは糖尿病以外の病気にかかるのも時間の問題だろうと思われた。

そして当然ながら、早く食べるためにその間ほとんど会話ができない。普通なら礼儀知らずだし、食事の楽しみをぶち壊しているともいえる。だが、トルネコの場合を想像するに、家族が半ば崩壊し形だけになってからはずっと一人きりの食事が続いていたはずだし、そのためにこういった他人に配慮する必要のない食事スタイルになっていったのだろう。そう思うとこのカレーを飲む姿にも一種の、何か滑稽な哀切を感じずにはいられなかった……

ライアンは話し相手がいないので一人そう考えながら皿目のカレーを、トルネコが皿目のカレーを食べ終わると同時に食べ終えた。

(これでやっと話ができる)

そう思つて先の疑問を言おうとしたとき、トルネコはその疑問を吹き飛ばす——少なくて、一時的に頭の中から消し去るほどの暴挙にでた。

カバンから地上で買つてきたカレーパンを取り出し、貪り始めたのだ。それを食べ終えると、今度はメロンパンとアンドーナッツを食べ始めた。

「い……いくらなんでも、初日から食べすぎではないか？」

「そうか？　これでも腹8分目くらいでちょうどいいんだがな……」

会話もそこそこに、2つのパンをほとんど嘔まずに丸呑みする。もう、このことについては何も言うまい……とにかくこれでやっと話が出来、疑問も訊くことができるのだから。

それでもまずは、あたり障りのない会話から始めることにした。

「それはそうと……　先ほど言つておつたモンスター合成——本当に大丈夫なのか？」

何か嫌な予感がするのだが」

「アンタも心配性だな。大丈夫だ、あのモンスター爺さんからキツチリ教えてもらったし、万が一にも失敗することはない。それに、失敗しても例の錬金術師みたいなことに

はならねえ」

「そうか……それを聞いて少し安心した、少しだけだぞ。それと、一階から何やら熱心にスライムの死骸を集めておったが、あれはどういう魂胆があつてああしていたのだ？

某からみれば、スライムなど合成したら逆に弱くなるのではないかと思うのだが」

聞きながら、トルネコは壮大なゲップを吐き出した。狂った消化器官が行う旺盛な消化活動の副産物だ。

「オレも最初はそう思った。まあ、何も知らなきやそう思うよな。ところが、スライムつてヤツはモンスターの中でも一番原始的らしいんだわ。だから弱いんだけどよ、その分全てのモンスターの『もと』になれる存在でもあるんだとき」

「なるほど、つまりそれぞれのモンスターのいい部分を集めてスライムを接着剤代わりに合成するというわけだな。先の毒も、耐性をつけさせるためにか」

「さっすが、軍団長さん、鋭い洞察、その通りだ」

「軍団長か。今となつては元軍団長、だがな」

一瞬、アストロンで固めたような重い沈黙が漂う。だが、トルネコは口を開いた。食事中に出来なかつた会話を取り戻すように。最も、こういった場の空気に流されないところは交渉するときには役に立つが、勇者にとつてはそれがデリカシーの無さと映つてしまつたらしい。永遠に補欠のままだった。といつてそれは相手への気遣いの欠如か

ら来たものではない。むしろ、互いに何でも話し合いたいという願望からきており、その心の距離の取り方が少し勇者の世代と違っただけなのだ。

「……アンタを解雇するなんて、国王もアホな奴だぜ」

「いや……そんな国王に忠誠を尽くした自分の方が莫迦だったのだろうな」

つい話がそれて関係のないほうに来てしまった。気まずい空気を紛らわすために、ライアンはカレー鍋の中を覗きこんだ。中途半端な量が残っている。まさかここまで食べるとは思っていなかった。

「トルネコ殿……」

「なんだ？ カレーならもういらないけどな。まあまあ美味かったぜ」

「いや、そうではない。この町に来てからずっと気になっていたことがある」

「何だ？ 言ってくれよ。答えられるものならなんでも答えてやるよ」

「ここまで入念に準備しているのだ……また今回も何か格別な儲け話があるのだろうか？ でなければトルネコ殿のこと、こんなところに進んで来るわけがない」

それを聞いた瞬間、真剣な表情になったトルネコだったが、すぐに負けを認めるかの様な乾いた微笑みに取って代わった。

「ああ、その通りだ。あるぜ。儲け話、それも途方もなくおおきなヤツがだ」

ライアンのルーをかける手が思わず止まってしまった。

「だが…… 今の段階ではまだ教えるってわけにはいかねえ。アンタを信用してないからじゃない。ただ、こういった類の話にはガセも多いから、変な期待を持たせたくねえ。だから、今後確証を得たらすぐに話す」

「二言はないな？」

「ああ、約束するよ。数少ない友人にウソはつかねえ」

「それならば、言った通り、あまり期待しないで待つとしようか」

話の核心を知ることはこの段階ではできなかつたが、ここまで聞くことができただろう。とにかく、トルネコは通常の目的以外に何かアテがあつてここに来ていることが判つたから、それでいい。

ライアンが、取り敢えず中途半端に余つたルーを皿に盛ろうとしたときだった。

「あまり食べ過ぎないように、腹八分目にしとけよ。なんたって、これから夜のお楽しみがあるからな。オレはアンタが食べ終わるまでしばらく横になつとくからよ」

ライアンがカレーを食べ終わってから、二人は将棋を楽しんだ。トルネコの一手差の勝利の後、ついに夜のお楽しみとなる獲物を探すべく、暗くなつたダンジョンへと乗り出した。

そうしている内に、早速リリパットがこちらへ向かつて襲い掛かつてきた。待つてま



したとばかりにトルネコが変化の杖を振り下ろす。とたんにリリパットはライアンが見たこともない女性に変化した。後で聞いたところによると、最近レイクバナに引越してきた新婚夫婦らしい。仲が良くてムカつくから、こうしてそれをブチ壊してやるのが楽しいという。

いきなり非力な人間の女性に変化し戸惑うリリパットの服を、トルネコは早速ビリビリと力づくで剥がし始めた。相手も必死になって抵抗してみるのだが、完全にマウンポジションを取られており、失神寸前まで殴られ続けた。

「よおし、大分おとなしくなってきたじゃねえか。そうだ、アンタも参加するかい？ 別のが好みなら杖を持っていつていいぜ」

今やほとんど頭わになった巨峰を揉みしだきながら言う。相手は諦めたのか、特に大きな抵抗は見せていない。

「少し趣味が違う様だな。お言葉に甘えて、少し借りていくとするか」  
ライアンはそう言って杖を拾いあげると、通路の奥へ消えていった。

通路の角を曲がったところで、ライアンは背後から元リリパットが悲鳴をあげるのを聞いた。

「分かってない」

変化の杖を握り締めながらそう思う。

(やはり所詮は成金商人。やることが野暮でエレガントさがない。真のエロスは少年愛だろ)

そんなことを考えながら、ライアンは杖を振った。

## 4. v s リリ。パツト族

——翌朝——

トルネコたちは突然の事態に直面していた。

「そつちはどうだ？」

「駄目だ。完璧に包囲されておる。なんとか切り抜けられる確率は五分五分といったところか……」

「クソツ……やっぱ昨日の『夜のお楽しみ』がダメだったのか。奴ら、完全に頭に来たようだな」

二人の本日の目覚めは一本の矢から始まった。

見張り役のトルネコが寝込んだ隙を見計らって、リリパツトたちが奇襲を仕掛けてきたのだ。幸い、一発目はトルネコの最も皮下脂肪のブ厚い場所に刺さったため、大した怪我にはならずすんだ。その上、敵の奇襲にも早くに気付くことが出来たために、第2波もなんとかやり過ぐすことができたのだ。一旦奇襲に気付いてしまえば、後は大したことにはなかった。並みの冒険者であればハリネズミにされたとしてもおかしくはなかったが、現在の二人の強さと経験は、リリパツト達を遥かに凌駕している。

とにかく、トルネコとライアンは別々に動いて矢を躲わしながら、間合いを詰めて一体づつ、リリパットたちを倒していった。

戦いが終わって二人が元の場所へ戻ってきてみると、トルネコが何本もの矢を受けて針山のような格好になっているではないか。どうやら矢を避け切れなかったようだが、全てトルネコ自前の肉の鎧が盾となったおかげで、致命傷に至るものはないようだ。

「ゼエ、ぜえ……クソツ、朝っぱらから手間かけさせやがって……これで全部倒したのか？」

針を一本ずつ抜きながらトルネコはたずねた。こういうことは軍事専門家であるライアンの方が詳しい。

「おそらく、何匹かは逃げただろう。もう奴らの射程圏にはいないし、奇襲してきた群れは全部追いついた。だが安心はできません。依然、包囲された状況には変わらないのだから」

「しかたねえな。とりあえず、レミラーマ草と地獄耳の巻物を使おう」

「なるほど、敵情を把握して最も手薄なところを切り抜けるということか」

「いや、違う。全部、ブツ殺すんだ。こいつでな」

「ご自慢の2番アイアンを指しながら吐き出すように言った。」

「一匹残らず、だ」

調べた結果、どうやらモンスター達は、トルネコがいる部屋の周囲の全ての部屋に布陣しているらしかった。このような場面は通常のモンスターハウスでは絶対にありえない。モンスターは種族ごとに分かれており、その中でもさらに様々な種類に分かれるのだ。しかも、モンスターは極度な自由主義であり、このように団結することなどまず普通にあり得ない。それも二人の冒険者相手なら、尚更ありえない。

これだけの数をまとめようと思えば、モンスター爺さんが100人いてもできるかどうか怪しいものだ。

とにかく、敵軍突破を諦めるのなら、一匹づつ確実に仕留めていく——思いつく戦略はこれしかない。そのために、トルネコたちは用意してきたゴルフボールのほかに、大量の小石を用意した。

そして、最初の小石をセットし思いっきり振りかぶると——第一球を豪打した。

「やはり、あのスライムを追い出さなければ良かったな……」

今やモンスターの大军を率いるリリパットの指揮官がそう呟いた。

「しかし、もう既に終わったことを悔やんでも仕方があるまい。スライム一匹で変化する戦況でもあるまいし、それにここから出て行ったのは半ばそのスラ吉とかいうスライ

ム自身の意思でもある。今さら気にする必要は全くないだろう」

さまよう鎧特有の、鎧の中で反響した木霊のような声が聞こえる。

「だが、その先にいる『奴等』のことを唯一知っているものではあつたがな。もしスラ吉の情報がもつとあれば……さっきの奇襲で仲間を失わずに済んだのかもしれない……」

「それは自らを責めすぎではないか？ 何せそのスラ吉とかいうものがここに来たときは、すでに半狂乱状態だったと言うではないか。私が人づてに聞いたところによると、『青髭の魔人が破壊をもたらす』だとか『地獄の商人が最後の仕入れにやってくる』だの、エセ預言者めいた妄言を繰り返すばかりだったというが……」

「ああ、本当だ。だが、今となつてはその予言が真実を語っていたらしいな。おかげで下の部族に援軍を頼まねばならなくなつた」

さつきから、ずっと通路の暗がり凝視してリリパットの指揮官は話をしている。

「……我々は、あの後スラ吉の汚れた体を洗い、食事を施した。にもかかわらず、まさか食料庫に侵入し火を放とうとするなど……あれさえなければ何も追い返すことはなかったのに……」

そう語るリリパットの指揮官の視線は、相変わらず通路の奥の闇に注がれていた。そうしていればトルネコの姿がここからでも見えるかのように。ここで、黙って聞いていたさまよう鎧が口を開いた。

「確か、『やつら』を兵糧攻めにするつもりだったらしいではないか、本当か？」

「ああ、確かにスラ吉はそう言っていた。最初は何を言っているのか訳が分からなかったが、今となっては彼がそう言うのも分かるような気がする」

「私にはさすがにそれは大げさな気がするが……何しろ、これだけの数が集まって団結しているのだ。個々の強さもスラ吉がいたフロアとは桁違いに強いといえるだろうし、その上全ての出口をこうして完全に包囲している現在、『やつら』は兵糧攻めにされているに等しい。それも、ひとえに貴公の作戦と指揮力によるもの。おそらく、最も少ない犠牲で『やつら』を倒せることだろう」

「そなた程の歴戦の勇士にそう言ってもらえるのなら……まだ少しは救われた気分になれそうだ……そういうえば、ここの者達を束ねるときも随分と助けてもらったな」

実際に、このリリパットが全軍の指揮官に推されたのには2つの理由があった。

一つは、トルネコとライアンのダンジョン内での暴虐、そして『夜のお楽しみ』の犠牲になった2人のリリパット。2人とも服がちぎれており、一目ですぐに犯されたのちに惨殺されたというのが分かった。

そしてもう一つが、さまよう鎧が真っ先にリリパット達の指揮下で戦うと約束したことだ。リリパットは死体が発見されると、すぐにフロア中のモンスター達に、種族の壁を越え一致団結して戦うことの必要性を必死に説いた。

だが極端なまでに自由を好み、また個人主義者であるモンスター達は、半ばその必要性を認めつつも自ら積極的に行動しようとはしなかった。キメラたちも内心ではなんでも俺たちがリリパットのために戦わねばならないんだ、と考えていたし、きめんどうしも日課の昼寝の方が大事だと思っていた。もちろん、口や表情には出さないが……

そのせいでリリパットの演説がおわった後は、誰も喋ろうとしない、誰も、何の返事もしない重苦しい沈黙に包まれてしまう。皆、肯定することで困難を抱えることを憂い、また、否定して悪者になるのも嫌だったのだ。

それを打ち破ったのがさまよう鎧である。

彼は、たった一人であつても自分はリリパットの指揮下で戦うこと、義はリリパット一族にあり、それにはこのフロアにいる全モンスターの尊厳がかかっている、そして、この状況を看過するものには個体としての尊厳すら有り得ないということを、切々と説いた後、証拠としてリリパット一族に跪いて拝剣の礼まで行つたのだ。

これにはさすがのモンスター達も隠しきれぬ衝撃を受けた。

さまよう鎧はモンスターの中でも、最も自己の誇りに忠実であり、ましてや上からの命令に従うなど、その誇りが許すわけがなかったのだ。ところが、そのさまよう鎧が真つ先に自らの誇りの象徴でもある剣を捧げ、(この戦いのみとは言え)命を預けて戦うと誓つたことで集まつたモンスターの心境は一変した。



ここまでされてしまうと、もはや罪悪感と呼んでもいい感情が湧いてきてしまうほどだった。

こうして共に戦うことを約束したモンスター達であったが、いざトルネコの周囲の部屋に分割して配置してみると不安になるほどの数になってしまった。しかし、話を聞きつけた残りのモンスター達が続々と集結し、結果的にモンスターがモンスターを呼ぶことになって、今までに無い数のモンスター軍団がここに結成されたのであった……

「まあ、いずれにしても『やつら』の手持ちの兵糧はそれほど遠くない未来に尽きるだろう。そうなれば必然的に我々が待ち構えているところに突撃せざるを得ない……『やつら』も必死だろうから、少なからぬ犠牲は出るだろう。だが、現時点で最も成功する可能性がある作戦だ」

「ああ。だが……それでも……それでも、また犠牲者が出てしまうのか」  
リリパットの指揮官は未だ暗闇に注がれていた。

「それはある意味、仕方ないだろう。だが、こうやって団結して戦うことで全員が犠牲になることは防げるだろうし、下のフロアの者も守ることにつながる。最終的には、最も少ない犠牲ですむだろう」

「だといいいのだが」

「いいや、絶対に防いで見せる。どうも今日はあまりに多くのことが起こってしまったらしい。貴公もだいぶ疲れているから悲観的になつて居るのだ。心配しなくても、『やつら』はまだ出てこないし、少し休んだ方がよからう」

「……確かに、少し気が張りすぎていたようだな。それでも、下にやった使者が援軍を連れてくるまではこうしているつもりだ。指揮官がおいそれと休むわけにはいかないだろう?」

そういつてようやく闇から目線を逸らし、傍にたたずむ、さまよう鎧を見上げたときだった。何か言おうとした（おそらく、ねぎらいと希望の言葉だったのだろう）さまよう鎧の首が一瞬で消えて吹き飛び——次に鼓膜を、とてつもなく大きな鋭い金属音が震わせた。もう少し強ければ、鼓膜ばかりか脳まで揺らされて気絶していたかもしれない。

部屋中の全てのモンスターがさまよう鎧（の今はなき頭部）に注がれている——木霊のような残響だけが幽かに聞こえる中で。

時が止まったかのように全員が呆然としている中、第2撃目は首なし鎧の真ん中を貫通し——同じように大きな鋭い金属音——やがてさまよう鎧の胴体はお辞儀をするかのようにゆっくり倒れ、数秒間、拝剣の礼を取ったと思うとそのまま地面にうつ伏せになり——ドシンと地面が揺れる——もう2度とさまようことはなくなつた。

「ないっしょ〜ツ!!」

勢いよく飛んでいった小石はダンジョンの奥の暗がりへ吸い込まれていく。ライアンはただトルネコの側で、畑に突っ立っている案山子のようにその作業を見守っていた。クラブの先で、小石の山から石を一個だけ取り出す——足元に運ぶ——打つ——腹の周りの肉が揺れる——さつきからずつと同じ作業を繰り返していた。

「ヒヤハ〜! ホールインワンだぜ!!」

「トルネコ殿……」

「ん、何だ? 急に」

小石を打ち出す手は止めずにそう答える。

「本当に、命中しておるのか?」

ライアンが疑ったのも無理からぬ話だ。何せ向こうのモンスターがいる広間まで、少なくとも200メートルはあるのだから……仮にライアンが地獄耳の巻物を読んだとしても、次々と消えていくモンスターの反応に我が目を疑ったことだろう。

「心配すんな、間違いなく命中しているって。オレの2番アイアンにとっちゃあ、300ヤード以内はパターだ」

そう言うのと、トルネコはセットされた小石に向かってクラブを打ち下ろした。

「落ち着け！ 各自持ち場を離れるな！」

だが一番動揺していたのは、そう叫んでいるリリパット本人であるかもしれない。広間は、早くも阿鼻叫喚の地獄絵図と化していた。いたる所にキメラや鬼面導師、スライムナイトなどのモンスターの血糊が、巨人がコップからこぼしたかのように撒き散らかされていた。

(何なんだ、これは……?!)

流星？メテオ？異常気象？一体何をされているのかも分からない……

今、自分の隣を走って逃げようとしていたきめんどろの背中に、何か（多分、小石か何か……少なくとも、自分にはそうみえる）が高速で激突し、そのまま腹を突き抜けて今度はキメラの翼を根元から折って羽と血を撒き散らした後、すでに頭を吹き飛ばされていたゴーレムの腹にねじり込んで止まった。

「ヒャハハッ!! さっきのは一発で2匹吹っ飛ばしてやったぜ!! やつばバーディーを取る  
と気持ちいいな!!」

モンスター達は早くも潰走を始めた。恐らく敵が最初から肉弾戦を挑んできたのな



た。最後の力を振り絞ってゴーレムの残骸に手をかけ、体を起こす。そしてゴーレムの胴体に空いたクレーターの中心に手を突っ込む。

塔の中から出てきたのは、何の変哲もない、ただの一個の小石だった。

と、ついに両腕の力が尽き、体を支えきれなくなつて、元の血の海に沈む。大分まえから意識が朦朧としてきてはいるが、それでも何度見ても、これは、ただの小石だ……とすれば『やつら』はとてつもない武器を持っていることになる……

これに対抗できるのを挙げるとすれば、リリパット一族に代々伝わるあの武器しかあるまい……だが『アレ』は使い手の技量を相当選ぶものであり、今のリリパットで使えるものは誰もいないのだ……

「くそ……黄金の弓さえ使えたなら……」

あまりの不甲斐無さに思わずそう呟いたときだった。

どこからともなく飛んできた小石が壁に当たり、地面を跳ね返つて血の海に立つ塔の背面に命中した。そしてそのままゆっくりと、スローモーションにでもかかったかのようによつくりと、塔は痛みをこらえるかのような表情でリリパットがいる方向へ倒れ落ちた。

「あアーツ！くそッ、外しちゃった!!本日二度目のボギーだぜ……」

こうして、モンスター軍団は逆にトルネコからの奇襲を受けて、無残にも敗れ去った。

その後、トルネコは残ったモンスターの残骸を集め、合成の壺へ放り込んでいった。一般人からみれば、その光景は死体を漁るハイエナにしか見えないだろう。

一通り死体を集め終えると、屠殺場を後にしてダンジョンのさらに奥へと進んでいく——例の闇商人に会うために。そこでさらに強力な武器を手に入れ、さらに多くのモンスターを殺戮するために。そして、その先にある、莫大な富のために。

## 5. 商談

二人は、今や無人の原野と化したダンジョンの中を、ただ黙々と歩んでいた。

それにしても、とライアンは思う。まさか自分が薄暗く湿ったダンジョンの通路を、いい年したオッサンと二人つきりで探索することになるうとは……一体このことを誰が予測できただろう？——あの無敵の軍団長、バトランド王国史上、最高の武勲を挙げた男とまで言われたのに、今やこうして社会の底辺に、貧者の流刑地とまで呼び習わされているところにいるのだ……

ライアンの出自は武家でも貴族でもない。上流階級とは何ら関わりなどなかったが、それでもここは最悪の場所だと確信できた。

こんな場所へ来たのも、運命の導きなのだろうか？

少なくとも、ライアンは栄光と勝利の塔を運命の手に導かれながら頂上まで登りつめた。そして運命はその足で塔を蹴り倒し——またしても運命に導かれて、今度は闇商人の元へやってきたのだ。

ライアンは最初、闇商人という言葉の響きから怪しげなフードを被った中年の男を想



像していた。それにトルネコの言うところでは、冒険者を引退してこの商売を始めたというではないか。その情報によって、もしかしたらお爺さんに近い年齢かもしれないとすら考えが膨らんでいたが、今トルネコと商談を繰り広げるその男は自分よりもずっと若く、トルネコの子供だと言つてもいいくらいの年齢だった。見た目から判断するに20代前半だろうか。

「オイオイ、確かに強力な毒物だけだよ……あんたの要求する武器とは交換できんぜ。俺がブツを手に入れるのにどんだけ苦労したと思つてるんだよ……」

若者は頭に被った編み笠を傾けて言う。着ているものも、こちら辺で着られているような普通の服ではなく、異国——それも遙か東方の国で用いられている服を着こみ、肩には白いイタチを乗せている。

もしかしたら冒険者を辞めたというのは嘘かもしれない（この2つの職業がはつきりと分けられるのかも怪しいが）。こんなリスクの高いダンジョンで商売をしようと思えば、『普通』の商人では到底無理な話だ。まあ、半分引退、といったところか。

「な〜にが『苦労した』だよ。実際にブツを仕入れるのはあの『ハゲ』のやるこつたろう。アンタはそれを買つてここで売つてるだけじゃねえか。仕入れ値はいくらだ？ もつと安くしてくれよ。オレだつてこんなところに来て、予備の金なんて持つてねえよ。それに、この毒物だつて苦労して手に入れたんだ。苦労したのはお互い様だろ？」

「あんななあ……あんたにとつてはただのハゲかもしれないけど、俺達風来人の間じゃあ、すつげえ尊敬されてるし、信頼も厚い。あの方は俺らにとつては父親同然とまで言える。だから、皆はあの方のことを『イソノ家最後の一本』て呼んでるほどなんだ」

「へえ、そうかい。まあ、その『最後の一本』の話は置いといて……売ってくれるのか、どうなんだ？」

「じゃあ、あんた知らないのか？」

「何をだ？」

「本当に知らないのか？ 冗談で言ってるんじゃないよな？」

笠を被った男は信じられないという目で（半ば笠で隠れて見えなかったが）トルネコを見つめる。

「オレはそんな面白くもない冗談は言わねえだろ」

「そうか……いや、実はな……その『最後の一本』が引退してこの業界から完全に足を洗ったんだ」

トルネコも驚いていたが、今ここに来て初めて名前を聞くライアンにも、その驚嘆の何分の一かは理解できた。といつても、それはローン返済について喧嘩する両親の話をこっそり聞いた子供の理解力と似たようなものであったが。

「それまた急な話だな……なんで引退なんかしたんだ？　米軍からの物資の横流し——かなりウマ味のある商売だったんだろ？」

「地元警察の大規模なガサ入れさ。捜査の手から逃れるために、住所も変えて完全に足を洗ったよ」

「それでもよお……今までの在庫とかなんとか、なかったのかよ」

「そんなのとつくの昔に尽きたね。というより、サツサと売り払ってどこかに行っちゃった。これで分かっただろ？　俺がブツを仕入れてくるのがどれだけ大変だったか」

「オイオイっ、だからってこっちも予備の金は持つてねえんだよ」

「まあまあ、俺も冒険者だったから、話は分かる。そこでだ、どうせ武器を買うんだから、その、あんたが今背負っているヤツ、その武器をつけてくれるんなら、こちらとしても取引に応じてもいい」

「ちツ……しゃあねえなあ。けっこう気に入ってたから、大事に使えよ。それと、こっちだつて愛用の武器をつけるんだから、アンタも何かオマケしてくれよな」

「わかったよ。ちゃんとオマケしてやるから、今後ともよろしく頼むぜ、トルネコさんよ」

「ああ。こっちからも末永くよろしく、だぜ、シレンさんよ」

その後、細かい話を二人だけでしたあと、トルネコとライアンはシレンに別れを告げて階段を下りていった……

## 6. 特殊階層・前編

クネクネと曲がる奇妙な階段を下りてゆくと、今までとはガラリと雰囲気の変わった場所に到着した。

それまでの暗くジメジメした混沌とした空間から、人工的な直線が視界を縦横に横切る、古代遺跡のような場所に出たのだった。壁には今の時代の人間では理解できない、失われた文字や極端にデフォルメされた壁画が描かれている。空気も妙な湿り気はなく、むしろ外よりも清らかに感じたほどだった。

「また、けつたいな場所に出ちまったようだな。」

思わず壁画に見入っているライアンにそう話しかける。もしかしたら一人ごとかもしれない。それにしても、この壁画はかなり独特で精巧なつくりになっていようだ。天井には見たこともない星座と神々が描かれている。考古学者がこの遺跡を見れば、感涙にむせび泣くであろう。これらの、どれが絵でどれが文字かも分からないような壁画の解説にかねらは喜んで一生を捧げ、もしかしたら大して深くはない信仰心を捨て、一歩でもこの壁画の製作者に近づこうと、この異教の神々を信じるようになったかもしれない。

「おい」トルネコが急に野太い声で話しかける。

「何だ?」

「何だじゃねえよ。見とれてないで、とつとと頂くものだけ頂いてオサラバしようぜ」

リリパットの族長は突然の事態に内心パニックに陥りかけていた。上の階層にいる支族長からの救援を求める使者がやってきたのまでは良かったが、使者の報告が終える直前、珍しいことにスライムがやって来ると、上の氏族長は他の全てのモンスターと一緒に全滅した、と伝えてきたのだ。

「スライム不勢が嘘を吐くな! だいたい、今回の戦は長期戦になるはず……仮に敵が無謀にも突撃してきたとしてもこんな早く負けることなど、まして全滅などありえる訳がない!」

使者はそこまで一息にまくし立てると、今度は族長の方へ向き直った。

「このスライムの言うことを信じないでください。こやつはつい最近も一宿一飯の恩を忘れて、食料庫に火を放とうとしたのです! 私は先ほど、長期戦になると申し上げましたが、敵はもうすでに動き出しているかもしれないかもしれません。そうなれば今すぐに、今すぐです! 一人でも多くの兵が必要なのです!!」

「ダメだよ!! 族長さん……言いにくいけど——もう全滅してしまっただよ……この

フロアの戦力じゃあ、やつらを倒すことはできない。今は少しでも遠くに逃げて、戦わないようにすることが先決なんだよ」

「また『逃げる』というのか!!? お前の言うとおりにしていれば、いずれこの不思議のダンジョン自体から逃げ出さねばならんぞ?」

「やつらの狙いはあくまでダンジョン最下層なんだ……でも、そこに行くためにたくさんのアイテムが必要だ。それを持って退却し続けられれば、いずれやつらはここから引き上げるようになるんだよ……ぼくはさつき、やつらが降りる階段を改造した。だから、しばらくはやつらはこことは別のフロアにいてる。早く今の内に……」

「もういい!! まさか族長も、お前のような基地外の言うことを真に受けるとは思わないが、とにかく全ての判断を族長にしてもらおうではないか! さ、族長、ご決断を。救援は早ければ早い程、効果があるのです!」

使者は最後の言葉を、特に念を押して強調した。

数秒間、深い沈黙があたりを包み込んだが、族長はすぐに口を開いた。

「わしには、お前が言うようにこのスライムが嘘をついているようには到底思えん。口調や仕草からどうもうそ臭さが感じられんだ」

使者とスラ吉が期待のあまり同時に身を乗り出しているのが分かった。

「しかし、スライムに嘘を吐く意思は無いのかもしれないが、戦場でのあまりに陰惨な光景

を見て、気が動転してしまったというのもあり得ることではある」

「で……でも……ぼくは、本当に見たんです……!」

「黙れ! 今、族長が話しているのが聞こえんのか!!」

激昂した使者が今にも襲い掛からんとする勢いでスラ吉を怒鳴りつけた。

「両者とも切迫した状況だが、むしろ切迫した状況だからこそ落ち着いて聞いて欲しい」

族長は両者をなだめながら話を続ける。

「とにかく、どちらにしてもまずはその階層へ行く必要がある。その上で真偽を確かめねばなるまい」

「それではすぐに出発致しましょう! して、この嘘つきはどう処罰しましょうか?」

使者はスツクと立ち上がるとスラ吉を上から指して言い放った。

「今回は別に何もしない。というより、このスライムの情報は一部であれ正しいと思われる。そうでなければここまで真に迫ったことは言えまい。だとすればもう戦端が開かれている可能性もあるだろう」

「いいえ……ちがうんです」

スラ吉はワナワナと震えだした。

「言いいくないことだけど……もう本当に全滅してしまっただよ。もう誰も生きちゃい



ない……だから、せめてあなた達だけでも逃げて欲しいんだ」

「お前はまだ――」

言いかけた使者を、族長はこのときは付いていた左手で制すると、静かだが威厳のある声でスラ吉に語りかけた。

「私はもうすでに決定を下したはずだ。もし、それに対してこれ以上何か言うのであれば、おまえには何らかの刑罰が課されることになる」

「そ……そんな……ぼくはただ……真実を述べているだけなのに」

「もし真実だと言いたいのならば、それを裏付ける証拠か、少なくとも信用できる証人を連れてこなければなるまい。だが、それが無いのにそなたの話だけを信じることはできない。私も族長として責任のある立場なのだ、分かって欲しい」

スラ吉は族長の言葉を黙って聴いていたが、半ば諦め、半ば期待を込めて口を開いた。

「分かったよ……でもぼくの言うことが真実だと確認できたのなら、そのときは復讐なんて考えないで、すぐにぼくの言った通りにして欲しいんだ……」

「分かった、約束しよう」

「さっ、話が決まったのでしたら、すぐに出発の準備を致しましょう。早く準備すればそれだけ多くの人数を集められますから」

スラ吉は一人、族長と使者が出て行った広間に佇んでいた……が、すぐにここでの自分の役割が終わったことを感じると、一人寂しくこのフロアを後にした。

(まずいことになった……)

ライアンは一人通路を歩きながらそう思っていた。トルネコは先の部屋でワープの罠を踏んづけてどこかへ飛んでいってしまった。近くの部屋でワープした可能性も考えてしばらく待つてみたものの、やって来るのは冒険者の成れの果ての姿である腐った死体だけである。

どうやら、このこのフロアは大昔の古代墳墓で、墓荒らしに入ってきた者を蟻地獄のように待ち受けては、かかった者達を墓守として使役しているらしい。もうすでに7、8体の腐った死体やミイラ男を倒した。だが、こういったゾンビ系モンスターは倒しても墓が残り、そこから何度でも復活してしまう。

一体くらいなら大したことはない。トルネコの言葉で言うところの『ボケ老人から金を巻き上げるくらい簡単』ということだ。だが、何体も同時に攻められるとノーダメージというわけにはいかない。それにゾンビ達の吐く汚物には特殊な効果があり、愛剣が錆びたり、混乱したり、ステータスが下がったりと、とにかくロクなことがない。そういう状況もあって、ゾンビ系との『一对多』の戦いは、トルネコのいない今は非常に危

険であると言えるのだ。そして、もう一つの最大の懸念要素があった。

それは――

「チャラララン、チャツラツラー!!」

トルネコと分かれた時から聞こえ出した、他人を馬鹿にしたような音――このフロアのどこかでバーサーカーが強くなっていくことを知らせる音楽で、もう3回は鳴ったはずだった。もし、何らかの不慮の事故――鈍足、踊り、眠りの罫を踏む、ゾンビ共の特殊攻撃を喰らう等――が起こって、もしも。もしもそこにバーサーカーがやって来れば、恐らくかなりの高確率（コーラを飲んだらゲツプが出るのと同じくらいの確率）で、ライアンはこのフロアの墓守への転職を余儀なくされるだろう。

それだけは何としても避けねばならない……

だが、悪いことは何度でも重ね塗りができるようで、リレミトの巻物を始めとするアイテムは、全てトルネコが持っている。万が一、追い詰められたとしても脱出はできない。

まさしく一卷の終わりという訳だ。

だが、そういつたこのダンジョンに入ってから始めての危機に際しても、ピンク色の鎧を着た歴戦の勇士はきわめて冷静、そのものだった。

それは昨日まで大言壮語していた新兵が戦場にでた途端、恐怖に憑りつかれ、涙や糞

尿を撒き散らしながら神や母親の名前を連呼するのを間近で見えてきたからでもあるし、勇者との冒険でさらに大きな危機を乗り越えた自信からも由来している。

何より、ライアンは何度か稲〇淳二もビツクリ昇天するくらい臨死体験をしているのだ。その度にザオリクや教会に金を積んで復活していたが、よく考えればそっちの方が余程ゾンビじみていることだろう。

さて、ライアンがこの状況で採るべき選択肢は二つしかない

1. このままこの部屋に留まり、トルネコの帰りを待つ

2. この部屋を出て、トルネコと合流する

1は最も確実な作戦と言える。ワープで飛んだトルネコは真つ先にこの部屋に向かってくるだろう。下手に動けば入れ違いになって合流するまで余計に時間がかかる。だが、それは同時に狂ったバーサーカーとも出会う可能性があるということだ。そして、部屋の中には5つの墓：微かに呼吸しているようにも見える墓石を眺めながら、なかなかよく出来ている、と思った。恐らく、侵入者があれば自動的にバーサーカーが目覚める仕掛けになっているのだろう。目覚めたバーサーカーは、近くに居るゾンビ達を殺し続ける……しかし、ゾンビは死んでも一時的に動きを止めただけで、またすぐに復活する、そしてそれを倒してさらに強くなっていく……

では2はどうか？ これはバーサーカーに出くわさない限り、ライアンには大丈夫だ

と思えた。だが、先も述べたように、トルネコと入れ違いになる可能性は大きい。それでも、もし一つだけ希望があるとすれば、すぐ隣の部屋にこのフロアを出るための階段があるかもしれない、ということだろう。

ライアンは髭を弄りながら2つの策を天秤にかけていた。この男が髭をイジるのは自らの考えに深く没頭している時の無意識の癖でもある……

「チャラララン、チャツラツラー!!」

例の耳障りな音楽が思考を中断した。どうやら、迷っている暇はあまりなさそうだ。ライアンは音が聞こえてきたのとは反対（と思われる）方向へ足を運んだ。

「クツソ〜……誰だ、アンナ罨を仕掛けたアホは」

ここにはいない誰かを罵りながら、トルネコは重い尻を床からあげた。

どうやら、ワープしたときの着地に失敗したらしい。

「痛エ……ライアンともはぐれちまったしな。早く戻らねえと」

そのときだった。通路の向こうから剣士らしきものが来るではないか……しかし、遠目から見ただけでもライアンではなさそうだ。

トルネコはさっきのフロアで拾った鋼の剣を装備した。

「へへへ……やっぱりあんだだったのか」

地獄の底から発せられたかのような声でそう喋ったのは、ガイコツ剣士だった。露出度が高すぎて腐った内臓や骨がチラチラ見える。トルネコは目の前に罨がないのを確認すると、新手の敵の方へ一歩踏み込んだ。こんな雑魚相手に新兵器を使うのは勿体ない。剣は苦手だが、今はこれでなんとか凌がなければなるまい。

両者ともジリジリと間合いを詰めていくが、先に動いたのはトルネコの方だった。

「ウリヤアアアアアッ!!」

だが、ただでさえ剣の扱いは大して上手くない上に、今までゴルフクラブを手にしていたせいで、その剣運びは敵から見れば子供のチャンバラ同然だった。ガイコツ剣士は少し身を引いて剣先をかわすと、素早く剣を払ってトルネコの武器を弾き飛ばした。

「へいーへい!!へい!!そんなショボイ剣の腕で俺にかなうとも思ってたのかよ?今の軌道が丸見えなんだよ!!」

勝利の御託に酔いしれながら止めの剣を最上段に構えた瞬間だった。ガイコツ剣士は額に冷たい金属の感触を知覚した。それは冷たいにも関わらず、どこか獐猛で凶悪な、感情すら感じさせる存在でもあった。そして、次の瞬間、その小さな金属片——ミス&ウエツソンM500——は確かにトルネコ的手中に収まっていることが、ガイコツ剣士の虚ろな眼窩からも確認できた。

「え……? いや、まさか、じよ…ジョーダン……だよね? まさかここでそんな物騒な

モノ撃つちやう、なんてことはき……」

「ああ、するんだよ」

「……ッ!!」

「そのまさかをな」

だが、考えてみればものすごく滑稽な光景だ。剣の間合いの中にいながら、こうして銃を突きつけられている不自然なポーズで固まっているのだから。もし、ガイコツ剣士に汗腺があれば、滝のような冷や汗が流れていただろう。もちろん、そんな人間的なものがあったのは遥か彼方の過去の日々、もはや剣士の精神にしか記録され得ぬ程の大昔のことではなかったが……

「そ、そんなことしちやったらさあ、ボクたちの仲間が黙ってないと思うよ」

「そんなときは全部ぶつ殺すだけだ。それに、今この状態ですら誰も助けに来ないのに、後になって誰か来てくれるモンなのかね？」

ガイコツ剣士はすでに震え始めていた。もう、今すぐ墓に入りたかった。しかし、そんなことは叶うわけがない……なんとかしてこの状況を切り抜けなければ……しかしどうやって？

「さて、アンタを生かしておいたのは他でもねえ、一つ気になったことがあったからだ」

カチツ。死を刻む時計から聞こえてくるような音をたてて、撃鉄が上がった。

「さつき『やっぱり』で言ったよな？ てことは、すでに俺のことを知ってた、てことだよな。誰から聞いたんだ？」

「お……同じフロアの仲間からだ……」

「オイオイ、嘘はよくないな。このフロアに来て最初に会ったのがオマエなのに、なんで他の仲間から聞けたんだよ？」

「いや、本当だ……信じられないのも分かるけどよ、このフロアにいる『あの方』に情報を持ってきた奴がいたんだよ」

「そいつはどこにいる？ それと『あの方』てのは、何だ？」

「誰が情報を持ってきたのなんて知らねえよ……それに『あの方』について話したりしたら、後でどうなると思って——」

最後まで言い終わる間もなく、額の銃口がめり込むかと思う程、強く押しつけられた。

「オイ、それじゃあ、質問の答えになってねえよ。こっちは時間がなくて急いでんだ。知らないんならチャツチャと始末して先に行かせてもらおうぜ」

トルネコの指が死刑執行人と化す直前だった。

「分かった！言うよ、言う！『あの方』ていうのはこのフロアで眠っているゾーマ様の



ことだ！ この遺跡を造ったお方でもあり、死んだ後もここで完全復活するまで眠っておられる！ 本当は前に一回復活したんだが、勇者一行にやられちゃった……」

「よし。んで、オレたちのことをチクツたのは誰だ？」

「それは知らない、本当だ、本当に知らない！ 俺はただ命令を受けてこうしているだけなんだよ！」

「じゃあ、その代わりに、ゾーマとかいうヤツの弱点を喋ってもらおうか？」

「……………」

「どうした？ ホラ、早く喋れよ。別に愛し合っている訳じゃないんだろ？」

「…………ゾーマ様は、まだ完全に復活されていない、つまり、俺たちと同じゾンビ、死者の側にいる…………もう大体、わかっただろ？ アンタ賢そうだから……………」

「アンタと同じ、カピカピのミイラ野郎、てわけだ。超燃えやすいな」

ガイコツ剣士は口では肯定しなかったが、わずかに首を縦に振った。

「ああ、ありがとう」

「じゃあ、その銃を放してくれ…………もう知っていることは全部喋ったんだからよ」

「まず、アンタが剣を離すのが先だ。そんまま手を離せばいい」

「分かった…………その代わりに、あんたも必ず、命を助けるって約束は守ってくれよ」

「ハハハ、オレは信用で金を作る男だぜ。だから今まで約束なんて破ったことねえよ」

ガイコツ剣士は内心（初対面で銃突きつけるヤツの言うことなんか信用できる訳ないだろ、ヴォケが!!）と思つたが、今は口にも表情にも出さないことにした。といったところで表情の方は失くしてすでに久しいが。

「分かった。とにかく、離すからよお……」

床に落ちた剣は情けない音を立てて床に転がった。

「さあ、これでもういいだろ？ な？ 早く解放してくれよ……」

「ああ、してやるぜ、この世からなwww」

「え？ 約束は守るって……」

ダー——ーン!!!

いつも死というのはあつけなくやつてくるものだ。例えそれが生ける屍であつたとしても。平等に。均等に。無作為に。

「ああ、守るよ。ただし人間との約束に限るがね。契約書はちゃんと読めよwww」  
もしかしたら、この最後の台詞を、ガイコツ剣士は薄れゆく意識の中で聞いていたのかもしれない。だとすれば死に際の表情も少し変わったものになつただろう。しかしその表情は大昔に失われているのだし、そんなことに頓着するトルネコではない。

なにせ、今の彼には守らねばならない約束が——ライアンと合流する、地上に帰つて一生かかっても返せるかどうか分からない額の借金を返す——たくさんあるからだ。

(やはりなかったか……)

ライアンは隣の部屋へ移動して、階段がなかったことを少しだけ残念に思ったが、決して落胆したわけではなかった。そんなに都合のいいような場所にあると本気で信じる程、楽天家でもなかったし、およそカジノにはじまるあらゆる賭け事でも、それ以外の人生の局面においても、自らの運のなさは身に染みてよく分かつている。

しかし、さっきの部屋に戻って、もう一つの通路に行く気にもなれなかった。

『チャラチャラン！チャラチャラ！』

これで何度目だろう？ 正確な数はいちいち数えてないから分からないが、この成長しつづける敵が、もはやライアンの手に負えぬほど強くなっているというのは、ほぼ確実だった。それだけ、下手に同じ場所をうろついていけばバツタリ出くわすことになりかねない。何しろ、相手は倍速のモンスターでもあるのだから。

結局その部屋も真つすぐそのまま突き抜けて長い通路を渡ると、たどり着いた部屋の隅にミイラ男が眠っていた。別に恨みはない無いが、大事を取って殺しておくことにすると、鼻息より静かに近づき——竜巻より速く剣を奔らせ、ミイラの首を切り落とした。

自らが死んだことにすら気付かずにその命を奪われた生首をライアンは数秒間眺めていたが、すぐにこの部屋を立ち去ろうと通路の方へ振り向いたそのとき――最悪の敵と目が合った。斧を持って充血した目を不気味に光らせている、狂戦士――バーサーカーの不定形の破壊衝動が、明確にピンク色の戦士に注ぎ込まれたのが分かったのだ。

ライアンは念のため、もう一度素早く部屋を見渡したがやはり何のアイテムも落ちてはいない。アイテムはトルネコに預けるといいう一極集中管理が完全に裏目にでた。せめていかずちの杖でもあれば、遠距離から敵の体力を削り、近づいてきたところを先制攻撃して強力な一撃を喰らう前に倒すことは――可能だっただろう。

しかし、今ここで仮想戦法をいくら考えても仕方がない。

久しぶりに壁以外の攻撃対象を見つけたバーサーカーは、すでにこつちの方へ猛スピードで走り寄ってきている。ライアンは先に切り落としたミイラ男の生首を（といってもカピカピに乾燥していたが）素早く拾いあげると、バーサーカーへ向かって勢よく投げつけた。

「グア!？」

突然飛んできた生首にひるみ、驚嘆の声をあげた。しかも、粉々に砕けた破片が目に入ったのか、一瞬だけバーサーカーの動きが止まった。

もちろん、この隙を見逃すようなライアンではない。すかさず愛剣を打ち込んだ。

が、間合いギリギリだったのと、わずかな視界を頼りに盾でうまく防御されたために、大したダメージを与えるには至らない。このことで少しあせってしまったライアンは、敵に立ち直る隙を与えぬように何発も連続して打ち込んだ。だがその分単調になってしまったのだろう、顔からミイラの粉を払い落としたバーサーカーに見透かされ、逆に切り込まれた。

物凄く重い一撃を覚悟して剣で受け止める——ん？ 少しおかしい……

レベルが上がったにしては随分と弱い一撃だ。それでも他のモンスターと比べればかなりの衝撃だったが、結局、ライアンはそのバーサーカーを難なく倒すことができたのだった。

『チャラフラン！チャツラツラー!!』

今しがた聞こえてきた例の音楽が、別の場所——それも言うほど遠くない場所——育ちつつある脅威を知らせてくれた。

「こうしてはいられまい……」

ライアンは別の通路の方へと急いだ。

## 7. 特殊階層・中編

トルネコはガイコツ剣士を倒した後、その部屋に一つしかない通路を通って階段のある部屋へ到達した。しかし、商売人のカンからきた嗅覚によると、このフロアからは金の香ばしい匂いを感じ取っていた。

特に、高貴な人間（や魔族）のミイラには保存剤として世界樹の葉が使われていることが多い。もし、それが発見できれば合成生物も活躍できるようになり、探索が一気に楽になるだろう。

この階段は無視して先に進むことにしよう。

通路は入ってきたのを除いて二つあったが、これも商売人のカンで選ぶと、まずはライアンと合流するために元いた部屋（ワープの罫を踏んだ部屋）へと急いだ。

（なんとということだ……!!）

ライアンはひしめくゾンビの群れに足を踏み入れてしまったようで、すぐさまモンスターハウスの定石戦法——通路に退却して一体ずつ倒す——を取った。

（まさか……このようなタイミングでモンスターハウスに出くわすとは）

己の不運を嘆くのはこれで何度目だ？（グールの顔面上半分がなくなる）

その不運の中で自分が招いたのはいくつあっただろう？（グールの死体を乗り越え  
シャーマンがやってくる）

冷静に、客観的に見たところによると『いくつもない』（シャーマンが振り下ろそうと  
した手が杖と一緒に吹き飛ぶ）

では、自分は不幸になるべくしてなったのだろうか？（シャーマンの心臓に剣が突き  
立てられる）

否、違う、断じて違う。（そのまま貫通した剣はミイラ男を串刺しにする）

自分ではできうる限りのことをした、そう、土地は命がけで耕したのだ（2体の死人が  
ピンを刺された虫のように痙攣する）

しかし、雨が降らなかつた（剣を引き抜く）

ただそれだけのことなのだ。神の気まぐれ、しかしつまるところ（次の敵が勇敢にも  
乗り込んでくる）

神なんてものは人格があるわけではなく、むしろ自然現象のようなものなのかもしれ  
ない（腐った死体の頭の3分の2くらいまで剣がのめり込む）

教会の神父の子守唄代わりの説教では、よく天国と地獄についてあるや無しやの諸説  
が語られるが、要約すれば（剣を引き抜きもう一度顔面へ振り下ろす）

どれも神の恩恵のあるところが天国で、それが無い場所が地獄であるということだ。  
 (今度は横に払って首を落とす)

では、天国と地獄の現世における比率はどれくらいだろうか？ 今までの経験と観察から思うに(ガイコツ剣士が勇ましく飛び出てきたが、死体に足を取られて、また他のモンスターに押されて地面に転ぶ)

この世の99%は地獄だ。(顔を上げようとした瞬間を狙って思いつきり踏みつける——バキョツという乾燥した、生命のカケラも感じられない音がする)

だからトルネコよ、早く来てくれ！ 残りの1%を信じられる、今の内に、早く!!

トルネコは一刻も早くライアンの元に駆けつけたかったが、今はなぜか床に片膝を置いて荷物も脇に置いていた。遠目から見ればそれは壁画に描かれている異形の神々達に祈りを捧げているように見えたことだろうが、信仰心など枯れた井戸ほども無いトルネコにとっては神など教会関係者との話のネタの一つに過ぎない。

特に、教会でも上層部になるとそれなりの金持ちでもある。信仰心を持っている『フリ』をしておけば商談もまとまりやすい。そして、そうした成果が神の賜物、信仰心のおかげだと本気で信じているヤツが脳タリンの信者に多く——いや、全てとっていいくらい——いるのだ。



そうやって強化された信仰心によって、人々は何の効果もない免罪符を買いあさったり、平願治癒のために今までの貯えをいとも簡単に寄付できるようになる。

もちろん、トルネコにはそれは無い。

だから、いまこうして糖尿病による発作を抑えるためにインシュリン注射をしているのだ。

「ふう〜、これをちゃんとやつとかなないと…… ミイラ取りがミイラになりかねんからな……w」

このフロアに掛けたトルネコ会心のジョークを聞くものはいない。震え始めた手と必死に抑えながら注射を打ち込む…… やはり昨日の晩に調子に乗って食べ過ぎたことが原因だろうか？ かといって医者のおりの食事量では餓死してしまうだろう（ジョーダン抜きで）。幸い、出発前にライアンが言っていた『万が一の事態』は避けられた訳だが、正直なところこんなに早く症状がでるとは思わなかった。これからは食事もある程度制限した方がいいだろう。インシュリンはまだまだ十分あるが、ダンジョン内では注射を打っている場合でない事態が発生するし、もしそんな時に発作が起こればかなりヤヴァイ。

——まあ、ライアンのことだから、心配しなくても今頃は暇を持って余して壁画でも眺めながら待っているのだ。新しい武器の性能を試しながらポチポチ行けばいい。何も

苦戦せるような敵はいまい——

そう考えながら、薬が効いて発作がおさまるのを待ち、今度は武器をサブマシンガンに持ち替えて立ち上がった。

「へへ、じゃあ、次はコイツの性能試験といきますかwwww」  
トルネコは誰に言うともなく、ぼそりと呟いて部屋を出た。

(まずい……!! もう来たというのか……!!)

殺戮の手を一瞬止めて後ろを振り返ると、通路の向こうの暗がりで見守るバーサーカー(L.V. 9)の姿があった。木のウロのような目には、この遺跡の闇と同じ、大昔から消えることのない虚無と絶望が宿っていた。

とにかく、早くここを切り抜けるしかない。

だが、その後は？ 敵は完全にライアンを捕捉している。動くスピードは、向こうはこちらの2倍あるのだ。何のアイテムもない以上、今この場を逃げ切ったとしてもすぐに追いつかれるのは火を見るより明らかだ。しかし……それでも逃げずにはいられなかった……

兵士になる前——猟師をしていた頃——猟の最中に矢が刺さった鳥が——もうすでに飛んで逃げることも叶わないのに——それでも近づいて手を伸ばすライアンに必死の

抵抗を続けている……そんな光景が一瞬だけ——本人も気付いていたかどうか分からない程一瞬だが——視床下部を駆け抜けた。

幸いなことに、ハウス内のモンスターとの2割ほどは別の部屋に行き、残ったほとんども、もう動かぬ死体と化していた。

あとは目の前に腐った死体が一体、いるだけだ。

「うおおおおお!! ぞけええいッ!! 邪魔だあああ!!」

思わず怒声をあげてしまう程、今のライアンは切迫した状態だった。だが、言われたとおりに腐った死体が道を開けたとして、どうなるというのだろうか? パーサーカー(L.V. 9)に殺されるのが、数秒先送りされるといっただけではないか?

しかしライアンも、矢の刺さった鳥も、最後の(いや、最期、というべきか)の1%を信じて己の100%を賭けた足掻きを見せるタイプなのだ。

むしろライアンはそういった状態でこそその者が持つ真価と実力を発揮できると信じていたし、後輩の兵士たちにもそう教えていた。

ライアンは一撃で斬り伏した腐った死体の死骸(これ以外に何と言えればいい?)をさつきの間抜けな骸骨剣士のようにならないように気を付けながら素早く乗り越えた。後を振り返りたい欲求に駆られたが、そうしなくとも俊足の足音を聞くだけで、どんどん近づいてくるのが十分理解できた。

今は空っぽとなったモンスターハウスに入るとすぐに全速力で出口の通路へ向かって走る——そのときだった。

「うおおおおおおおッ!!」

何かに足をすくわれてライオンは床に突っ伏した。

その左足にはトラバサミの骸骨のような歯が食い込んでいた。

まるでそのフロア全体が墓場と化したかのようなようだった。仲間どころか生命の気配すらまるで感じられない中、血の海を飲み込みぬかるんだグラウンドになった部屋の中で——リリパットの族長はただただ、立ち尽くしていた。

……あまりの惨劇と悪臭に、新兵が昼間に食べたチャーハンをリゾットに加工して吐き出す音——ビチャビチャ——だけが唯一の沈黙の伴奏だった。

「族長、報告がありました……」

「生存者か？」

「いえ……残念ながら、報告ではこの部屋と同じ光景が延々と続いていると……もはや生存者は……絶望的だと思われま……」

その報告を受けても、なお黙ったままの族長は、ふと目についた頭のないゴーレムの残骸の方へ、2、3、歩近づいていった。

血泥に足跡だけがはつきりと刻まれていく。

しやがみこんで、下敷きになった者が伸ばした手を見つめる。

「族長、このフロアの捜査もじきに終わるでしょう」

「……………」

「……………今のこの状況から見て、生存者はおそらくいないでしょう」

「……………」

族長は今だ口を閉ざしたままだった。肩が震えているのを見ると、もしかしたら泣いているのかもしれない。

「族長……………」

リリパットの部隊長が何か言いかけたときだった。

「お前達は……………別のフロアにいるリリパットなのか？」

木霊のようにエコーがかった声が残りの会話を遮った。

「どうなのだ？ 答えてくれ。私にはもう……………あまり時間がない」

「誰だ!? 一体……………生存者なら安心して出てきて欲しい。我々に敵意は無い。あなたを助けに来たのだ」

「私は……………先の戦いで負傷して動けない。だが、そなた達にはすでに見えてい  
る。……………だ……………だ……………」

部屋中のリリパットたちがそのエコーのかかった声の方へ歩み寄った。そこには、強い衝撃を受けてかろうじてさまよう鎧の頭部だと分かる程度の鉄塊が転がっていた。

「あなたは…一体…?!」

「薄々分かつているとは思いますが、私はさまよう鎧だ。このフロアで大きな戦いがあった……生存者はもういない。すぐに元いたフロアへ引き上げろ……そしてすぐに逃げろ。戦うことは考えるな。今のそなたらただけでは……到底敵わない」

「ちよつと待ってくれ。その戦いとは『地獄の商人』との戦いのことなのか?」

「そうだ。ではそなたたちも例のスライム……スラ吉とかいうものに会ったのだな?」

「ああ、そうだ。だが、そのときはこのフロアからの使者の援軍要請もあり、またスラ吉の言うことに確たる証拠がなかったために、こうして調べにやってきたのだ」

族長は相変わらず黙ったままで、代わりに側近が今までの状況を説明した。

「もはやこのフロアに生存者はいない。とにかく——できるだけ早く、持てるものを持って逃げろ。今の『やつら』はこことは別の特殊階層にいる。おそらく、スラ吉が階段に細工したのだろう。だがそれも時間稼ぎにすぎぬ……とにかく早く……逃げ………」

もうそれつきり喋ることはなくなった。

「族長、もはや生存者はいないと分かった以上、ここにいる意味はありません。とりあえず、元のフロアへ引き上げましょう」

「ここではじめて族長は口を開いた。仲間だけに反応する隠し扉のように。」

「引き上げることに皆も異議はないと思う。だが、引き上げたあとはどうするのだ？」

「コイツの言った通り、戦いもしない内から罪人のようにコソコソと逃げ回るのか？」

「それは族長が決定してください。逃げるのならば次元の果てまで付き従います。戦うのならばこの身が動く限り戦い続けます。」

「……ならば戦争だ!! 同じ種族としてこのような暴虐を見過ごせるわけが無い。いくぞ。帰ったらすぐに戦支度だ!」

「そういうと、族長はこのときはまだ自分のものだった右足を使って、喋ることの無くなったさまよう鎧の頭部を蹴り飛ばした。」

「グオオオオ!! 外れろおおおお!!」

いつもは冷静なライアンもこのときは焦った。降りしきる矢の雨の中でもこんな大声を挙げたことはなかったのに……それ程までにパーサーカー（Lv. 9）の存在は恐ろしいものだったのだ。今や獲物が部屋の中で動けなくなっているのを見て、慌てるこ

となく悠然と近づいてくる……目だけを不気味に光らせながら。

通路を歩くゾンビをマシンガンで撃ち殺した直後、トルネコはライアンと思しき叫び声を聞いた。ただの雄たけびかとも思ったが、あのライアンがそんなことをするとは考えにくかったし、何よりもその声には恐怖のニュアンスが含まれているのが明らかに感じられたのだ。反響するとはいえ、声がするということはこの近くにライアンがいる——それも好ましくない状況で——ことを明示している。肉と荷物を揺らしながら、トルネコは通路を走り抜けた。

「うおおおおお!!」

もはやトラバサミから抜け出すことをあきらめ、両手に剣を握り締め威嚇のときの声を無意識に放っていた。バーサーカーは楽々と先制を取ると斧を振り下ろした。

並みの冒険者ならこの一撃だけで死んでいただろうが、流石に手練れのライアンは何とか剣で受け止めることができた。だが……

足がトラバサミで固定されているためにそれを受け流すことができない。結果として力押ししの鎧迫り合いとなった。

「ぐっ……なんという力だ。それも片手でだと……!?!」



バーサーカーは久々に出会った手ごたえのある獲物を楽しんでいるように見えた。両手を使えば軽くライアンの剣を押し戻し、斧を肩から心臓まで食い込ませることができはすなのだ。それをしないで敢えて片手だけで勝負を挑む。(ホラ、もつと力出せねえのか？ オレはまだまだ本気じゃねえぞ)

ライアンにはバーサーカーがそう言っているように見えたし、表情もかすかに喜びに歪んでいるように見えた。

「ぐうううつつ……!!」

もはや限界だった。最初の数秒はなんとか耐えていたが、今やジリジリと刃を押し返されている……もうダメか……諦めかけたと同時に斧が肩の鎧に食い込もうとした瞬間だった——周りの風景がもうスピードで流れ去り、消えたかと思うと——いつの間にか別の部屋にいた。

声のする方に駆けていくと、案の定、通路の向こうにはライアンの姿があった。遠目から見ても目立ちすぎるピンク色だから、それだけは誰が見ても間違うことはない。

やっと合流できる…… そう思い歩を緩めて近づいていったが——何かおかしい。いつものライアンらしからぬ雰囲気漂っている……トルネコが眼力を絞って見直し

てみると、バーサーカーが斧を振り下ろすのが、ライアンの背中越しでも分かった。しかもよく見てみると、トラバサミに足を取られているではないか……トルネコはこの世における多くない友人を助けようと、すぐにサブマシンガンを手にしたが、この通路から撃つことはできなかつた。射線上にライアンがいるからだ。といつても、もはや斧がライアンに接触するくらいに近づいている今、走つても間に合うかどうか微妙なところであつた。ライアンも手練れであつたが、トルネコもある意味手練れ——というより脳練れといつた方がいいか？——の冒険者だつたので、すぐに杖を取り出し、ライアンに向かつて振り下ろした。

「なるほど……バシルーラの杖か」

（だが……あの新兵器の威力をもつてしてもヤツを倒せるのか……？）

もしそれでも敵わなかつたら……一瞬、鳥肌がたつたがすぐにその地縛霊のような考えを振り払うと元のモンスターハウスだつた部屋へと急いだ。数少ない友人の一人が生きていることを願いながら。

それにしても、こうして一対一で向かい合うとバーサーカーの異様さは周りの空気をも侵食しているかのように見えた。あのライアンですら文字通り刃が立たなかつたの

だから、接近されればほぼ一巻の終わりと見ていいだろう。必然的に取るべき戦法はヒット&アウェイ、それもこういつた通路のような狭い場所で行うのが理想的だ。

トルネコは持っていたままだったバシルーラの杖を地面に放り投げると（どうせ今は使わない、そしてそれを合図にバーサーカーが疾駆する）サブマシンガンに持ち替えた。銃器類は一通りの説明書を読んでいたから使い方は分かっていた。だが、それはテニスのルールや技術を知っているというのと同じで、実際の射撃の腕は動きの鈍い腐った死体やミイラ男を相手にした程度でしかなかった。そして初心者が陥りやすい考えである『数撃ちや当たると』戦法を選んでしまった。

そこには商人の好きな『リスクは分散する』という発想もあったのだろう。このような考えはライオンなら絶対にしなかった。

『数を撃つ』のが最も効果的に発揮されるのは集団戦の場合においてのみであって、個人戦では数を撃つための『労力』『時間』、および『持ち弾』の無駄でしかないからだ。剣もただ振り回していればいいというわけでないのと同じだ。

そしてここで繰り返された光景も大方の予想の範疇を超えないものだった。狭い通路に猛ダッシュで駆け込んだバーサーカーは、盾で上半身の主要部をガードすることで左足に一発弾丸を食らったただけですんだ。そしてそのまま、盾ごとトルネコに猛タックルをかまして吹き飛ばした。

通路の曲がり角の壁に思いつきりぶつかったトルネコだったが、起き上がるとすぐにサブマシンガンを構えた。

「痛つてええエエ!! これでも喰らいやがれ!!」

通常なら気絶するか軽い脳震盪を起こしていてもおかしくないが、リリパットの矢すら防ぐ皮下脂肪のおかげで大したダメージを受けずにすんだ。トルネコがこの時ほどメタボリックに感謝したことはないだろう。

だが、何度も言うように、銃というのはただ撃てばいいという代物ではない。すでに銃の威力と射程距離を十分理解したバーサーカーは斧が届かないと見るや、すかさず後方の暗がりの中へ後退していった。

「ウオオオオオオ!!」

立ち上がるとすでに暗闇に紛れて見失った敵へ向かって銃を撃ち続けた。そして弾が切れると、通路を全速力で逃げながら弾を込め、また足音だけが聞こえる背後の暗がりへ威嚇射撃を行った。

「トルネコ殿……生きておったのか!!」

あの冷静なライアンにもその口調の中に驚きと喜びを隠せないでいた。

「ああ。なんとか、ギリだったがな……だが、ヤツも生きてる、すまねえ」

「いや、謝る必要はない。むしろヤツ相手によく生き延びた。感謝したいくらいだ」  
久々に走って息を切らすトルネコに肩を貸しながら言う。

「さ、今のうちに階段へ急ごうではないか。早くこの忌々しいフロアから出よう」  
「ぜえ、ぜえ、ぜえ……」あまりの息切れに喋ることもできない。

まあ、なまけものがドーヴァー海峡をバタフライで横断したところを想像すればトルネコの息の荒さも分かるだろう。直前にインシュリンを注射しておいて正解だった。

「いいや。まだだ……」

「すまない、余りにここから去りたいあまり、少し急かし過ぎたな。」

「そうじゃない」

「……?」

一瞬、ライアンはトルネコが何を言おうとしているのか理解出来かねたが、すぐに察しがついた。ここにまだ残っていると思いき最後のアイテムを回収しに行くというのだ。

なんとという商魂!

他人の命より金が大事という人間はいくらでもいるが、自分の命と比べてすらまだ金の方に価値があるというのだから、ある種の尊敬の念さえ感じてしまう。あるいは、こ

のダンジョンの最奥部にある財宝はどんな生物でも持つている生存本能を狂わせてしまふ程のものなのか……おそらく、こういった人種は金の力があれば星の運行を狂わせて太陽を西から昇らせることが可能、とても思っているのだろう。

しかし、そんなものに付き合わされてはたまったものではない。ライアンは必死に反論しようとした。

「だが、さつきは辛うじて難を逃れえたが……ヤツに致命傷を与えたのか？」

「銃は剣と違つて手ごたえが無いから何とも言えねえ。だが、オレの予想からするにヤツは軽傷だろう……戦闘能力は依然健在と見ていい」

「なら、ますますここは退くべきだろう。昨日の儲け話が何かは知らぬが、このフロアには無いのだろうか？」

「ああ、そうだ。ここじゃない、もっと深い場所だ」

「ではなぜそんなにこだわる!？」

ライアンの語気が荒くなった。が、それも無理のない話だ。

トルネコは息を整えるとカバンの中にある合成の壺を指した。

「こいつのためさ。ゾーマのミイラともなれば、多分フンダンに世界樹の葉が使われているはずだ。そうすれば、この合成生物も使えるようになるだろうしな」

「合成生物がいかに便利なものは全く知らない。だが、今、この状況でより優先すべき

ことがあるだろう！ それにゾーマ？ ズーマだと!? バースカーに追われている中、わざわざ挟み撃ちされに行くというのか?!

最もな、あまりに最もな意見だったが、ここでトルネコがおとなしく引き下がる訳はなかった。

「大丈夫だ、そんなに心配する必要はないって。今回は追跡を免れる策もあるし、ゾーマにはヤツに良く効く、もつと強力な武器がある」

そして自ら確認するかのように

「大丈夫だ」と言った。

「その言葉、信用していいのだろうか?」

「ああ、大丈夫だ」

「二言はないな?」

「当たり前だ。商人は信用が第一なんだからな」

## 8. 特殊階層・後編

トルネコ達は長い通路を踏破し、ついに玉座の間（勝手にトルネコがそう呼んでいるだけだが）らしき場所に到着した。その天井は天を型取ったように高く、見知らぬ星座が描かれていた。特にライアンは軍団長でもあり、それ以前は元獵師だったこともあつてか、こういった気象天文に関する知識を一通り備えていた。

「……………誰だ？」

ライアンはこの巨大な遺跡そのものが喋ったかのように錯覚した。

「そつちこそ誰だよ？」

だが、トルネコにとつてはそんなことはどうでもいいようだ。あるいは計算済み？

あるいは、勇者との冒険に慣れきっていて、この程度では何とも思わなくなっているのか？

「私の名は……………ゾーマ。だがそれは昔の自分……………今はゾーマだったもの。そしてゾーマになろうとして眠りにつく者……………」

「ゾーマさんよお、アンタに一つだけ頼みがあるんだがよ」

ライアンはこの会話に二重の意味で驚いていた。このゾーマの定型とも言える演出



によつてもたらされた、少なからぬ畏れと、それに全く動じずに凶々しくも他人の寢室に土足で上がりこんで取引を持ちかけるトルネコの胆力に。

「何だ？ 余の墓守になりたいのなら、大歓迎だがな」

「アンタの体に巻いている包帯、少しいから分けて欲しい」

「ハハハ……何を言い出すかと思えば。どうやら、お前も墓荒しのようだな。そしてここまでできたということは、余の大切な墓守も今では墓の下にある、というわけだな」

セリフの端々に、ゾンビが持ちえない、ある種の刺々しさが含まれているのがライアンにはハッキリとわかる。

「もちろん、世界樹のエキスに浸した年代モノだから、タダでくれとは言わねえ」

「クク……なかなか見上げた商魂だな。まさしくお前の言うとおり、今、余が身に巻いているのは世界樹特製の包帯……おかげで肉体も精神も長きにわたつて保存されておる。」

「だが」と続ける。

「今、余が欲しいものは商人との取引で手に入るようなものではない。それでもあえて言うならば、そなたらの命ぐらいか……」

「残念ながらそれは取引できないね」

「別に命そのものをくれとは言わん。こここの墓守を倒してここまで来たことだけでも

よくできたものだ……人間の割りにはな。どうだ、人間よ、余の配下にならぬか？ ただのゾンビではなく、そなたらのような兵を欲していたのだ」

「そいつあ、お断りだ。」

「何だと？ もう一度よく考え直せ。余さえ復活すれば、そなたらは余に次ぐ地位を持つものになれるのだぞ？」

「もう、誰かに使われる立場にはうんざりなんでね。それに、復活したら真つ先にオレたちを消すつもりなんだろう？」

「なかなかの洞察力……本当は吸収して余の一部になつてもらおうつもりだったが、むしろ惜しいな。そのときは他の者を代わりに吸収することにしよう。復活すればあとはいくらでも自由なのだからな」

ライアンはこの話のやり取りを聞いて、突如としてとてつもない不安に襲われた。

ゾーマと言えば、遙か彼方の昔のそのまた昔、ほとんど伝説とっていい範囲に出てくる魔王の名前で、世に定期的に出現する魔王の中でも、実在すると考えられる最初の魔王である。もし……もしこれが本当にあのゾーマなら、死んでゾンビ化しているとは言え、かなりの魔力を有していると考えられる。当然、こんな草臥れた戦士と商人二人でどうにかなるような相手ではない。そして、この話の流れから察するに、戦うことになるのは自明の理……

「どうしても譲ってくれないのかねえ」

「お前たちこそ、余の要求を受け入れられぬのなら仕方がない。せめてお前らが殺した墓守の代わりにしてやろう」

それつきり、数秒間、全くの沈黙が玉座の間の、つかの間の支配者になった。だがそのたつた数秒間はライアンにとっては何百年と続く腐敗した王朝末期の圧政のごとく、皮膚に重くのしかかってくるように感じた。

その王朝は、部屋の中央にあつた祭壇から生じた轟音と——勢いよく飛び出した、褐色の巨大な積乱雲によって儚く崩壊したのだが。

侵略者が残した銃痕は左足だけでなく脇腹にもあつたが、幸い2発とも致命傷には至っていない。全て急所を外れていたのだ。といつても、どの傷も1cmずれていれば、今頃バーサーカーはこの世に存在できなかつただろう。

このギャンブラーが欲しがるような類まれな幸運を、しかし彼は全く幸運のおかげだとは考えていなかった。

運ではない。戦士の力量が引き寄せた当然の結果だ。

少なくとも、たとえ幸運の女神が目の前に現れようとも、本人はそう考えていた。

あの商人が持つ武器は確かに強力だ。だが、所詮、武器というのはどれだけ進歩しよ

うと、使い手の影響から逃れられる代物ではない。

冷静な心で武器を支配する者だけがその武器を使いこなせるのであり、武器を過信するものは逆に武器に振り回される。そういうものなのだ。

少々（というかなかり）痛かったが、体内に残った最後の弾丸を摘出し、壁にもたれかかり、しばし戦士の小休止を味わいながら作戦を巡らせていた。

いや……そのようなことを考える必要は、ないかもしれない。

というのも、普通の冒険者ならこの時点で下のフロアへ脱兎のごとく逃げ去っているであろうからだ。今までの戦闘経験からそれは確実といえる……

そう、確実と理性の分析では言えたにも関わらず、心の奥底で否定しようのない嫌な予感……海底のヘドロのように払拭しがたい、ある種の虫の知らせを感じずにはいられなかった。

そのとき、バーサーカーの精神にこのフロアの主の声がテレパシーで送られてきた。

——全ての忠実なる墓守たちよ、蒼穹の間へ集え……——

主人のテレパシーはそれだけだった。必要最低限の言葉だが、それだけで主人が戦っている相手が『やつら』であることは瞬時に理解できた。

そして、自らの戦士の予感が計らずも的中してしまったことも。

「フン、何か策でもあるのか？ 随分と余裕そうだな、人間よ」

「あははは」

躊躇などミジンコの鼻毛ほどもなかった。

まあ、机上の交渉はすでに決裂したのだから、あとは戦場での決闘以外にこの世での解決策は残されていない。

魔王によくあることとして、ゾーマはこの戦場を一種の神聖な——といつても子供が砂場を縄張りしているのと同じ程度の神聖さだが——場所だとみなしており、そこでは自らと強者どもとの戦いという至高のエンターテイメントが繰り広げられ、互いに最高のスリルと全ての賭け金、そして永遠のドラマ性を兼ね揃えた魔王唯一の劇場活劇が——自らが監督・主演・脚本を兼ねて上演されるものと考えていた。つまり、魔王族にとって世界征服などはただの副産物に過ぎず、真の価値はその過程——強者との戦いの中——でしか生まれえぬものだったのだ。そしてその戦いを通して、自らの生を感じ取り、また勇者の最後の足掻きから死に逝くものの絶望と哀切と諸行無常を観察することで、ありとあらゆる超越感と優越感に浸ることができるといった。そうでなければ——世界征服が目的であれば、自分一人でサツサと人類を片付けている。わざわざ勇者に強くなる機会など与える必要もない。

このような理由でゾーマは戦闘中であつても饒舌であつた。もちろん、相手を対等に  
見ているのではないが、会話することによつてこの自作の劇を盛り上げ、後々までそ  
の思い出に浸れるようなものにするための演出なのだ。

だが、トルネコにその発想はない。

あのライアンですら……ライアンですら、剣を抜くのを忘れていたとき——トルネコ  
はすでに火炎放射器のノズルを最大限に開放し、灼熱の炎をゾーマのミイラに浴びせか  
けた。

「地上に残してきたものに別れのこと B h i u g k j p @ 3 — p e l i ぎゆ p f s  
?!!!  
」

ゾーマが何か言おうとした。恐らく、

「地上に残してきた者に言いたいことがあるけどここで言うが良い。天国へ送る前にそ  
の者に伝えておいてやろう。」

とでも言いたかったのだろう。

いまやその口を炎が完全に塞ぐ。トルネコにとつての戦闘など、錬金術上の作業行程  
に過ぎない。当然、戦場は作業場という認識なので、そこでは決められたことをただ、  
淡々とこなすだけだ。

「ヤッパ、ミイラはよく燃えるねエ」

「おのレエエエエエー!!!人間ドモがああああ!!!」  
 ゴーマが当初の脚本に無かった叫び声をあげる。

「苦しいのも今のうちだけだよ。なんとたつてドイツ軍のタイガー戦車すら5秒で溶かすらしいからなwwww」

時ここに到り、ライアンの心の中から畏怖と恐怖の念はすっかり吹き飛ばされてしまった。むしろ、少々の哀れみの感情すら感じるようになっていた。ちようど屠殺場に引かれていく子牛を見守るときに、非常に近い感情が。まあ、子牛ほど食欲をそそる相手ではないにせよ。

「クッソッおッおッおッ!!!道連レニッシッテッヤッルッッ!!!」

ゴーマは最後の力を振り絞ってトルネコの方へ寄ってこようとしたが、一方のトルネコはすぐに距離を取ると手榴弾を何発も投げつけた。その動きは、ライアンからすればそれ程速いわけでもないのだが、鈍重なゴーマと比較されてどうしても素早く見えてしまう。軽快なデブは、この場面では不快の極みにしか映らなかつた。

手榴弾は、相手が燃えているせいで、当たった瞬間に爆発し、ゴーマの体を玉ネギ刻みに少しずつ吹き飛ばしてゆく。投げすぎると爆風で逆に火が消えてしまうので、2、3発投げては、また炎を吹き付ける錬金術上の作業を4、5回繰り返すと、そこにあるのは巨大なミイラの燃えさしだけになってしまった。

あとに残った二人の中年男は、それが燃え尽きて全部灰になるまで、ただ黙って見つめていた。

灰が冷め切らない内に、トルネコはゾーマだったものを集めると（こうして地獄の帝王、ゾーマは復活しようとしたところを名も無き商人によつて倒されました。そうやって未来の世界は救われたのです。メデタシ、メデタシ）合成の壺の中へ放り込んでいた。

世界樹の効果は灰になつても一部は残っているらしい。これだけの灰があれば、一部の効果しか残つてなくとも葉一枚分以上の効果はあるだろう。

これでついに合成生物のお出ましか、とライアンは思ったが、トルネコはもう少し他のモンスターとの合成を進めるといふ。おそらく、それがいいだろう。これまでのモンスターは弱いし、下へ潜ればもっと強いモンスターを合成に使える。

そうやって全ての灰を壺の中へ入れ終わったときだった——ライアンは何となく背中に寒いものを感じ、自分が来たときとは違う、この部屋へ通じるもう一つの通路を見たとき——そこには明らかに怒りに目をたぎらせるバーサーカーの姿があった。

こういう悪い予感だけは、外れたことがない。



「ここはオレが時間を稼ぐ!! アンタはきつき話した計画通りにしてくれ!!」

そう言うやいなや、トルネコはサブマシンガンを素早く手に取り、壁画へ向かって考古学者が泣いて止めるであろう、フルオートの連射を浴びせかけた。

もちろん、先の戦いからバーサーカーに命中するなどとは全く考えていない。ライオンがトルネコに頼まれた通り、通路にナパームをばら撒いて退却し終えるまでの間の時間を稼げればそれでいい。後はトルネコが退却した時点でナパームの帯に火をつける——バーサーカーは通路で丸焼け、という策だ。成功するかどうかは正直厳しいところだと思った。

だが、バーサーカーも先の戦いで負傷しており、この短時間では回復しきっていないし、いくら動きが速いといっても撃ちまくれば近づくことは容易ではない。

しかし、その計算はライオンが通路に消え、トルネコもその後を追いかけてようとトルネコもその後を追いかけてようとした時点で、早くも破綻し始めた。

バーサーカーも通路の中に入られれば、いくら自分が素早くても銃を持つ者を相手して、自らの射程圏に捕らえることが不可能だと分かっていた。といって、射程を延ばす方法はこちらにはない。ならば採るべき方策は一つ——通路に入られる前に倒す——それしかなかった。

弾丸を避けて中央祭壇に避難していたバーサーカーは意を決するとそこから飛び出

し、マシンガンの弾を避けるために斜めに全力で走る——だがどうしてもあと5メートル足りない。そこで壁に突き当たってしまったのだ。トルネコはその瞬間、勝利を確信した——ここで倒したらナパームも無駄になるな、それにしても、これでこの鬱陶しい追跡者から逃れられる。まあ、軽く飛び出すなんてコイツらしくないが、ま、所詮近代兵器の前に石器時代の斧振りかざしたところで勝てやしねえよ、蠟螂の斧、て諺、知ってるか？——冷たくなり逝く予定のバーサーカーの死体に投げかける言葉まで、すでに準備していたトルネコの目の前で、バーサーカーは垂直な壁を蹴りあがって跳躍すると、そのままトルネコの頭部に回し蹴りを入れた。

普通ならこの一撃で相手の首の骨は砕け散って、勝負が決まっていたであろう。普通なら、というより普通の首なら。

そういう意味ではバーサーカーの計算も破綻したといえる。

この商人には外見上、首に当たる部分などなく、周りについた膨大な肉の緩衝材が蹴りの衝撃を吸収していたのだ。そのせいで、思ったよりダメージは与えられなかったのだ。

「うおおおおおおおおりやあああああああああ!!!」

蹴りの衝撃で地面に倒れた商人は、そういう特殊事情もあつてか、バーサーカーが体勢を立て直す前に、獣のような絶叫とともに銃を乱射した。

この遺跡最後の墓守はとっさに祭壇のほうへ身を引いた。商人が生きている以上、ここで通路に入ればあの剣士と挟み撃ちにされる。あの剣士がそう易々と倒せる相手でないことは十分分かつている。しかも、今回はトラバサミというハンデもないのだ。

バーサーカーはこの時点では、悠然と通路に引き返す商人を見送ることしかできなかった。

だが、ここで諦める訳にはいかない……何せ、あの二人は主君の仇なのだから。

とにかく、バーサーカーは二人の跡をつけることにした。このフロアで追いつけなければ（その確率はかなり高そうだと思った）下のフロアまで、どこまでも追いかけるまでだ。どうせここにはもう守るべき主君もないのだから……そう決心すると、祭壇から身を乗り出し、二人が消えていった通路へと慎重に尾行を開始した。

「へへッ、これでヤツも主人と同じ道をたどったというワケだ。」

燃え盛るナパームの炎の回廊を見てトルネコがぼそりと呟いた。

「じゃ、さつき捨てたバシルーラの杖でも拾ってくるか。また意外なところで役に立つかもしれないしな。」

トルネコがしばし部屋を出た後も、ライアンは燃え盛る炎をただただ呆然と見つめていた。

何か少しおかしい、と思ったときにはもう手遅れだった。通路の先の闇から疾走してくる炎の蛇に丸呑みにされ——ついに自分も主人と同じところへ、同じ方法で逝つてしまふのだろうか——ぼんやりとそう思った。

バシルーラの杖を拾つてくると、二人は階段を降りて適当な場所で野営することにした。今日の晚餐はトルネコ特製のハウスのハヤシライスだ。

食後はいつも通りの夜のお楽しみをしようかと思つたが、二人とも今日の出来事に心底疲れきつていたので、今日のところはお楽しみを諦めて早く寝ることにした。

寝袋に入る直前、トルネコは例の合成の壺を取り出し、例の独り言で語りかけた。

するとどうだろう、中から微かな振動——内部から壺を蹴るような振動が、手に感じられたのだ。どうやら、ゾーマの灰はすでに効力を発揮しているらしい。苦労も多かったがその分収穫も多かった今日という日に感謝しながら、トルネコたちは暗く冷たいダンジョン内で眠りについた。この体の疲労が、いい夢をもたらしてくれそうだと期待を込めて。

## 9. リリパット族の復讐

トルネコは丘の坂道を登っていた。

顔料で染められたかのような濃い青が、見上げれば目がかすみそうな程澄み渡っている。

トルネコはこの場所を知らない。今までに來たこともない場所だった。それでも、自分には確かにこの場所を知っているような、妙な確信だけあった。

そうだ、この丘の上には一本の木がある。

知らないはずなのに、その木が白昼夢のようにそこに立っている情景が、ありありと浮かんできた。

そこでトルネコが来るのを待っている、ポポロやネネの姿とともに――

奴らは今、石のように深い眠りにについている。その様は傍で大砲が鳴っても目を覚まさないと思われる程だ。

――いける

リリパットの族長は今までにないくらい成功を確信したが、その足音は静寂ですら聞

き分けることあたわず、だがそこに過信は全くない。今、手を伸ばせば届きそうな暗闇の中に憎き商人が間抜け顔ぶら下げてグースカ寝ているのだ。

——しくじる訳にはいかない

何せ全滅した氏族全員の仇なのだから。

部下が全て配置についたところで、族長は合図の火打石を2度打った。

トルネコの目の前にはポポロとネネの死体があった。

二人とも矢が刺さったまま、例の木の下に倒れていた。

空だけが鮮明に青い。

トルネコは声を上げようとしたが、舌が張り付いてうまく声を出せない。

二人の死体に手を伸ばそうと屈み込んだとき——トルネコの左肩に矢が刺さった。

目を覚ますと、火矢だけが妙に明るかった。

気がつけば右足をライフルで吹き飛ばされていた。

矢はすでに射ち尽くした。

ついてきてくれた仲間も、あの二人に皆殺しにされた。

自分がこんな無謀な作戦をしなければ、という自責の念は少なからずあったが、どうでもいい。もうすぐ自分もそこへ行くのだから。

青い商人の方が、地面にうつ伏せになっている自分を見下ろしている。

あの歪んだ笑顔で。

「おい」

トルネコが畑の虫に話しかけるような口調で、リリパットの族長に初めて口をきいた。

「お前が仲間のところに還る前に一つだけ訊いておきたいことがあるんだがよ」

「く……くそ……まさかこれ程までとは……」

族長が地面に向かってボソリと呟く。

「おい、ちゃんと聞いてんのかよ。色んな意味で時間がないから、俺のたった一つの質問にサッサと答えろよ。『黄金の弓』てのは」

——勿体ぶった僅かな沈黙。

「どっしりあるんだ？」

言い終わった一瞬、族長の体が硬直したように見えた。

「し、知らん。聞いたこともない……」

トルネコは、地面に倒れたままの族長の、右足の無い左右非対称の体を見下ろしながら続けた。

「上の階でアンタのお仲間が言ってたんだがよ。『黄金の弓さえあれば』てな。地獄耳の巻物で聞いたんだから確かだと思ってアンタに教えてもらおうと思ったんだ」

「知らない……知らない……」

「知らないワケはねえだろ。こつちだつて穩便にことを運びたいからな。今なら命を助けてやってもいい」

「誰が……お前なんぞに……知っても教えるわけがない！」

「正直にいうと、アンタが早く喋ってくれないと、こつちとしても『したくないこと』をしなくちゃならん。分かったら早く喋ってくれないかな。黄金の弓の場所を」

「断じて断る……！ お前らにしゃべるくらいなら死んだほうがマシだ。さあ、早く殺せ！」

「ふう、やれやれだぜ。またメンドクサイことになりそうだな」

これまでの会話をずつと黙ったまま聞いていたライアンだったが、ここで面倒になることを思いとどまらせようと、トルネコの耳元でささやいた。



「こ奴はいっぱしの戦士、それも族長だ。なかなか口を割らせるには時間がかかる。それに、弓がなくとも我らにはもうすでに十分、強い武器があるではないか。武器のほかに、不完全だが合成生物もいる。先はまだまだ長いのだから、ここは急ごう」

ライアンのもつともな陳述に、トルネコはしばし考え込んだ。今、トルネコの心の中ではライアンの提示した戦略案と、レアアイテムへの渴望が領土争いをしている。しかし、結果は見えていた。このチャンス（そのためにわざわざ一匹残しといたんだからな。じゃなきゃあ、とつくに殺してるね）を無視して先に行くなど、トルネコの商魂——もはや最後に残されたアイデンティティ——が許す訳がない。それに、急ぐのなら黄金の弓を入手してからでも十分だ。

そう考えたトルネコがカバンの中から拷問に使えそうなアイテムを取り出そうとしたとき——背中に衝撃が走った。

トルネコの一瞬の隙を突いて、族長が隠し持っていたナイフを背中に深々と突き刺したのだ。

それから0.5秒後、族長の左腕の肘から先は、トルネコの放ったショットガンによって盛大に血を噴き上げて吹っ飛んだ。

「ライアン、そいつが動けないように、押さええてくれ」

背中の中の分厚い脂肪の鎧に突き刺さったナイフを引き抜きながら言われて、ライアンは正直なところ面倒になったと思った。族長が余計な事をしてくれたせいで、拷問はさらに長引きそうだ。

いっそのこと押さえながら首の骨を折って、ひと思いに始末してしまおうか、とも思ったが、こうなつたトルネコを止めることは簡単ではないし、これから先の冒険が気まづくなる。それにライアン自身も兵士特有の武器への好奇心があつた。黄金の弓を見てみたい。そして、出来ることなら使いこなしてみたい。

ライアンがそう考えている間にも、トルネコは黄色い草を取り出すと腕を吹き飛ばされた痛みに耐える族長に無理やり飲ませた。

——毒草だろうか——族長は一瞬そう考えたが、もしそうなら幸いだ。右足と左腕の切断面からの大量出血サーブスに加え、毒草の効果が上乗せされるのならば超特急である世に行けるだろう。

だが冷静に考えて、拷問をするのだからそんな早く死なせる訳がない。族長はトルネコが本気を出す前から死にすぎりついていた。もはやこの時点でトルネコが半分勝つたようなものだった。

草を飲んだ瞬間から、やけに意識がハッキリとし、周りのものがよく見えるようになった。目の前の商人の服に付いたカレーのシミまでよく見えるし、自らの心臓の鼓動

まで聞こえるし——何よりも右足と左腕の痛みは常に針で突かれているかのように鋭く感じられるようになった。これは……？

「目覚まし草だ。途中で気絶されたら困るからな。ライアン、もう放していいぜ」  
——自分は……これから一体、何をされるのだ……？——

恐怖はすぐに痛みで押しつぶされた。

「ぎいやああああああああ!!」

トルネコが手にしているのは火炎草だ。正確には、先ほど吹き飛ばした族長の腕に火炎草を握らせたのを、掴んでいるのだ。

火炎草をグイグイと押し付けるたびに、腕の断面からジュウジュウと煙があがる。肉の焦げる臭いがあたりに充満した。その中に骨の焼ける臭いを感じ取ったのは、おそろしく目覚まし草を飲んだ族長だけだろう。

むき出しの骨と神経を、トルネコは容赦なく焼き払っていく。

「目をつむれば中々、おいしそうな匂いじゃねえか」

また、あの歪んだ微笑だ。

「ちようどいい焼き加減だ。余った草はやるよ」

そう言うのと、族長の眼前に火炎草を投げた。





胃が熱い。喉が痛い。目から涙が溢れ、目潰し草の汁と混ざって流れ落ちている。思わず左手で拭いそうになった。不思議と、ぬぐった感触はあった。

今までこの左手で何本の矢を放ったのだろう。仲間と共に……その仲間も、みんな死んでしまった。彼らのためにも、黄金の弓の在り処を喋るわけにはいかない。

あれはただ単に強い武器というだけではない。リリパット族の誇りそのものと言っ  
てもいいのだ。絶対に言うものか……

おや……何やらジョロジョロと音が聞こえるが……

「おい！ ライアンもやれよ！ 男の友情、ツレションだぜ」

二つの黄金の滝が交わる所に、腐ったパン（とそれを掴む族長の元左腕）はあった。

——絶対に言うものか……

その瞬間、後ろ掴みに頭を持ち上げられ、口に例の黄金水入り——こつちの黄金だけは御免こうむりたいが——腐ったパンが口の中に詰め込まれた。

「しつかりとよおく噛むんだぜ。あと、弓の在り処を言いたいのならいつでも言いな。大歓迎だからよ」

口の中にヘドロと生ゴミを混ぜたような味（どちらも食べたことは無いが）が広がり——ひと噛みごとにパン（もどき）から液体がジクジクと滲み、舌にまとわりついた。

そして、パンを掴んでいる自らの元左手の味を知覚したところで、ついに族長は嘔吐した。

自らの焦げた胃の一部とともに。

絶対に言うものか！絶対に言うものか！絶対に言うものか！絶対に言うものか！絶対に言うものか！絶対に言うものか！絶対に言うものか！絶対に言うものか！絶対に言うものか！

トルネコは足で族長をpushしながら残った右腕をねじり上げ、インシュリン注射器を静脈にブスリと突き刺した。

「さて、楽しいクイズの時間だ。この注射器の中に入っているのは何でしょう」

「グあ……あ……あ……」

もはや虫の息だ。

「中に何が入っているかを訊いてるんだよ、この注射器の中身を」

「……………」

返事がない、もう屍になったのか？

「この中にはな、踊り草の濃厚なエキスが入ってるんだよ。アンタの最期として、面白おかしいダンスを見せて貰おうじゃねえか」

無様な最期は嫌だ！嫌だ！嫌だ！嫌だ！嫌だ！嫌だ！嫌だ！嫌だ！嫌だ！嫌だ！  
でも、弓の在りかを言うのはもつと

嫌だ！嫌だ！嫌だ！嫌だ！嫌だ！嫌だ！嫌だ！嫌だ！嫌だ！嫌だ！

「よし、本当だな？ まあ、嘘だと分かったら、そのときはまた戻ってきてお注射してやるからよ」

どうやら、自分は無意識の内に弓の在り処を言ってしまったらしい。

情けなくて、また涙が流れた。

涙のおかげで早く目潰し草の汁が流れ去ったのか、ようやく視力が戻った。その眼が映し出したのは、意気揚々と立ち去る二人の人間の姿だった。

族長は永遠の闇を求めて、ゆっくりと——まぶたを閉じた。



## 10. 黄金の弓（試し撃ち）

——遅い……まだ帰ってこないの？

そう考えていたのはまだ若いリリパットの母親だった。つい先日、夫に緊急招集がかり、従軍していった。日数はそれ程かからないとは言っていたが、それでも心配だ。以前、魔王軍に従軍したときは奇跡的に生還したものの——やはり多くのリリパットが死んだ。確か、前の族長もそれで死んだ。

「不々思議のダ〜ンジョン〜♪ 手〜ごわいシュミレ〜ジョン♪」

隣の居間から聞こえてくる調子外れの歌は、二人いる子供の内、下の息子が歌っているものだ。リリパット族にしては珍しく、将来吟遊詩人になりたいのだという。

父親は一族の掟通り、息子をいっぱしの狩人として育てるつもりだと言っているが、もし才能があるのなら——このリリパットの母親は、吟遊詩人でもいいと思っていた。

まあ、今のところ子供は幼く、まだまだ先の話であり、また、いつまでも歌に興味を持ち続けるとは限らない。そして重要なのは、今日の晩御飯の準備をし、夫が帰ってくるまで子供たちを守ることであった。

「ねえ、母さん、さっきのどうだった？」

「そうねえ……なかなか良かったんじゃない？」

本当はかなり幼稚な歌だと思っただが、そこは息子への愛情があるためか、逆にその幼稚さがよかつたりする。

だいたい、こんな子供がプロのオペラ歌手並みの歌唱力でヴェルディやモーツァルトの曲なんて歌った日には、うつつとうしくしてしかたがない。成長過程を見守るのが子育ての大変なところであると同時に、それ以上の喜びでもある。

しかし、上の長女にとっては不満だったようだ。

「母さんつてば、あまりほめないでよね。また調子に乗ってうるさくしだすんだから」  
他の大半のリリパットたちに代わって姉が苦情を申し立てる。

「まあ、いいじゃない、リリパも前よりだいぶ上達したんだから。この調子でいけばホイミンみたいになれるんじゃない？」

晩御飯の準備をしながらそう返事をしたときだ。

玄関のドアを暴風のように激しく叩く音がした。

こんな時間に……一体だれ？ 知り合いならこんな乱暴にドアを叩かないはず……

様々な考えが頭を巡ったが、とにかく、ドアのレンズから覗いてみよう、ドアの近くに寄った。

その瞬間、落雷のような音がしたかと思うと、扉は大剣によって真つ二つにされ、そこからピンク色の鎧を装着した人間が家に悠然と侵入してきた。

「ちよつと……なんなの!?! あなたは……」

言葉に窮するリリパットの主婦とは対称的に、ライアンは何の躊躇もなく弓を構え、と取り出した矢をつがえた。

「お金ならあげるわ。だから何もしないで、黙って出て行って——

これがこのリリパットの最期の言葉となった。もし許されるのなら、家族に『さよなら』の一言もあつただろうが、残念ながら死神というのは何の挨拶もなしにやってくる、そういうものなのだ。

ライアンは一度に3本の矢を放ち、それはまだセリフを喋り終えていないリリパットの心臓部に全て命中した。

リリパットの主婦は十数秒の間、胸を掻きむしりながら、陸揚げされた魚のように床の上をのたうつと、すぐに血を吐いて絶命した。

「おい」

静まり返って誰もいない空間に呼びかける。

「居るのはわかっている。早く出て来い。出てこなければ、家に火を放つ」

あの二人、歌っていた少年とその姉はどこかへ隠れていたのだろう。

このまま隠れていれば、二人とも殺されるかもしれない……

少女は一人決心すると、弟に絶対に音を立てずにこのクローゼットの中に隠れているように言い残し、ライアンの前に歩みでた。

「出てきたから、火をつけるのはやめて」

姉は全身の震えを必死に抑えながら何とかそれだけの言葉を吐き出した。

「よし」

ライアンが一步近づいた。

少女は一步下がる。

ライアンがもう一步近づく。

少女がもう一步下がった時点で、かかどが壁にぶつかつた。

なおもライアンは一步づつ、床をコツコツ鳴らしながら近づいてくる。

このまま殺される——しかし、ライアンはそのまま恐怖に立ちすくむ少女の前を通りすぎると、勝手口の方へ歩いて行き、そのドアを蹴り破つた。

「10秒やる。ここから全力で逃げろ」

——この人間は何を言っているのだろうか？

少女は液体窒素をかけられたかのように硬直した。何のために？ 本気なの？

「1、…2、…3、…」

ヒゲの奥から聞こえる時報に、少女は先のセリフが本気であることを悟ると、固まった足を全力で動かして兎のように駆けだした。

チラリと後ろを振り返ると例の戦士は矢を取り出し——ここまで見ればもう何をするつもりなのかは十分推理できる。少女は矢を避けやすいように、ジグザグに走りだす。

だがすぐに地面に倒れた。目で見て初めて、ふくらはぎに矢が刺さっていることが分かった。それほど鮮やかな弓術だった。遅れて、脈打つ筋肉に刺さる冷たい矢の感触が伝わってくる。まだ走れるだろうか。

窒息寸前の肺魚のような呼吸と早鐘のような心音であっても、まだもう少し——もう少しだけなら走れそうだ。

すぐ目の前にある林まで行ければ——そう思つて手をつきながら、体を重機で鉄塔でも起こすように持ち上げた時——今度はもう一方の足に矢が突き刺さった。

少女がそれでも何とか痛みに耐えながら体を起こす間もあればこそ、天から降り注いだ幾本もの矢が次々と急所へ襲いかかってきた。

薄れゆく意識の中で弟の無事を祈りながら、リリパットの少女は絶命した。

「ふむ、まあ、久々にしては上出来だろう」

数十メートル先に転がっている痛ましい肉塊を眺めてそう呟くと、すぐに松明を取り出した。もうここに用はない。

——それにしても、ずい分と高価なテーブルだ——ライアンは場違いにそう思ってしまった。同じ猟師でもライアンはもつと質素だった。こうまで生活水準が違うというのはおかしい。族長の家か？ もしかしたら、トルネコの言っていたダンジョンの秘密と関係あるかもしれない——そう推理しながら、火打ち石を取り出す。

「うあああああ!!」

突然の関の声に振り返ると、そこには一本の矢を掴むリリパットの子供がライアンへ襲いかかってくるではないか。しかも、この距離とタイミングでは弓の先制攻撃は間に合わない。並の戦士なら防弾チョッキでも着てない限り、この攻撃を防げなかった（それだけこのリリパットの攻撃はよかった）だろうが、黄金の弓に選ばれるだけの力量を持つライアンは、やはり子供には過酷過ぎる相手だった。

竜巻の速さで剣を抜くと、リリパットの顔を横に払った。その純粋な、まだ誰かのために流す涙を持つ目を巻き込んで。

「ぎいや、あああああ!!」

両目を押さえて床を転げまわる。

「ぐぎ……ぐ……」

止めは刺さなかったが、代わりにくるりと反転し、まだ途中だったカーテンに火を点ける計画を実行した。そして火が燃え上がるのを確認すると、侵入してきた表口の方へつかつかと歩いて行った。

「どいこ……どいこにいったんだあああ」

「どいこにも行きはしない」

ライアンは火の回り始めた家を後にしながら、ボソリとそう呟いた。

## 11. 最後に立っていた者

「ギガデイン」

勇者の放った刃雷に、襲いかかったモンスターが瞬時に焼肉と化した。

今、目の前では有り得ない光景が繰り広げられている。

4人が、その何百倍もの数のモンスターを、包围しているのだ。数から言えばおかしいが、今されていることはそういうことだった。

後ろで爆音が轟く。おそらく、あの踊り子風の人間が放ったイオナズンだろう。上空から、バラバラになって粉塵と混ざりあった肉塊が降ってくる。

それによって、ますます部隊は混乱し、指揮系統は分断、組織的抵抗さえできない有様。そもそも、指揮官がまだ生きているかどうかすら、この場の誰も、分からなくなっていた。

爆炎から逃げようとして、反対方向に逃げようとしたものは、今度は小柄な青い帽子を被った少女に殴り殺されていった。小柄だと思つて舐めてかかったのがいけないかった。その4匹のシルバーデビルの攻撃は軽くかわされ、あつと言う間に急所を突かれて絶命した。



こつちも駄目だ。すでに包囲されている。

族長に向つてそう叫んだ。もう、この場では逃げることを先に考えた方が良かった。いくら包囲されているとは言え、相手は4人しかいないのだから、必ず逃げ出す隙間はあるはずだ。

そう考えているときに、頬に熱風を感じた。

ベギラゴンだった。その炎で、仲間の大半が焼き払われた。

何か考えてしたことではない。ほとんど条件反射で族長の元に駆け寄ると、まだ燃え盛る火を必死で消した。

「族長、大丈夫ですか。今、火を消しました」

「ああ、何とかな……お前が早く消火してくれたおかげで」

苦悶の表情を滲ませながらも、少しだけ笑う。

「歩くことぐらいは出来そうだ」

「早くここから撤退しましょう。ここはもうお終いです……肩を貸しますから、すぐに立ってください」

「負傷者は？」

「今は族長がここを逃げ切ることが先決です。残りは、自力で動けるものは自力でなんとか脱出してもらおうか……」

「そうか……」

族長は、そこで大体の戦況を悟った。

一応、逃げ切る算段は僅かだがあった。魔法攻撃は常に一定のタイミングで行われている。さらに、あの少女はいくら強いとはいえ、通常の物理攻撃しかしていない。ならば当然、一番有効射程が狭い。

そして、魔法では、勇者の使うギガデインの間隔がいちばん長い。他の二人は魔法使いだから、魔法攻撃しかできない。勇者は肉弾戦もできるから、MPを無駄に消耗することを避けているのだろう。

逃げるなら、そこしかない。少女と勇者の間の空間、ギガデインの射程ギリギリのところ——ここを全力で逃げ切るしかない。イオナズン方面は、粉塵に紛れることもできるかもしれないが、逆に視界を遮られて退路を見誤る可能性があるし、射程も広い。それに族長の怪我の状況では、粉塵舞う熱風の最中を走り抜けるのは無理だ。

ベギラゴン方面は、死体があちこちで炎上し、退路が無い。

思考している内に、ギガデインが放たれた。もうさほど多くないモンスター達が地面に倒れるのを確認すると、族長を支えながら全力で走り出した。とにかく、次の雷撃が来ないことを祈るしかない。

格闘少女がこちらに気づいた。

体全体を向けて、止めを刺しに行こうとした——とほぼ同時に、少女の背後の炎が動いた。

ベギラゴンで焼かれた仲間が、最後の力を振り絞って少女に襲いかかったのだ。

奇襲は完全に成功したかに見えたが、少女はその燃える腕を掴むと、綺麗な一本背負いを決め——そして、その燃え盛る仲間はこっちに向かつて猛スピードで飛んで来た。

族長を支えながら、避け切れる訳もない。

ビリヤードのように、燃える肉塊が当たった衝撃で吹き飛ばされ、地面を転がった。顔を上げてみれば、族長は燃え盛る肉塊の下敷きになっていた。

「逃げろ」

火が、下の族長にも燃え移ってゆく。

「逃げて、このことを伝えろ」

見殺しにはできない。生き残って、臆病ものの汚名を着たくはない。それに、まだ間に合うかもしれない。族長の元に駆け寄りとうとしたその時——雷撃が襲いかかった。

射程ギリギリだったので死は免れたが、もはや歩くだけで精一杯の状態だった。若干朦朧とする意識の中で、格闘少女がすでにかなり近づいていることが辛うじて認識でき

た。

相当のスピードだ。そして、その進路を遮るようなモンスターはもはや残ってはいない。

それでも、諦めるのはまだ早いように思えた。

「いいな、必ず伝えるのだ。お前一人なら今からでも逃げ切れる」

そう言うのと、族長は最後の力を振り絞りピオリムの杖を振り下ろした。

そして、2度と動くことはなくなった。

目を開けると、そこは青かった。しばらくして雲が目に入った時に、ようやく空を眺めていることに気付いた。それにしても、嫌な夢を見たものだ……何年も前に、前の族長と一緒に魔王軍に参加、勇者と闘った時の光景だった。あの後、自分は結局逃げた。仇を取ろうなどとは全く考えなかった。ピオリムの杖の効果が切れてからも、心臓が破裂しそうになるまで走った。情けないだけだったのに、その後、勇者と闘った者で唯一の生存者ということ、族長になってしまった……

——そうだ。他の仲間は、リリパットの里はどうなった？ ——

気になって、とにかく視線を空から動かそうと首を動かすと、視界に例のスライム——スラ吉がこちらをジッと見つめていた。

「よかった。意識が戻ったんだね」

その一言で、ようやくここが現実だと知ることができた。そうだ、こいつなら里がどうなったか知っているだろう。早く訊かなくては……急いで喋ろうとするも、口が動くだけで全く声が出ない。

「まだ喋らないで。体力の消耗が激しいから」

そんなことに構ってられない。里がどうなったのか知りたい……帰りを待つ子供たちがいる。

「里は……リッリパットの、里は……どうなった……？」

自分で聞いていても酷い声だと思った。そう言えば、死んだ部下にヴァルハラで会ったとしたらどんな声になっているのだろう。考えると、今はなき左手がうずいた。

「今……燃えているよ」

予想は出来ていた。里が無事なら、こんなところで寝転がってはいない。どこか家の中に運び込まれているはずだ。

「なぜ……助け……た……」

「もう、誰にも死んで欲しくなかったんだ」

「ふ………死んだ方がマシだ……この体ではもう復讐もできま……い」

「僕は、里の方を見てくる。まだ生きている人がいるかもしれないから」

きつと、調べても無駄だと思う。だが、もしかしたら、どこかに隠れた子供が生き残っているかもしれない……可能性は限りなく0に近いが。

「まだ眠っていて。傷は薬草と弟切草で防いだけど、まだ体力が回復してないから」  
 そういえば、さつきから随分と眠たい。視線をまた空に戻すと、そのまま魂を持つて行かれそうだ。除除にまぶたが下がっていく。

「そう言えば、まだ名前を聞いてなかったね」

もはや、その声すら蜃気楼より遠い。

「パトトリック……私の名はパトトリック……」

パトリックがまたしても深い眠りに就いたのを見てから、僕は未だ空を赤く染めて  
 いる里の方へ向った。

頭の中で例のしわがれた声が何度も反響する——死んだ方がマシだ——  
 生きてさえいければいいことがあるなんて全く思わない。それでも、もう目の前で誰も  
 死んで欲しくなかなかった。

——あの事件が、頭から離れない。

家々が燃える炎は、離れていても熱かった。

「おーい、誰かいませんか……」

聞こえるのは、パチパチと炎が里を飲み込み、灰へと消化していく音だけだった。死体の焼けた臭いで、空気まで腐ったようだ。

それでも、一人だけ生存者はいた。

「お姉ちゃん……起きてよ、お姉ちゃん……」

矢が何本も刺さった死体に、少年はずっとそう繰り返していた。

だけど僕がそれ以上に驚いたのは——リリパットの少年の閉じられた目は両断され、大量の血が大河のように頬を染めていたことだった。

きつと、『やつら』の仕業だろう……

「ううっ……」

いつの間にか、僕も嗚咽をもらして泣いていた。

## 12. 反撃ののろし

今、トルネコのカバンには、レミラーマ草は一つしかなかった。

「試し打ちはどうだった？」

まだトルネコが2番アイアンを持っていた時に大量に消費したのに加え、それを取引に使ってからは、まさか今後使うことは無いだろうと思っていた。

「まあまあといったところか。実戦で試したことはないゆえ、何とも言えんが」

黄金の弓の効果は、放った矢を自在にコントロールできることだ。レミラーマと地獄耳の巻物があれば、一方的に攻撃できるのに。

「下の階へ行けば幾らでも実戦できるぜ」

それから10階程降りて行った。実戦は確かに幾らでもできた。だが、地獄耳も出なかったし、世界樹の葉も出ない。

どうやら、アイテムの引きは相当悪いらしい。

リリパと名乗った少年と一緒にパトリック族長を急ごしらえの寝床に移すと、とりあえずパンと釣った魚を焼いた。パトリックは未だに昏睡状態だったし、たとえ起きたと



してもすぐに普通の食事ができる状態ではなかったもので、族長には薬草粥を用意しておいた。

これなら、なんとか喉を通るはずだ。あとは族長の回復力に任せるしかない。

「さあ、とにかく、君も食べなよ」

そう言つて皿（あの瓦礫から勝手に持つて来た。まさか、最後に僕が使うことになるなんて……）をリリパットに差し出した。

「いらない」

もうずつと夢以外は見ることもなくなった目を傾けると、幽かにそう呟いた。

こんな時に、食欲などないことはよく知っている。

「でも、食べないと体が持たないよ。残ったら僕が食べるから、今の内に、すこしでも食べて」

リリパは、黙つて僕が差し出した皿の方に視線を移した。おそらく、視力があつた時の癖がまだ抜けてないのだろう。

「やっぱりもういいよ」

「じゃあ、しばらくここに置いておくから、お腹が空いたら適当に食べてよ」

一瞬にして全ての家族とこの世の光を失つて、すぐに食欲が沸くわけがないのは重々承知しているつもりだ。今日の出来事を、この子は一生背負つていかななくてはならな

い。でも、それに負けちゃだめだ。これ以上、負けちゃだめだ……

とにかく、今は食べよう。僕は自分の分のパンを食べ始めた。

「……」 「……」

食事中に会話が無いことがこんなに不自然だなんて、初めて知った。いや、誰も会話を必要としないことに。

焚き火のパチパチと燃える音だけが聞こえる中——

「ううう……」

背後でアリのクシャミ程度の小さなうめき声があった。

「族長さん、目が覚めたんだね。」

これからの見通しなんて何一つ決まっていなかったが、とりあえず族長が目を覚ましてくれたのは嬉しかった。族長には、まだ生きる意志がある。

「私は……まだ……」

「まだ喋らないで。あの後、また意識を失って……体力の消耗が激しい。葉草粥があるから、とりあえず一口だけ食べてみて」

粥をよそおうとしたときだった。

「奴らは……どこかにいる……？」

変声機を使ったような声——それは、僕たちに今日何が起こったのかを改めて思い出

させた。そして、その前の出来事も……

「コ、ロ、ス……必ず殺す……武器は……武器は、どこだ……？」

降りた先はモンスターハウスだった。

トルネコたちはまたいつものように作業プレイを開始する。

まずライアンが天上へ向って矢を放つ。何本も同時に。⇒その間、迫りくるモンスターはトルネコがその時の気分で選んだ好きな銃器類で倒す⇒矢がモンスターを襲う

だが、このモンスターハウスはやけにモンスターの数が多かった。モンスターの間に、チラチラとミニデーモンの姿がみえる。大方、他のモンスターの蔭から近づいてアイテムを盗もうというのだろう。

「ライアン、あの地獄の鎧を殺ってくれ」

そう言うと、すぐに地獄の鎧はハリネズミと化し、本当に地獄へ落ちた。

だが、ショットガンを構えるトルネコの前に現れたのは、7，8匹ものミニデーモンだった。

こんなにいた訳がない。恐らく分身か身代わりの巻物を使ったのだ。こうなつてしまえば、とにかく全部撃ち殺してみるしかない。うまく本物に命中すれば、一発で終わ

るだろうが。

一匹目——期待したがハズレ。二匹目もハズレ。もう距離がない。次で決めないと盗まれてしまう。

祈りながら3発目を撃つ。命中したが——これもダミーだった。

ミニデーモン達はトルネコの懐からアイテムを盗みだすと、すぐにフロアのどこかへワープしていった。

「ね、うまくいったでしょう?」

悪魔神官は微笑しながらそういった。とは言っても、表情は仮面で隠れて見えはしな  
いが。

「ああ、確かにな」

アークデーモンが頷く。

「分身の巻物があつてもこんなうまくいくとは思いませんでした。きつと、強い武器に頼っていたせいで完全に油断していたのでしよう。倒すなら今が好機でしょうね」

「でもよ、さつき商人からアイテム盗んだだろ、あれでまた警戒してるんじゃないのか」

神官はそれを聞いて深いため息を漏らした。仮面の奥からでもハッキリきこえてく

る程に。

「あなたはホントに気が小さい。もう少し大きく構えてください、高貴な悪魔族の眷属なのでしよう?」

「悪魔族にもいろいろあるんだよ」

「それは言われずとも分かっていますよ。しかし、あなたの場合は慎重ではなくて、ただ臆病なだけです。それを一般論でごまかさないうで下さい。前に約束したでしょう。もう、下らない言い訳はしないと」

「分かったよ。ちよつときいてみただけだ」

「それが言い訳だと言うんです」

「分かったつて」

「まあ、いいでしょう」

そう言うのと悪魔神官はロケットランチャーを手渡した。

「あのミニデーモンがうまくやってくれました。これだけ強力な武器があれば、まず間違いなく勝てます」

「アンタは? 一緒に戦ってくれるんだろ?」

頼み込む目がアークデーモンとは思えない程だ。むしろチワワに近い。

「いいえ、戦うのはあなたお一人で、です」

仮面に隠された顔からその表情を窺い知ることはできない。

「あんな化け物2匹相手に、一人で戦えるかよ」

「ですから、その化け物の武器を奪ったのです。これで敵の戦力は落ちた上に、こちらの戦力は大幅に強化されました。あなたは今、化け物と同等の力を有している訳です」

「確かに、それは分かる。でも、それでも2対1だ。圧倒的に不利じゃねえか」

悪魔神官は心底うんざりした。

鋭い爪——どれ程の敵をサイコロステーキにできるのか——尖った歯——どれ程の肉塊を赤いペーストにできるのか——筋骨隆々たる肉体——そしてどれ程の敵を肉塊に変えられるのか。それら悪魔本来が持つ殺戮の才能は、使われることもなく倉庫にしまわれたまま。戦いに特化した肉体を持ちながら、あわよくば他人に戦いを押し付けようとしている。どうせアークデーモンの役割など、遠くからロケットランチャーを撃つぐらいだ。

これなら、まだあのミニデーモンの方が勇敢なぐらいだ。

しかし、まあいいだろう。こうなることは分かっていた。

悪魔神官は靴音を鳴らしながら壁に近づくと、どう見ても岩にしか見えない擬態されたスイッチを押した。

「私の戦闘力では足を引つ張るだけなので、長年かけて開発したこのキラーマシンに頑

張ってもらいます。あなたの仕事は、ロケットランチャーを商人どもにお見舞いしてやることだけです。」

動いた壁からのぞくキラーマシンの眼は、悪魔神官以上に表情に乏しかった。

「それでも、ようやく五分じゃねえか。いくら強い機械でも、やつら二人を一度に相手にできるのか？」

「それは心配には及びません。どうせあの欲どうしい商人のこと、きつと——

何度も止めたが、仕方がない。

トルネコの希望で、結局は別々に行動することになった。

トルネコは、ロケットランチャーを盗まれたにも関わらず、久々にいい気分だった。

これ程気持ちよくモンスターを倒していったことは無い。まして、勇者と冒険していたときはそれを馬車から遠く眺めるだけだった。今のモンスターハウスを勇者に見せてやりたい。

「うん、オッサンにしては悪くない。なかなかセンスがあるんじゃない？ 魔法無しも得点高いね。ただ、少し飛び道具に頼りすぎかな」とか言いそうだ。

まあ、今頃は故郷の村でハッピーエンディングの真つ最中だろうが。

「たすけて……」

一匹のシルバーデビルが、矢の刺さった体を引きずりながら命乞いをしている。

ちようどいい。この合成生物に2回連続攻撃を付けたかったところだ。すぐさま拳銃でそのシルバーデビルの頭を撃ち抜くと、ナイフで解体して壺の中へ押し込んでいった。

「済まなかった」

ライアンが近づいて言う。

「そんなことはねえよ。よくやってくれた。むしろ俺の方が済まないと思うぜ」

「いや、私をもつと弓の扱いに慣れていれば、あのミニデーモンを逃がすことはなかったかもしれない」

「俺がすまねえというのはそういう意味じゃねえ。これから別々に探しに行く手間をかっけさせてすまねえという意味さ」

やっぱり、なんとしても反対すべきだったのかもしれない。

いくら強くても、万が一の場合もあり得る。トルネコは「その『万が一』が起こつても悲しむ奴はいねえ」と言っていたが、ライアンにとっては大迷惑だ。ここで死なれて



は、自らの生活にも影響が出るし、このダンジョンの秘密も分からず仕舞いになってしまう。

何より、これから一緒に酒を飲む友人が減ってしまう。ダンジョンに潜る前に買ったあのワインは、二人で飲まねば——意味がない。

トルネコは大丈夫だと言っていた。このフロアのモンスターが強さなら、別々でも何の支障もない。だが、盗まれたロケットランチャーは後々絶対に必要になるという。大抵の敵は、ボスクラスでも一撃で倒せるからだ。

それなら、確かに取り戻す価値はある。

仕方がない。それ程強力な武器が盗まれたのだから。

そうだ。仕方がない。

ライアンは自らの悪い予感を打ち消すように——もはや何者もいなくなってしまう部屋のなかで——何度も自分に言い聞かせた。

アークデーモンは遠くの茂みの中に身を隠しながら、トルネコがキラーマシンと対峙する様子を眺めていた。かなり離れていても、一人と一台の発する殺気に、逃げ出したい気分を抑えるのが精いっぱいだ。

撃つタイミングは悪魔神官から事前に聞いている。にらみ合っている今ならたやす

く倒せそうな気がするが、そこではまだ撃つてはいけない。キラーマシンがチャンスを作る。決定的なチャンスを。そこを一発で決める。もし外してしまえば、かなり厄介だ。商人たちは警戒するし、少なくとも射程距離内には入って来ないだろう。そこにあの黄金の弓を持った戦士が来れば、最悪だ。あの弓では流石のロケットランチャーでも危ない。

とにかく、重要なのは、機を逃さず、一撃で獲物を仕留めることだ。敵はもうすでに、半分は網にかかったも同然なのだから。

どうやら、ただのキラーマシンではないようだ。Lv換算で少なくとも20〜30はあるだろう。ボウガンに向けてくるが、防御する気は、トルネコには全くなかった。

マグナムを2丁構えると、キラーマシンへ向ってジリジリと歩み寄る。

驚いた。自信か蛮勇か、あの商人は全く身を守るそぶりすら見せずにキラーマシンへと近づいてゆくではないか。それとも、盗まれたものへの執念か。そのいずれかは、観客の自分にはハッキリとは分からないが。

一人と一台はようやく至近距離まで近づくと、しばし睨み合った。

時間というものは、よく一方方向に一定の速度で流れていると思われているが、それは客観時間の話であって、それぞれの主観時間は流れる速さも変わるし、時たま遡ることさえある。

アークデーモンが感じた1時間も、実際は1分もなかった。

ほぼ同時にボウガンが放たれ、マグナムが鋼鉄の獣を放った。

乾いた破裂音が何発もダンジョン中に響き渡った。

しかし、両者の決着は飛び道具では着かなかった。どちらも、すでに弾は撃ち尽くしている。リロードしている時間はなさそうだ——剣を振りかぶるキラーマシンを前にそう判断した、矢ダルマのになった商人はマグナムを捨てると久々に正義のソロバンを取り出した。

だが、接近戦ではキラーマシンの方が動きが早い。剣は吸い込まれるようにトルネコの肩から首の付け根に振り下ろされ首を切断した——かに見えた。

さしもの肉の鎧も、このキラーマシンの剣撃をまともに喰らってはひとたまりもないが、トルネコは肉に剣が食い込んだその瞬間を狙って、肩と顎で剣を挟み込んだのだ。

キラーマシンの腕が高音のうなりを上げて力を入れても、食い込んだ剣はビクともしない。表情のない一つだけの目玉が、忙しそうにキョロキョロと動いた。機械に感情など無かったが、その眼の動きは焦っているようにしか見えない。

トルネコは悠然とソロバンを振り上げると、キラーマシンの頭部に叩きつけた。

キラーマシンの頭部が大きく凹み、眼らしきところから火花が散る。今度は死の恐怖でも感じているのだろうか。

そんなことにはお構いなしに、トルネコが止めの一撃を振り下ろしたが、それは咄嗟にボウガン本体で防御されてしまう。当たり所が悪かったのか、正義のソロバンは柄の真ん中で真つ二つに折れ、珠が地面に散らばった。

もう、キラーマシンにさつきまでの理性は残っていない。肩に刺さった剣を諦めると、トルネコを素手で殴りまくった。その様子はまさしく壊れた猿のオモチャに似ている。

トルネコは折られた正義のソロバンの柄を、思いつきりキラーマシンの顔面に突きたてた。

柄は後頭部まで貫通すると、高級な殺人兵器をただの粗大ゴミへと変えさせた。

あのキラーマシンが負けた。悪魔神官との打ち合わせとは少し違うが、今が商人を倒す好機なのは間違いない。少々避けられても、こっちにはホーミング機能がある。

トルネコがカバンから回復アイテムを取り出そうとしているのを見計らって、アークデーモンはロケットランチャーの引き金を引いた。

手こずらせやがって、ケツ拭きマシンが。それより薬草、薬草……  
ん、何か飛んでくる音がするが……

ロケット弾は見事にトルネコに命中し、爆炎を上げた。

傍に痴呆のように佇んでいたキラーマシンの残骸は、爆風に煽られると人形のように手足の関節をアクロバティックに曲げながら、地面を転がっていった。

さて、こちらの仕事は終わった。あとはピンク色の戦士だけだが、キラーマシンがあなつてしまった以上、また作戦を立て直さねばならないだろう。

物陰から立ち上がったが、そこでアークデーモンはただならぬ気配を感じ、またもや物陰に隠れた。

今まで周りからは臆病だと言われてきたが、その分敵の気配を察知することは人一倍

敏感だ。今までにこの勘は外れたことがない。じつと目を凝らしてみると、地面を転が  
る焼き豚寸前の肉塊がゆっくり起き上がっているではないか。

何と、まだトルネコには意識があつたのだ。

どうやって助かつたのかは知らないが、ここで確実に倒しておくにしくはない。回復  
されたら厄介だから、間髪入れずに次のロケット弾を放つた。

弾丸は真つ直ぐにトルネコに向かって突き進んでいく。何の感情も込めずに。

爆音で一瞬、頭の奥が痛む。

(殺つたか?)

顔を上げて見ると、そこには期待した焼き豚はなく、さつきと同じトルネコがいるだ  
けだった。おかしいと思つたアークデーモンの肩に、矢が突き刺さつた。

間一髪、間に合うことができた。高速で動くロケット弾に矢を当てる自信はなかつた  
が、戦士の集中力と黄金の弓の魔力はそれを可能にした。

それにしても、まさかモンスターが奪つたアイテムを使いこなすとは——完全に予想  
外のことだった。撃つてきたとおぼしき茂みにも一発お見舞いしてやったが、あれで完  
全に敵がくたばつたとも思えない。また撃つてくる前に、何としてもトルネコを救出し

このフロアから脱出しなければ——そう考えていると、場所を変えてまた撃ってきた。一度コツを掴んだとはいえ、絶対落とせる訳ではない。敵は用心深く戦い方を心得ている上、こちらは障害物もなく負傷したトルネコを庇いながら闘わなくてはならない。

黄金の弓を手にしてから、ライアンは初めて戦場での不安を感じた。

もう油断はしない。悪魔神官の作戦通り、一発撃つごとに場所を変える。こうすることで、黄金の弓の標的にならずにすむのだ。ここで頑張れば——もう自分を臆病者呼ばわりする奴もいなくなるだろう。

トルネコの傷は酷かったが、薬草の応急処置で何とか立てる程には回復していた。

どうやら、直撃する寸前に爆破よけの盾で防御したのが大きかった。盾は爆発の衝撃で原型を留めてはいなかったが、おかげでトルネコは原型をとどめることはできた。

「ライアン、右に3歩、上に5歩だ」

何のことだろうか？　とうとう脳にまで重い障害が現れたというのだろうか。

「出口だ、ライアン」

出口と言っても階段は見えない。見渡す限り平らな地面が広がっている。一体何の

ことを言っているのだ？

「幻覚じゃねえ。目薬草だ。さつき薬草と一緒に飲んだんだよ。おかげで普段は見えない落とし穴がバツチリ見えるぜ」

「それを聞いて安心した。一瞬、もう駄目かと思った」

「本当にすまねえことになっちまったな」

「次の弾丸を撃ち落としたら移動する。動けるか？」

「肩を貸してもらえば、なんとか」

なら大丈夫だ。敵は移動してる分、それ程頻繁に撃てるわけではない。

次の一発さえ凌げば。逃げる時間は十分ある。

「これを使え。最後の目覚まし草だ」

集中力を限界まで引き出す草。ライオンはそれを飲み下すと、弓を引き絞った。

飛んで行った矢は、真っ直ぐにロケット弾に命中した。

アークデーモンは肩にトルネコを担ぎながら移動するライオンを見て、今なら両者を一度に屠ることができると思った。



もう次の弾が飛んできた。さっきより間隔が早い。

「あと一歩だ」

ライアンはトルネコを信じて、一步を踏み出した。ライアンの目にはそこはただの地面にしか見えない。もしここが見た目通りただの地面なら、二人とも生きて地上に戻れないだろう。だが、ここで心配だけしていても仕方がない。

ライアンは意を決すると、トルネコと一緒に足を踏み出した。

惜しかった。悪魔神官とアークデーモンは落とし穴があった場所を眺めながら、改めて自分たちが逃した魚の大きさを嘔みしめていた。

作戦は中々うまくいっていったし、それぞれがよく役割を果たした。逃がしたのは誰のせいでもない、ただ、強運が商人側にあったというだけの話だ。

落とし穴は、爆発の衝撃で跡形もなく吹き飛び、今は焦げた地面がそこに残っているだけだ。誰もここを見て、落とし穴があったなどとは思わないだろう。

悪魔神官は悔しがるアークデーモンの横をすり抜けると、キラーマシンのバラバラになった残骸へと歩み寄り、串刺しにされたその頭部を拾いあげた。

なかなかの自信作だと思ったのだが———どうやら、更なる改良が必要なようだ。正義のソロバンの柄を引き抜くと、その頭部を懐へしまう。

中の制御チップが無事なら、今回の戦闘の経験値を次のマシンに生かすことができる。

まだまだ戦いはこれからなのだ。

相変わらず表情のない仮面の下で、悪魔神官はほくそ笑んだ。

## 13. 交錯する復讐

目の前は悲しくなりそうなくらい青一色だった。海の青、空の青…青青、青…抑えられない負の感情…耳に入ってくるのはおさまらない貧乏ゆすりのような波の打ち返す音だけだ。スラ吉は一人、真つ白な砂浜を歩いてきた。それは泳ぎに来たわけでもなく、ましてや感傷に浸るためでもなく、これからの復讐計画を練り上げるために、たった一人でここにやって来たのだった。

計画そのもの自分が生き残っていた時から考え始めていたし、もつと具体的に『あの商人』と倒すことを思いついたのは特殊階層以後のことだ。必要なものをそろえる準備はリリパとパトリックを助けてから始めた。2人の世話をしながら、必要な道具を集めていた。

後は計画を実行に移すタイミングと、不備がないかを総点検するだけだった。

「何を、して、お、る、の、だ、こ、ん、な、と、こ、ろ、で」

後ろの岩場から急に現れた族長・パトリックのしわがれた声に、スラ吉は一瞬ビクツとした。

「考え事をしていたんです」

言つた瞬間、スラ吉はしまった、と思つた。泳ぐのでもなく、サーフィンでもなく、ナンプでもなければ海にくる理由なんて考え事ぐらいだらう。

しかも、こう言つてしまつた以上、次は「何を考えておつた」とか訊かれるに決まつている。スラ吉はこの二人のリリパットを巻き込みたくなかつた。もし、二人が自分と同じく五体満足ならこの考えも変わつていたかもしれない。だが、二人はすでに致命的な身体の損傷を背負つている。

単純な問題として足手まといになるかもしれないし、それ以上に二人には生き伸びて、残された人生を生きて欲しい。

今や、二人が生き延びることがスラ吉にとつての唯一の希望だ。

スラ吉はもはや死ぬ覚悟でいた。この戦いは死んでいった仲間たち——スラ美ちゃんや大ナメクジのおばさんに捧げるため、ただそれだけの戦いだ。

もう二度と取り戻せない故郷に決着をつける。

スラ吉は自分の計画を心中に秘めておくために、「族長はなんでここに来たのですか」と相手の機先を制した質問をしたつもりだった。

「お、前と、同じ」と、考え、て、いた、の、だよ、」

スラ吉の真横で松葉杖を傾けながら真つ白な砂浜に族長は座つた。ここ数日で、松葉杖にもだいが慣れたようだった。

「復讐計画だよ。何も、君だけの専売特許ではないだろう？」

唯一使える右手で貝殻を拾い上げると、海面へ向って滑るように放り投げる。貝殻は2, 3回海面を跳ねると、元いた海底へと沈んでいった。波紋は波の力であったという間に消されてゆく。

「実は話があつてな。」ひと呼吸置いて続ける。

「リッリッパも……あの子どもその計画に参加させて欲しい」

スラ吉はハツとしてパトリックの方を見上げた。

「驚くのも無理はない」

「驚くつて……何を言ってるんですか。あの子を危険な目に遭わす訳にはいかないよ。例えば本人が望んでいたとしても」

「言いたいことは分かる。私だつて出来れば参加させたくな」

「だつたらどうして」

「君は気付いているかね」

パトリックがフードの影で僅かに笑みを浮かべている。

「何にですか」

「あ、の子の、聴覚に、だ」

「あ、の、子の、聴覚は、失った、視力を、補う、か、の、よう、に、日に、日に、  
発達し、て、い、る。ま、あ、歌の、方は、ア、レ、だ、が、ね、」

「それがどうしたんです。そんなこと言ったって参加させる訳には……」

「まあまあ、話は最後まで聞くものだよ。リリパの聴覚は地獄耳の巻物の効力をも、上  
回っておる。いや、これは大げさかもしれんが、とにかく、リリパはダンジョンで、広  
範囲で索敵できる。必ず役に立つだろうし、索敵だけならばそれ程危険もない。頼む、  
連れてやってくれ」

「まだもう一つ頼みがあるんじゃないですか」

「よ、く、分か、って、お、る、な、……私も、連れて、行、つ、て、く、れ、」

フードの中の顔に不敵な笑みが広がった。明るい色彩の風景の中、パトリックの暗緑  
色だけがくつきりと浮かび上がってみえる。そう言えば――スラ吉はこの時初めて自  
分の体色が空と海と同じ青色だと気付かされた。

「どうせダメだ、って、言、つ、て、も、つ、い、て、来、る、ん、で、し、よ、？、でも、危険なことは僕がやる。今回  
はヤツラをおびき寄せる罠が必要なんだ。それも近くで挑発するような罠が。それは  
絶対、僕一人でやるからね」

「分か、つ、て、お、る。こ、の、中、で、一、番、足、が、速、い、の、は、（スライムに足は無い

が)お、前だから。だが」

フードの中の笑みが消えた。

「絶対に、生きて、戻つて、来い。無理だと、思ったから、退くことも、勇気の、一つだ。今回を、逃しても、また、襲撃するチャンスは、必ずある。」

「……問題は襲撃するチャンス、正にそれなんだ。さつきはついて来てでもいいって言ったけど、僕は全力でヤツラを追いかける。ついて行けなくなったら、気の毒だけどそのまま置いて行くからね。それだけは分かってよ」

スラ吉が言い終わるやいなや、パトリックは突然高笑いした。戦火の傷痕生々しいあのダミ声で。

「私は、由緒正しい、リリパットの、族長だぞ。君たち、の、知らない、近道くらいい、いくつ、も、知つて、おる。まあ、若者を、導く、の、も、老人の、義務だからな。ハハハハハハハハ」

パトリックは砂の上で立ち上がりにくそうだったが、一旦、立ち上がったしまうとそのままヒョイヒョイと砂浜を横切り、リリパの元へ消えていった。

後には、空の青も海の青も拒むスライムが白い浜辺に佇んでいるだけだったが、それもしばらくすると何処かへ溶け去った。

トルネコ達は傷を癒すと、さらに10階ほど降りて行った。

いつものように階段を下りたが、すぐにただならぬ雰囲気二人の冒険者は困惑した。

BGMが急に止んだのだ。

過去の冒険でもこのような事態はあったが、それは嵐の前の静けさであり、何か大きなイベント——それも大抵はよくない方の前触れだ。二人とも沈黙の中、何を喋っているのかも分からなかった。ライアンは何か言おうとしたが、舌は軸が外れた車輪のように空回りし、肺は異常な空気を取り込むだけで精一杯で、意識しなければ呼吸自体が止まってしまいそうだ。

こんな状況であっても、最初の沈黙を破ったのはトルネコの方だった。

「さつき拾った地獄耳があるだろ」

「ああ、あるな。一つだけ」

「それを使おう」

「ここで？ 少しもつたいはないか？」

「いや、どうせ使うなら今使おう。それにしても嫌な空気だ。隣の部屋にネネでもいる



んじゃねえのか」

ライアンは地獄耳の巻物を平板な声で読み上げた。

何のBGMもない中では、巻物を読んだ時の効果音ですら何か不吉なように響いた。

「何だ？　これは……」

「オイ、どうしたんだよ」

ライアンの予想外の表情の変化にトルネコですら少し戸惑っている様子を隠せない。

ライアンはしばしの間、自らの目間違いがないかどうかを必死に確かめてみたが、それでもフロア内に全くモンスターがないという自らの解雇に匹敵する歴史的大事件は疑いようがなかった。

いや、ちよつと待てよ……

索敵範囲ギリギリのところ、かすかに光る赤い点が見えるではないか。その赤い点はずぐに移動し、巻物の効果範囲外に出てしまったが……

一瞬、それはライアンの願望が生み出した希望的幻影かと思ったが——それはあり得ない。広大なマップの中に確かに赤い光を見つけたからこそ、そこに注目したのであり、その光が太陽の黒点のごとく移動してゆくのを目撃できたのだ。だから、あの赤い

点があつたのは確かだ……そのことをトルネコに告げると

「とにかくそいつを追いかけてみようぜ。地獄耳はモンスター以外に神父や商人なんかも赤い点でしか表示しねえからな。ひよつとしたら物語上の重要人物かもしれないねえ」

口には出さなかつたが、ライアンは思った。このゲームの製作者がそんな粋なことをする訳がない、と。

だが、それを言つたところでどうすることもできない。

二人は、取り合えず赤い点があつた場所に行こうと、左の通路へ入つて行つた。

ぼきゅ、ぼきゅ、ぼきゅ……

静寂に包まれた部屋の中で、合成の壺へドラゴンの死骸を入れる音だけが響き渡る。トルネコはその高貴な古代生物の死骸を発見して喜んでいたが、ライアンは一抹の不安を感じていた。というのも、死骸からは内臓の一部がすでに抜き取られているようなのだ。そして足元にある焚火の跡……ここでドラゴンの心臓を焼いて喰つたのだろう。

そして大きな外傷——首筋のバツクリ開いた切り傷。これは強烈な力で叩きつけられた斧によるものと見て、ほぼ間違いない。そしてこの二つの痕跡から想定されるのは——バーサーカーだ。それに、ライアンはバーサーカーが戦いの直前に竜の肝で出陣前

の儀式を行うことも知っていた。

別に、竜の心臓やその他の内臓の喰ったからといって強くなる訳ではない。そうするのは、ただの儀式なのだ。人間が辛い時や悲しい時に神に祈ったり、どうにもならない家のローンを抱えながら宝くじを買ったり、はたまた教会の売る紙切れ同然の免罪符を買ったりするのは同じ、ただの効力のないジンクスなのだ。

それにしても——もうあのフロアで黒こげになったと思っていたのに、まさかここまで先回りして待ち伏せしているとは……

いいだろう、ここで決着を着ける。

こっちは二人とも強力な武器を持っている。向こうの斧が届く前に矢と鉛の雨で、儀式を捧げた神の元へ送り返してやろう。

「いやあ、ちょうどドラゴンが欲しかったところなんだよ」

——ひと通り死骸を壺に詰め終わったトルネコが嬉しそうに喋りかけてくる。もはや、この壺はトルネコにとってただの家畜の入った壺以上の愛着が芽生え始めているようだ。

そうだ、その方法があった。

ライアンはトルネコにこのフロアに例のバーサーカー（Lv9）がいることを知らせた上で、ここで合成生物を使うように提案した。

「いや、駄目だね」返事はそつけないものだった。

「なぜだ？ 今こそ使う時ではないか」

「さつきドラゴンを合成しただろ。あれでまた完成するまでに時間がかかるんだよ。今コイツを開放しちまうと、暴走する可能性が高い。何たって、まだ不完全なんだからな」

「最悪、敵が増えることになる、そういうことか」

「まあ、そういうことだな」

この肝心なときに使えないとは、何と不便なものだろう。こんなモノの為にわざわざ危ない橋を渡ってゾーマまで倒しに行ったのかと思うと、余計に腹の底からこみ上げてくるものがあつたので、その辺りはあまり深く考えないようにした。

とにかく、今は生き残ったゾーマの犬を始末することが先だ。

「そう心配するなつて。俺達には強力な武器があるじゃねえか」

放火しといて「保険かかってるからいいじゃねえか」と言うようなものだ。心の中でお前が言うなとボソリと言いつながら、赤い点を追って歩きだした。

早くしないと——地獄耳の巻物の効果もそれほど長くはないのだから。

「よし、この辺りでいいかな」

「向こうの部屋も言われたとおり準備できた」

「こつちも準備できたよ」

「ありがとう……二人とも、もう安全な場所に下がって。これから先は僕一人の戦場だから」

安全な場所——このフロアにそんなものがあること自体、信じていない。例の商人達にバーサーカー。しかし、リリパの聴覚が捉えているのは、自分たち以外にはあの二人だけだという。では、さつきフロアに残ったアイテムを回収した時に見つけた、あのドラゴンの死骸は……？ このフロアにバーサーカー（Lv9）がいることは、あの証拠から確かだ。だが、姿も見えず存在も感知されないということは、普通に考えればもう下のフロアに降りて行ったのだろうか。

「どうした、何か、気になること、でも、あるのか？」

「ええ。一つだけ気になることが」

本来なら、実行直前に不安になるようなことはあまり言わない方がいいだろうが、この二人には聞かれても構わないと思つたし、むしろ聞いて欲しかった。もしかしたら、何らかの解決策が得られるかもしれない。

「ああ、ドラゴンの死骸のことだろうか？」

コクリと黙ってうなづく。

「もうそのことは気にしても仕方がない。忘れろ」

「うん……でも」

「私とリリパのことなら心配はいらん。危険が近づいたらいくらでも逃げることはできる。だから、余計なことはもう忘れろ。今は目の前の、『自分の戦場』に集中するんだ」

「はい……」

スラ吉の返事は小さかったが、決意は大きかった。いくら近道を通つたとはいえ、ここまでついて来れた二人なのだから、もはや心配する必要はないとようやく悟つた。そして、スラ吉がいなくなつても、もう十分生きていけるだろうということも……

すると突然、パトリックは松葉杖を放し、(その間、左足と右の義足だけで立っていた)右手をスラ吉の上に掲げた。

「すべての無念の死者たちよ……大いなる勇氣を持つ、この小さきスライムにあらん限りの武運と祝福を！ さあ、存分に戦え。私たちも見守っていることを忘れるな！」

「ありがとう、みんな……そっちこそ、氣をつけてよね」

「言われるまでもない。私は由緒正しいリリパットの族長だぞ」

松葉杖に手を戻して、リリパと一緒に奥へ行こうとした時だった。

「こ、これは……もう一人フロアに……」

「心配すんなって。俺達には強力な武器があるじゃねえか。」

例の商人の声がすぐ真上でした。BGMが消えた静寂の空間を二人の足音だけが点描していくのを聞きながら、十分遠ざかったところにバーサーカー(Lv9)はドラゴンの死骸があつた地面の下から這い出た。

商人たちの前には、スライムが通りかかった。

恐らく、彼もここで決着を着けるつもりなのだろう。あの弱いスライムがどうやって戦うのかはだいたい予想がついていたが、それでも無謀なのは変わりない。まあ、そんなことはどうでもいいが。

バーサーカー(Lv9)はスラ吉があまり好きではなかった。その最大の原因は、スラ吉がゾーマをけしかけて、結果的にトルネコと闘わせたことにある。あれ程強力な武器を持っていると知つていながら、主君の自尊心をくすぐりうまくあの遺跡へ商人を招き入れた。お陰で自分は今こうして主君も故郷も、主君が復活したときに約束された栄誉もはく奪され、復讐に身をやつす羽目になったのだ。

完全に地面から抜け出すと、バーサーカーは商人が消えていった通路へと足を踏み入れた。以前のような異臭がしないか確認する。

まあ、ここまで用心しなくても、そもそもあの二人はまさか自分が竜の死骸の下にいるとは思つてもいないだろう。それより、スラ吉のやっていることの方が気になった。

正々堂々と勝負をつけるつもりで（それとリハビリも兼ねて）フロア内のモンスターを排除しておいたのだが、このままではハサミ打ちの格好になってしまう。

まあいい。奴らにフェアプレーなど高級すぎる。最期にこの斧を叩きこめれば、それ以外はもうでもいい……

暗い通路に油の臭いはなかったが、嫌な湿り気とコケ植物特有の香ばしい香りがバーサーカーの鼻腔を満たしていた。

ようやく、逃げて行つたマップ上の赤い点をまた捕捉したところでライアンは自分たちの跡をつける赤い点が、新たに出現したことに気づいた——のだが、それとほぼ同時に地獄耳の巻物の効果はブツツリと、電源を落としかつたかのように切れてしまった。

「ん？ どうした、何でまた急に止まるんだよ。まさか、もう巻物の効力が切れちゃったのか」

トルネコが少し驚いた表情のライアンを見てそう尋ねる。

「ああ、そのようだ。だが、場所は分かっている。それより気になることが2つある」  
すぐに思い出したように通路を歩き始めるライアン。

「2つもあるのかよ。アンタが分からんことを、俺が分かるとは思えんがね。」

「まあ、もしかしたら話すことで何か解決の糸口が見つかるかもしれん」



「んで、結局何が気になるんだ？」

「まず第一に、さっきの竜の死骸があつた部屋、そこから忽然と姿を現したやつが一匹……そいつは今、我々の跡を追つて来ている。実際に追いかける気があるかどうか分からないが。」

「なるほどね、要するに、後ろの赤い点は気になるが、分らないことが多すぎる、前の赤い点は罠の可能性があるってことか？」

「ああ、そうだ」

別にライアン程の軍事専門家でなくとも、少し経験を積んだ人間なら容易に想像できることだろう。こういう場面での問題は、相手がどこまでこちらの思考を読んでくるか、に尽きる。こちらに罠だと思わせておいて、実は何の罠もない、ということもあり得るのだ。

だが。

「実際、奴さんが何を考えているかは知らないけどよ、いったん部屋の中に入っちゃえばアンタの黄金の弓でイチコロだろ。俺らの武器の前では小細工は通用せんぜ」

確かに、トルネコの言うとおりだと思つたが、それでもライアンの心の中に何か引つかかるものがあるなは否めない。あれだけ強力な武器を持てば、誰だつてトルネコと同

じことを言うだろうが。

「それに、今思ったんだが、相手がモンスターって決まった訳じゃないだろ。もしかしたら別の冒険者かも知れんしな」

「ああ、そうだな。可能性はある」

口ではそう言ったものの、実際にそれはものすごく考えにくい。人間だとしたら、なぜあんなところで止まっているかが理解できないからだ。だが、説明できないことをいくら言い合ってもしかなかったが、

最後は自分の目で確かめるしかないのだから。

リリパの聴覚によれば、地面から出てきたのは足音から判断するに倍速系のモンスターらしい。これを聞いた時、スラ吉は自らの計画が成功する確率がグンと上がったと確信した。そしてついに——たくさんの仲間を殺戮した商人たちが、通路の闇からスラ吉のいる部屋へ、無機質な足音だけを異常に響かせながら入ってきた。

## 14. 一応の決着——しかしまだ終わってはいない……

「やあ。随分と遅かったんだね」

二人の前で、一匹のスライムが薄笑いを浮かべながらそう言った。二人とも、随分と度胸のあるスライムだと思ったが、あれだけ恐怖と好奇心を煽られた分、逆に目の前の弱小生物に対する侮りと嘲りが湧き上がってきた。トルネコは、このとき目の前のスライムが一番最初に逃したスライムだと気付きもしなかったし、これからも気づくことはなかったのだが。今の二人には、窓ガラスについた鳥のフン程鬱陶しい、この青いゼリーを早々に始末することしかなかった。

「商人さん、僕のこと覚えてくれてた？」

「さあ、何のことかね、へへ……」

暗に指名されたことで徐々に銃を撃てる……（最近はライアンの弓ばつかしだからな）

人類最強の兵器を最弱のモンスターに撃ち込む快感に、それを実行する前から思わず笑い声が漏れてしまう。『何のことかね』も、トルネコにとっては挑発しているつもりはなく、本当に何のことか覚えていないだけのことだった。仮に、目の前のスライムに

ついで誰かが説明してくれて、何とか記憶の片隅の地層から当時の記憶を掘り起こすことに成功したとして、それでも「それがどうした？　いつものことじゃねえか」と同じ笑顔で返事することだろう。この程度は日常会話の範疇だ。こんな性格だから勇者のパーティーでも補欠だったのかもしれない。

「そうか、僕はちゃんと覚えていたのに、残念だな」

「うれしいねえwwこんな、いち商人をわざわざご記憶あそばしてくださってww」

スライドを引きながらおもむろに一歩ずつ近づいてゆくトルネコ。照準をつけ引き金を引いた——と共に反動と破裂音がする。まともに弾丸を喰らったスライムは地面に青いしみを作つてきれいさっぱり弾け飛んだ——はずだったのに。

実際には真後ろにいるライアンの足元へ向けて発砲していた。撃つてからしばらくの間、トルネコは独楽のように高速で回転し続けた。

回転板上で一人フィギュアスケート状態の商人をこんな場所で目撃したライアンだったが、長年軍隊で鍛えた精神はすぐさま弓で反撃するように手足を動かした。

しかし、スライムはこのわずか1秒に満たない激動の瞬間にすでに通路の奥に走り去つていたため、矢はライアンの操作にもかかわらず、壁に突き刺さっただけだった。

「ウエ…オウウウウエ…!!」

450回／sの強烈な回転が生み出す遠心力は、トルネコの三半規管をズタボロにする。そのひずみが生み出す気分の悪さ——皆も十分経験したことがあると思う——がトルネコに惨めな声を上げさせた。

「オウウエエエ!!グウアアア!ヴァアアッ!!」

まだ続いているようだが、幸い食事前だったので口からは涎が糸を引いているだけである。

とりあえず、ライアンは近くの罌を踏んでしまわないように慎重にトルネコに近づくと、その背中をさすってあげた。

「大丈夫か?」

ライアンの手には、冷や汗がにじんでじつとりとした感触が伝わってきた。油ぎった手を眺めながら、滑って武器の扱いに影響が出ないように拭いておこうと思った。だが、それよりも拭い去るべき恐怖が先にやってきた。

バーサーカー(Lv9)がこちらの様子をうかがっていたのだ。

とはいえ、ライアンの精神は崖の上で後輪だけで踏ん張る車のごとく、ギリギリの状態でなんとか崩壊を免れていたのだ、すぐに黄金の弓を引き絞ったり3本の矢を放った。

3本の矢はバーサーカーの急所に向かって飛ぶはずだったが、さっきのトルネコの油がアダになった。ヌルリと滑った矢は、それでも一本だけはバーサーカーの急所へ向って飛んで行き、命中した——はずだったが、目の前でバーサーカーはその矢を掴んだのだ。

もうこれで、次の弓攻撃はできない。間合いが近すぎるからだ。

ライアンの精神が最後のエンジン音を上げて抵抗している最中、2発の銃声が響いた。その内、一発はライアンの兜をかすめて（そのとき短くチリツと音がした）全く見当違いの方向へ飛んで行った。もう一発は天井への最短距離を突き進んでいった。

このときトルネコはすでに、えずきは収まったものの、依然として深い酩酊・混乱状態にあった。駅にいる酔っ払い同様、見える世界のすべてが変形し、重力が壊れた歯車のように回転している中で撃つ銃は、威嚇どころか危うく同士討ちになるところだった。

とにかく、前後に挟まれてはどうしようもないので、ライアンは持っていた回復の杖をトルネコに向けて振った。

またもや2発の銃声したが、今度は正確にバーサーカーの方へ飛んでいくと、一発は盾を貫通した。トルネコ達はその隙に通路に逃げ込むと、手榴弾で通路を完全にふさいだ。

だが、通路を完全に塞いだところで、二人に時間がある訳ではなかった。バーサーカーには壁を掘る能力がある。その上、このフロア全体の地理もおそらくは把握しているだろう。二人が進んだ先にはまたしても部屋が——そこには予想通り、あのスライムが何とも言えない微笑を浮かべながら鎮座していた。

「どうしたの？ けっこう遅かったみたいだね」

「調子に乗るんじゃないよ、青うんこが」

「へえ〜ここら辺の豚はよく喋るんだね」

ライアンの目の前では、魔物と人間の微笑ましい言葉の応酬が繰り返られていたが、今まさにそれにも飽きたトルネコによって一方的な幕が引かれようとしていた。

「お前とはもう少しお話したかったが、こっちは今急いでいるんでね。あばよ」

トルネコが引き金を引いた。だが、そこにあった銃は、いつの間にか消えているではないか。

「……!?!まさか」

装備外しの罫か、ゲリ糞ウンチがシャレたことしてくれるじゃねえか、だがその無駄な抵抗はお前のその無駄な命を無駄に数秒長引かせただけに過ぎないがな、ヒヤハハハ

ハと言おうとしたが、それはスラ吉の次の一言によつてこの世に発声される機会を永遠に失つてしまふ。

「そろそろ自分の身の安全を考えたらどうかかな？ それとも何かかなりたい豚肉料理でもあるの？ あ、でもトンカツだけは勘弁して欲しいけどね。これ以上油っぽくしたら食べれないでしょ？」

トルネコはすかさず銃を再装備した。もはや、頭の中には目の前の青うんこを撃ち抜く以外になかった。

「その銃は自分を守るために使つたほうがいいんじゃないかな？ そろそろ……」  
「奴が来た……！」

ライアンが後方を振り向くと、そこには焼け跡のついた斧を持つバーサーカーがいた。あのときも、この斧で壁を掘つて難を逃れたのだろう。

「な……！！ もう来たつて言うのかよ」

「じゃ、ゆつくりしていつて。僕はこの辺で」

「あつ、待て、コラ、逃げんじゃねえぞ」

トルネコはこのとき未練がましくスライム一匹にこだわったことを、後々激しく後悔することとなる。それも、ライアンが、トルネコの隙をついてバーサーカーが投げた斧



から身を守ってくれたおかげだろう。もし、ライアンがトルネコを押しつけていなければ、いかにトルネコの肉の鎧といえども命はなかつたろうし、ライアンが助けたからこそ、より一層自責の念、スライムの挑発に乗って冷静な判断力を失ってしまったことが悔やまれたのだった。

とはいえ、そう思ったのはもつと後のことで、この時点ではそこまで考える余裕はない。

ライアンのとっさの判断で押し出され、トルネコの肩口コースの付近を斧がかすめた後、トルネコの足は転び石をもろに踏みつけ——そこで記憶は途切れている。次に記憶のフィルムが継がれたのはトルネコの自宅で、だった。

ただ、転び石を踏んづけた瞬間に——これじゃあ犬の糞を踏んだ方がまだマシだ——そう思ったことだけは鮮明に覚えていた。

暗い通路を駆け抜けていると、背後で低い爆発音が轟いた。音の大きさから判断するに、大型地雷×5を踏んづけたのだろう。

まさかここで終ってしまおうとは……2次爆発（おそらく商人の持つ銃砲火器に引火したのだろう）の音を聞きながら、スラ吉は少しあっけない気分を感じた。復讐を成し遂げた充実感はあまりない。結局のところ、あの商人を倒したところでかけがえのない仲

間たちは誰一人として戻ってこないのだから。それでも、これを人生における一つの区切りとすることは可能だ。

幸い、スラ吉は今や完全に一人ぼっちな訳ではない。族長やリリパがいるし、できれば誰か他のモンスターとも一緒に破壊されたダンジョンを再建するという目標も芽生えつつあった。

そう考えている途中に、もはや使う必要のなくなった第3の部屋に到着した。本当はここで倒す予定だった。あの、初めて奴と出会った日——部屋の隅へ追い詰められたときを再現し、罠にはめて見事に逆転してみせるつもりだったのだ。あの左隅に鉄球を作動させるスイッチがある。奴が追い詰めたと思ったところで罠を発動、鉄球で吹っ飛んだ奴は、部屋の地雷原へ放り込まれる——後はさつき、第2の部屋で起こったことと同じだ。

バーサーカーの出現で、計画は前倒しになったが、もうそんなことはどうでも良かった。この第3の部屋に入ってきた、もう一人の人間と目が合うまでは。

はあつ、はあつ……

体中から嫌な汗が噴き出していた。そいつとは1, 2秒の間目を合わせていただけ

だつ たが、状況を悟ると僕はすぐに元来た通路を駆け戻つた。

——あいつは、一体なんだつたんだ……？

おそらく向こうも同じことを考えているに違いない。でも、出会つた瞬間はとにかく逃げることで一杯一杯だつた。

通路の暗がりの中、何度も背中に人間の視線を感じた。そんなことはないのだけど、頭の中の幻想では、人間はすぐ後ろまで迫つて来て、今まさに掴みかかろうと手を伸ばそうとしている……

急に明るく熱い部屋に出た。さっきの第2の部屋だ。

「どうした？ そんなに息切れしよつて。地獄の商人はこの通り、きれいに吹っ飛んでくたばりよつたわ。ハハハハハ！」

「それどころじゃないんだ」

絶対に出てきては駄目だと言い残してきたのに、パトリックの背中には金色に光る弓が傾げられていた。使うことは無理でも、一族の象徴を取り返したことで、パトリックは今までにない位上機嫌だつた。でも今はそれどこじやない。新たな脅威が現れた以上、とにかく早く撤退しなくてはならない。

僕は今起こつたことと、もうすでに切り札は全て使い尽くしたことを説明し、早く逃げるように言つた。

「そうか、分かった。」

だが、次の一言は僕をイラ立たせることになる。

「お前は先に行け。わしはこの商人にまだ用事がある」

「何言ってるんだよ！ 早く逃げてよ」

そのとき、ふと商人とピンク色の戦士のすぐ傍に、もう一人倒れている人間がいることに気づいた。いや、人間じゃなくて、バーサーカー（Lv9）だ。

「……………」

そのつもりはなかったとはいえ、巻き込んでしまったことに僕は言い知れぬ罪悪感を感じていた。あたりには地雷に引火して燃え盛るナパームが所々にあつたけど、それを避けながら近づくと、口でバーサーカーの腕をくわえて、引きずって行った。今なら、まだ何とか助かる。

「おひさん、てつはつてよ」

「ん？ 何だ、今なんて言った？」

「おじさん！ そんなことをしているなら早く逃げるか手伝つてよ！ もうやつが来るかも知れないのに……」

「ふん、お前にとつては『そんなこと』でもワシにとつては重要なことだ。一族の尊厳に関わる大事なことだ！」

「おじさん……」

僕はもう、誰にも死んで欲しくなかった。このまま放っておけば、僅かに残った命すら、さっきの人間に始末されてしまう。

「それにな、バーサーカーは基地外だ。戦いだけが楽しみの修羅だ。そんなもん、助けるだけそっちの方が無駄だぞ。きつと、目覚めれば躊躇なくお前を殺す」

そう言いながら商人の道具袋（もう焼け焦げてポロポロだ）を漁る。

「あつた、これだ」

どうやら、あの壺——商人が最も大事にしていた死体入れだ——を見つけたようだ。

だが、見た目と違つてかなり重たかつたようで、（それもそうだろう、膨大な量の死体が入っているのだから）残つた右腕だけでは引きずるようになして運ぶのが精いっぱいのようにだつた。

「頼む、手伝つてくれ！」

壺の中にはたぐさんの死体が入っている。僕の仲間やスラ美ちゃん、そしておじさんやリリパの一族たち……でも、所詮みんな死者でしかない。壺をうまく取り返したところで、誰も復活したりはしない。せいぜい墓でも作つて供養することくらいだ。それなら、目の前の命を助けることの方が余程大切じゃないか。もうこれ以上誰にも死んで欲

しくはない——こんなささやかな願いすら神は聞き入れてくれないのだろうか……  
僕の中に虚脱感が芽生えたときだった。

「スラ吉さん……ぼくが手伝います。どっちに運べばいい？」

リリパがバーサーカーのもう片方の腕を掴みながら、見えないはずの目で僕を見た。

「リリパ、いいところに来た！ こっちだ、こっちを手伝うんだ！」

「……………」

リリパは何も答えなかった

「何をボーツとしとるんだ。早く手伝わんかい」

「……………」

リリパは何も答えられなかった。僕はそつと呟いた。

「別に、無理しなくていいよ。君にとつておじさんは大切な族長だから気持ちちは分かる  
……おじさんの言うとおり、バーサーカーなんて助けても意味はないかもしれない。で  
も、僕はもう誰にも犠牲になって欲しくないだけなんだ。君は、君の好きなようにして  
いいよ。僕はそれで君を恨んだりなんかはしないから」  
「おい、早くしろと何回言えば分かるんだ！」

パトリックは焦っていた。肝心のリリパは自分ではなくスラ吉の方を手伝っている。一人ではもう一人の人間が来るまでに壺を安全な場所に運ぶのは、到底不可能だった。

「くそっ、うおおおおおー！！」

こうなれば、せめて破壊して二度と使えないようにしてしまおうしかない。パトリックは残った右腕に力を入れると、壁へ向って壺を放り投げた。壺の重さからして、壁の半分の飛距離も到達しなかったのは別に驚くことでもない。壺は意外と頑丈にできていたのか、ちょうどいい角度で落ちたのか、ヒビが入っただけで割れることはなかった。パトリックは最後の抵抗が無駄に終わったことを見届けると、悔しさに歯ぎしりしてその場から立ち去った。

しかし、パトリックが壺を投げたのは完全に無為な行為という訳でもなかった。

とにかく、この時はそれを知っているのは壺の中にいるモノのみだったことは確かではある……（マッド・トルネコ、プロローグ完）

## 15. かつての仲間たち

なぜこんなダンジョンの深いところにスライムがいるのか分からない。とにかく、そのスライムを追った先には、自分の父親とライオンが重傷を負って倒れていた。

「父さん……」

パチパチと火が燃えている中、ポポロはトルネコの側へと駆け寄った。脈や呼吸はまだあったが、もはやかろうじて生きている、焦げたチャーシュー寸前の状態だ。ライオンも意識を失い重傷を負っていたものの、トルネコと比べればまだマシといえた。すぐに地上へ戻って手当すれば大丈夫だろう。だが、トルネコの方は……

迷っている時間はポポロにはない。これ以上スライムを探すことはあきらめ、リレミトの巻物を取り出すと、二人を連れて地上へと帰還した。

このとき、ポポロは二人に応急手当をすることに頭がいつぱいで、部屋の中に合成の壺が落ちていることに気づく訳がなかった。ましてや、その壺が内部からの力で振動していることになど。



——トルネコ宅にて——

トルネコは地上での医師の治療によって、薬草エキス漬け包帯で全身をグルグル巻きにされた状態で、寝かされていた。

ライアンの方はポポロの最初の応急処置のおかげもあって、すでに意識も回復し、かろうじてだが自力で歩ける程度まで回復していた。それでも、重傷には違いないし、今までの戦闘で体力も相当磨り減っている。

「やるだけのことはやりましたが、何せ全身に重度の火傷を負っているので……明日まで持つかどうか……」

医者 of 絶望的な診断を聞いたライアンは、疲労で硬直した筋肉に鞭打つと、ポポロの横までフラフラと移動した。

ポポロはジツと、わずかな空気を求めて必死に上下するトルネコの腹を眺めている。

「最近の父さんは少し変だったけど、昔は一緒に遊んでくれたこともあったんだ。こんな大きな魚を釣ったこともあるんだよ」

ここで初めて、ポポロは隣に立つライアンを見上げた。

美しい瞳だ——ライアンは純粹にそう思った。

まだ世間の泥土にまみれていない、美しき存在。

「これこそ、まさに勇者と共に命がけで守ってきたものだし、これからも守るべきものだ。」

「そういえば、ネネ殿はどうした？」

「ああ、母さんのことだね」

伏目がちに目線をそらしながら言った。

「二応、店の人に連絡したんだけど、仕事で今は移民の町にいるらしいんだ。いつ、こつちに帰ってくるかは分からないって……」

一体、ネネは何を考えているのだろう。いくら仲が悪いとはいえ、長年連れ添った夫婦ではないか。もしかしたら最期かもしれない時に、どれ程大事な仕事か知らないが、悲しんでいる息子を放っておいてそつちを優先するとは……

その憤りがライアンに新たな考えと行動力を与えることになる。

とにかく、ここで死なせる訳にはいかない。ポポロのためにも、トルネコ夫婦にとつても。どれだけ仲が悪くても、決着はきちんかつけるべきだ。

昔、ともに戦ったアイツならこのトルネコの傷をどうにかできるかもしれない。

ほとんど当てのない話だが、このまま黙って眺めているよりマシだ。

すぐに空飛ぶ靴を履いて飛び立とうとしたが、足に力が入らず大きくよろめいた。

「大丈夫？ 僕も一緒に行くよ。こんなところにおいても何にもできないし。ライアンさ

んも支えが必要でしょ？」

「いいや」

ライアンは支えてくれたポポロの肩を掴むと言った。

「そばに居てやってくれ。それが君にできる最大のことだ。私なら何とか一人で行ける。心配しなくてもいい。なに、少し知り合いのところまで飛んでいくだけだ。すぐに戻ってくる」

「分かったよ。でもなるべく早く戻ってきて。ライアンさんも重傷なんだから」

黙って頷くと、そのまま窓からサントハイムへと飛び立った。

城の人間に道をきき、ライアンはサントハイムの城下町を、クリフトの住む家に向かつて走って行った。城下の人々が所々に包帯を巻いた、今しがた戦場から戻って来たと言わんばかりのライアンの姿に好奇の目を注いでいたが、今はそんなことを気にしている場合ではない。一刻も早くクリフトの元へ行かなければ——このままではダンジョンに何があつたのかさえ、永遠に闇の中だ。

走っている最中、ライアンはさきほどポポロが自分を支えてくれたことを思い出していた。あれは危なかった。あのまま一緒に連れて行ったら、自分の理性が壊れるか鼻からの大量出血で間違ひなく大惨事を引き起こしていただろう。あんなに小さかったポ

ポロが、ああも美しい少年に成長していたとは。

自分のこの忌まわしい性癖さえなければ、もっと素直に喜べただろうが……

ライアンは無事にクリフトを連れて戻ってきた。クリフトのベホマなら一瞬でトルネコの傷も治るだろう。

「あ、それじゃ、おじやましませーす☆」

一同が驚きに硬直し、狂気じみた声の主を振り返った。

「こらっ、お前は喋るなど何べん言や分かるんじゃ、このプリン脳みそ神官が！ 黙ってさっさと用事だけ片付けんかい！」

ブライが杖で小突きながら、とにかくこの緑色の狂人をトルネコのベッドにまで案内した。

「あ、ちよ、痛、やめてください！ マジで暴力反対！」

「ならとつととやることをやらんかい」

「あの一、すいません……」

硬直している者たちを代表してポロがおずおずと切り出した。

「今ちよつと大変なことになっているので、用事とかそれどころじゃないんですが……」

「案ずるな、彼が父さんの傷を治してくれる」

無意味にポポロの肩に手を置いてそう言ったが、どうやらポポロの前では少し口調まで変わってしまうようだ。

「でも、その……言いにくいですけど、治療が必要なのは、この人の方なんじゃ……それも頭の中の」

やはりポポロは間違いなくトルネコの子供だ。この緊急事態での発言にライアンはそう実感した。

「それじゃあいきますよ、これが全MPをかけた会心の回復魔法ですよ。よおく見といてくださいよ」

「しょーもない能書きを垂れとらんで、さっさとベホマと言わんか！　ことが緊急事態だと」

ブライが杖でクリフトを殴る。犬でも調教するように。

「その空っぽの脳みそに！」

異様に痙攣しながらうづくまるクリフトにさらに杖を振り下ろす。

「何べん言やわかるんじゃー！」

だが、3度目で杖の動きは止まった。

ブライが振り向くとそこには杖を掴むライアンの姿があった。ライアンは杖をその

ままゆつくりと下ろさせると、諭すように言った。

「ブライ殿、お気持ちはよく分かるが、クリフトもあのような状態なら、いくら殴っても同じことではないか。それに、老人が杖を振り回している姿は……目に入れるに余りある」

もうブライがクリフトを殴る気が無くなったのを確認すると、ライアンは杖から手を放し、今度はクリフトに向かって言った。

「クリフト、見れば分かる通り、トルネコ殿は瀕死の重傷で、今は一刻を争う状況なのだ。約束の金は必ず渡す。だから、今すぐにトルネコ殿を治療してやってはくれぬか。もうこれ以上……友人が苦しむ姿を見たくないのだ」

「おっさん……」

ライアンの静かな訴えが伝わったのか、狂った神官は急にしおらしくなった。

「俺……今まで……その、すごく墮落していたんです……なんていうか、楽な方へどんどん流されていって……でも何もしなくて……」

「もういい、全て過ぎたことだ。人の真価は『今何をするか』にある。今までのことを悔やみすぎるな」

「そう言ってもらえただけで、すごく気分が楽になりました。俺、もう逃げません。やれることをやってみます。それで皆が元通り受け入れてくれるか、分らないけど」

「大丈夫だ、落ち着け。前にできたことだ。今できない訳がない。それに、皆が見守つてくれている」

もう二人に言うことはない。互いにうなずきを交わすと、クリフトは例の焦げた豚ミイラの前に歩み寄り、手をかざした。全員の期待に満ちた沈黙の中——

「ベホマンマミーア!!」(地中海の陽気な漁師風)

とにかく、僕は念のために持つてきた薬草を使って、すぐに応急手当をした。途中、おじさんが何度も「そんな奴を助けたって何の意味もない、起きたら真っ先に殺されるぞ」と言つていたけど、そんなことに構つていない場合じゃないと思つた。何といつても、命がかかつている。しかも、このバーサーカーが惨めな目に遭つたのは、半分は僕のせいなのだから。

でも、結局はおじさんも手伝つてくれた。おじさんが言うには、僕の手当は見えていられないようだ。こんな手当を自分もされたと思うと鳥肌がたつ、しっかりと手本を見せてやるからよく覚えておけ、だつてさ。

そうやって銃弾の痕を治療し終えた時——急にバーサーカーが上半身を起こした。びつくりしたよ。急に投石機見たいに上半身が跳ね上がったんだから。

バーサーカーは起き上がるとしばらくの間、黙つて僕を見つめていた。そして、手を

ゆつくりと動かし、額当ての宝石を取り外し、僕の目の前に置いた。

その時にはすでに僕とバーサーカーは心が通じ合っていたから全く怖くはなかった——ということもなかった。起き上った瞬間は恐怖で硬直して動けなかったし、額の宝石を外すときもビームが何か出るんじゃないかと思っていた。

しかし予想に反して、バーサーカーはそのまま宝石を置くと立ち上がり、ダンジョンの奥へと去って行った。

「お前、それをもらったのか？」

急に出てきたので少々驚いた。今までどこかに隠れていたのだろう。恐らく、あの硬直していたときに、素早く隠れたのだ。

僕は落ち着きを取り戻すと黙ってうなずいた。

「バーサーカーは自らが認めた相手には、その証として額の宝石を渡すのだという。お前も、とうとういっぱしの戦士だな。リリパもちゃんと見習うのだぞ」

もう、途中からおじさんの言葉は耳に入ってなかった。僕はずっとバーサーカーの去っていった方向を眺めているだけ。

——その内、すぐにおじさんは立ち去った。何でも帰って勝利の祝宴の準備をするらしい。

やがて、リリパの少し悲しげな歌が聞こえてきた。



「ぎやはははは!!ひいひい……フッフ」

「何がそんなにおかしいんだよ!」

陽気なイタリア人風に笑い転げるクリフトを見て、ポポロも怒りを隠せないでいた。

「ちよwwここ、笑うところですよww」

ライアンは今度こそは暴力に訴えてでもクリフトにベホマを唱えさせようとしたが、その前にポポロのベスヴィオ火山が噴火した。

「何が笑うところだって!?! 他人の不幸がそんなにうれしいなら、そこら辺の寂れた商店街でも行つてくればいいじゃないか!!」

「かんべんしてくれよ、もう最近の若者はすぐに切れるからねえ。小さい時はあんなにかわいかったのに随分変わっちゃったなあ、あ。あのときはお父さん、元気『でした』よねえ?」

一瞬、クリフトの皮肉を理解するのに時間がかかったようだ。

「そのことを言うんじゃない」

声のトーンが急に変わったような気がした。今まではただ単純に怒っている感じだったが、このときはマグマがグツグツと煮えたぎっているような感じになったのだ。

「もういっぺん、ふざけたことを言ってみろ。殺してやる」

今の状況なら、本当に殺しかねない。もつとも、その時はベホマで即、自分を回復するのだろうか。しようがない、もしブライが説得して駄目なら、もう腕づくでやらせるしかないのかもしれない。

「それじゃあ、ここでクリフトのマニアッククイズ!!」

早速ふざけ出した。もはや訳が分からない。クイズに正解すれば景品でもくれるのだろうか。

ただ、当の出題者は、異様に血走った眼で、ここにはない異空間を眺めていることから明らかに狂気に汚染されている。

一同はクイズより、その狂気の理由が訊きたかった。だが、逆にクイズを投げかけられたことにより、何となく先にクイズに答えなければならぬと思わされていた。何より、相手は狂人のくせにトルネコの命を握っているのだ。祈りなど絶対に通用しない相手だ。

「あるところに、まじめな中学生、ツトム君がいましたあ(ポポロ君と同じくらいかな?) ツトム君は昨日、バトミントン部から帰ったあと、家でなあにをしていたでしよるか? 大事な大事な、ビッグバン・アタック・チャンス!!」

狂人という者に勇氣などない。あるのは欲望とそれを発散させようとする意思だけだ。

「うん、答えてやるよ。答えればいいんだろ」

ポポロがクリフトの前をツカツカと横切る。

「そうです。正解したらトルネコの傷を治します、でも不正解の場合は……ごめんなさい、昇天アボンですう」

「何か、ヒントはないのかな」

ポポロがイスの背もたれを撫でながら静かに尋ねた。

「人生にヒントはない！ 自力で考えなさい！」

「全然分かんないから、少しだけ教えてくれないかな」

「じゃあ、特別にヒントを差し上げましょう!! ヒントは『昨日』何をしていたか、てとこ！ さあ、答えてもらいましょうか、時間が迫って来ているぞお、ポポロ君……チツチツチツチツチツチ……」

「うん、それじゃあ言うよ。答えは……」

「答えは？」

「これだ！」

バキョツという音がポポロが叩きつけた椅子からもクリフトの頬からも響き渡った。

「もう本当に殺してやるからな、クソ神官!!」

「放せ、放せたら! 殺さなきゃ、こいつはここで殺さなきゃ」

イスだった物を振り回すポポロの両腕を、ライアンは後ろから羽交い締めにして止めた。

「放せたら……うう……なんでこんなことばかり……」

ポポロの両目からはドクドクとマグマのごとき温度を持つ液体が流れ出た。

「ぐう……うう……」

ライアンは両腕を放した。ポポロに、もはや攻撃の意思は無い。

その場の気まずい沈黙に包まれ、ブライが仕方なくライアンを連れて帰ろうとしたときだった。クリフトが血とアザだらけの顔面を上げて立ち上がった。

「あーあ、仕方ないなあ。この後はクリフトのマニアックしりとりもあったのに、台無しじゃん……つたく、空気読めよ。今回だけだからな」

一同が棘のある沈黙でクリフトを凝視している。

「分かっている!!」

そう言って、トルネコへ向かって手を掲げた。

「はいはい、ベホマ、ベホマ」

——クリフトのHPが全快した!!

## 16. かつての仲間たち2

勇者たちが急いで村に戻ってみると、魔物の残党が暴れまわっているところだった。

元々は、村から洞窟に住むモンスターを退治して欲しい、と依頼されたのが始まりだった。勇者は村長と退治できた時の報酬を決めると、いつものレギュラーメンバーで洞窟内のボスを可哀そうなくらいにタコ殴りにしたのだが、死の間際、その大して強くもなかったボスが言うには、すでにこうなることを見越して村に別のモンスター軍団を向かわせたというのだ。

すぐさま、リレミト・ルーラで村に戻ったのだが、普段から魔物の恐怖を味わっている村人たちは、戦うことも忘れて逃げ惑っている。さほどの軍勢でもないのに、すでにあちこちから火の手が上がり始めていた。

「メンド臭いな。マーニヤ、イオナズンで一氣に蹴散らしてくれ」

「オイオイ、どこの国に顧客に向かってイオナズンぶっぱなすアホがいるんだよ」

馬車から出てきたトルネコを見て、勇者の表情が明らかに不快感を示すものに変化した。アホと言われたことより、嫌いな者に正論を諭されるのが嫌なのだ。

「しかたないだろ。早く倒さないと、モンスターの子でその顧客が消えちゃうかも  
しれないからな」

「ここはトルネコの言うとおりにしといた方が無難だと思うわ。下手に村人を傷つけ  
たら、報酬が貰えなくなるかもしれない。それなら、メンド臭くても助けて恩を売つと  
いた方が印象もいいわね」

ミネアが横から勇者に耳打ちする。

「しゃあねえな。おい、いくぞ、アリーナ」

「よかつた、ちようど戦い足りなかつたところなんだよね。さあ、皆ボクについて来て  
！今からこの村を救うのだ！」

最後のセリフも言い終わらないうちに、猛スピードで駆け出して、触れたモンスター  
をどんどん肉塊に変えていった。

「さて……年寄りにはヒヤダインで消化活動でもしてようかのう」

「俺は負傷者の治療をします」とクリフト。

引き算の結果、残った戦士と商人は燃え盛る村の鑑賞をしながら、馬車で留守番をす  
ることになった。

「ありがとうございます。これは僅かばかりのお礼ですが、旅の途中で役立てていた  
だければ幸いです」

中央の広場に、勇者の姿を見に来た村人たちが集まっていた。村はミディアムレアと  
いった状態で、半分程の家が焼けていた。もし、勇者が来るのがもう少し遅れたなら、全  
焼していたところだろう。

「村長さん」

渡された袋の中身を確かめながら、勇者が言う。

「これじゃ全然少ないじゃん。約束と違うしさあ」

「申し訳ありません。本当は約束通り支払いたかったのですが……何分、先程の攻撃  
で穀物庫が焼かれてしまいました……本来ならば行商人に穀物売って、その代金で支  
払うつもりだったのです。今、村からあるだけのゴールドを集めました。この村ではこ  
れが限界です。残りは後で必ず払いますから……」

「そうか、分かった。これ返すよ」

「しかし、タダというわけには……」

「いや、いいよ。それより焼けた村を復興させるのに使った方がいいぜ。これから寒  
くなるしな」

「我々の心配をしてくださるのですか？ それなら大丈夫ですよ。皆で助け合って何  
とかします。それよりも、今は一刻も早くデスピサロを倒して欲しい。そのためにも、  
ゴールドは多い方がいい。少なくとも、妨げになることはないはずですよ」



「いや、目の前の人間を見捨てることはできない。ゴールドのことなら心配しなくていい。すでに十分持っている。それより、デスピサロの戦いの前にあなた達のことになりなると、戦いに集中できなくなる。だから、これは返す。気持ちだけ受け取っておくよ」

「しかし……」

「遠慮しなくていい。困っているときは『皆で助け合う』んだろ？ さあ、受け取ってくれ、村長さん。これはあなたが村人のために、責任を持って使うべきだ」

「かたじけない……復興した暁には必ずお礼を」

そう言つて勇者が返却したゴールド袋を受け取った瞬間、村長の手は袋を掴んだまま、地面へと落下していった。

勇者が村長の手を高速の居合で切り落としたのを見て、トルネコはまたもや激しい嫌悪感に襲われていた。今までの会話は全部茶番だ。

勇者と比べれば、偽善者ですら聖人君主に見えるし、詐欺師でも宣教師か牧師に思える程可愛らしい。(まあ、詐欺師も宣教師もそれ程の違いはないがね)

「とか言うと思つたのか？ おかしいだろ、常識で考えて。こっちはこれだけの人数であんだだけのモンスターと戦つたんだぜ？ あんたら、もっと人数いるんだから、せめて帰ってくるまでは何とかしろよな」

広場の敷石の溝にそって、村長の血がドクドクと流れてゆく。血河は落ちたゴールド袋に到達すると、そこで大きな湖をつくった。集まった村人たちは、どうすることもできずに、黙って右手をおさえている村長を眺めているしかなかった。

「しかし……本当にこれ以上はもうないんじゃないか……信じてくれ！」

「信じるも何も、これじゃこっちは赤字だよ？ この気分を抑えるためには、村をメツチャクチャにしてやらんと気が済まんね」

「頼む……後で必ず払う……約束する……」

「必ずか？」

「必ず……」

「いいか、よく聞けよ」

もうお前の口からは何も聞きたくない、トルネコだけでなくその場の全員が思った。

「まず、命を賭けた戦いの報酬がガキの小遣い程度ということ。そしてもう一つが——ここが大事なところなんだが」

村長の息が上がり、顔が青白くなってきた。痛みと、あの世への旅立ちを必死に耐えているところなのだろう。

「穀物庫は大切なはずだ。それは分かっている。ならどうして命がけで守らない？」

さんざん他人に頼って、後でとぼちちりを喰らうのは全部俺だ。聞いてるのか？」

村長は僅かばかり首を縦に振ったが、それも限界といった様子だった。

「頼む、後で必ず払う……」

「お前、それしか言えないのかよ。つま、どつちにしても、現時点で払えないような奴を信用する訳にはいかねえよな」

「この村の者に死ぬというのか……」

「俺も魔物じゃない。君たちに選択肢くらい与えてあげよう。村長のお孫さん、けっこうキレイだよね？」

「ぐっ……」

村長の青白い顔がますます青白くなってゆく。

「本当に……本当に払いますから……それだけは……」

「もうそのころにはデスピサロも倒しちゃってるだろうし、いちいち取りに行くのメンド臭いだろ。だから、君たちにその選択肢はない」

「……………」

息も荒くなってきた。出血がひどい。

「よおく、考えて。気は長い方じゃないけど、どうやらあんたが生きてる間くらいは待てそうだな。そうだ、お茶でも飲みながら考えるかい？」

すでに炎は完全に消えていたが、今度は沈みかけた夕日が村の家を猟奇的に赤く染めている。周囲の森はきり絵のようにその風景を切り取っており、白い月がのどかにそれを鑑賞していた。

村長はしばらく全く身動きしなかったが、やがて喰いしばった歯を緩めると言った。

「分かった……今夜私の屋敷に案内する……」

「それが正しい選択だと思うよ。村を救った大英断だね」

そのまま村長の前に歩み寄ると、そばに落ちていた右手を拾い上げた。

「おい、クリフト。ご老人をいたわって差し上げろ」

一瞬、嫌な顔をしたが、（もちろん、勇者に悟られぬようにだ。しかし、トルネコだけはそれを見逃さなかった）クリフトはすぐに勇者から右手を受け取ると、すぐにベホマで元通りに治療した。

「おいおい、そんな辛気臭い顔すんなよ。せつかく村が救われたんだから、今夜はパーツといこうぜ、パーツと！」

……

「……はどどだ？」

さつきまでどこにいたかも定かでなかった意識だったが、それがたつた今、自分の肉体に戻ってきたようなのだ。最初に気づいたのは、全身を焦がしながらそれでいてツラのように刺す、あの痛みが消えていることだった。

自分はあのとき、忌々しいスライムの挑発に乗り、そこでバーサーカーの奇襲を受けたのだ。それから、ライアンのとつさの機転で助かったと思っただが——確かあれは転び石——だったと思う。それにつまずいて地雷原に突入、大型地雷と誘爆した弾薬・燃料をまともに喰らってしまった……

そこから先は記憶が無い。あれで死んだと思っただが、そのことを今考えているから死んではいけないのだろう。

——なんだ？ さつきから声が聞こえる……何か……ポポロが随分と騒いでいるよ  
うだが……聞き間違いだろうか……？ それにしても目の前が暗い……とにかく体を動かさし……何だ？ 何かに締め付けられているようだ……なら力づくでブチ破るまでだ。

力づくで！

再びイスを振り回すポポロの目の前に、包帯の切れ端が舞った。一同がトルネコの方へ視線を移すと、ちぎれ飛んだ包帯が空中で立体道路のように交錯し——その中央には

全快したトルネコの姿が鎮座していた。

「だから言ったじゃないですかあゝ」

クリフトは皆の眼がトルネコに釘付けになっている中、頭のコブを押さえながら立ち上がった。

「だから、一度目のベホマで自分の傷を治して、二度目でオツサンの怪我を治したんだって」

「父さん！」

ポポロがステテコパンツ一丁の（残りの服は全て焼けてしまった）トルネコと熱い抱擁を交わし、久々の親子の再会を喜び合った。それまで、例えば同じ屋根の下であっても互いに顔を合わせることもすらなくなっていたからだ。

結局、呼んだにも関わらず、その日一日、ネネは仕事という、自身にとってはもつともな、他人にとっては不可解な理由で、姿を見せることはなかった。

一応の診察も終え、トルネコが完治したことを確認すると、医者はそのくさと屋敷を後にした。もうすでに医者が出る幕は終了したし、何より狂った神官の無用のトラブルにこれ以上巻き込まれるのはもう、うんざりだったからだ。

もちろん、それはポポロやライアンにとつても同じなのだが。

「あつそうだ。忘れてたよ、ヒヒヒ……」

久しぶりに絆を取り戻した親子と、それを見守るライアンに歩み寄ると、充血した眼に不気味な光を宿しながら口を開いた。

「治療費、10万ゴールドになりまーす?」

「おい」ライアンが光る眼を見つめ返す。

「あ、分割は10回までとなつておりますので——でも出来れば即金一括で払って欲しいな、ヒヤハ」

「後で必ず払うと、連れてくる時に言つたはずだ。どうしてそんなに急かす?」

「え……だつて、すぐ欲しいんだもん……」

ライアンの全く動揺のない平板な声に怒りを読み取つたのか、急にクリフトの口調が変わつた。

「とにかく、今はもう少しトルネコ殿と話すこともある。支払はそれが終わってからだ。いいな? それまでおとなしく待つてくれ。何、それ程時間はかけん」

妙に優しいのが逆に恐ろしい。この態度から察するに怒りの導火線は残り僅かしかないようだ。だが、クリフトの自制心も僅かしか残つていなかった。

「え……だつて、すぐくれるつて言つたじゃん! 俺には今すぐ欲しいからここに来

「たんだよ！」

「お前はライアンの言ってることがわからんのか？　犬でも『待て』くらいはできるぞ？」

それまで親子の感動の再会をぶち壊しにしないように、沈黙を守り続けていたブライだったが、もうこれ以上放っておくわけにはいかない。付け加えて、クリフトの保護者としての責任も感じていた。

「ライアンがここまで頼んでいると言うのに、お前はそわそわかな時間すらも『待てぬ』というつもりか？　もとはと言えばお前のオフザケのせいせいで時間を食ったんじゃない。なんなら、今からわしが『クリフトのマニアックしりとり』の相手をしてやってもいいが？」

「だって……だって……」

「『だって』じゃない。早く外に出るんじゃない！　もうお前の役割は終わったんじゃないから。金は明日にでもワシが受け取つといてやる」

そう言いながら、ブライはクリフトの神官服の袖をつかんで引つ張つていこうとした。

「う、う、うるさい！　僕は急いでるんだ！　早く行かなきゃ……向こうの売人には『今日の夕方までに払う』て伝えてあるんだ……」



「たわけ！この——」

ここでトルネコが止めなければ、ブライは神官長とは思えぬ程口汚くクリフトを罵つただろう。そして、彼が振るう杖によってクリフトの頭に本日13個目のコブが作られていただろう。

「オイオイ、そこら辺にしてやりなつて。年寄りがそんなに怒つちや健康にも悪い。10万ゴールド？　いいよ、すぐに払つてやるぜ。なあに、命の代償に比べちや、安い、安い」

「え、本当にすぐにくれるの？」

クリフトの真赤に充血した眼にまたもやさっきの光が灯つた。不浄な光、人間の精神が異臭をたてて腐り始めたときに漏れだしそうな光だ……

「ああ、今すぐだ」

「やったおー！　ひやつほーい！」

「ただし条件がある」

この場にいる者全員が自らの耳を疑つた。クリフト自身ですら何を言われたか判別しかねたくらいだ。条件？　条件だと？　狂犬相手に芸を仕込むようなものではないのか？

そんなことを知つてか知らずか、トルネコは天気の話でもするかのように話を続け

た。

「なあに、簡単なことだ。アンタと一緒に不思議のダンジョンに潜って欲しい」

この提案に一同は驚いた。当のクリフトも驚いた。

「ダンジョンにはどれくらい?」

餌をぶら下げられ、狂犬はチワワのような口調になった。

「長くても一週間くらい——もつと短いかもしれねえ」

「だめだよ……僕は……ダンジョンに長い間いられないんだ……」

「どうしてなんだよ?」

もう、黙っていてもしようがない。ライアンはブライに了承を得ると、クリフトが重度の麻薬常習者であることを説明した。そして今、クリフトが麻薬の売人をエンドールに待たせているところを、有りもしない金を餌に連れて来たことも話した。

「なるほどね。それで支払を先に延ばしたがつてたワケか」

やつとはつきりと分かった。今までも半ばそうだと思っただけだったが、とにかく、これで数分のうちにクリフトの口調が変化したことにも納得がいった。中毒症状が出始めてきたのだ。その影響で、徐々に理性を失い始め、幼児退行しているのだ。

「そうだ。何せ緊急事態だったからな。とにかく、時間を稼いで金を工面する必要が

あつたのだ。病み上がりで悪いとは思うが……」

「心配するな。金ならアテはあるから、今すぐ払える」

話を終えると、今度はクリフトの方へ向き直った。

「分かった。ダンジョンに潜っている間、十分な麻薬を用意しといてやる。会計上の特  
別勤務手当、てやつだな。どうだ、悪い条件じゃねえだろ？」

「おじさん……」

今までにないほど親しみを込めてそう言うと、クリフトはベッドの前でがつくりと膝  
を折り、トルネコの肉厚の手を取って敬遠な爬虫類のごとく頭を垂れた。

「あなたは神？ いや、神だ……神しかありえない……」

クリフトにとって、この家は瞬時に天国と地上の狭間にある大聖堂と化した。トルネ  
コはさしずめ洗礼を施す病床の救世主と言ったところか。麻薬の神を称える万神殿。  
しかし……しかしそれでも、眼に宿る不浄な光だけは消し去り難い……

「おお、神よ、至福の神よ……私はあなたを讃えます……」

「お祈りの最中にすまねえが、一つ聞きたいことがあるんだけどよ」

「おお、私には神の声が聞こえる……何でしょうか？」

「ツトム君は結局、何をしてたんだ？」

## 17. かつての仲間たち3

翌日——トルネコ宅にて——

「またあの姉妹を呼んでくるそうだな」

「マジで？ あいつらウツさいんですよね。戦闘でも優先して回復してくれとかさあ。それに化粧も何時間かけんだよって。どうやったって、心の醜さは隠せない、つうの」

「ワシもあまり気が進まん。特にマーニヤの方は——かなり手くせが悪い。ありやあ、子供のときに親の財布からこづかいを盗んでいたに違いない」

「確かに、ブライ殿の言うとおり、信用できるかが一番心配だが、それ以外に一つだけ気になることがある」

「スリーサイズ？」

「姉妹を雇うのにいくら必要かじやろ。分からんが、そこはトルネコに任せるしかあるまい。どうせ、今頃エンドールのカジノで商談中じやろうて」

本日3度目の神への祈りをささげながら、マーニヤは手札のカードを切った。

狙っているのはキングのフォーカード。全チップを賭けた最後の大勝負に、カードを

引くマーニヤの手が震えた。

マジで頼むわよ——これで来てくれなきや、次は路上でストリップダンスだわ——  
去つてゆく恋人を後ろから必死で引き留めるような気持ちで——引いたカードは  
ハートのキング。どうやら、神はまだマーニヤに気があるようだ。

「よろしいですか」

ディーラーの問いかけにマーニヤは思わず笑いそうになった。それを必死にこらえ  
ながら——わたししたらなんて博才なの、今日はこのディーラーを徹底的に痛めつけて  
やるわ。もう二度とポーカーなんて出来ないくらいにね——カードをオーブンした。

ディーラーはスリーカードとワンペア。他の客はほとんど素人だから、もはやマー  
ニヤの勝利は確定したも同然——早くもテーブル上のチップを取ろうと手を伸ばした  
が、その手がチップを掴むことはなかった。

「悪いね。ストリートフラッシュで俺の勝ちだ」

啞然としたマーニヤが、自分のチップ（と人生の半分）を持つていった分厚い手の持  
ち主に視線を移すと、そこにはいつの間座っていたのか、懐かしい商人の顔があった。

あの、トルネコの顔が。

「いや、そのことも確かに気になるが、トルネコ殿の言う、ダンジョンの奥に何かがあるのか、そちらの方が気になるのだ」

「きつと果てしなく広がるケシの畑にハーレムがあるんだよ」

「ライアンはつい先日、トルネコと一緒にダンジョンに潜つとつたんじゃから、知っておるのではないのか？」

「いや、それがどうしても話してくれなかった。また改めて聞き出す機会もないまま、こうして地上に送り返されてしまった……」

「まあ、俺は麻葉さえあればそれでいいけど」

「それもトルネコが帰ってきたら聞こうかの。また勇者のパーティが集まるとは、思ってもおらんかったわ。まあ、今度は世界ではなく、生活の危機のために集まるが」

「あの魔王を倒した時が一番良かった。正直、今でも奴が復活してくれないかと思うと  
きがある。不謹慎な考えだとは分かっているが」

「♪何回やつても、何回やつてもデ・ス・ピ・サ・ロが倒せないよ♪」

「ライアンの言うことはよく分かる。ワシも不謹慎だと思うが、教会も奴がおらんよう  
になつたせいで不景気の極みじゃ」

「教会が？ なぜだ？」

「神なんていないってことさ。小学生でもわかるぜ、ハッハー！」

「どうやら、喉元過ぎれば熱さを忘れるらしい。奴がいた頃は、民衆も神にすがりたかつたのじゃろうが……ひとたび災いが去れば、誰も寄付しようと思わなせん。寄付は減つたのに対し、施しは前と同じかそれ以上を求められるようになった。これでは蓄えもあつという間に尽きてしまふわの」

「それか。教会が最近、何やら怪しげなものを売り始めたというのは」

「神の国への入場許可証だぜ！ハイル！ゴッド！分かる？『ハイル』が『入る』に掛つている、この高等ジョーク！」

「免罪符のことじゃろう。でもしようがない。ワシら（多分、この『ワシら』にクリフトは入っていない）も座して死を待つ訳にはいかんからの。信憑性のないお札を売らないと、もはや、やっていけん」

「なるほど。そういうことだったのか」

「謎は全て解けた！てか？」

「じゃが、ダンジョンに行く理由が、ワシにはどうしても分からん者が、一人おるな。あのトルネコの息子は どうしてダンジョンなんかに行きたがるのじゃ？」

「父親を守るため？ それくらいしお思いつかん……一つだけはつきりしているのは、理由は何であれポポロが助けてくれたおかげで、自分は今こうして喋っていられる、と

いうことだ」

「おお、神よ、迷える子羊を導き給え！」

広場は、すでに今晩の祭りの準備が整っていた。そこここに出店や出し物の屋台が軒を連ねている。今日は祭りの最終日だろう。だが、自分にはあまり関係はない。

ポポロは寂れた商店街の中にある、小さな公園へと足を踏み入れて行った。

「やつぱりここにいたんだね」

ポポロと同じくらい年の少女が話かけてきた。いわゆる、幼馴染というやつだ。昔はこの公園にまだ母親（の振りをしていただけだろうか？ 今となつては分からないが）のネネに連れられてよく遊んだものだった。今も法律上は母親だろうが、自分の心の中ではもう認めてはいなかった。

「ポポロ君、またダンジョンにいくの？」

「うん、あたりまえだよ。まだ諦めちゃいない」

「ふーん……」

武器屋の少女は半ば興味がなさそうな感じだった。以前はそんなことはなかったのに……

「わたしね、引越すことになったの」



別に付き合っているわけでも、好きな訳でもなかったが、急にいなくなると聞かされると心の中に穴が開いたように感じた。

「あと少しで何とかできそうなんだ。それに……ここでやめたら今まで頑張ってきたことが無駄になっちゃうじゃないか」

「ポポロ君が商店街のために必死になつてくれたのは、みんな覚えていてくれる。だから無駄なんかじゃないよ」

「負けたら、何の意味もないんだ」

そう言いながら、ポポロはまだ幼いころ、この公園でネネと一緒に遊んでいたことを思い出した。ここで、母親を追いかけて地面に転んだことも。

「そんなことないよ……ポポロ君、なんていうか……最近ちよつと変だよ……」

「ぼくは変でもないし狂っちゃいない。むしろ、おかしいのは君らの方だよ。トルネコ商会に客を全部持つていかれて、悔しくないのかい？」

「悔しいけど……どうしようもないよ……」

「だいたい、引つ越して武器屋はどうするんだよ？」

「店をたたむって……」

「クソッ」

ネネは夕方の残照の中、黒い塊と化してポポロの前に屈みこむ。そして、その温かい

手で、擦りむいた膝の痛みに泣きじやくる息子を引つ張り上げるのだ。

「店を整理したお金を元手に、新しい街で次の仕事を見つける間の生活費にするらしいの。わたしの家だけじゃないわ。みんなもう、この街で商売するのは限界だつて……」

「あいつら、ここをどうするつもりか知ってるかい？」

「『あいつら』つて……それにはポポロ君のお母さんも含まれてるんじゃない？」

「あんな奴はもう母親じゃない」

「やつぱりおかしいよ。たった一人のお母さんなのに」

「母親だからだ。母親だからこそ、必ず倒さなきゃならないんだ！」

「……………」

服に付いたほこりや砂利を払いながら、ネネはポポロによく言い聞かせた。

「最後に教えといてやるよ。あいつら……この商店街を全部潰してカジノやホテルを建ててやるんだよ」

「そうなんだ……」

「それだけ？ 言いたいことはたったそれだけ？」

——ポポロ、立派な大人になるには、自力で起き上がれるようにならなければ駄目よ。泣いてもいい。けれど、次からは自分で起き上がるの。ママはもう手伝わないからね、

分かった？

「もう、つかれたよ……悔しいけど、わたしにはもう、どうしようもないんだもん……」

ポポロが泣いていたのは、転んだ痛みのためではなかった。そのままネネが自分を置き去りにして、どこかに行ってしまうそうだったから、泣いたのだった。

「ぼくは最後まで戦うからな。そして絶対、やつらをここから追い出してやる」

だが、その日以降、本当にネネがポポロに手を貸すことはなかった。だから、その続きの言葉もよく覚えている。

「ポポロ君……」

——ママはあなたに立派な大人になって欲しいの。周りの人たちの模範になるような、立派なことをする大人にね——

「絶対に、だ」

クリフトのお祈りが終わったと同時に、トルネコが自宅へ帰って来た。その後ろには神に導かれし子羊、マーニャとミネアの姿もあった。

ただし、導いてきたのはクリフト専用の神でしかなかったが。

「これでメンバー勢ぞろいだぜ」

「あら、二人ほど足りないんじゃない？」

今しがたルーラで3人を運んで来たミネアが、その神のご宣託に疑問を呈した。

そう、確かに、あの時いてここにいない者が二人いる。アリーナと勇者の二人だ。

広場の向こうから見ただけなので、誰だかはつきりとは見えなかったが、確かにその人物が自分の家の中に入って行ったことぐらいは見えた。青い三角帽を被ったその人物は、遠目からでよく分からないが——身長が2メートルくらいありそうな感じだった。

「あんな奴、来るわけないじゃないか。ねえ、おじさん」

「そうだな。勇者なら今頃ハッピーエンドの真つ最中だ。邪魔しちや悪いからな。アリーナは連れてこない。お前と約束したからな」

「どうしてよ？ けっこうな戦力になると思うのだけれど」

「とにかく、アリーナ姫なんて奴は、絶対に来ないんだ！」

妙に激しい言いざまにミネアは一瞬たじろいだ。マーニヤが——ミネア、もうやめときなつて、こいつ基地外だから——と耳打ちしようとしたとき、突然後ろの扉を開けてトルネコの家へ入ってくる者がいた。

「酷いなあ、『あんな奴』なんて。せっかく苦勞して遥々やってきた、ていうのに」

開いた扉の向こうには、皆の見知ったアリーナ姫の端正な顔があった。だが、その下の体は――

「何しに来たんだ……この化け物め！」

クリフトが思わず椅子から立ち上がり、麻薬以外のことでは珍しく激しい口調で言い放った。

「もう、クリフトも素直じゃないなあ。本当はボクのこと好きなんですよ」

可憐な声と台詞とは裏腹に、その体には化け物としか呼びようがないほどの筋肉が、パンク寸前まで詰め込まれていた。

「出発する前に一言あいさつしてくれればよかったのに」

化け物の姫がそう言いながら家へ一歩足を踏み入れると、安ものの床材はギイギイと情けない音を立てて軋んだ。

「おじさん、約束が違うじゃないか！　こいつだけは……絶対に連れていかないって約束開いたはずなのに……！」

「なんだか事情はよく分からないけど、ボクが勝手についてきただけだから、関係ない

よ

クリフトはアホみたいに口を開けながら、怯えた目つきでトルネコの方をチラッと見  
た。満腹度ゼロのときにモンスターハウスのど真ん中に放り込まれた者よりもどうし  
ようもない目つきだとトルネコは思った。

「だいたい……おじさんはルーラで来たんだぞ！ 尾行なんてできるわけ……」

「ああ、そのことかあ」

またアリーナが一步クリフトへ近づく。それに合わせて一步後退するクリフト。

「飛んで行った方向を見て、だいたいの位置を把握してからキメラの翼を使ったんだ  
よ」

クリフトは生涯で2回、キメラなんていなければ、と願ったことがあるが、今日はそ  
の記念すべき第一回目となった。

「まあ、そういう訳で、二人の愛の前にはどんな障害も無意味なんだよ」

迫りくるアリーナだったが、もうクリフトの背中は壁とくつついている。

さらに近づくアリーナ。

その場にいた者は、トルネコも含め何もなかったのだろうか？ いや、そうではな  
い。もはや、死期の近づいた老人を見送る心境だった。避けようない死神の接吻……

トルネコですら、2メートルを超える筋骨隆々たる死神を、ただ見上げることしか出

来なかったのだ。

「こつちに来るなああああ!!」

雄叫びを上げながら、逃げ場を失くしたクリフトは、自分が座っていた椅子を愛の死神に向かつて投げつけた。

だが、椅子で死神が倒せるだろうか？

世の中には、儂いものが散りゆく様の比喩として『岩に卵をぶつける』とか『せんべいにハンマーを振り下ろす』といった表現があるが、今、目の前で正にその通りなことが起こった。

とつさに防御したアリーナの鉄腕に当たった椅子は、戦車に轢かれた三輪車よりあつけなく、元の木材へと還っていった。

「あれ？」

防御した腕を下げた時には、壁の前にクリフトの姿はなかった。その代り、視界の隅には、すでに階段を駆け上がりとする神官の姿が映った。

アリーナは黙ったまま猛スピードで階段を跳躍し、クリフトを追いかけて行った。

「で、どうするの?」

マーニヤがタバコをくわえ、メラで火をつけようとした。

「ま、追いかけるしかねえだろ」

トルネコの言うとおりでた。

「それと」

トルネコは点火の前のたばこを素早くとりあげた。

「ここは禁煙だぜ。ネネが後でうるさいんでね」

ポポロが帰つてみると、家の中は空だった。どうやら、みんなは2階に行つたらしい。上で物音がする。

「ねえねえ、この扉、壊していいでしょ。後で弁償するから」

扉の向こうではクリフトが恐怖に震えながら神に祈っていた。トルネコ達が上つて来るわずかな間に、この状況から助け出してくれれば麻薬を止めるだの、エロゲーをやるだの、免許符売りませんだのと、守れもしない約束を神といくつか交わしていた。

「他人の家のものを壊すように教育した覚えはない」



ブライが厳しく言い放った。

「勇者なんて勝手に壺割ってたし、別にいいじゃん。愛のためなら仕方ないでしょ？」

「駄目ですぞ。それに、クリフトもそんな物を壊すような人になって欲しくないはずですよ。のお、クリフト」

「あ、ああ、そうだ。その通りだ……他人の家のものを壊すなんて最低だ！ もし入ってきたら、自分で自分にザキをかけてやる」

しかし、まだアリーナはドアノブから手を放さない。アリーナのオーガボディを前にすれば、ドアはいかにも頼りなかった。

「もういいじゃん。そんな堅いこと言わずにさあ、どうせ弁償してまた新しいのにしてあげるから」

「それも駄目ですぞ」

「どうして？」

「我が国の財政状況からして、そんなものに出す金は残つとらんのじゃ。だから姫さま、諦めてくだされ」

「分かった、諦めるよ」

クリフトはようやく安心できるかに思えた。

「その代わり、クリフトが出てくるまでずっとここで待ってるから。それならいいで

「しよ?」

流石のブライも、そこまでは止められなかった。

クリフトは、もし神が目の前に現れれば、ザギを連発してやりたいと思った。

2階で見た光景はポポロにとっては最悪だった。

何せ、自分の部屋の前にどこぞの勇次郎も真つ青な巨漢、いや男ではないが、とにかくそんな人間がいて、さらに自分の部屋の中には、あの狂った神官が籠城しているというのだから。

「三日前だと? 我らは一体何日ダンジョンにいたのだ? 計算が合わんぞ」

ライアンが珍しく驚いて言った。

「ああ、そうだ。出発したとき、町のやつらが祭りの準備をしていただろ。それは覚えてるな?」

ライアンは軽くうなずいた。

「その祭りの最終日が今日ということとはだ、俺たちがダンジョンに潜ったのは、逆算して3日前ということになる」

「しかも、昨日は地上にいたから実質2日ということか」

トルネコ達は籠城したクリフトと包围したアリーナを放っておいて、とりあえず一階のテーブルに集合した。おそらく、このテーブルを複数人数で使うのは何年かぶりの快拳だろう。普段の食事も、もはや一緒に摂ることはなくなっていた。

「ワシも聞いたことがあるな。ダンジョンの中は異世界だから、時間の進み方が違うという」

外ではもう夕日が沈みかけていた。それに、祭りの楽の音の演奏が遠くから聞こえる。夜の本番に向けて最後の練習をしているのだろう。その音色も、なぜかこの家の中では物寂しく聞こえた。

「逆に、こっちで何週間も経っているのに、ダンジョンの中では2日や3日、てこともあ  
るらしいぜ」

退屈そうに聞いていたマーニヤだったが、話がトルネコの自慢話になりそうなので先手を打って口を開くことにした。

「わたしから一つだけ聞きたいことがあるのだけれど」

「なんだ？ これから行く所にアンタの大好きなカジノはねえよ。あと、お菓子は300Gまでだ」

「茶化さないで真面目に答えて欲しいのだけど。それだけ聞いたらわたし、外に買い物に出かけるから、後はつまらない自慢話でも好きなだけしてくれていいわよ」

「俺はいつだって真面目だぜ。んで、ききたいことっていうのは何だ？」

「もう分かってるんでしょ。この場の全員がききたくてしようがないことじゃない？  
一体、ダンジョンの奥には何があるの？」

あけすけな物言いだが、それは確かに皆が聞きたいことだった。それが命を賭けるに値しないものならば……いや、トルネコがこれだけのメンバーを集めて大がかりな準備をしている時点で、それはないだろうが……顔には出さないが、皆、心の奥では一抹の不安を感じていた。

「某も聞きたいと思っていた。教えて欲しい。今こそ、話をするに絶好の機会ではないか」

「だが、まだだ。まだ言えねえ」

「ふざけないでよー！」

マーニヤの振り下ろされた拳で机が揺れた。もう、夕日はだいぶ沈みかけている。

「いつでも真面目なんじゃないの？ だったらもう少し真面目に答えてよー！」

「トルネコ殿」

気まぎれになった空気の中、ライアンは静かな口調で問いかけた。その声音にはもしかしたら労わりの気持ちさえこもっているかもしれない。

「そろそろ教えてくれてもいいのではないか？ ここにいる者は、今さら他人に秘密を

漏らしたりするような裏切り者でもない。なにせ、一度は互いに命を預けて戦った仲ではないか。それに、もう察しはついているだろう、我々の危機的な状況を。もうどの道、この探索に賭けるしかないのだ。賭けの前に、その内容を教えてくれてもいいではないか？」

やがて窓から差し込む夕陽の断末魔もゆつくりと消えてゆき、トルネコは鉄のように密度のありそうな真黒な肉塊と化した。

「明日だ」

腹の底から絞り出すようだった。

「明日の早朝、出発前に言おう。明日までにもう一度よく考えろ。それでも今回の探索に賭けたいと思う勇氣ある者は、ここにもう一度集まれ。今、俺から言えることはそれだけだ」

真つ黒になったトルネコは椅子から立ち上がると、玄関の方に歩いて行った。

「どこに行くのだ？」とライアン。

「明日の準備さをしに、またネネの店に行くのさ。なんせ、残っているのはあのワインだけなんだ」

トルネコが立ち去った後、残った者は特に何も言い交すことなく、それぞれ解散していった。クリフトとアリーナを除いては。

## 18. かつての仲間たち4

自分は一体、何をしているのだろうか？

棚の商品を卸しながらホフマンはふとそんなことを考えた。

数年前——退屈な田舎町の故郷、レイクナバを飛び出した。何かあてがあつたわけではない。こんな寂びれた田舎町でうつうつと一生を過ごすのが嫌になつたのだ。畑を必死で耕しながら、税金で持つていかれ、戦争で荒らされ、天候に見放されて苦しみ多く収穫少ない人生が見えたからだつた。

自分をもっと大きなことができる——いや、必ずでかいことをしてやろう、そうするまで絶対に故郷には帰らない。

最初は勇者に馬車を貸した。本当は一人で世界各地を旅行する予定だったが、折しもデスピサロのせいで魔物がいたるところに出没するようになっていた。だから、護衛の意味も兼ねて勇者たちにはただで馬車を貸した。

おかげで、かなり安全に旅することができた。

今でもホフマンが生涯の師と仰ぐミントスのヒルタン爺とは、このとき出会つた。

最初は馬車を勇者にあげてしまうのはとても惜しかったが、もうすでに自分には必要

のないものだったので、思い切つてあげた。後で爺から聞いた話だが、もしそこで勇者に馬車をあげなければ、弟子にせずに追い出すつもりだったと言う。

そういう訳で、そこでの修行の日々も、勇者に馬車をあげたのにも、後悔は全くなかつた。むしろ、今でもそれは良かったと思う。こうやって思い返すに、そこでヒルタン爺と暮らした日々が最も充実していたからだ。

ミントスはレイクナバ以上の田舎だったが、そこで退屈することはなかつた。商売上、都会に旅することもあつたが、気が付けば、ホフマンにはミントスはすでに第二の故郷となつていた。

ヒルタンには、商売以外のことも教えてもらつた。商売と直接関係なくても、ヒルタン爺が望むならやつた。送迎用の馬車馬の世話や、農地や庭の手入れもした。

だが、何事にも潮時というものがある。

ホフマンはヒルタン爺からよく聞かされていた。弟子の義務は師匠を超えることだと。

今まで学んだことを生かして、ホフマンは自分の町をつくろうと決心した。

そして、ミントスに別れを告げ、今度は一人で世界を巡る旅にでた。

しばらくあてどない旅を続けるホフマンだったが、ついに新天地とも呼べる場所を

見つけた。

砂漠の真ん中の小さなオアシス——彼はそれを敬愛する師匠の名前をとってヒルタンガルドと名付け、世界各地に散る移民たちの町にしようと思った。

幸い、勇者の宣伝とデスピサロによる世界的情勢不安で移民たちはすぐに集まった。

どこにでも、食いつめものやその土地で生きていけなくなった農民や町人がいるものだ。ホフマンにはそういった人々の気持ちがよく分かったし、移民たちも熱く理想を語るホフマンに魅かれていった。

早くも町としての形はある程度整ったのだが、それでも移民たちだけでできることに  
は限度がある。

そこで、ヒルタンガルドに出資する企業には税金を安くすると決めたところ、早速ある一つの会社が名乗りを上げた。

ネネ率いるトルネコ商会である。

別にネネのことを最初から信用していなかった訳ではない。むしろ逆だった。

出店契約をするときに訪れた印象では、人当たりもよく才気はつらつたる経営者と



いった感じで、町の人達も、あの人ならいい仲間になれそうだと期待していた。契約の際に連れて行った町の主だった者たちの印象も悪くなかった。

それに、ネネはあのトルネコの奥さんなのだし、彼女ならこの町を発展させる、大きな原動力になると思っていた。

ホフマン自身が、町を出ていくようになるまでは。

トルネコ商会のシンボルマークである、笑うトルネコの絵が町を見下ろしていた。

トルネコ商会の店が、町の中央の広場に出来てだいぶ経つ。もうすでに、トルネコ商会は完全に町の一部となっていた。その波及効果で様々な産業も活気づいた。

商会の壁に描かれたトルネコの笑顔は、町を優しく見守っているかのように、この頃ははまだ思えた。

ネネの出資のおかげで町の発展にも見通しが立ってきた頃、たまたま新しい農地を開墾していた農民から、地下に古代王朝の遺跡が埋もれていると報告があった。

ホフマンがその報告を聞いて駆け付けたときには、すでに人だかりが出来ていた。

「本当に見つかったのか？」

にわかには信じられない話だ。

「ええ、本当よ、ホフマン」

背後から、ネネが答えた。

「すごい……一体、どれくらい年代なんですか?」

「それは分からないわ。でも、もしかしたら考古学を覆すほどのものかも知れない。それ程古いつてことね」

「信じられない……」

ホフマンにはこの突然のあまりに幸運な出来事が夢か蜃気楼のように思えた。本当に遺跡が見つかったとなれば、観光地として莫大な収入を見込める。ホフマンの頭の中では、早くも『蜃気楼の幻都くオアシス周遊7泊8日の旅プラン』と記念ポストカードの構想がムクムクと湧き上がってきた。

「でも一つだけ問題があるの」

「問題?」

言われてようやく気がついた。町は発展したばかりで、この大きな遺跡の発掘・維持管理に回す人手がない。

だが、この問題をクリアしない限りホフマンが考えたことは全て蜃気楼の下へと逆戻りだ。それに、聞くところによると貴重な遺跡だろうから、風化する前に早く保護する必要がある。

「そこで、私から一つお願いがあるの。私たちに発掘させてもらえないかしら?」  
渡りに船とはよく言ったものだ。

「え、いいんですか? こつちも人手が足りてないし……やってもらえるなら助かります」

「いいのよ。発掘にかかる費用もこつちが出すわ。人手も集める」

「し、しかし……そんな費用、今は払えませんか?」

「費用は無利子で貸すということにしとくわ。後で返してくれたらいい」

「それはあまりにも……」

「ホフマン」

ネネは手を取って言った。

「私達は同じ町の仲間じゃない。一緒に町を発展させると誓った。この遺跡は貴重なものよ。放っておいたら誰の手に渡るか知れたもんじゃないわ」

次の一言で、ホフマンはその渡し船に乗った。

「あなたの夢は私の夢でもあるのよ。あなたは決して一人じゃないわ」

だが、ホフマンにとって一つだけ計算違いだったのは、この船の行先が地獄だということだった。

気がついたときにはもう手遅れになっていた。

あつと言う間に、ネネは古代遺跡を掘り出し、その中にカジノを作った。

砂漠の真ん中にある古代遺跡を利用したカジノ——宣伝効果は抜群だった。町の人だけでなく、遠方から観光客がやってくるまでになった。

そもそも、カジノは町を建設し始めた当初から禁止していた。治安が悪くなるし、町の住民が仕事より賭博に流れるようになるからだ。

だが、町の人々の中に、そんなことに頓着するような人間は少ない。なにせ、中には囚人もいるのだから、すぐに一部の人間を除いてカジノにのめり込んでいった。それに、ヒルタンガルドにはもともと娯楽が少なかったのだ。

ホフマンは抗議したが、それはすべて無視され、逆にネネは最後の一手、『愛と信用のゴールド銀行』をカジノの2階に作ってしまった。

ギャンブルと金貸しという最も相性のいい無限コンボに捕まった者は、一生をかけても背負いきれないほどの借金返済のため、ネネの奴隷として搾取され続けることとなる。

ホフマンは再三再四抗議し、契約違反を訴え続けたが、それに対しネネはのらりくらりと返答を洩るばかり——訴状を見ていないのでなんと、記憶にございませぬ、et  
c……

ホフマンはついに最後の手段である住民投票で雌雄を決しようとしたが、それこそまさにネネの待ち望んでいたことだった。

結局、トルネコ商会の有り余る金の力とカジノの魅力で、ネネの行為は容認されてしまう。

そしてこのことで町民ともそりが合わなくなったホフマンは、ほどなくして自らが作り上げた町を去ることとなった。

町を出るときに振り返って見た、商会の壁に描かれたトルネコの笑顔は、ホフマンを嘲笑っているかのように見えた。

もはや行くあてもないので、仕方なくレイクナバの実家に帰ったホフマンだったが、そこでもまたネネのトルネコ商会に苦しめられることになる。実家は地元商店街で小さな雑貨屋を営んでいたのだが、それもトルネコ商会の不当販売であえなく廃業へと追い込まれた。

これで、ホフマン一家に何も売れる物はなくなった。ただ一つ、ホフマン自身の労働力を除いては。

屈辱的敗北感をなんとか抑えながら、ホフマンはトルネコ商会でアルバイトをすることにした。日々のパンを得るための嘆かわしい金銭のために、人生を売り、心を犠牲に

した。

このとき初めて、ホフマンは時間でも癒せない傷があることを知った。時間は、傷を癒す代わりにホフマンの心の痛みの感覚の方を奪い去っていった。

今はもう、トルネコ商会のために働くゼンマイ仕掛けの奴隷でしかない。

急に色々なことを思い出して、ホフマンの過労で充血した眼が一瞬潤んだかにみえた。だが、涙は出ないだろう。そんな人間らしさは無味乾燥な長時間労働の日々の下に埋もれてしまったのだから。

「レジお願いします」

遠くから聞こえてくる他のバイトに呼び出されて、ホフマンは膝をガクガクさせながら、延々と商品棚が並ぶフロアを、レジへと駆けつけた。

早くも息が上がり始めたホフマンが目にしたのは、菓子パンを両腕いっぱい抱えたトルネコの姿だった。

固体のような闇の中、松明の明かりがポツポツと町を照らし出している。町の中央の広場は、祭り特有の賑わいで活気づいていた。

それにしても、人が多い——とライアンは思った。地面から湧き出てきたと思えるほ

どだ。「しかし、ブライ殿、クリフトとアリーナを放ってきてよかつたのだろうか……」

傍らを歩くブライに話しかける。ライアンは以前トルネコに歩くのが早いと言われたが、この人ごみの中なら、歩みも自然に遅くなるだろう。

「もう二人ともいい年じゃ。今さらワシが口うるさく言うほどのこともあるまい。なあに、ああ見えてまだまともなところもある。それに、姫を外に出す訳にはいかんじやろう?」

「ブライ殿がそこまで言うなら正直に告白しよう。最初、部屋に姫が入ってきた時は、某も逃げようと思ったぞ」

「いきなりアレを見れば、そりゃ誰でも逃げたくなるじやろうて。クリフトもあの状態では外に出す訳にはいかん」

「むしろ、二人ともああして家の中にいてくれた方が都合だと?」

「まあ、そういうことじゃな」

話している内に、祭りのメインイベント『収穫の踊り』が行われる舞台へと到着した。

「だから、今宵は二人のことは気にせず、この踊りを楽しむことにしようかの」

重圧からひと時の間だけ解放され、徐々にライアンが見た屈託のない笑顔——その視線

はすでに始まった踊りへと注がれており、松明に照らされたその横顔は、教会に飾つてある油絵より荘嚴に映つた。

「やはり、教会も不景気なのか？」

この祭りのときにあまりにそぐわない、たわいない世間話に、言いだしたライアンは自分でも笑いそうになった。しかし、上流階級の礼儀が何だというのだ？ ライアンは武骨な戦士として今日まで生きてきたのだ。

「不景気なんてもんじゃないわい。終わりじゃ。教会はもう終わりじゃよ。アンタの軍隊生活同様にな」

こういうときの返し方は十分心得ているらしい。もちろん、ブライとライアンの仲だからこそ、こうした皮肉めいたジョークも言えるのだが。

「もう某にはトルネコ殿の探索に賭けるしかない。ダーマで他の職も探したが、年齢制限のせいで応募することすらできなかつた」

「ワシから一つだけ言えることは、祭りの時はもつと楽しい話をするこじや。まあ、昔から無口な男じゃつたが、陰気ではなかつたはずじゃ。楽しめる状況では楽しまんと損だぞ。ほれ、あの踊っている町娘を見てみい。いいケツしとるじゃろうが！」

趣味が違うことは、このときは言わないでおいた。

舞台の上の町人は楽しそうに踊っている。それは、ライアンにはとても刹那的にみえ



た。世界滅亡寸前の最後の饗宴……それ程おおげさではないにしても、この夜が明けてしまえば、町はまた惨めな現実世界に引き戻されてしまうのだろう。

今、この夜だけ、きつとこの町は異世界と化したのだ。

町の人は、時間が経つのも忘れてそこに浸ればいい。自分にとって、そこにいくのはまだ早いだけの話だ。明日、自分は虐殺の道を、血みどろの舞台へ向けて歩きだす。そしてそこで栄光を得る。

それまで楽しむのはおあずけだ。

そう考えている内に、最後のステップが、伴奏の最後の音が、闇の中へ消え去っていった。もう終わりかと誰もが思ったところに、舞台のそでから二人の踊り子が出てきた。

マーニヤとミネアである。ミネアの本職は踊り子ではないが、一応一通りの踊りはできる。マーニヤと一緒に踊りを披露するぐらいには問題ない。

広場が静まり返ったところで、弦楽器と打楽器がアップテンポの曲を奏で始めた。二人はそれに合わせて激しいステップを踏む。

ライアンとブライも、姉妹の本気の本気など見たことなかった。ましてやレイクバナの住民にとって、姉妹は以前の有名人だし、心の醜さを知らない分、その登場を素直に

喜んだ。

人々の期待通り、姉妹の踊りは観衆を圧倒した。みんなその場でアストロンにでもかかったように目をくぎ付けにしている。

それには、ひとえに姉妹の魅力的な体型も関係していることだろうが、それでもこの町の歴史で語り継がれる程の出来栄であることは間違いない。人々に勇気と希望を与えたことなど、デスピサロ討伐を倒したとき以来だろう。

気が付けば、ブライもライアンも無言で姉妹の踊りに見入っていた。

ライアンはこの町の祭りなど初めて見るが、それでも今までの祭りの中で一番の出来だろうと思った。

町の人々にとっては願ってもないグランドファイナーレ、ライアンにしても、何か心の中为重りが取れたように感じた。それに―体も軽くなつたように感じる。

隣に座っているブライも小踊りしそうな位の歓喜の表情だ。

ついに曲が終わった。

だが、皆はそれを望んでいなかった。せめてもう一曲欲しい。この昂ぶつた心を発散させるにふさわしい舞踏が。皆がそう望んだとき、舞台のそこからまたしても意外な人物が現れた。

買い物帰りのトルネコだ。

観衆はあまりに意外な組み合わせにまたもや静まり返った。

マーニヤとミネアもあまりの事態に思わず苦笑を浮かべている。かつてモンバーバラで踊り子をしていたときも、これ程似合わない組み合わせはなかった。しかも、トルネコはただの商人なのだ。まともな踊りができるのだろうか？——観衆の心配もよそに、トルネコが手を挙げると音楽が鳴り始めた。いぶかしみながらも、前奏に合わせて姉妹が軽いステップを踏み出す。と同時に、トルネコは服を脱ぎ棄てステテコパンツ一丁の姿になると、何とも奇妙なステテコダンスを踊り始めた。

しかも、これが一見滅茶苦茶に手足を動かしているようでいて、音楽やリズムと合っているのだ。

姉妹の華麗なダンスと、中年メタボ商人による奇妙なダンス。

このダンスは観衆にある一つの感覚をもたらした。

トルネコに合わせて踊っていると、自分たちもマーニヤやミネアのような、華麗なダンスをしているような気になってくる。

やがて、すぐにその場の全員が——つられて踊ってしまった！

「いい踊りだったぜ、おっさん。俺もつられて踊りそうになった」

仕事から解放されたホフマンがタバコを吸いながら言った。

「じゃあ、なんで踊らなかつたんだよ。舞台の上からアンタの姿もバツチリ見えてたぜ。今日ぐらい羽目を外しても良かったんじゃないやねえのか？ 来年は祭りがあるかどうかも分からんぜ」

「もう、他人に踊らされるのはたくさんだつたんだよ」

ホフマンは心底疲れた様子だった。まだタバコを持つ手が小刻みに震えている。もしかしたら、一生治らないかもしれない。それに比べれば、トルネコの方が、外見上はまだ健康に見えるくらいだ。特に今日は、踊りで心の中のヘドロが一時的にしろ失くなって、かつての覇気も何割かは取り戻していた。

「まあいい。俺の渾身の踊りにつられなかつたの残念だが、今日はその話をしに来た訳じゃねえからな。例のブツはもう届いてるんだろうな？」

「ああ、バツチリだ」

そう言うのと中央のテーブルに強化ハンドガン、ショットガン、アサルトライフル、グレネードランチャー、ロケットランチャーが無造作に放り出された。

「まず、銃器・弾薬。けっこう量があるから間違いないか確認してくれ」

そう言われたトルネコは、久し振りに逢瀬を果した愛人に対するような手つきで、その中の一つの銃を手に取り、脂ぎった手で愛撫し始めた。

あの銃だけにはなりたくないものだ——そう思ったとき、ホフマンは気付いた。きつ

とトルネコにはこの銃以外に信用できるものなど無いのだろう、と。

哀れに思ったが、その感情は同時に自分にも向けられていた。

ホフマンが信じているのは、今となつては金だけだった。でなければ、こんな運び屋の仕事などしない。たとえ運び屋として破格の信用を得るようになり、直接中身に手を触れられるような身分になつたとしても——全ては金のためだ。最初に神は言った。お金あれ、と。それで何が悪い？

「ああ、ちゃんと揃つてるぜ」

「じゃあ、後はこれだけだ」

早く仕事を終わらせよう。地獄の労働の後に見るべきものは、少なくともこの商人モドキの豚ではないはずだ。

トルネコの目の前に、今度は白い粉末が詰まつた袋が放り出された。

「こんな大量の砂糖、どんな料理に使う気だよ」

もちろん、ホフマンは袋の中身が砂糖ではなくマリファナであることなど百も承知だ。

「へへ……今回は甘党の神官を連れていくんでね。必需品なんだよ」

「そいつに今度会つたら、酒と煙草と砂糖は程々に、て言つといてくれ」

「そんな物わがりのいい奴ならこんな大量に用意しなくて良かったんだがな」

言っても分からないのはお前の方だよ——ホフマンは暗にトルネコの糖尿病もたしなめようとして言ったのだが、本人は全く気が付く様子がない。それとももう気付いているのか？ ただ単に表情に出していないだけなのか。

とにかく、これでシレンから頼まれた荷物は全てトルネコの手に渡り、ホフマンの仕事は無事に終了した。

この後、ホフマンはしばし短い睡眠を挟んでから、また今日とほぼ同じ日常を迎えることになるだろう。

「期待してな。次にダンジョンから戻ってきたら大金持ちになっているだろうからな。そしたら、アンタにも特別ボーナスだ」

「そいつは楽しみだ。期待して待つてるぜ」

ホフマンが何かに期待することなどもうない。ただ、そういう言葉を知っているだけの話だ。

荷物ではちきれそうなカバンを背負ったトルネコを見送ると、短くなつたタバコを消して新しいタバコに火をつけた。

こうやって、仕事が全部終わった後、誰に気を使うことなく吸うタバコが一番うまい。その煙が肺を満たしていく時、心の中も満たされてゆくようだ。

——ひよつとしたらほどほどにしないといけないのは自分の方かもしれない——

トルネコが立ち去った空間を眺めながら、ホフマンはふとそう思った。

## 19. かつての仲間たち5

祭りが終わって1時間ほどたった頃だと思う。外では、まだまだ町の人たちによる馬鹿踊りが続いている最中、父さんは家に帰って来た。暗くなつて、マトモな人間なんていなくなったこの家に。でも、きつと祭りから帰って来たんじゃないだろう、てことは直感的に分かつてた。祭りから帰って来たにしては、すごい大きくなつたカバンを背負っていたから。きつと、明日のダンジョン探索の準備をしていたんだと思う。なんたつて、今回は『テツカイ山』みたいだからね。だけど、その『山』の正体を知っているのは、まだこの時は父さん一人きりだった。

僕は、暇つぶしに持ち歩いてきたPSPでモンスターハンターをしていた。もちろん、一階の部屋で。2階には——思い出したくもないけど——例の神官と筋肉姫がいるから、容易に近づぐことはできない。だいぶ静かになつたから、きつと二人とも疲れて寝ているんだと思うけど、それでも起こしたら後々めんどうだ。

父さんが帰って来たのは、僕がそんなことを考えながら、ゲリヨスを狩りに出かけたときだった。いつものように、互いに「ただいま」も「お帰り」も何の挨拶も会話も交わすことなく通り過ぎるだけだと思つたけど、このときは違つた。



「お前に渡しておきたいものがある」

こんなときに父さんが、わざわざこうやって渡す物だから、クリスマスケーキやその類のものでないことは分かっていった。

だから、机の上に六連発リボルバーを放りだされても、あまり驚かなかった。

ただ、リボルバーの銃身は黒く焦げていた。きつと、前の探索のときに持つていった唯一残ったのが、この焦げたりリボルバーだったのだろう。

僕はPSPをわきに置くと、その銃身に手を伸ばした。

「ちよつと黒くなつちまつたが、まだ十分使える。機能に支障はない」

銃については、初めて触るし、僕にはよく分からなかったが、父さんがそういうのだから特に問題はないのだろう。

「まあ、モンスター使いのお前には、あまり必要のないものかもしれないねえが、万が一ということもある。お前はまだ剣をうまく使えない。使い方は知っているな？」

僕は銃を手にとると、父さんに銃口を向けて引き金を引くマネをした。（もちろん、この時はまだ弾は入っていない）

「ほう、よく分かっているじゃねえか」

「こんなのちよろいよ。」

「だが、惜しいな。撃鉄が上がったままだけ」

父さんにはにつきり微笑んでそう言い残すと、二階の自分の部屋へ帰っていった。

その頃、クリフトは扉の外にいる異形の姫に、夢の中でも怯えていた。

何もすることがなく、クリフトはついついうたた寝をしてしまったのだ……

ちょうど、教会が免罪符を売り出して3年ほど経った頃だった。クリフトはまたしても夜中のバーで泥酔するまで酒を飲んでた。その様子は、酒は命の根源とでも言いたいようであつたが、迎えに行ったブライからすれば、このまま墓地にでも埋めてやりたい気分だった。

いくら忍耐強いブライでも、こんなことが毎晩のように続けば、そう思うようになるのも無理はなかつた。

「クリフトはどこに行きよつた？」

「多分……また酒屋にでも行つてるんじゃないですか。一応止めたのですが……」

司祭は朝の仕事の一つである、ロウソクに火を灯しながら、申し訳なさそうにブライに言った。

「何か彼に用でも？」

「大事な要件がある。今の時間なら大丈夫だと思つたんじゃないが。今度は朝から堂々と飲

みに行くとは——それ相応の罰を与えねばならんな」

「そのことなのですが——」

司祭は教会のロウソクを、一旦わきに置いた。

「あまり彼に厳しく当たるのは止めて頂けませんか。別に彼の行為を擁護している訳ではありませんが」

「理由を聞こうかの」

「彼が酒を飲むのは……その、罪悪感からなのです」

教会のステンドグラスを通り抜けた朝日は、信者たちを様々な色に照らし出していた。一時期から見ると、朝の参拝客も随分と減った。

「朝から仕事をさぼって酒を飲むことには、罪悪感を感じないのかの?」

「それはもつともですが、彼にとってはこの教会で免罪符を売るといふ仕事に……これ以上耐えられないのです」

「つまり」

杖を構えなおして言う。

「免罪符を売るといふ仕事の苦しみから逃れるために、酒に逃げています」

「ええ。もちろん、それが到底許されないことは分かっています。しかし、彼の苦しみは私にも分かりすぎる程なのです。せめて他の仕事を任せるとか、そういうふうには出来

ないものでしょうか？」

「出来んな」

即答だった。

「なにせ、免罪符を考えたのはクリフト本人だからの」

町に出てみると、幸いにもすぐにクリフトの姿を見つけてくれた。

路上に犬みたいに寝転がっていれば、誰でも発見できる。恐らく、金がなくなつて酔つたまま店から追い出されたに違いない。

ボロボロになつた法衣をまとつたクリフトだったが、その腹には大切そうに酒瓶を抱えている。砂漠で遭難したものが、最後の水を必死で守っているかのようだった。

「おい、クリフト」

ちらつと顔を上げてブライの顔を見ると、ニタリと笑みを浮かべた。

「よお。ツケ払ってくれよ。んで、俺はまだまだ飲める、て言つてやつてくれよ」

「さあ、早く立つんじゃ」

やれやれ。こいつは面倒なことになった、とブライは思った。今日は大事な話があるからやつてきたのに、これではまず泥酔神官を家まで運びこんで酔いが覚めるのを待つしかないではないか。

「肩を貸してやろう。とりあえず、家でしばらく頭を冷やしてろ」  
「肩より金を貸して欲しいね」

軽口を無視して、ブライは老体に鞭打ってクリフトの体を持ち上げた。だが、肝心の足は中々帰ろうとする家の方向に進まない。

「おい、クリフト、そつちは酒場じゃ！　いいか、家に帰るんじや。今日は大事な話がある。家に戻るんじや！」

「嫌だ！　俺はまだまだ飲めるんだぜ？　それに何が大事な話だ。どうせカビ臭え説教話だろ」

「何をいうか。本当に大事な話じゃ！」

「うるせえ！　とにかく俺はまだ飲めるんだ。だから酒場に行くんだ」

クリフトの肩に回した腕が、ブライを強靱な力で締め付ける。そのまま無理やり酒場の方へと引つ張つていこうとするので、ブライの首はおかしな角度に曲がってしまう。

「とにかく、酒場に行くならその腕を放せ！　ワシはお前のツケまで払う気はないぞ」

「は？　何シケたこと言つてんだ。俺と一緒に飲み明かそうぜ。さあ、楽しいカクテルパーティーの始まりだ！」

「もう朝じゃ！　今から飲み明かしてどうするんじや！」

「いいから来いって。とてもとても楽しいよ」

「行かん！ どうせツケを払わせようって魂胆じやろう」

「いいから来いって言ってるだろ。付き合い悪いな」

「とにかく、家に戻れ！」

「嫌だ。さあ、酒場に行こうぜ」

「断る！」

「来い！」

「行かん！」

「来い！」

ブライがキレることは、特に歳をとってからは滅多に少なくなつたが、それでもこの状況だけは耐え難かつた。首を絞めつけているこの腕は、もはやブライの力ではどうしようもなかつたが、酔つ払いの不安定な足元をすくうくらいのことはできる。

足を取られたクリフトは、雲から落ちてゆく酒神のごとく、もんどりうって地面に転倒した。

「へへ……後一杯だけ、いいだろ？」

大事そうに抱えていた酒瓶（この時初めてそれが空だと知った）をちらつかせながら、全く悪びれるそぶりもない。

「いいか」

今や倒れたまま壁にもたれかかるクリフトより身長が高くなったブライは、背を曲げ、あごひげを突き出して顔を近づけて言った。

「金が欲しければ免罪符を売って自分で稼ぐんじや。それ以上ワシから言うことはない」

そして乱された法衣の裾を正しながら、杖を傾けて付け加えた。

「家に帰るか？　なら大歓迎だがな」

そう言ったブライの頬を突然、紙の束が襲った。

「くれてやるよ！　こんな紙切れ」

クリフトが投げつけた紙切れには聖典の一句と教会の捺印がなされている——免罪符だった。

「それでカマのケツでも拭いてやりな」

「いいか、クリフト、よく聞くんじや」

ブライはしゃがみ込むと飛び散った札の一枚を取り上げ、目の前に突きつけながら言った。

「確かに、免罪符は忌まわしいものじや。教会としてもこんなものに頼りたくなかった」

「だったらどうしてこんなもの売ってんだよ。俺はこんなこと望んじやいなかった……今でもそうだ」

「でもしようがない。信仰心など消えうせたこの世界で教会が生き残ろうと思えば、これしかない。お前もそう思つて言いだしたんじやる?」

「そうじゃない。たまたま思いついたから会議でそういつたら、アンタらおえら方が勝手に採用して話を進めて……気がついたら免罪符販売部長にされていた」

「もう割り切るんじや、クリフト」

「割り切つてやるよ。酒をくれたらな」

「汚く稼いできれいに使う。金はそういうもんじや」

「きれいに使うつて? 笑わせるのもいい加減にしろよ。全部でめえら腐つた神官の生活費だろうが。そんなことに自分を犠牲にする気はねえからな」

「生活費で何が悪い? 少なくとも、誰かさんの酒代よりは遥かにましな使い道だと思うが」

「うるせえよ。教会がこんなくだらないところだとは思わなかつたぜ。それでも、ウジ虫を生かしておくぐらいなら飲んだほうがマシだ」

「だが、お前はいつまでこんな生活を続ける気なのじや。成程、神官の中には腐つた性根のやつもいる。そのことは認めよう。しかし、今のお前はそれ以下じや。他人のことを



貶す前に、神官なら神の与えた試練に耐えてみよ」

「は？ 何が神だつて？ 笑わせんなよ。俺はこんな試練、望んだ覚えはこれっぽっちもありませんが？」

「神は決して乗り越えられない試練を……」

「ガタガタうつせえんだよ！ そんなじゃあ、その神つてやつを今ここに連れて来なよ。ご自慢のゲロビームで歓迎してやるからよ」

今のクリフトなら本当にやりかねない。クリフトが飲み込んだ様々なアルコール類と胃液の混ざりあつた混合酒のシャワーが描く放物線は、正に天国への虹の架け橋というわけだ。

「これ以上話あつても無駄なようじゃな」

「ああ、そうだな。説教したいならご愁傷さま。酔いが覚めたんで、別の酒場いつてくるからよ」

「酔いがさめた？ それならちようどいい。ひとつだけ最後に言っておく」

「なんだよ。酒をやめるっていうのは無しだぜ」

「1週間後、アリーナ姫と面会することが決まった。まあ、その酒臭いまま姫に会いたいというのなら、無理に止めはせんがの」

「おい、クリフト」とサントハイム城の窓から叫ぶアリーナを見て、クリフトは本当に一週間前から酒を断って良かったと思つた。だが、それも王の間でアリーナと直接会うまでの短い時間に過ぎなかつたのだが……

「クリフト、ちゃんと僕のこと覚えていてくれた？」

声と顔には確かに見覚えがあつた。だが、体つきは勇者と旅したときと比べて異常なまでに筋肉が発達していたし——何より身長が2メートルもなかつたはずだ。

そこにクリフトが会うのを楽しみにしてきた可憐な少女の面影はない。

筋肉の塊にアリーナの顔だけとりつけたような、そんなフランケンシュタインの化物にしか見えなかつた。

「え？ あ……アリーナ姫……随分と……その、お元気なようで」

クリフトはどうかそれだけの言葉をひねり出した。

「はあく、クリフトつてば、相変わらず辛気臭いなあ……よおし！ それじゃあ、ハグしてあげるよ。そしたらすぐに元気になるよ」

「え？ ちよ、待つて……ぐうっ……!!」

それはクリフトの認識では、ハグというよりヘッドロックに近いものだったが、本人はじやれているつもりなのだろう。しかし、クリフトの体は限界だつた。

さつき、首からゴリツという変な音が聞こえた。そして感触も、見た目と変わらぬ鍛え抜かれた筋肉そのものだった。

山のように盛り上がった筋肉のついた腕が、大蛇のごとくクリフトの首を絞めあげているせいで、さつきから呼吸ができずにいる。クリフトはなんとか抜け出そうと、自らの持てる限りの力で手足をばたつかせ、必死に脱出を図るが——ダメだ！抜け出せない！

「あ、クリフト、元氣出てきたみたいだね！」

——死にかけてるんだよ！ いい加減はなせ、筋肉ダルマ！

「ハツハツハ、やはり若者は元氣なのが一番ですな」

ブライが当事者以外にとっては微笑ましい光景に思わず笑いだした。

「ああ、私のアリーナもちょうど相手がいなくて困っておったところだ。二人とも楽しんで何よりだ。ハツハツハ！」

国王がそれに応えて笑う。

——おい、笑ってないで、止める！ 死ぬ前に早くこいつを止めてくれ！ それとブライ、ワザと言ってるだろ!!

「しかし」クリフトの酸素欠乏症を無視して、国王が急に真剣な表情で何やら話した。

「ふたりは本当にお似合いのカップルだ。周辺の国の王子はどうもアリーナの良さが分からんようなのだ。この際、昔から共に育ち、良き理解者でもあるクリフトにもらつてもらおうと思つてな。今日はその話もあつてお主らと呼んだという訳なのだよ」

——理解不能、理解不能！

「おお、そうですか、陛下。ちようどワシもクリフトに大臣の座を譲ろうと思つておつたところですよ。こういうのはどうでしょう。大臣に就任すると同時に挙式、というのは」

——他人のくせに保護者気どりか?!

「確かに名案だ。与も結婚する以上はクリフトにはゆくゆくは国王になつて欲しいと思つておる。そのためにも、大臣になつて経験を積んでおくことは、この国にも二人の将来にとつても、有益だ」

「それでは、今日この場では『婚約』という形にしておいて、また細かいことは後日じっくり話し合つてみましょう」

「まさに与が言いたいことをお主が言ってくれた」

……………

すでにクリフトの体からは意識の光が消え去ろうとしており、二人の会話も、鼓膜を震わせるだけで何も聞こえてはいなかった。

「え、ひよつとしてクリフトと結婚?!」

突然の（アリーナにとつて）うれしい話に、思わず腕の締め付けもゆるんだ。

「ああ、そうだ。そしてゆくゆくは国王になってもらう。だから、お前もクリフトをしつかりと支えてやってくれ」

「やったー！お父さん、大好き！」

城の広間の一角では、異常な筋肉以外は普通の光景が繰り広げられていた。そして、片方ではやつとその筋肉から解放された若い神官が、膝についてゼーゼー、ヒューヒュー、息を荒げていた。

——空気ウマー

久々に鼻腔を満たす酸素の感触に、クリフトは一瞬そう思った。だが、次に考えたのは

——すぐにここから逃げ出さなくては……

「ああ、それはそうと、ブライ」「何ででしょうか？」

「クリフトに大臣の座を譲つてからも、しばらくの間は参謀長として与のそばにいてくれぬか。正直、お主程の人間をそうやすやすと手放したくはないのだ」

——ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア……

何とか呼吸を整えつつ、今までにない速さで城門への最短ルートを検索（レミラーマ）

し、逃げる算段を巡らせる。

「願ってもないことです、陛下。ワシも、クリフトが国王になるまでは心配なので、この目でしっかりと見届けたいのです。そして立派な王となった暁には……どこかに隠居して、二人で湖に船でも浮かべて極上の酒を楽しむのですよ!」

「あと将棋もだ。1045勝1046敗で負け越しておるからな」

「将棋といえば、トルネコもかなりの腕前と聞きますぞ。彼も一度は招待して、是非ともその棋力を見て頂きたい」

「ブライがそう言うのなら相当の腕なのだろう。ああ、早く一局指してみたくはないか」

「ははは……お気の早い。あとは、世界樹が見渡せる小高い丘の土地でも買って、好きな花を育てるのもいいですな」

「もちろん、天気の良い日には気球も用意して、晴れた日には――」

「ちよつとお、それよりボクたちの結婚式についても考えてよね。今日はそのためにクリフトにも来てもらったんだからあ」

「すまんすまん、つい熱が入ってしまったようだな。そう言えばクリフトは……」

国王、アリーナ、ブライがクリフトがいた場所に視線を移したときには、すでにそこに人影はなく、広間の扉はいつの間にか開け放たれていた。

すぐにアリーナが追いかけてようと廊下に出たが、そこには窓から差し込む夕日で、長く伸びた影があつと言う間に遠ざかってゆくのが見えただけだった。

「ぜえ、ぜえ、ぜえ……」

元々、武闘派ではなかつたが、普段ならこの程度の走りでもここまで息が荒くなることはない。それも、さっきの「ハグ」のダメージが回復し切っていないせいだろう。

「ク・リ・フ・ト」

化け物（少なくともクリフトからすれば）の声が自分の名前を呼んでいる。窓の外に見える夕日も今のような状況でなければ、もつと違ったものに見えたのだろう。ガクガク震える膝に鞭打って足を動かすと、次の曲がり角を右に曲がった。本当は直進した方が近かつたのだが、このままではすぐに追いつかれてしまう。どこかに隠れながら体力が回復するのを待ち、少しづつ城門に近づいて行かなくては……

「クリフト、どこに行つたの？ いい歳してかくれんぼなんて」

逃げ入つた部屋の内側から、扉に耳を当てる。

「クリフト……！ もう、どこに行つたんだろ」

カツ、カツ、カツ……アリーナの重量を感じさせる靴音が響く。扉の下のわずかな隙間から足がつくる影が見える。

カツ、カツ、カツ……

ふうく、どうやら通り過ぎたようだ。

もう少しアリーナが向こうに行き去るのを待つてから、さっきの曲がり角で最短距離を爆走しよう。今回は十分逃げ切れるだけの余裕があるはずだ。とにかく、0.1秒でも早く城を抜け出さなくてはならない。城門が閉じられる時間は刻一刻と迫って来ているのだから。

それにしても……ブライといい、国王といい、最終的に面倒なことは全部クリフトに押し付けて当の本人たちはハッピーリタイアするつもりらしい。

——冗談じゃない。なぜ俺がやつらのスケープゴートにされなきゃならんのだ。

もし、国王やブライの言ったとおりになれば、この国（負債5兆ゴールド付き）とアリーナ（筋肉山盛り）はクリフトのものとなる。昼間は仕事に追われ、夜はアリーナの熱い抱擁、もとい絞め技、関節技の実験台とされる日々が続くのだ。それも、自分が死ぬか、新たな犠牲者を見つけるまでは。

クリフトは床の一点のシミを見つめながら、生睡を飲んだ。何としても、今ここで逃げ切らなければならぬ……もうこれ以上荷物を背負わされてたまるか。

完全に足音が消えたことを確認すると、クリフトは勇気を振り絞って、ゆつくりとドアを押し開けた。



よし、これでは城門まで逃げ切るだけだ。

そう思つてドアをそつと閉めたとき、ドアの死角になつていた場所に人影が映つた。それは、明らかに筋骨隆々としており、顔だけとつてつけた仮面のように少女のものだった。

「あは、やつぱりここにいたんだね」

「うあーっ！」

クリフトは閉めたばかりのドアを、今度はアリーナの方へぶつけるようにして思いっきり開け放つた。しかし、アリーナの拳はドアを薄紙のごとく貫通し、クリフトのみぞおちへ（ドアで視界が遮られていたにも関わらずだ）吸い込まれるようにして命中した。

その瞬間は、クリフトは痛みを感じなかった。だが、次に周りの世界がボミオスにかかったようにスローモーションに見え——同時に吹き上がった体が廊下の天井にぶつかり、3 m程背中をこすりながら進み——今度はそのまま地面へ落下し——回転しながら2、3回バウンドして——最後は壁に背中をぶつけて止まった。

「グガバツァー！ ガバア……ツァ……ガハッ！」

遅れて全身の筋肉が自ら受けた苦痛を報告してきた。

クリフトの脳が報告書の処理に忙殺されている間、アリーナは蝶つがいを外れて昆虫

の羽根のように見えるドアの残骸を腕から外している真つ最中だった。

「さあ、もう年貢の納め時だよ」

一歩ずつノシノシと近づいてくる。だが、クリフトは諦めない。歯を喰いしぼるとそのまま走りだしたのだ。

「全くもう、往生際が悪いんだから」

もうほとんど沈みかけた夕陽に照らされながら、異形の姫はそう呟いた。

「ゼーゼー、ヒューヒュー……」

さつきから5分と経っていないにもかかわらず、すでにクリフトの呼吸は肺が破裂しそうな程に激しくなっていた。

石造りの窓の外を見ると、もうわずかな光が差し込むだけで、空には白い月が浮かび上がっている。きっと目の前に広がる城下町では仕事から、遊びから、学校から帰って来た人たちが夕飯の前のお祈りをしているのだろう。だが、たった一人の切実な（まさに一生のお願いだ）、まことに切実な祈りは、無残にも無視され、もうすぐ異形の姫の手に落ちようとしている。

……!? 物音がした。だが、大丈夫だ。今はすでに廊下に飾つてある騎士をかたどった鎧の中にいる。

「あつれく、おかしいなあ……確かこつちに行つたはずなんだけどな。そんなに遠くに  
行けるわけないし」

鎧の隙間から見える。頼む……アツチに行つてくれ！必死に祈るクリフトの耳には、  
自らの心音と呼吸音だけが聞こえていたが、それすらもアリーナに聞かれてしまうよう  
な気がして余計に怖くなり、その恐怖がさらに呼吸と心拍を乱していった。

——神よ！もしおられるのなら、我を無事にここから逃がしたまえ！

「ん〜どつちに行つたんだろ？」

——神様！……ここで私の願いを聞き入れてくれるのならばもう免罪符売りませんから

……

「こつちかな〜？」

と言つてクリフトの鎧の方へ一歩踏み出す。

——ああ、神様、神様！ 神様、神様!! このまま通りすぎる！

「あ、ひよつとして、またさつきみたいにどこかの部屋に隠れているのかも。一回戻つて  
調べてみよ」

アリーナはすぐに踵を返してまた元来た通路を走つて行つた。

一瞬、ひやりとしたがこれでしばらくは戻つてこない。といつて。ここにずっと隠れ  
ていてもすぐに見つかつてしまうだろう。幸い、アリーナはあらぬクリフトの幻影を求

めて後戻りしている。たとえ気づいたとしても追いつかれるまでに時間はかかるはずだ。

クリフトは物音がしないように慎重に鎧を内側から開けて通路にでた。

とそのとき――

カーン……カーン、カーン、カーン……

どうやら足が鎧のひざ当てに引つかかって外れたみたいだった。不気味なくらい静かな中、廊下中に金属音がキンキンと反響している……

しばらくたつても反応がないところから、アリーナはすでに音がしない程遠くへ行つたのだろうか。クリフトはふと窓の外に広がる城下町をチラリと見やつた――ようやくあそこへ帰れる……おっと、もたついてはいられない、あと少しだ――

そう思つて一歩踏み出したとき――

「やくつぱりそこにいたんだね」

聞き覚えのある声に背すじが震える間もあればこそ、アリーナが背後の武器庫の壁をブチ破つてクリフトに向かって突進してきた。当然、不意を打たれ満身創痕のクリフトにかわす術はなく、そのまま二人は窓枠もブチ抜いて、城内中庭へと落下していった。

——ここは、どこだ？ 暗くて、冷たい。それに……息も苦しい！ 空気は？ 空気はどこだ!?

そう思ったクリフトは地球上の貴重な資源を求めてまたもや手足をばたつかせた。そのとき、手首を誰かがガツシリと掴んで引き揚げた。

——空気ウマー

クリフトを池から引きずりあげたのは紛れもなく、あの異形のアリーナ姫だった。それだけは朦朧とする意識のなかでもハッキリと分かった。左手の手首を掴んで、片手だけでクリフトの体を宙へ持ち上げている。

「やっとなら捕まえた」

クリフトにはもう逃げる体力は完全になくなっていた。だが、MPならまだ残っている。やるか？ 殺人魔法（ザキ）を？ だが、結末はあつげなくやつてきた。アリーナはそのまま手を放し、クリフトはどきりと芝生の上に落ちた。

「それじゃ、今度はボクが逃げる番だね。ちゃんと10秒数えてから追いかけるんだよ」  
そう言うと、アリーナはクリフトを残し、城内へ戻っていった。

10秒後、クリフトはすでに陽が落ちて真っ暗になった城下町を、痛みが残る体に鞭

打ちながら全力疾走していた。

そこから先の転落は早かった。

まず、面会の日の翌日に、クリフトはカジノのそばで泥酔して倒れているところをブライに発見された。

しばらくの間、クリフトの唯一の慰みは酒しかなかったが、そこにやがて麻薬が加わるようになったのは何も驚くべきことではない。

最初は免罪符を売る罪悪感から逃れるためだったが、程なくして麻薬を買うために免罪符を売るようになっていった。

あの日以降も、クリフトをアリーナに会わせようという、無駄な努力は続いた。

マヒヤドでクリフトを凍らせて運んだりもした。

だが、氷が融けてアリーナと会った瞬間にパルプンテを連発、空からは獅子座流星群が雨あられと降り注ぎ北極海の氷が消滅し住処を追われた北極グマの難民がイムルに流入し山は動き魔人が復活してムーンウォークを披露したと思っただらそれは幻で住民はメタルスライムに姿を変えて凍りついたかと思うと大きなドラゴンに姿を変えて炎を吐きながら住処を求めてデモ行進を行ったが突如として光の竜が現れ全員を連れ去

りついにサントハイム中が霧に包まれ地面が揺れて大混乱に陥り、ブライト国王はその後片付けのために新たに500兆ゴールドの赤字国債を発行し、事態はようやく收拾したのだった。

なんということだろう。夢の中にまで出てくるとは。

結局、クリフトは睡眠を何時間か取ったものの、悪夢で全く疲れはとれなかった。

早朝の霧の中、昨日と同じ面々が祭り明けの誰もいない広場に集まっていた。

ようやくアリーナの恐怖から解放された神官はふらつく足をなんとか踏ん張って広場に駆け付けた。

「やつほー」

この声は……いや、そんな訳がない。姫は帰ったはずだ。それにいくらなんでも一国の姫なんだぞ。ダンジョンにまでついて来るはずがない。そうだ、しっかりしろ、クリフト。よく寝てなくて疲れてるから、こんな幻聴が聞こえるんだ。気をしっかり持て、まだ冒険は始まったばかりだぜ。

「ああ、クリフト」

トルネコがこの世で最もみたくないものの一つである、アリーナ姫を指して言う。

「こいつも一緒に連れていくことになった。戦力になるしな。一応止めたんだが、お前  
のこと心配だからどうしても、てな」

これが悪夢だったらまだどんなにマシだろうか。だが、残念ながら目の前の筋肉の塊  
は、クリフトの徹夜明けで充血した目と麻薬に朦朧とした脳であつても、それが紛れも  
なく現実だと思ひ知らせるに十分な実在感を備えていた。

「これで全員そろつたわね」

マーニヤが催促も兼ねてポツリと言つた。もちろん、ダンジョンの秘密のことであ  
る。これ以上待ち切れるものは誰もいなかった。

「もう、ここまで来ればどちらも後には引けまい。トルネコ殿も我らも。そろそろ教え  
てくれぬか」

クリフトがまたもやアリーナのハグによる酸素欠乏症にあえいでいる中、皆の眼はト  
ルネコの口髭へと注がれていた。

「分かつた。なあに、大したものじゃない。油田があるのさ、ダンジョンの奥には。それ  
も馬鹿デカイやつがな」

それを聞いた途端、皆の眼がそれぞれにとつて都合のいい取り分で描かれたバラ色の  
未来を見た。もはや分け合うことは完全に頭の中になかつた。

ダンジョンから戻つたら、ライアンは山の別荘で悠々自適の生活をし、町の商店街は



復活し、教会は立ち直り、姉妹は元の豪華な生活を送り——トルネコはネネと決着をつけ新しい人生を歩むのだろうか。

旅の終着駅がどのようなになるかは、まだ誰も知らない。

ただ一つ明らかなのは、そこへ到る道ははずれにしろ血みどろだということだ。

「皆さん、到着したようね」

朝霧の中から現れたのは、黒紫の衣装——三角帽にマントとローブという典型的な魔法使いの装い——に身を包んだ太った中年女性だった。

「よお、レミ、遅かったじゃねえか。頼んだ通り、早速ダンジョンの奥に送ってくれ」

「何が遅かったよ。時間は、確か朝日が昇る前でしょ。東の方はちよつと明るいけど、まだ太陽なんて上ってないじゃない。ダンジョンに潜っていたせいで、時差ボケしたんじゃないの」

「そうかもしれないねえな。それより、ちゃんと出来るんだろうな、8人全員を一度にダンジョン奥地に送り込むなんてよ」

「送り込むことはそんなに難しくもない。ちよつと骨が折れるけど、いつも通りのバシルーラ（の強化版）で何とかできる」

「その言い方だと何か不都合があるようだな」

全員が不安を隠しきれないでいた。もしかしたら、冒険の最初でつまづくかもしれないな

いなのだから、当然の不安だった。

「ダンジョンの50階に送り込むのは問題ないけど……あんた達、強さには自信ある？」

「あるに決まってるじゃねえか。デスピサロを倒したメンバーだぜ」

「それなら問題ないわね。実はね、フロア内にランダムに送り込まれちゃうの」

「というと」

「そう、もしかしたら、全員が孤立してしまう可能性がある。もちろん、ランダムだから逆もありうるけど……それでも、いくらあんたらでも——50階で孤立しても大丈夫なの？ それだけ念を押ししておきたかった」

全員が一度に同じことを思った。大丈夫だ、と。むしろ、金のためなら地獄の底から死体を掘り起こすのも厭わない連中なのだから。

太陽が地平線から完全にその頭を出したとき、朝霧の晴れた広場には仕事を終えたレミの姿しか見えなかった。

## 20. ダンジョン50階層にて1

レミの言った通り、トルネコ達はダンジョンの50階へと、別々に飛ばされていた。

「よお、ライアン。またアンタと一緒にか」

「そのようだな。正直安心したぞ。流石にレベルが低いうちの50階単独は厳しいものがあるからな」

「他のやつらはどこに行つたんだろうな」

たぶん、ポポロのことだけが心配でこのような柄にもないことを口走つたのだとライアンは思った。他のメンバーは全員、デスピサロに立ち向かつた猛者だが、ポポロはただほんの子供にすぎない。本人は自分を大人だと思つていてもだ。

「大丈夫だ。我らを一度は窮地から救つてくれたのだから、ここでも心配することはない。それに、他の者は皆（落ちぶれたとはいえ）一度は世界を救つた英雄たちだぞ。すぐに合流すれば全く問題ない」

「そのことなんだがよ」

異常に暗いダンジョンの空間を見つめている。数メートル先も見えないくらい、暗

い。

「マーニャやミネアと合流したなら、まだ安心できる。ブライやアリーナも頼もしい。だが」カチツという金属音。銃器に弾を込めているのだろう。

「もしもだぜ、もしもクリフトとポポロが一緒になっちまったらどうするんだ？」

確かに、クリフトはトルネコの言うこと以外、聞きそうになかった。もし、ポポロに万が一のことがあつたら、どうするだろうか。正直なところ、精神異常者の行動は予測できないが、よくない結果になる可能性が高いことだけは容易に予測できる。

「そして俺達の置かれた状況」

アサルトライフルの安全装置を外しながら続ける。

ライアンは暗闇に手を伸ばした。冷たく無情な感触が、そこに頑丈な壁があることを視覚に代わって教えてくれた。

「ここは多分、迷宮タイプのダンジョンだ」

「前に話してくれたことがあつたな。たしか、フロアが通路だけで構成されている、というやつか」

「そうだ」とトルネコは軽く答えた。「これだけ視界が狭いと俺達がポポロを拾うのも難しいだろうな」

「なら、一刻も早く階段を見つければあるまい。まさか、前のようにアイテムにこだわ

る気はなからうな？」

「前は欲張りすぎた。今回は一直線に獲物だけを取りに行く。それに、他のメンバーも気になるからな」

よかった。ダンジョンでは誰か一人が階段を見つければ、パーティ全員が——フロア内のどこにしようとも——下の階へ自動的にワープする。もちろん、一か所にワープするから、レミの魔法のように、そこでメンバーが散ることはない。

「早速、階段を探しにいこう」

「だがその前に害虫駆除が先だな」

そう言ったトルネコの見つめる視線の先に目を凝らすと、闇の中に触覚や肢が蠢いているのが見えた。

「ねえ、ポポロ君はこんなの好きかなあ？」

どこに隠し持っていたのか、クリフトはどう見てもただの美少女フィギュアにしか見えないものを取り出すと、熱心に布教活動を始めた。

「聖母マリア様・スク水メイド服 *ver1* / 10スケール」

頼んでもないのに得意げな顔で説明を開始する。このまま待っていれば誰か来てくれるかと期待したかったが、迷宮タイプのフロアではそれも望み薄だ。

何とか自分の力だけで乗り切るしかない。

「これを買えば君も今日からマリア様の下僕になれるよ。今なら教会特製免罪符もついて期間限定特別価格8万9980ゴールドでご奉仕します」

あたりを見まわして見たが、闇に包まれた中で、出口なんて見当もつかなかった。こいつと一緒に階段を探す―考えただけでほとほと嫌気がさした。

そんなことを考えているポポロの目の前に、突然手足をエキセントリックに曲げたマリア様が舞い降りた。

「ねえねえ、ポポロ君。わたし、あなたにお仕えしたいな。あなたのことならなんだって聞くよ」

クリフトの気味悪い裏声が、ダンジョンの中で不気味に反響する。

「もうそれ、今すぐやめろよ。あんまりやるとモンスターがやって来るかもしれないし」  
本当のことだった。暗い場所のモンスターは目が悪い代わりに主に聴覚が発達しており、そこで営業活動すればやつらに無防備でちよいい獲物がここにいると宣伝しているようなものだ。

「えー、マリア、もつとポポロ君とお話したい」（c.v. クリフト）

「だったら、外に出たらいくらでもしてやるよ！」思わず語気が強くなってしまった。

「だから、今はその口を閉じてるんだ。分かったな。今度喋ったら、今度こそ殺すからな」

トルネコを回復したのはクリフトだったが、あの時の騒動を忘れたわけではない。瀕死のトルネコを目にしながら、クイズを出して嘲笑っていたあの光景を忘れるわけがない。

それでも、なんとか心の中の怒りを鎮めると、暗闇の中へ歩き始めた。きつと、これからの探索ではこの基地外神官の回復魔法が必要になるだろうから。そう頭の中で無理やり自分を納得させた。

ところが、クリフトはポポロを追いかけると横から腕を伸ばしてまたしても人形劇を始めた。

「ポポロ君怖い……もつとリラックスして、ね？」

「……」

「そうだ、ポポロ君のためにお歌を唄ってあげるよ。じゃあ、いくよ、1, 2, 3——  
ポポロはそれがどんな歌か、残念ながら聞くことは出来なかった。

歌が始まる前に、ポポロは手に取った銃を関節がおかしな向きに曲がったままのフィギアに向けた。そして今度は抜かりなく撃鉄を上げると、何の躊躇もなく引き金を引き絞った。

意外とあつけない破裂音と共に、クリフトの大事なマリア様の胴体の一部は吹っ飛び、腕と首は闇の彼方に散っていった。

「すまないけど、下らないお人形遊びに付き合ってる暇はないんだ」

茫然自失のクリフトを置いて、ポポロははじめじめと暗い通路を歩き続けた。

「あら、ここだけ扉があるわ」マーニヤが通路で不思議なものを発見した。

一足遅れて、ミネアが燃え尽きて灰になったアイアンアントの死骸を踏みしめながら、その扉の前にやってくる。

「結構頑丈そうね。いかにもここには何かありますよって感じの」

「面倒くさいし、イオナズンで破壊しちゃっていいでしょ？」

「何言ってるのよ」今度は長いスカートについた灰を払っている。「ああ、もう……灰も残さず焼き尽くすんじゃないの？ 煙たいし、最悪じゃない」

「しようがないでしょ、久し振りのベギラゴンなんだから。これでも頑張った方なんだし」

コン、コン、と中に誰か入っているか、確認するかのようにノックする。

「んで、肝心のこれ、どうする？ イオナズンで吹っ飛ばす？」

「そんなことしたら、扉ごと中身もお釈迦よ」



「いいじゃない。どうせ大したものなんて入ってないでしょ。こんな大げさな扉つけちゃってさあ」

「姉さん」それはいくらなんでもやりすぎでしょ、と言いいたかったが、言っても仕方ないのでミネアは一つの鍵を取り出した。

「ねえ、そんな鍵で本当に開くの？ 明らかに形が違うじゃない」

マーニヤの心配をあざ笑うかのように、鍵は目の前で素早く形を変えると鍵穴にピタリと収まった。

「最後の鍵よ。アンタが冒険終わったときにこっそり勇者のそこから持ち出したの。まさか忘れた、なんて言わないでしょうね」

そのままゆっくりと鍵を回すと、ガチャリと音を立ててあっけなく扉は開いた。

「忘れた」

「だと思ったわ。タンスの奥でホコリ被ってたわよ、この鍵」

「まあいいじゃない。質に入られてなかっただけマシね」

仮にタンスの奥から奇跡的に救出されたとしても、質に入られることはなかっただろう。あまりに汚れた鍵に、そんな価値があるとマーニヤが気づくわけがない——そう考えながら、ミネアは無言で開いた扉の中へ入って行った。

「あ、ちよつと待つてよ。もしかして、まだ古い用の水晶を勝手に質入れしたこと怒って

るの?」

無論、その金はカジノにあるマーニヤ専用の貯金箱（ミネアはカジノのコイン販売機をそう呼んでいた）へ全額投入されたのは言うまでもない。

ひどい悪臭だった。

ライアンの記憶の中でこの臭いに最も近いものを探すとすれば、一週間たった戦場が最もふさわしいだろう。ここには戦場を飛び交うカラスも、死者の無念の表情を照らすいかなる天体もない。だが、もしこれら硫酸で溶けた巨大なアリの死骸を照らすに相応しいものがあるとすれば、月が一番似合っているように思った。

これが人間の死体なら夕日と答えただろうが、やはりモンスターには月光がよく似合う。それは山から谷へ河が流れていくのと同じく、ライアンにとっては太古の昔から決まっている自明の理のように思えた。

目の前の硫酸を溶びて溶けかかった巨大アリは、通路の壁に僅かに張り付いているヒカリゴケによって僅かにその崩れた輪郭を浮かび上がらせていた。死んでいるが、まだ肢や触覚がヒクヒクと動いている。

これももし美術館で見た絵ならそれなりに心動かされるものがあつただろうが、なにぶん、この悪臭の中では悪意のこもった戯画のようなもので——要するに反吐が出ると

いうやつだ。ライアンは床に漏れ出したアリの体液と硫酸が作った水たまりを避けながら、トルネコの方へ近づいて行った。

トルネコは無言でグレネードランチャーを操りながら、通路に群がるアリの群れに、硫酸を浴びせかける作業に熱中していた。それが唯一、神から与えられた仕事だとも言いたそうに。あまりの熱中ぶりに声をかけるのをためらったが、それでもこの臭いを紛らわすのに何か喋りたかった。

「油田の情報はどこで聞いたのだ？」

空になった葉莖を地面にバラバラと落とすと、次の硫酸弾を補充した。アリの群れは今がチャンスとばかりにトルネコの方へ押し寄せてくる。ああ、あと数秒でその牙がトルネコの肉に食い込もうというところ——だが。

「なあに、簡単なことさ。ネネの会社から盗み出したんだよ」

アリがどれくらいの速さでこちらに迫ってくるのかくらいはどうに計算済みであつたらしく、その牙は惜しいところで硫酸を浴びて地面に溶け落ちた。残った顔も、溶けて歪んだせいで人の無念の表情に見えないこともなかった。インチキ霊媒師が見れば、昔ここで死んでいった冒険者の亡霊がどうのこうのと話して、自らの妄想癖を自ら証明してくれることだろう。

「そうか……しかし、あれだけ抜け目のないネネの目をかいくぐって、よくそんな情報を

入手できたものだ」

「昔は社員も全員がネネに賛同してたわけじゃない。一部は俺のようにネネのやることに反感を持っていた。今になって思うよ。あいつらは本当の商人だった、てな」

アリの群れがだいぶまばらになってきた。それでも、トルネコの手は止むことを忘れた機械のように硫酸弾を撃ち続ける。

「今となつちやあ、もう誰もネネに逆らうような根性あるやつなんていねえけどな。みんな、よくて左遷か降格、ほとんどが首になった。代わりに来たのは、ネネの言うことに賛同するカスばかりさ」

「トルネコ殿でも止められなかつたのだからな。まあ、過ぎ去ったことを悔やんでも仕方あるまい。人間には忘却という神が与えたまいし精神安定剤がある」

こんなことを本気で信じている訳ではない。ただの気休めだ。自分だって、解雇された時の悔しさとその後の恥辱にまみれた生活を忘れはしない。それは魂に刻まれた刺青だ。消え去ることは決してない。ただ、その刺青を見ることに慣れただけの話だ。

「俺が思うに、あいつがこうなったのは俺が勇者と一緒にデスピサロを倒しちまつたからだと思ってるんだ」

「アリたちはもういくら突撃しても無駄だと悟ったのか、闇の中を撤退し始めた。戦場で思い出話をするのは不吉だという」

「そいつに聞きたいね、戦場の定義を」

「命を賭けて戦う場所」そう言った本人に直接聞いたわけではない。ただ漠然とそう思ったただけだ。「ではないのか」

「やっぱりよ、戦場つてのは相手が対等であつて初めてそう呼べるモンだと思ふんだ。こんなアリンコ相手じゃ——そうだな、掃き溜めなんてしつくりこねえか？ この臭いといい、雰囲気といい」

軍隊には貧しい農家出身の若者がたくさんいたが、それですらまだ軍隊内ではマシな部類の人間といえた。彼らには、帰るべき故郷がある。中には囚人一歩手前のゴロツキもいたし、当然、職にあづれた者もいた。ようするに、社会の掃き溜めという訳だった。

ライアンはいくつもの戦場で彼らの死体を見てきたが、そこに名誉や尊厳を見出すことは、正直できなかつた。

ただそこにあつたのは、夕陽に照らしだされた死体の山と、立ち上る悪臭だけだった。

「というわけで、とにかく早くここから立ち去ろう。さつきから鼻がひん曲がる思いだぜ」

しかし、あれ程の悪臭だったにも関わらず、ライアンの鼻はすでに何も感じなくなつ

ていた。もう、掃き溜めの臭いに慣れてしまったからだろう。

ブライは暗い通路の中、一人でとても不安だった。

大抵のモンスターなら倒せる程度の魔力はあるとたかをくくっていたが、いざ一人つきりになると流石にどうしようもない焦りのようなものを感じた。

だいたい、ここはアイアンアントの巣ではないか。

角を曲がると、そこには延々と続く通路が、僅かにへばり付いているヒカリゴケに照らされて不気味に映った。こんなところを、どこにあるかも分からない出口目指して進まなければならぬのかと考えるだけで息が詰まりそうになった。

デスピサロを倒したときも、このような無気味なダンジョンに入って行ったが、その時は若い者もいる手前、年配者の威厳を見せつけておかねばならぬと虚勢を張って、無様に怯える姿は見せないようにしてきた。

——トルネコのやつめ。油田なんて本当にあるんじゃないやろうな？

一人心の中で自問自答する。

やつぱり、こんなところに来る必要はなかったかもしれない。あともう少しで引退なのだから、聖職者年金でも貰いながら王の目付け役として適当に頑張っていれば、それで充分快適な老後を過ごせたのに……

もし民衆がもう少し信仰心を持ってくれれば、自分はこんなところに来なくてすんだかもしれない。いや、クリフトがもう少し頑張つて昔のように正常な人間でいてさえしてくれれば……

口からリレミトが出かかったが、その呪文を必死に胸の奥にしまいこむと、勇気を振り絞つて闇の中へ足を踏み出した。

どうせ地上に戻つても、孤独なだけだ。教会の煩瑣な儀礼にくだらない布教活動、アホな国王のお相手……今城に戻つたら、アリーナがどこに行つたか、絶対に訊かれるに決まっている。教会の神父どもは、やつかいな老人が消えてくれて今頃せいせいしているだろう。

そんな素敵な郷愁に胸をときめかせていると、通路の向こうで何やら肢が多い生き物が通つたように見えた。最初は恐怖による幻覚か気のせいだと思つたが、光ゴケが一瞬隠れたことから、それが幻覚でも痴呆の始まりでもないことが分かつた。

ゆつくりと、そのアリらしき生物が横切つて行つた、十字路へと近づく。左右を見ると闇しか見えない。どうやら、もうさつき見たアリは通り過ぎたらしい。ブライは確認のため、松明の呪文（レミーラ）を唱えた。杖の先が淡い光を放つ。

ブライの目に飛び込んできたのは洞窟の壁——だつたらそんなに驚くわけもない。そこには天井にへばり付いて待ち伏せしていた、アイアンアントの開かれた牙があつた

のだ。

「マヒャドー！」

とつさの攻撃呪文も、むなしく響く木霊を生み出しただけだった。精神が錯乱していたせいかもしれないが、おそらく長年、戦闘から離れていたことと、ダンジョンに入ってきてレベルが低くなっていることが原因だろう——といつもの冷静なブライなら分析できたろうが、このときは無様に杖を振り回すのが精一杯だった。まるで痴呆の、幻覚を見ている老人のように。

「あつちへ行け、クソ虫が！」

落ちていてヒヤダルコでも放てば簡単に倒せる相手だが、一旦パニックに陥ってしまったと、人間は最も原始的な方法（ようするに脳細胞の使用量を最小限に抑えるような方法）にすがりつくようになる。

もちろん、お爺さんの滅茶苦茶に振り回す杖にやられてあげる程、アイアンアントはお人よしではない。大あごでブライの法衣の袖に噛みついて自由を奪うと、押さえこもうと前あしを伸ばしてきた。

ブライはあともう少少でアイアンアントのまずい餌になるところだったが、さすが長年の年季とも言おうか、必死にもがいてそこから脱出することができた。ただ、そのとき犠牲にした、ちぎれた法衣の裾はアイアンアントの牙（に見える大あご）にだらし



なくぶら下がっている。

アイアンアントはブライをちよろい獲物と思ったのか、天井から壁へ移動すると、頭と前足をもたげて威嚇のポーズをとった。

いや、威嚇ではない。弱い敵にそんなことをする必要がない。それが単なる次の攻撃への予備動作だと察知すると、機先を制して杖をその頭に叩きつけてやった。

だが残念ながらアイアンアントは、レベルの低い魔道士の打撃攻撃でやられてあげる程、お人よしではなかった。一瞬ひるんだがそれでも大あごで噛みついてくる。とっさに後ろに下がったので、アイアンアントの攻撃はブライの肩口に軽い傷をつけただけすんだ。

だが——なんということだろう、軽傷とはいえ、傷を受けたことと、急に後ろに足を動かしたせいで足は絡まり合い、結果ブライは地面に尻もちをつけて倒れ込んでしまった。

その間、大あごの法衣を前足で器用に取ると、最後と思われる攻撃をしかけてきた。

「来るんじゃないー！」

そう叫んで必死に杖を振り回すが、努力空しく大あごはどんどんと迫ってくる。ついに喉に食らいつこうとしたところ——ブライは、死ぬ間際に今までの一生が走馬灯のよ

うに見えるというが、実際は走馬灯も何もみえないものだ、と考えていた。だが、いつまで経っても走馬灯はおろか、敵の攻撃さえこない。いつの間にか咄嗟にあげた腕をおろし、そらした視線を元に戻すと、アリは宙に浮いた状態で子供が駄々をこねるかのようにならばと6本の肢を動かしていた。

「あは、やつぱり爺じだったんだ」

巨漢——漢は女にも使えるのだろうか？——がアイアンアントの大あごを掴んで持ち上げていた。

「光ってたし、遠くからでもすぐに分かったよ」

この時だけは、杖の光で下から照らされるアリーナの顔が聖母に見えた。

「来るなって言ってたけど、来ちゃってよかったんだよね」

もちろんだ。

「んで、こいつどうする?」

殺せ。

「分かった」

聖母様は大あごを掴んだ逞しい右手と左手を広げると、アイアンアントの頭を——杖であれ程殴つても大したダメージを与えられなかったのに——子供がトンボの頭でも引きちぎるかのようにならばと、簡単に真つ二つに引き裂いた。

「安っぽい剣ね」

指で刃の部分弾きながらマーニヤがそう呟く。この場合の『安っぽい』とは機能や攻撃力ではなく、ただ単純に値段と見た目に絞られた価値観のことを指している。

ミネアは、またもや姉の悪い癖が出たと心の中で深いため息をついていた。男を選ぶ基準も見た目と収入の2つしかないから、よく散々な目にあつた。頭の悪い魚のように、ルアーを追いかけては釣り上げられる。せめて本当の餌かどうかを見極められるようにはなつて欲しい。

今、マーニヤが持っている剣はおそらく剛剣かまいたちだろう。8方向同時攻撃ができるのがその特徴だが、マーニヤには装備できないためあまり意味がない機能ではある。

マーニヤがブンブンと素振りをし始めた。

「まあ、剣舞ぐらいには使えそうね」

「姉さん、それは……」

仕方なくマーニヤに、今自分が持っている剣がどれ程貴重な物を説明する。

「ふーん」

子供が期待してクリスマススの翌日に靴下の中身を見たところ、大したプレゼントが

入っていないかったときに口から出そうな、興味なさそうな返事だった。

「たった8方向？ 別に、イオナズン使えばそれで一発じゃない」

「誰でもイオナズンが使える訳じゃないでしょ。戦士とか、そんな人にはうつつの剣なのよ」

マーニヤがミネアの言葉を確かめようと素振りをしてみる。

「やつぱり、8方向なんて攻撃できないじゃん」

「姉さんは装備できないでしょ」

子供から玩具を取り上げる母親のように、マーニヤの手から剛剣かまいたちを取り上げると、入ってきた扉に向かって歩き始めた。用事は果たした。もうここに用はない。

「こっちの方が近いわよ」

立ち去るミネアの背中に向かって、マーニヤがそう言ったと同時に、ダンジョン中を揺るがす轟音が鳴り響き——次に粉塵が室内に充滿した。ミネアが咳込みながらバギマで粉塵を追い払うと、そこに確かにあつたはずの壁がポツカリと消え去っていた。

たぶん、アイアンアントは餌にするつもりで持ってきたのだろう。そうでなければ、こんなところに——普段は集団で暮らすももんじやが一匹でいることに説明がつかない

い。

殺してしまうことはもちろん容易（たやす）かったが、これからの探索で万が一ということもあるし、頭数は多いにこしたことはない。一応仲間にしておくことにした。

「ルールルルル。ほら、こつちにおいで」

ポポロはしゃがみ込んで手まねきすると、ももんじや是不安そうな目でポポロを見つめた。その視線には、ようやく虫以外の生物に会えたことに対する、若干の希望もこもっている。

そうだ、ポケットにモンスター用の肉が入っていたはずだ。

肉が取り出されると、ももんじやの目の色が変わった。きつと、お腹もすいていたのだろう。この人間は悪者かもしれない——その疑いより餌の誘惑が勝ったとき、一歩ずつ、ゆつくりとだがポポロの方へ近づいて行った。

「さあ、怖くないよ、こつちにおいで。るるるる……」

くちばしの先が肉に触れようかというときだった。突然、低い轟音とともにダンジョン全体が僅かに揺れた。天井から落ちた土くれが床に落ちきる前に、ももんじやは猛スピードで通路の暗がりへ消え去っていった。

まあ、自業自得と言えばそれまでだが、俺の放った硫酸弾とアリの体液によって、通

路はエゲツナイ臭いに包まれていた。まあ、しようがねえ。こういう甲殻動物に最も効く兵器は硫酸弾だからな。シレン先生がそう言ってたんだから、間違いないねえ。だが、こんなに臭いんじゃないやあ、次の使用は『前向きに検討致します』ってやつだな。

どれ程臭いか、てのは嗅いだことのない人間には分からんだろうが、一応説明してやるよ——まず、中年のサラリーマンを思い浮かべて欲しい。そいつは脂ぎったやつで、頭は禿げあがりゴキブリの背中みたいにギラギラとテカってる。そこに刻み海苔みてえに、髪の毛が申し訳なきさうにかぶさっているんだ。しかもそいつが無精ひげに囲まれた口を開くと、歯の間について食べたのか知らねえがクラッカーのカスなんて挟まってよ、歯は黄色い歯垢でべったりだ。そしてアンタがかつたるい仕事を終えて、ようやく安らぎの我が家へ帰ろうという頃——そいつはやつてきて異常に顔を近づけ、体中の汗腺からドブ川のヘドロ口みてえな汗を出しながらこう言う——今夜一杯、どう？

どうだ、大分キただろ？

だがこれからが本番なんだぜ。アンタはその非常に『前向きに検討したい』要求を断りきれずについて飲みについてちまう。そこではまあ、おいしい食事やなんかかんやで、なんとか乗り切ることができたが、帰り道に地獄が待ってる。

まず、アンタはそのへべれけに酔っ払った、上司である中年サラリーマンを肩に担いで電車の駅まで送り届けなければならない。なぜそんなことをする必要があったか

？ 世の中の理不尽に理由なんてねえよ。あえて言うなら、酔っ払った上司を支えるのが『後輩の役割』だからさ。とにかく、アンタはアルコールの酷い臭いが混じった上司を何とか支えながら駆まできたが、とうとうそこでオツサン、やっちゃった。

地面に屈みこむと、今までに喰ったものを全部オムレツにして吐き出したんだぜ

びちゃびちゃと地面に音を立てて盛り付け完了したオムレツさんは強烈な胃酸の湿った臭いを立てている——しかも、よく見てみりやあ、飛び散ったオムレツがアンタのスーツにちよつとかかかってやがる！

そこまで来て、アンタもついにやっちゃった。思わず胸からこみ上げてくるリゾットに——そしてその他諸々に——ついつい耐えきれず、オムレツの上にそれをふりかけちまうってワケさ。そうやってできたオムレツとリゾットのイタ飯定食の臭い——ちやんと想像できたか？ それに非常に近い臭いがこの狭い通路に充満したら、俺がこれから硫酸弾をあまり使いたくねえのが分かるだろ？

でも人間ってすごいと思つたな。こんだけ酷い悪臭にも10分もすれば、嗅覚が麻痺してきて、あまり感じなくなってくるんだ。15分もすればそこで普通に飯でも食えるかと思つた程だ。

そんな障害を乗り越えてアリンコ供を撃退し、通路を進んでいくと、肌がちよつと霏囲気の違う空気を感じ取った。ま、冒険者のカン、てやつだな。ここには何かあるぞつ

て。

察するに、暗く狭い通路を抜けて、急に開けた大きな部屋に出てきたようなんだ。(俺の人生もぜひそうなって欲しいもんだね。トンネル抜ければ夏の海ってどっかの歌にもなかったかい?)

でも、そこだけヒカリゴケも何もなかったから、真っ暗で何も見えねえ。俺はすぐにライアンに頼んで、松明をつけてもらうことにした。アイツが松明を取り出したときだった。

ズシン……

「今、少し揺れなかったか」

「そうか? 気のせいだろ。それより早く松明をつけてくれ。無駄話してると、日が暮れちまうぜ」

今思うと、ライアンも嫌な予感がしてたんだと思う。アイツの『嫌な予感』はミネアもビックリの的中率100%だからな。俺はと言えば——隠したって無駄だから正直に言うよ。アイテムにこだわらないと言った矢先から、何か貴重なアイテムでもあるんじゃないか、て期待してた。そりゃあ、こんだけの広い空間、アリンコが何に使うってんだよ。野球でもするののか?

ライアンが松明に火をつけた。



そこに財宝でもあるかという俺のかわいらしい期待は、炎に浮かび上がったアリンコ  
供によって粉々に打ち砕かれたね。（どうやら夏の海は大時化のようで……残念、また  
トンネルに逆戻りだな！）

## 21. ダンジョン50階層にて2

「白馬のお、王子様あ、なんて、しくんじてる、わーけじやないいいいい……」

そんな歌を口ずさみながら、クリフトは地面に散らばった世界で限定100体しか存在しないスク水メイドマリア様の破片を集めていた。相変わらず麻薬で充血した目を真つ赤に腫らしながら探した努力が、神に認められたのだろうか、腕の部分は何とか見つけた。だが、フィギュアの命とも言える肝心の顔は、いくら探してもどこにもなかった。クリフトは、このときだけブライトと一緒にいたら良かったのに、と思った。ブライトなら、レミールが使える。そうすれば、こうやってヒカリゴケのわずかな光に頼ることもなかっただろうに。

「そつとこぼれてくるー涙、のゝ意味さえわからない……」

本当に、涙がこぼれそうだった。一番のお気に入りだったのに、いとも簡単に闇の彼方へ吹っ飛んでいった。それにしてもあの餓鬼、ひどいことしやる。何の予告もなく他人のモノに向かって銃を撃つなんて、どんな教育受けてるんだ。今度あつたらびしつと言つてやらないとな……これもきつとゆとり教育のせいだ……

そんなことを考えつつ、クリフトは岩のでこぼこの隙間など、自らが考えられる場所

を丹念に何度も探した。

発砲した場面も何度も思い返し、吹き飛んで行った方向らしき場所もすでに探してあった。それでも、見つからない時は見つからないものだ。

物事が心理的死角に入り込んでしまったからなのか、それとも最初からそこに目当てのなどないのか。結局、マリア様の頭は銃撃で粉々に砕けたのかもしれない。だが、銃弾の焼け跡から判断するに、ポポロが撃つたのは首の真下辺りの鎖骨付近、それゆえ必ずどこかにはあるはずだ。必ずある。自分にそう言い聞かせた。見つけてどうするつもりなのか、それは本人にとってもよく分かってなかったが、とにかく見つけなければならぬという気持ちだけはどうしようもなく湧いてくる。

「あなたくっつかまえたら決して、逃ぐがさないよおうにしてくえくえく……」

歌が終わった。歌が闇の彼方へ消え去っていった後に残ったのは完全な静寂だけ。だが、それは今のクリフトにとっては、どんな騒音よりもうるさく感じた。

「クソ、なんで見つかんねーんだよ！」

思わず壁を蹴りつける。蹴った瞬間、ダンジョン全体が少しだけ揺れたような感じがしたが、多分脳内に残った麻薬の成分が見せた幻覚だろう。冷静に考えてそんなことあるわけない。

足を止めてあたりに注意を払ってみるが、相変わらず忌々しい静けさしかそこには感

じられなかった。

「クソツ、クソツ」

そう言いながらまたもや通路の壁を蹴りつける。そうすればこのクソいまいましい静寂から逃れられるとでもいうように。

「クソツ、クソツ！ いい加減にしろよ、このゴミ虫——」

言い終わる瞬間、クリフトの最後に残っていた自制心の残滓が、高く振り上げて今にも壁に叩きつけようとする右腕の動きを止めた。手には大事なマリア様が握られたままになっているのだから。

「クソツ！」

その代わりに、クリフトはもう一回壁を蹴りつけた。そうでもしないと気分が——いまこそ一発ヤクを決めるか酒を浴びるように飲めればいいのに、という欲求がこみ上げてくる——おさまらない。蹴った衝撃で、へばりついていたヒカリゴケの一部が剥がれ落ちた。

どうして周りには俺の足を引っ張るような人間しかいやがらねえんだ。

地面に落ちて光を失いつつあるコケの破片を眺めながら、クリフトは唐突にそう思った。

アリーナもブライも国王も、俺に重荷を押し付けることばかり。やつらが俺の足を

引つ張らなければ、今頃はもつとまともな神官として着実にキャリアを積んでいったことだろう。もしそれが退屈でつまらない平凡な生活だったとしても、こんなクソ虫の巢の中で立ち往生しているより余程マシだ。

「クソ……」

思わずクリフトの口から、最近では神とその他大勢の人々を罵倒するとき用いていた言葉が漏れだした。これは、クリフト自身ですら意識してなかったことだった。

こういうときにヤクさえあれば——またしても思わずマリア様を握っている右手に力が入ってしまうところだったが、なんとか抑えた。

それにしても、あのクソガキ、俺に向かつてなんて言いやがった？

たしかキチガイ神官とかなんとか言ってたな。ついでにクソ神官とかヤク漬けでアルコール漬けの社会のゴミクズとか言ってたような気もする。

まあ、具体的にあのガキが何を言っていたかはひとまず置いておこう。

だいたい何を言おうが、あのポポロとかいうクソガキはこの世の敵しさを何も知らないではないか。たまにはダンジョンに潜り込んでモンスターのクソ集めみたいなことをしているらしいが、そんなのは命懸けで魔王と戦ったことに比べれば砂場のお遊戯に等しい。

しばらくの間、哀れにも頭と利き腕が吹き飛び、一部が銃撃で焦げてもはや用をなさ

なくなったボロ切れをまとっているマリア様の姿を眺めながらそんなことを考えていた。それからすぐにクリフトは泣きたくなくなってきた。この絶望的な状況に——ひとつは『クソ虫の巣』に閉じこめられていること、もうひとつはマリア様の失った破片はもう見つからないのではないか、ということに対して。

あのマリア様は、ポポロにとってはくだらないお人形でも、クリフトにとっては人形以上、もはや恋人かあるいは自分の家族に匹敵するくらい存在だった。

確かに、もともとは数あるコレクションのひとつにすぎなかった。だが、ある日いつものようにヤクをキめてクリフトの救世主である “本当の” 神のいる世界に飛んできたとき、確かにそのフィギュアが喋ったのだ。

他のフィギュアは喋らなかつたのに、マリア様だけが、確かに、喋った。口元をはつきりと動かしながら。クリフトが今までにどれだけ頑張っても、ついぞ誰にも言われることのなかつた励ましや慰めや、勇気が出るような、そんな言葉を。

そんな聖母さまが今ではこのザマだ。あのクソガキのせいだ。

トルネコの子供じやなけりやあ、ザキを連発していたかもしれない。

「あれ、クリフトじゃない?」

マーニヤの声。泣きそうになるのをなんとかこらえながら、クリフトは声のする方へ振り向いた。

「マーニヤ……ミネアも一緒なのか」

平静を装ったつもりだったが、情けない声にしかならなかった。

「そうね。アンタはひとりなの？」マーニヤが言った。

「いいや。さつきまでポポロと一緒にいたんだ」

姉妹は一瞬視線を交わし、マーニヤが「ダンジョンの中でわざわざ仲間とはぐれるなんて、ひよつとしてコイツはキチガイなの？」という無言のメッセージを目で送ると、ミネアは「本当にキチガイなの。だから姉さんは余計なことは言わずに、ここはわたしに任せて」と同じく目で返答した。

ミネアが一步クリフトに歩み寄って、口を開いた。

「で、そのポポロ君とはどうやってはぐれちゃったわけ？」

「全部アイツのせいなんだ」

言いながら、クリフトはいとしのマリア様の残骸を姉妹に見せた。

突然差し出されたフィギュアの残骸を見て、さすがのミネアも一瞬わけがわからなくなつたが、すぐにだいたいのことを悟つた。最初はクリフトとポポロの二人一緒に飛ばされてきたが、クリフトの奇怪な言動に嫌気がさして、ひとりで他の仲間を求めにいったのだろう。まともな仲間を。そのときに何か騒動があつて、クリフトの手に残つたのが、今、目の前にある何かよくわからない残骸というわけだ。

「これが、全部ポポロ君のせいだっというの?」

「そうなんだ。あいつ、俺が必死に励まそうとしたのに……何を思ったのか急に拳銃をとりだして——この大事なマリア様に向かって撃ちやがったんだよおお！俺の大事なマリア様にいいいい！ ああ……なんてかわいそうなんだよおお……」

かわいそうっていうのはアンタのようなことをいうのよ、とミネアは心の中で思ったが、もちろんそれは口には出さないでおいた。狂人に道理を説いてもはじまらない。道理が通じないから狂人なのだし。

多分、ここで起こったことの原因は99・9%クリフトのせいだろう。だが、今はそんなことを詮索している場合ではないし、一刻も早く先へ進みたい。

「分かったわ。あとでポポロ君に、わたしからきつく言っとくから」

「ああ、本当に、頼むよ……あいつ、子供だから、なんていうかその……分かってないんだ。当然、守るべきルールっていうか……ほら、そういうの、なんていうんだっけ?」

「物の道理?」

「そう! その“物の道理”をやつがポポロには全く分かってない。だから、俺たちがこの冒険の中で少しずつ教えてやらなきゃあ、ならない」

それを小学校から学び直さなきゃならないのは、ヤクボケ神官のあなたのほうでしよ。



ミネアは神官や神父というのがずっと好きになれないでいた。どんな人間でも、神に仕えているというだけで、胡散臭い、鼻持ちならない偽善者にしか見えなかった。

だいたい、あの寄付という制度が気に食わない。まるで死んだ人間にたかるハゲワシそのもの。だいたい、あれだけ祈つて魔王を倒す時に「神の御加護」なんてあつた？ いいや、そんなもの全然なかつたじゃない。そんなありがたいものがあるのなら、姉さんがカジノでとつとつに一発当ててるわ。極めつけは最近教会が大々的に売り始めた免許符。なんなの？ あのバカらしい代物は？ 『レアカード入り！』とか宣伝しているビックリマンチョコ並の子供騙し。それでも神の権威がつけばスライムでもメタルキングに華麗に変身、買う人がいるんだから本当に救われない。もちろん、買う人も悪いんだけど——そこでミネアはあらためてクリフトの顔を見た。ヒカリゴケのかすかな光に照らされて、眼だけがらんとあやしい光を放っている——やっぱり売ってる方が一番悪いわね。こいつら、死んだら真つ先に地獄行きだわ。結局神とか正義とかいうのは、こいつら聖職者の自分の都合に金メッキをほどこしたようなシロモノだったわけね。

だが、今はそういう「物の道理」を説いている暇はない。

「とにかく、先にここから出ましよう」

「そうしたいのはやまやまなんだけど、ここで探さなくちゃならないものがあるんだ」

それが100万ゴールド入った袋なら自分も喜んで参加しただろうが、あいにくそれがないから自分たちはこの惨めで、暗い、薄気味悪い場所にいるのだ。

ねえ、こいつほつといてきつきと先に行こうよ——マーニヤの目がそう語っていた。大丈夫、ほつといても死なないって。下へ行けばトルネコのおっさんがまたなんとかしてくれるでしょ。

それは分かっていたが、できるなら問題はここで解決しておきたかった。いくら雑魚ばかりのダンジョンとはいええ、どんな強敵が潜んでいるか分からない。もしものときに備えて回復役を用意しておくのは、今までの戦いの経験から導き出される当然の戦略ともいえた。

「その探し物、て一体何なの？」

後ろでマーニヤのめんどくさそうなため息の音がした。

「このマリア様の吹っ飛んだ頭と腕のときさ。絶対このどこかに落ちてはいるはずなんだ」

ミネアは、この瞬間決心した。どこまで伝わるか分からないが、クリフトにひとつだけ「物の道理」というやつを教えてやるわ、と。

「そうだ、確かマーニヤは炎系の魔法が仕えたんだよな？ だつたらここら辺を照らしてみてくれよ。絶対、ここら辺に破片が飛んでいったはずなんだ」

よかった。これで手間が省けた。もし向こうが言わなければ、ミネアの方から提案するつもりだった。

「分かったわ。マーニヤ、ちよつと手伝つてやつて」

思いつきキツイやつだね。ついでに目線でマーニヤに伝えた。

マーニヤもはじめの一瞬だけ戸惑つたような顔をしていたが、すぐにミネアの意味を読み取つた——ミネアもなかなかやるじゃない。

「それじゃあ、いくわよ。準備はいい？」

「ああ、準備万た——」

「ベギラゴン」

のたうち回る紅蓮の炎が照らしだしたのは、驚きと狂気が宿るクリフトの顔だけではなかった。クリフトは確かに見た。幻覚でなく、現実を。暗い壁の隅に転がっているマリア様の頭が、今にも真つ赤な炎に飲み込まれそうな光景を——痛いよお、助けて、クリフトおお——クリフトは言葉にならない絶叫を上げて炎の中に飛び込んでいったが、すぐに炎はマリア様の顔を真つ赤に染めて、その無尽蔵な胃袋の中へと飲み込み、消え去っていった。

「なんてことしやがるんだ！ このクソ売女！」

他のどの言葉でもいい。アホとかバカとか、カスでもクズでも、マーニヤは無視した

だろう。だが売女だけは無視できなかった。さらにクリフトが罵倒語を並べ立てる前に、素早くクリフトの右手——そこにはマリア様の残骸も握られている——を掴んだ。

「あら、いまなんて仰ったのかしら？ このお上品なレデイに対して」

「お前のアソコはザーメンまみれのクサマンだ、て言ったんだよ、クソ売女!!」

「アタシがちよつと本気をだせば、アンタの右手もろとも、その薄汚いダツチワイフの残骸は灰になるわ」

「やってみるよ。やれるもんならな。その前にザキで即死させてやる」

「どつちにしても、このままアンタの右手を消しさる時間くらいはある。本当にいいの？ そうなったら毎晩のおたのしみは左手でやらなきゃいけないくなるけど」

一瞬、クリフトはマーニヤが何のことを言っているのか分からないといった表情だったが、すぐにピンときたようだった。

それを見て、マーニヤの顔に会心の笑みがじわりと広がった。

やれやれだわ。

ミネアは二人のそばに歩み寄ると、フィギュアの残骸の上に手を置いた。

「二人とも、そこまで」

「ミネア、ちよつと——」

(キチガイの言うことを真に受けたらだめじゃない、姉さん)

ミネアはマーニヤの耳元で、クリフトには聞こえないよう慎重に、そう囁いた。「姉さん、さあ、手を離して」

マーニヤにはついカツと熱くなる癖があった。それは大抵の場合、カジノで負けが込んだときや、ごく稀に勝っているときにも発動して、有り金を全部なくすまで続く。

でも姉さん、ここのカジノは万が一にも負けられないのよ。だからわたしの言うとおりにして。

ミネアの必死の訴えが通じたのか、マーニヤはゆっくりと掴んだ手を離した。

「ふたりに俺をハメやがったな」

「聞いて、クリフト」ミネアが子供にさとすように言った。

「言い訳なんてどうでもいいんだ！俺のマリア様を返せ！」

「それならすぐに返ってくるわ」

「そういうことを言えばとりあえず俺が納得するとも思っているのか？ どうやって一度消滅したものがかえってくるんだよ」

「地上に出た時、また買えばいいのよ」

「はあ？ あれはな、この世に100体限定の貴重品なんだよ……いまじゃプレミアがついて何十万ゴールドって値段になつてるだろうよ」

本来、こういう人間に憐れみは高級すぎるのだが、今回ばかりはミネアも憐れみを禁

じえなかった。自分がなぜここにいるのか、それすら分かってない。

「クリフト、このダンジョンの地下に何かがあるか分かっているの？ 油田よ。それもトルネコの言うとおりになら、とてつもない大きさの。一人頭の分け前は少なく見積もっても数百億、数千億ゴールドは堅いでしょうね。もしかしたら兆の大台も突破するかもしれない。

「分かった？ わたしたちが今何を目指してこんなところにいるのかを。それだけの金があれば、残りのマリア様99体全部買い占めるなんて、薬草買い占めるのと同じなのよ」

ミネアの「物の道理」を聞いて、今度はクリフトの顔にじわりと笑みが広がっていった。狂気とあらゆる俗な欲望をはらんだ薄汚い笑み。

次から聖職者やめて「汚」職者にならなれば？

ミネアがそう考えているとも知らないで、クリフトは99体のマリア様に囲まれながらヤクをキめている様子を想像していた。

## 22. ダンジョン50階層にて3

あれはどのくらい前だったのか、あまりに昔のことなのでバーサーカー自身ですらよく覚えていない。体中から血を噴き出し、瀕死になりながらもまだ立っている——しかしそれすら、すぐに平衡感覚を失って地面に激突したから、多分そうだったのだろうという推測でしかないが。倒れた時も痛みの感覚はほとんどなかった。ただ、不思議と地面の異常な冷たさだけは感じた。

「もう終わりか」

本当は真上で喋っているはずの聲が、ずいぶんと遠くから聞こえるような気がする。

「今回の勇者どもは少しくらい楽しませてくれると思っていたが……まあこの程度か」

ああ、俺は確かゾーマとかいう奴を倒そうと勇者たちと一緒に遠くの町から遙々やってきて今ここにこうして倒れているでもゾーマというのは俺の主人なのにその主人を倒す？俺はなにを言ってるんだ——？

「ほう。その傷で立ち上がるとは驚きだな。他の3人もおぬしくらい強ければなあ」

当たり前だ俺は最強の戦士だ武道家を極めて戦士に転職して剣技を極めた戦士なんだお前を倒すし倒すまで俺は絶対に倒れない倒れられない——

主人を倒す？ どういうことだろう？ 俺にはこいつの言ってることがよく分からない。でもこいつは間違いなく俺自身だ、なぜなんだろう。

「このまま死なすには惜しいな」

もう目に映る光景はぐちゃぐちゃに絵具をぶちまけたようになっていてほとんど何も見えてないそのうえ右半分には真つ赤なカーテンがかかっている――

ザッ、ザッ、ザッ

ゾーマが近づいてくる足音大丈夫耳はまだちゃんと聞こえるからゾーマがやってくるだいたいの方向は分かるあとは右腕が動いてくれるかどうかだけがさつきから全く感覚がない剣を握っているのかすら分からないでもたぶん大丈夫まだ動くはずだだって俺は今日このときのために生きてきたんだからこいつを殺すために殺す殺すコロス剣で首を一撃でコロス。

ああ、なんて気持ち悪い夢なんだ。よりによって俺が主人を殺そうとしている夢だなんて。それにこの旅の扉の中に飛び込んだ直後のような、グニャグニャした視界にもだんだんと気分が悪くなってきた。だいたい、俺が殺すべき敵はひとりだけのはずだ。

――ザッ！

足音が止まったので俺は振り向きざまに剣を渾身の力で叩きこんだ俺の右腕はどうやらうまく動いてくれたらしいこの距離で獲物を外すことなんてありえないしゾーマ



もまさか俺がまだこんなに動けるとも思っていなかっただろうだ！勝った！これで故郷へ帰れる仲間と家族の待つ故郷に――

「本当に惜しいな」

なぜだ？なぜ喋れるんだたった今おまえは俺に首を斬り飛ばされたはず――

「とつくに死んでいてもおかしくない傷を負いながら、それでも最後の一太刀を浴びせかけてくる。弱っているから見切れたものの、全快状態ならそこそのダメージくらいは与えられただろうな。もちろん、人間の普通の攻撃を喰らったところで余は死なぬが」

ああクソ俺はもう駄目だこのまま死んでしまうんだでもまだ死にたくないせめてこいつを道連れにしなくてはさあ俺の右腕もう一回動いてくれ――

がちやん。

「ついに剣を落としたか。もうずいぶん前から感覚など無くなっているはずだからな。おまえは充分によく戦ったよ。これはお世辞でもなんでもないぞ。余が心の底から、本心でそう言っている。おそらく、世界樹の花が咲くくらい珍しいことだ」

おお神よ俺に死ぬ前に最後の力を与えてくれよく戦っただけじゃ駄目なんだ――

「すごい執念だったよ。おまえの魂はもうすでに人間の領域を超えている。そこでひとつ提案がある。魔族にならないか？ おまえ程の者がこんなところで無駄死にする必

要はない」

「いやだ！だれがおまえと同じ魔族なんかになるかそれならいっそ殺してくれ——」

「なんだ、泣いているのか。おまえには誇りがあるからな。だがそれは本当に命を賭けてまで守るようなものなのか？ どうして数多い人間のなかからわざわざ数人を選びだして余のところへ送り出すのだ？ 要するに、やつらは生き延びたいだけなのだ。おまえらを生贄にして、自分らはぬくぬくと生き延びたい。おまえたちを最初に送りだした国王が何をしてくれた？ 僅かなゴールドと貧弱な装備。それだけではないか。でも自分の城にはレベルの高く高価な装備をした兵士を配置する。そんなくだらないやつらのために自分の命を犠牲にする必要はない」

「いやそれでも俺はお前を倒さなければならぬなぜならそれは人間全ての希望であり俺たちがやらなきゃならないから——」

「ああ、こいつはきつとひどく疲れているんだな。だから何を言っても何も理解できないだろう。」

「まだ首を縦に振らんか。まあいい。それなら反抗する権利も与えよう。魔族になればおまえならいくらでも強くなっていけるだろう。いつでも殺しに来ていいぞ。もし余を倒すことを途中で諦めたとして、魔族として生きていくのに苦痛を感じるのなら、死ぬ権利も与えよう。もちろん、ザキでなんの苦しみもなくあの世へいける。これが余に

とつても、おまえにとつても、最もベターな案だと思いがどうか？ 少なくとも、ここで犬死するより余程マシだと思うが」

ここから先は「俺の人生」だからだんだんと記憶もはつきりしている。前世の「人間としての生」を捨てて、魔族として生きていくことになった瞬間。

この後も俺はささやかな抵抗を試みようとしたが、結局はゾーマの言うことを受け入れるしかなかった。いや、今思うと、表面上拒んだつもりなだけで、本当のところはむしろ嬉々としてこの提案を受け入れたのかもしれない。

これで犬死だけはしなくて済んだ。そう考えながらも、このときはいつかゾーマを倒そうと思っていた。だが、もしかしたら、ただ生への執着からそうしただけかもしれない。

このあと、俺はゾーマの言うとおり果てしなく強くなっていった。だがゾーマは俺の強さの比なんかじゃなかった。

俺は途中から、心の中ではゾーマを倒すことなど完全に諦めていたにも関わらず、あの「死ぬ権利」を行使することすらしなかった。ただただ己の強くなった力と、主人となったゾーマの圧倒的力に陶酔しきっていた。

「もうおまえに喋る力は残ってないだろう。だから余の提案を受け入れたいのなら、そのまま少し首を縦に動かすだけでいい」

俺はゾーマの言うとおりにした。多分、泣きながらだったと思う。歓喜と苦痛が入れ混じった涙。赤子が生まれてくるときに流すような。

ダンジョンが僅かに揺れた衝撃で目が覚めたのだろうか、通路の隅でうずくまっていた。バーサーカーが首を持ち上げた。

おそらく、スラ吉のいう『やつら』がやってきたのだろう。気配から察するに、今回は仲間をたくさん引き連れてきているみたいだ。だが、そんなこともこのダンジョンでは関係ないだろう。バーサーカーには壁を掘る能力がある。通路からいきなり奇襲を仕掛けるのはわけないことだ。

自分にとって一番有利な場所。だからここでヤマを張って待つていた。

バーサーカーは、ポケットの中の小さな石の像に手を伸ばした。そこらへんで拾った適当な石を、待ち伏せしている間に彫ったものだ。ヤスリをかけてないので表面はゴツゴツしたままだが、だいたい形はできている。

ゾーマ。かつての自分の主人。だが、ダンジョンにやってきた商人と戦士によってあつけなく倒された。いくら一度勇者に倒されて封印されていたとはいえ、あのゾーマがあんなやつらに、簡単に負けてしまうものなのだろうか？ あの商人はありえない武器や道具を使ったが、それでも全盛期のゾーマを傍で見てきたバーサーカーには信じられ

ないことだった。

多分、魔王の存在が次の世代に移っていったので、ゾーマ自身が魔王ではなくなっていたのだろう。あるいは——できればこちらの考えが的中して欲しいと願いながら——ゾーマはいまだに魔王という存在で、灰になりながらもお生きているのではないだろうか？

それにしても、俺はなぜゾーマなんか生きて欲しいと思っただろうか？

もうすでに主従関係はなくなっている。やはり、圧倒的力に対する憧れだろうか。それとも悪のカリスマだろうか。

いいや。

だいぶ前からうすうす感じていたが、考えないようにしていただけだ。本当は気づいていた。自分を騙しながら魔族として生きていくうちに、心から魔族になってしまったのだと。

それなのに何の後悔も感じないどころか、むしろそれでよかつたかもしれない、と思っているのだから、本当にそうなってしまったんだらう。人間だけがもつ、後悔、罪悪感。それがほとんどなくなっている。代わりにその台座に収まっているのは、破壊と戦闘への歓喜、強さへの渴望。そういった感情は、いまや女王様のようにふんぞり返ってバーサーカー自信に命令してくる。今すぐ武器を取って『やつら』を倒しに行き

なさい。成功したらわたしの足をなめさせてあげるから。

バーサーカーは言われたとおり武器を取ると、立ちあがって暗い通路を進んでいった。

トルネコがこのフロアの正式な君主である女王アリに火炎放射を浴びせかけている間、ポポロはひとりで逃げたももんじやを追いかけていた。

ももんじや自身の戦闘能力はどうでもよかつたが、このフロアから出るにはももんじやの記憶が役に立つかもしれない。連れてこられる時に階段を通つたはずだから、思い出して案内してくればさっさとこのアリの巣から抜けられるかもしれない。

ついに行き止まりまでももんじやを追い詰めた。逃げ場所はない。

「さあ、怖くないから、こっちにおいで」

しゃがみ込んで、ももんじやを驚かさないように、そつと肉を差し出す。実は今ポポロがももんじやに渡そうとしている肉は、疫病で処分された家畜の肉をそのままダでもらってきたものだった。人間が食える代物ではないが、使い捨て用のモンスターに食わずにはこれでも十分すぎるくらいだった。それにこのももんじやは、きつとここに連れてこられてから全く何も食べてないだろうし、こんな肉でもなおさら喜んで食べるはずだ。

ももんじやは、しばらく通路の端でうずくまっているだけだったが、やがて頭を上げると視線は肉にくぎ付けになった。そして、飢えの恐怖が人間への恐怖を上回ったとき、ももんじやは態勢を低くしながらゆっくり近づいてきた。

「そうそう、こわくないんだ。一緒にここから出ようよ」

ももんじやのくちばしが肉に触れ、そこで動きが少しの間だけ止まった。この肉に毒でも入っているんじゃないのか——そんなことを調べている感じだったが、すぐに食欲に屈した。最初の一口こそ慎重だったが、口の中に肉汁が広がるとあとは怒涛のごとく。ポポロが保存の壺から肉を出すの間にも間に合わないくらいの早さでむさぼり食った。

「だいじょうぶだって、まだまだあるからね」

ももんじやがとりあえず胃袋を満たし終わったあと、ポポロはゆっくりと手を伸ばした。ももんじやはいまだ警戒してはいたものの、ポポロの手が頭に触れ、毛並をなでると明らかに安心した様子だった。ポポロの手にも、ももんじやの体から徐々に緊張のこわばりが抜けていくのが感じられた。

すでに、ももんじやはほとんどポポロのことを信用していた。

「もうぼくたちはともだちさ。分かる？　ともだち」

ももんじやはポポロの言っていることがよく分からないのか、少し首をかしげてこちらを見つめているだけだった。

まあ、ともだちが何かは分からなくてもいいよ。それより肝心なのは、こいつがこのダンジョンの出口を知っているかどうかということ。

下の階に無事脱出できたら、そのときはももんじやをギガンテスカグレイトドラゴンの餌にしようと考えていた。

モンスターと戦うときに最も頼りにしてきたパートナー。真の友達。かれらはきつとポポロが用意した生餌を喜んでくれるにちがいない。ギガンテスならこん棒でミンチにしてから食べるだろうし、グレイトドラゴンは炎で焼いてから、火のついたまま踊り食いだろう。

「じゃあ、そろそろ案内してくれないかな。出口はどっち？」

ももんじやはまた首をかしげてつぶらな瞳で見かえしてきた。

「出口だよ。分かる？ 出口」

全く分かっていないようだった。ポポロはももんじやの反応に少しいら立ちを覚えた。

なんならこの場で生餌にしてやろうか——そうも思ったが、もしかしたら途中で思い出すかもしれない。今は腹いっぱいになって、とりあえず安心しきっている状態だからなのかも。

ポポロはまたももんじやの頭に手を伸ばした。もうももんじやは全く怖がる素振り



を見せていない。むしろ、なでてもらうのを期待している風にも見えた。

しかし、実際にそのときポポロの手がももんじやに触れることはなかった。

手が触れる直前に、ポポロの横の壁が大きな音をたてて吹き飛んだからだ。バラバラと飛び散る石の破片を、腕を上げて防ぎながら通路に思わず尻もちをついた。

いったいだれがこんなことをするのだろう——アイアンアントか？ いや、アイアンアントは壁を掘るのであって、こんな風に吹き飛ばすようなことはしない。考えられるのは父さんが爆薬を使ったか、マーニヤのイオ系の魔法くらいか。たぶん、通路越しに自分の声が聞こえたから、壁を壊して助けに来てくれたのだろう。それにしても、荒っぽい壊し方をするもんだな。せめて声でもかけてくれればよかったのに。あともう少し威力が強ければ爆風で自分も怪我をしたかもしれない。

ポポロは咳き込みながら服に飛び散った破片を払い落して立ちあがった。

——あともうちよつとでミンチになるところじゃないか——

そう言おうとした言葉を、ポポロは思わず飲み込んだ。

もうもうと立ちこめる粉塵が収まると、ポポロの想像したトルネコやマーニヤの代わりに、闇の中で光るバーサーカーの目がそこにあった。

それはまっすぐにポポロを見つめていた。

バーサーカーにしては、ずいぶんと澄んだ目——なにか悟ったような目——をしてい

るな。そんなことをポポロはふと思ったが、そう思えるのはさつきクリフトの目を見ていたから、なのかもしれない。

「じいじ、歩くのおそーい」

天井スレスレからアリーナが声をかけてきた。ブライは、老人の中ではまだまだ自分は元気な方だと思っていた。足腰も割としっかりしている方だし、記憶力もそれほど衰えていない。だが、さつきのアイアンアントの襲撃で転んだとき、どこか変なところがぶつかっただろう。歩くたびに足のつけね辺りがズキズキと痛んだ。一刻も早く、クリフトに回復してもらいたいところだ。

「早くしないと、日が暮れちゃうよ〜」

「そう年寄りを急かすもんでない」

「だいたい、日が沈もうが爆発しようが、この穴の中ではどうでもいいことだ。」

「もう。そんなこと言ったらいつまでたってもここから出られないよ」

ブライは頼むから黙って歩いてくれ、と願った。今にして思うと自らの人生の転落は、アリーナからも相当の影響を受けているのではないだろうか。アリーナは異形に変化してまで戦闘力を手に入れたが、それによって隣国との婚姻はご破算になった。現在

の国王も年齢的にそろそろ後継者を決めておかねばならないし、そこで候補に挙がったのがクリフトだった。もちろん、ブライは必死になつてそれを止めようとした。酒びたりに国務に耐えうるタマではないし、所詮は平民の出でアリーナとは身分が違った。

ブライの説得に、国王も最初はその通りかもしれない、ブライが言うならやめておう、と引きさがつたが、他の王子とアリーナとのお見合いが次々と破談になつてゆくうちに気が変わった。

幼馴染でもあるし、やはりクリフトがいいのではないか。国王に足りない部分は、今から我々が教育してゆけばなんとかなるのではないか。何といつても勇者と共に魔王を倒した、国内では英雄とも称えられる人物なのだし、素質は十分にあるはずだ。

ブライは必死に考え直すように言つたが、今度ばかりは国王も決心が堅かつた。国王はブライにクリフトを連れてくるように命じた。

結果は、おおむねブライの予想通りだった。ひとつ違ったのは、クリフトの高尚な趣味に麻薬が加わつたことだった。

まあ、仕方のないことだ。もし自分がクリフトの立場だったとしても——目の前に見えるアリーナの大ききたくましい背中を見ながら思った——やはり断つただろう。

ここまで考えていたところで、アリーナの動きが急に止まった。

さつきまで他人に急げと言つていたのに、何をしとるんじや。

「ねえ、じいじ。もうちょっと奥の方の通路を照らせない?」

アリーナの指さす方に目を凝らしたが、ブライの老眼のかかった目では何も見えなかった。

「何か見えたのか?」

「はつきりとは見えなかったけど、たしかに何かいるよ。気配もするし」

仲間だろうか? だが仲間なら向こうから近付いてくるはずだ。何か嫌な予感を感じながら、ブライは杖の先を通路の先へと向け、今まで放射状に広がっていた光を調節して、前方へ集中して放射するようにした。

そこにはももんじゃが一匹、ポツンと立ってこちらを見つめていた。

「ねえ、なんでこんなところにいるのかな?」

「おおよそ、さっきのアリンコどもが餌として運んで来たんじやろ」

「それにしても、なんか言いたそうな顔をしてるよね」

アリーナの言うとおり、ももんじゃは明らかにこちらに対して訴えかけてきている。闘うわけでもなく、かと言って逃げるわけでもない。

「ちよつと近づいてみようよ」

アリーナが一步前へ踏み出す。ももんじゃは耳をピンと立てただけで、まだ動かない。

もう一步。

そこでももんじやも少し後ろに下がった。

またもう一步。

今度は通路を曲がっていった。

「ねえ、ちよつと追いかけてみようよ」

やれやれ。面倒なことになった。昔から、アリーナは一度言いだすとブライが止めても聞きはしなかった。

だが、このまま当てもなく暗い通路を進むよりは見込みがあるかもしれない。足の痛みを我慢しながら、ブライはアリーナについて歩いていった。

俺たちは女王アリとその親衛隊とちよつとしたバーベキューパーティーをしたあとで、丸焼きになった女王（と思われる）の死骸の上に腰をおろした。

ライアンが嫌な予感がすると言った直後、松明をつけたら目の前にデツカイ女王様の御尊顔が浮かび上がったから、このダンジョンなれしてる俺でも正直言っけつこうビビったし、不安も感じた。だが、実際に戦ってみると火炎放射器でほとんど一撃だった。

兵隊アリが女王を守るように密着していたので、いったん火がつくと勢いが止まらな  
い。やつら、焦って尻から蟻酸を出して必死に火を消そうとしていたが、俺が火薬壺を

投げつけたらもはやそれでフィニッシュだった。運よくもえさかる火炎をまぬがれたヤツも、逃さずライフルで撃ち殺していった。中には勇敢にも最後の賭けに出てこちらに向かつてくるツワモノもいたが、すぐにライアンの昆虫標本のコレクションと化した。

「意外とあつかなかつたな」ライアンが言った。

「まあ、何にせよ、アンタの『嫌な予感』が外れてくれてほつとしてるぜ。それにしても、今でずいぶん倒したみたいだな。まだファンファーレが鳴ってやがる」

レベルアップの例の音楽が、すでに1分は鳴り続けていた。あの女王アリは意外と経験値が多かったのかもかもしれないな。同時に普通のアリンコも相当倒したしな。コンボポーナスでも入ったのかもしれねえ。たぶん、この戦いだけで20〜30くらいはレベルが上がったんじゃないか。

だが景気のいい音楽もずっと鳴り続ければいい加減うんざりしてくる。やつと鳴りやんだときには、ライアンもホツとしてたと思う。さつきまでは耳がイカレちまうんじゃないかと思うほどの静けさも、そのときは十年ぶりくらいになつかしく感じられた。「他のやつらはどうしてるんだろな? まあ、多分元気でやってると思うが」

「このボスは倒したことだし、もう何の心配もいらないだろう。それよりトルネコ殿。少しききたいことがある」

下の女王アリの死骸はまだ温かった。

「ダンジョンの奥に油田があるという情報、どこから入手したの？」

「教えたくなかったら？」

「まあ、それなら無理にききはしないが」

俺だつて、別に本当に教えたくないわけじゃなかった。こんな穴倉の中よりも秘密の話をするのに最高の場所は思いつかない。ここなら聞いているのはライアンと虫ケラの死骸だけだしな。

「いや、おしえるよ。ライアン、アンタにだけはちゃんと教えるよ。実はな、ネネの会社の中からそういう情報を盗んできたんだよ」

「大変だったのではないか？ あのネネ殿のことだからな。そういう情報は嚴重に保管しているだろう」

「ところがどっこい、そうでもなかったんだな。たしかに警備は嚴重だったがよ、俺は小指一本で崖つぶちにぶら下がつてるとはいえ、一応ネネ社長の戸籍上の夫なんだぜ。社内に入り込むのは簡単さ。あとはセキュリティガチガチのパソコンの中からデータを引っこ抜くだけだが、これも今までの冒険で手に入れた盗賊の壺で一発さ」

「やはりトルネコ殿は一流の冒険者だな」

「おいおい、まるで商人としては二流みたいじゃねえか」

「いや、商人としても一流だ。ただ、その中でも特に冒険者の方が向いていることだ」

それからライアンはヒゲをいじって何か言おうとしたみたいだが、結局それは言葉になることはなかった。代わりに出てきたのは今までの人生をなげいているのか、戦闘が終わっていつぶくしている安堵なのか分からないため息だけだった。

それから私は「ネネ殿があんなふうにならなかつたら」と言おうとしたが、やめておいた。人生のある地点まで戻ってやり直したいと思うのは、人間誰でもよくあることだ。だが、ここでそれを言うのは負けを認めるようで嫌だった。それを言うべき時は、油田を発見して地上に戻ってから。どこかに別荘でも買ってふたりで夕陽を見ながら晚餐をしているときにでも言うのがふさわしいだろう。夕陽は私たちの今までの苦痛や悔恨を連れて、地平線の下へと沈んでゆく。沈みきる瞬間に夕陽はいつそう輝きをまし、空の淵を濃いオレンジからダークブルーのグラデーションに染め上げる。陰影で大理石の塊のようになった雲は、重力法則をあざ笑いながら優雅に横たわる。そして何ものかが息を吹きかけたかのように突然最後の陽光が消え、頭上ではさつきまでいなかったはずの星が瞬きはじめる。そこでやっとトルネコ殿は口を開くだろう。

「これを見ずに仕事なんかしてるヤツは哀れ極まりないな。ネネと違って、俺たち幸せ



者だぜ」

私たちふたりは声をあげて、それこそいつ以来かもわからない、心の底からの笑い声をあげる。他人を貶めるための笑いではなく、純粹に自分を祝うための笑いを。

おそらく、それは人生最良の日になるだろう。

「それにしても俺たち、けっこうエゲツナイところに来ちまったな」

暗い洞窟の中で、トルネコ殿が口を開いた。

「誘つたのはトルネコ殿だぞ？」

「ハハツ、よく言うぜ。アンタら全員、飛びついてついてきたじゃねえか」

私は少しだけ抗弁しようとしたが、無駄に終わった。商人の口のうまさに、私はほとんど抵抗できずに言いくるめられた。これが店の中だったら、たいして欲しくもなかった武器を買わされていたところだ。さつきは「冒険者の方が向いている」と言ったが、根は商人なのかもしれない。

それからしばらくの間、私たちは消し炭になった女王アリのの上に座って話をしていった。意外にも、これほど悪臭立ちこめる場所でも話は弾んだ。私もそうだったが、トルネコ殿もそうだったと思う。早くここを立ち去りたい——だが話が盛り上がってなかなか離れられない。

このとき、私たちはやまびこの帽子でも被っているかのように喋り続けた——国王に

対する愚痴（接待麻雀や接待将棋の話から裏金、汚職の話まで）、家族に対する愚痴、臆病で他力本願な癖に他人からもらった恩はすぐに忘れてしまう一般大衆に対する愚痴、勇者に対する愚痴、仲間に対する愚痴、魔王に対する愚痴（もう一回復活して世界を恐怖のどん底に沈めて欲しい、など）、といった調子で話は大いに盛り上がった。

たぶん、話の途中でやつが現れなければこの愚痴は人類が滅び世界が終ったあとも続いていただろう。

そう、あいつが通路の暗闇から赤い目を光らせてやってこなければ。

私の嫌な予感はどうしてこんなによく当たるものなのだろうか。自分でもうんざりしてくるほどだ。

## 23. ダンジョン50階層にて4

吹き飛んだ衝撃で体の節々が痛んだが、今はそんなことにかまっていない場合ではなかった。一步一步、悠然とバーサーカーが近づいてくる。エリミネーターの斧を握りしめながら。瞳の中には、バーサーカー特有の、あの狂気じみた光はなかった。純粹なオリハルコンのように澄みきっていて——底のほうには殺意だけが——降り積もった粉雪みたくに静かに沈殿していた。

ポポロは、少なくともクリフトよりは不思議のダンジョンに潜った経験があるし、モンスターのことなら今回のメンバーの中で一番詳しいだろう。しかし、このような目だけはどんなモンスターであれ——いや、人間であれ——見たことがなかった。少なくとも、野生のモンスターの中では。人に飼いならされたモンスターならこんな目をしたやつを見たことがあった。ただ、そいつと主人の人間は、互いに並々ならない信頼関係にあった。互いに命を預けているというやつだ。そいつも、似ているのは澄みきった目だけで、その奥の光まで似ているわけではなかった。

いま目の前にいるバーサーカーには信頼とかいうチャチな毒消し草みたいな感情はない。ただ、それとは対極の——孤独。

ポポロがどんなに手を尽くして洗脳しようとしても、こいつは絶対に仲間にならないだろう。普通はどんなモンスターでも群れたいという本能がある。はぐれメタルなどでも、心の奥底には必ずそういう感情がある。ポポロをはじめとしたモンスター使用は、そういう魔物の深層心理をうまく掴んで手なづける。

ところがこいつにはそれが無い。  
魔物じゃないから？

今のポポロにはこの疑問に対する答えは見つけられそうになかった。それよりも一刻も早く対処すべき問題があつた。

肺の中に粉塵がまだ入っていたのか、ポポロは三回ほど大きく咳き込んだ。

バーサーカーはそれを眺めながら、ゆっくりと瓦礫の丘を乗り越えてやってくる。ポポロの前で、いったん斧を握りなおした。

このとき、ポポロはトルネコからもらった拳銃を取り出そうと思つたが、慣れてないのでやめておいた。

バーサーカーはしばらく目の前の非力な人間を殺していいものかどうか悩んでいるようだったが、すぐに決断が下された。ゆっくりと斧を頭上に持ち上げる。

タイミングはバツチリかな。ポポロはそう思いながら、さつとカバンの中からモンスターの壺を取り出し、頼れる「本当のともだち」を解き放つた。

突如何もなかったはずの空間に巨大な物体が出現したのを感じ取ったバーサーカーは、気配のした方を見た。そこには不気味に光る玉がひとつ——ギガンテスの目だった。

バーサーカーが身構える間もなく、ギガンテスの振りかぶったこん棒は通路の一部を吹き飛ばしながら目標に直撃した。

バーサーカーはその生涯で最大の加速度を味わいながら、そのまま行き止まりの壁まで吹っ飛んで激突し、めり込み、突き抜けた。

ギガンテスの攻撃でもうもうと立ちこめる粉塵に、またもや咳き込んだポポロだったが、それがおさまると言った。

「チヨロいやつだったね」

軽くハイタッチ。とはいえかなりの身長差があるため、ギガンテスが屈みこんで、ポロの方がジャンプしてやっと届くくらいだったが。こうやってモンスターに孤独な心を慰めてやるのも魔物使いとしての仕事だ。

それにしても、あのバーサーカーはいつたいたんだっただろう？ このダンジョンにいること自体がよく分からないし、それにあの目——おかしいと思つたのも気のせいだったのだろうか。ただ突然壁を突き破ってあらわれたことに気が動転し、ありもしないものを見ただけなのだろうか？

たぶん、そうさ。現実はいつも下らなく、あつけないものさ。僕はただ、気が動転していたのと、洞窟の暗闇のせいでもいつもと違うように見えただけ——

「さ、もういこうか」

ポポロはギガンテスを促すと、バーサーカーが吹っ飛んでいった方向とは逆の方へ足を向けた。できることならさっきのバーサーカーの死体を確かめたかった——でもどうやって確かめるの？ あの一撃を喰らったんなら、もうなんの死体なのか分からないほどのミンチになっているはずじゃないか。だいたい、確かめてどうするつもりなんだよ——

自分にそう言い聞かせていたが、2、3歩進んだところではやくも耐えきれなくなつて振り返つてしまった。

どうせ何もないに決まつてる。この世には神も幽霊も天国も地獄も夢も希望も愛も勇氣もないのさ。ただ無慈悲なだけの現実が素っ裸で転がっているだけさ。

だが、バーサーカーだけはそこにあつた。わずかな光に照らされて悪霊（おに）のように見えたが、間違いなく現実の存在としてそこにあつた。エリミネーターの斧までそのまま手に握られていた。

ポポロはあの一撃を喰らつて生きている生物がいること自体に驚いたが、攻撃した本人のギガンテスはもつと驚いていた。いや、それどころか怯えすら感じている。ギガン

テスの驚く表情を見て、ポポロの驚きはさらに倍加した。最強の部類のモンスタ―が、借金取りに追われる商人のように怯えている様子は、世界樹の花が咲くより珍しいかもしれない。

ポポロはトルネコからもらった拳銃を取り出そうとした。慣れてなくても仕方ない。ギガンテスに「待て」の合図を送り、カバンの中の鉄のグリップを握りしめた。だが、ギガンテスは恐怖に耐えきれなかった。あの痛恨の一撃が全く効かなかったのだ。焦つてしまうのも無理はなかった。

ギガンテスは、ポポロの制止も無視してこん棒をふりあげ、天井に拡張工事を施しながらまっすぐにバーサーカーへと振り下ろした。

ポポロの近くに、天井から削れた大きな岩の破片が落ちてきた。あれが当たつていれば脳みそが地面に飛び散り、ヒカリゴケの肥料かアイアンアントの餌になつていただろう。

当たらなかつたのは幸運だったが、それと釣り合わせるかのように、ギガンテスの痛恨の一撃も当たつてはいなかった。

――バランスシートは常にプラマイゼロなんだよ。資産ひく負債は常にゼロにしかならねえんだ――

父親がよくそう言っていたことが、なぜかこの場面で急に頭によみがえつてきた。

いや、避けられていたほうがマシだったかもしれない。バーサーカーはギガンテスの振り下ろした巨大なこん棒を、片手で支えていた。つまり、さっきの痛恨の直撃も、コイツにとっては大したダメージにはなっていないということだった。

バーサーカーはギガンテスのこん棒に両手をあてがいがい、それをはねのけた。ギガンテスの目が驚きに見開かれた。少なくとも、ポポロはこのギガンテスが単純なちから比べで負ける場所など見たことがなかったし、今の状況で見たくもなかった。いったんモンスターの壺に戻して、グレイトドラゴンと交代させようかと思った。しかしこの狭い通路内で灼熱の炎を吐いたら、ポポロの方がバーサーカーより先に蒸し焼きになってしまうだろう。

それに、バーサーカーとギガンテスの距離が近すぎる。バーサーカーは、あろうことかこん棒をはねのけた後、ギガンテスのふところへ飛び込んで逆に距離を縮めたからだ。確かに、こうすればこん棒での攻撃はできなくなる。

ギガンテスのかしこきは低いが、戦闘においては馬鹿ではない。持っただけでも無駄だと悟ると、すぐにこん棒を手放し、近づいてきたバーサーカーを掴み取ろうとした。

しかし、バーサーカーは予想よりはるかに速かった。ギガンテスには影すら掴ませず、そのまま股下をくぐり抜けざまに足を切りつけ背後に回った。ギガンテスの左足からしぼんだ風船みたいに力が抜けてゆき、ついに膝を地面につけた。そうすることに



よつて、尻から頭部にかけて、登るのに最適な登山道が出来上がった。少々急ではあったがネクロゴンドの山道を登ったことのあるバーサーカーにとつては、軽いハイキングコースに過ぎない。

バーサーカーはギガンテスが体勢を立て直す前に、一気呵成に背骨の上を跳躍して左腕を首に巻きつけた。そして右腕の斧を持ち上げ——振り下ろされるかと思つた瞬間、ギガンテスの拳がバーサーカーを横殴りにした。ダメージは大したことはないが、衝撃で斧はどこかへ飛んでいった。

バーサーカーは拳の嵐を身に受けながらも、もう少し上に登ると今度は両足でギガンテスの首に巻きついた。そうやって体をしっかり固定してから——今度はギガンテスが拳の嵐を味わうことになった。

ギガンテスはポポロが今まで聞いたことのないような叫びをあげた。それは小動物が天敵を威嚇しているようにもきこえるし、戦場で敵軍を目の前にした兵団が発している叫びのようにもきこえた。

しかし、どちらにせよ、今まで数多の獲物をあの世へ送りこんできたギガンテスが、今度は自分がそうなるかもしれないと思つてのことだけは容易に読み取れた。

ギガンテスは立ちあがつて天井にバーサーカーをぶつけようとしたが、片足に全く力が入らないので天井スレスレのところまで惜しくも届かなかった。だが、壁に倒れるとき

に斜めに倒れていったのが幸いして、バーサーカーを壁にぶつけることには成功した。半分壁にめり込みながらも——しかし全く意に介さない様子でバーサーカーは締め付ける足をゆるめる気配はなく、逆にギガントスの頭を壁に打ちつけはじめた。ギガントスも負けじと壁にめり込んだバーサーカーに向かって鉄拳弾雨を浴びせかけるが、いかんせん背後を取られているので本来のちからは發揮できない。やがて我慢できなくなつたギガントスが悪魔のような断末魔をあげながら——いや、たしかこいつは真正正銘の悪魔の仲間だつたつけ——文字通り悪魔の断末魔を上げながら、右に左に体を壁に打ち付けはじめた。打ちつけるたびに、ダンジョン全体が揺れているような錯覚におちいった。

ポポロはこのときになってようやく拳銃をカバンから取り出して狙いを定めようとしたが、すぐにそれは死人にベホマをかけるくらい無駄な行爲であると悟つた。下手すれば、ギガントスのほうに命中するかもしれない。いや、的の大きさからして十中八九そうなるだろう。

それでもポポロは麻薬常習者みたいに震える手をなんとか抑えつけようとしながら、狙いを定めた。

——モンスター使いがモンスターを見捨てられるわけがない——  
モンスター使いの中には、雑魚モンスターを捨て駒にしている者もいる。だが、ポポ

口はそれが嫌いだった。せっかく自分が手間ひまかけて育てるのだから、強くして誰にでも自慢できるようにしたい。しかも今回連れてきたのはポポロの中でも特にお気に入りのモンスターなのだ。最悪ギガンテスに当たったとしても、いずれは世界樹の葉で復活させればいい。それも無理なら（こういうのを本当に最悪の状況、ていうんだろうね。父さんのよくいう糞づまり、てやつ）クリフトに頼めばザオリクでよみがえらせてくれるだろう。

さつきより一層激しくなった咆哮が、通路の壁に反射してポポロ全体を包み込んだ。ギガンテスが苦しみにのけぞりながら、後頭部に手をやってバーサーカーを払い落そうとしている。ポポロはゆっくりと狙いをつけた。もしかしたら、今なら当てられるかもしれない。

「絶対動くな！」

思わず声に出してしまった。この状況で聞こえているとは思わないが、とにかく言わずにいれなかった。

だが聞こえたかどうかは知らないが、しばらくギガンテスの動きは止まった。おかげで、ぴったりと照準をあわせることができた。

急に動きが止まって何かを勘づいたバーサーカーが振り返った。

ピツタリだった。

バーサーカーがしまった、という表情をした。

ポポロはゆっくりと引き金を引いた。

しかし期待した発砲音は聞こえず、引き金は乾いた音を立て、途中で止まった。

ポポロは信じられなかった。いくら力をこめて引き絞っても駄目だった。

——撃鉄を上げるのを忘れるなんて!!

今度はポポロが完全にしまった、という表情をした。

それを見たバーサーカーはニヤリと痛恨の笑みを浮かべた。

ギガンテスも、首を絞められ意識を保っているだけで限界だったが、ここでついに耐えきれなくなった。地底で抑えつけられていたマグマが勢いよく噴出するかのようになり、いきりたつて暴れ出した。こうなれば、もうポポロの言うこと聞くことはないだろう。

ポポロは身の危険を感じて二、三步後ろに下がった。もはや見境を失ったギガンテスは何をするかわからないからだ。かといって、完全に諦めたわけでもなかった。

ギガンテスは、しばらく無意味に手足を振りまわしていたが、ひととき大きな咆哮をあげると残った渾身の力をこめて壁に激突した。

そのとき飛び散った破片の一部がポポロに降りそそぎ、さらにその中の一つがポポロの頭部へ見事に命中した。

ポポロが溶暗してゆく視界の中で見たのは、ギガンテスがついに壁を突き破って闇の

中へ消えてゆくところだった。

そしてポポロの意識も、闇の中へと消え去っていった。おそらくヒカリゴケすら生えないだろう闇の中へと。

「今、なにか音がしなかったか？」

ライアンがそう言うものの、いくら耳を傾けても闇からは何も聞こえてこなかった。

「おいおい、俺のスカしつ屁がばれちまったか？」

ライアンはトルネコの軽口を無視して立ち上がると、通路の奥の闇へ目を凝らした。

一瞬、何も無視することはねえだろ、とも思ったが、ライアンがこういう言動を取るのとは大抵異常を察知したとき、と相場が決まっている。普通の人間なら「ただの空耳」や「悪い予感」程度で済ませるところだ。だが性質(たち)の悪いことに、ライアンのそういう予感の的中率は100%を誇る。トルネコも自らのスカしつべの臭いを気にしている場合ではなかった。これが悪臭ただようアリの墓場だというのにけっこう臭つてくるのが自分にとっては気になることだったし、体調が悪いのかと思ったりしたが、どうやらそういう話はここら辺でおしまいようだ。

トルネコはスカしつべを吸収した女王アリの死骸から立ちあがると、ライアンの近くまで移動した。

そのとき、はるかな通路の奥から悲痛な叫び声が聞こえた。

「トルネコ殿……」

「ああ、今のは俺にも聞こえたよ。人間か？ それともモンスターか？」

「そこまでは判断がつきかねるな。できればモンスターであつて欲しいが」

それから低い地鳴りのような音も聞こえてきた。やがて、最後に弱々しくなったかすかな悲鳴とも嗚咽ともとれるような声……そして静寂。

一体何が起こっているのか？ 疑問に思った二人が互いに答えを求めて互いの顔に

視線を移したとき、耳をつんざくような大音量のファンファーレが鳴り響いた。

ちやららん、チャツラツラー

ちやららん、チャツラツラー

ちやららん、チャツラツラー

!!!!!!!

いつまでも続くかと思われるほど長く続いたが、それもピタツと止んだ。普段は景気のいい音楽にも関わらず、それはこのときの二人にとつては地獄の底から吹き鳴らされたもののように感じた。

俺たちの、じゃねえよな？

トルネコが視線で送ってきたが、それは考えなくても分かった。

ファンファーレというより、そら寒いサイレンのような響き。今すぐ、この場所から避難したいという切実な欲求がこみ上げてきたが、それは金銭的にも状況的にも叶わないことだった。

「来るぞ」

思わず口をついて言葉が出てきた。何が、とは言わなかったが、好みのお姉さんが裸で出てくるわけでないことだけは、トルネコには十分伝わっていた。

通路の奥から、だんだん大きくなる足音だけが近づいてくる。それは実際以上に大きくなり、やがてライアンたちの脳内ではダンジョン全体を震わせるような大きな音になっていた。

それから、ようやく闇の中から一人のバーサーカーが現れた。トレードマークの額の宝石はなかったが、完全にバーサーカーだ。さらにそいつは武器すらも持っていないかった。代わりにその手には人間の頭ほどもある大きな目玉が握られており（見た目から察するに鮮度は抜群のようだった）、そこから滴る血が地面に黒いシミを作っていた。

お前らのためにさ、地獄のお土産屋で買ってきてやったんだぜ、気に入ったかい？

バーサーカーの狂気じみた微笑みがそう言っていたが、当然ながらそんなお土産は本人と一緒に地獄へ送り返してやるつもりだった。

ライアン自身が、その復讐に燃えるバーサーカーによって地獄へ叩き落とされるまで

は。



## 24. ダンジョン50階層にて5

「しばしとどまれ、永遠にとどまれ……」

クリフトは首のなくなったマリア様に向かって何やらブツブツ呟きかけながら、姉妹の後ろをついて歩いていった。

「お前の人生をかけて走れ、永遠に走れ……」

姉妹からすれば、とんだ罰ゲームだ。こんな暗い洞窟の中で精神異常者のお守りをするなど。クリフトに轡をはめ、手綱を握るのは本来トルネコの役割のはずだ。だから、姉妹はまさか自分たちだけで仲良く脳みそ下痢グソ状態（耳の穴から臭ってくるくらい）の神官を介護することになるうとは、夢にも思っていなかった。ただ、それを言うならそもそもこんな穴ぐらに潜ること自体も夢にも思っていなかったのだが。

人生って分からないものなのわ。

マーニヤもミネアも、若い女性にしては珍しくそれを心の底から痛感した。魔王を倒しに行ったとき——姉妹がさらに若かったときだ——は『分からない』は魔法の言葉だった。そこから希望や明日への意欲や熱意のようなもの——もうそれも昔のことだから本当はどうだったのか分からないが、記憶が正しければ『分からない』はかつてそ

ういったものを生みだしていた。もしかしたら昔の思い出は美化されるというやつなのかもしれない。でもまあ、確かに昔は良かった。魔王という巨悪があり、それを倒すという明確な目標があった。色んなことが許されていた。他人のタンスの中からゴールドをくすめることも。カジノでそれをスッてしまうことも。

ただ、姉妹は自分たちが過去を美化するほど年をとっていないと信じたかった。今のこの洞窟の中の『分からない』は、ただ単に『お先真つ暗』という意味でしかない。物理的にも、心理的にも。

一刻も早く、この暗い穴ぐらから抜け出したい。そして狂気を宿した厄介極まりないお荷物をトルネコにお返しする。ついでに人生のお荷物もトルネコにどうかしてもらいたいものね。油田さえ、油田さえ見つけちゃえば――

「ベホマベホマベホマベホマベホマベホマベホマベホマ……」

姉妹の共通した思考は、クリフトが再開した眩きで中断されることとなった。

姉妹の「物の道理」を聞いてから、クリフトはいったん元気になった。なつたはいいが、その後暗い迷宮を進むにつれて、その元気の風船は急激にしぼんでいった。

「あ、そうだ！ ザオリク！」

しかしMPがたりない！

もはやMPすら使い果たしてしまったらしい。

「ベホマ」しかしMPがたりない！

「ベホマ」しかしMPがたりない！

「ベホマあああああああああ!!!」しかしMPがたりない！

何をやっても自分だけのマリア様はもう戻ってこないんだと悟ると、クリフトは通路にしゃがみこんで嗚咽を漏らし始めた。

ヒック……ヒック、ウエ……

それはまさに、酔っぱらいが駅のホームでえづきながらうずくまっているような光景だった。

アンタも辛いのはわかるけどさ、こっちはもつと辛いよ。

「ミネア、もうほうつとこうよ。関わるだけ無駄だつて」

「じゃあ回復役はどうするのよ？ クリフトがいないとザオリクを使えないわ」

「今でも使えないでしょ」

「そういうことを言ってるんじゃないの。とにかく、クリフトの力は後々の冒険で必要よ、たとえば本人が狂っているとしてもね」

油田を見つけるために必要——なら仕方ない。

「どうしても必要なのね？」マーニヤが念を押した。

「ええ、どうしてもね」

マーニヤはつかつかと歩み寄ると、首根っこを掴んでクリフトを無理矢理立ち上らせた。それから拳で2、3回クリフトの顔面を殴った。普通の魔法使いと違って、マーニヤはカジノのスロット台を叩いていたので（もちろん負けがこんだときで、その機会は頻繁にあった）、クリフトの顔面くらいではさして痛みを感じなかった。

「いい加減にしろよ、このクソキチガイ脳みそザーメン野郎が」

そう言いながらクリフトの顔を壁にめり込めせるようにして叩きつけた。一応、ヒカリゴケの生えているところを狙ったのはマーニヤなりの思いやり精神だった。まあ、むき出しの岩壁よりかは、ヒカリゴケがあれば幾分かクッションにはなるだろう。

クリフトはほとんど意識を失い、地面に崩れ落ちた。そのとき、わずかに残った意思の力によって、クリフトの両手が何かをつかもうともがいたが、岩壁を虚しく引つ掻いただけに終わった。

「あらあら」

マーニヤがかがみ込んでマリア様を拾いあげる。

「あーあ、大事な大事な聖母様を落としたらダメじゃん、クリフト」

「そ……それを放せよ……く……そばい……た……」

「え、なんて？ もっと大きな声で言ってくれないとあたし分かんない」

今度はマーニヤがマリア様を使って人形劇を始めた。マリア様の首と片腕がなく

なっていること以外、クリフトがポポロに見せてやった人形劇とマーニヤの人形劇は、偶然にも酷似していた。まるで同じ場所から生まれた双子のように。

「わたし売女！ アソコがとつてもイカ臭いの！」

マーニヤはマリア様の足を限界まで開いて、そのイカ臭い場所を指しながら言った。

よくやるわ。ミネアはそんなことを思ったが、一方で久々にスカツとした気分を味わっていたことも事実だった。ただし、ミネアはあんな汚い——心理的にはもちろん、へタをすれば衛生的にも汚いかもしれない（ひよつとしたらクリフトはあのフィギュアに毎日寝る前にディープキスしてたのかもよ？ ウゲツ）、気持ち悪い——物を素手で掴む気にはなれないだろうが。

「じゃあ、そんなマリア様を使って、ちよつとしたマジックショーを披露しまーす！」

何と、マリア様が消失しまーす！ もちろん、タネも仕掛けもありませーん！ それ

じゃあ、皆さん、成功したら拍手をお願いしまーす！」

「やめろ、やめてくれ……俺の取り分の半分をやつてもいいから……それだけは……やめて——

全部言い終わる前に、クリフトのみぞおちにマーニヤの靴先がめり込んだ。足先自体も踊りで鍛えられていたが、蹴りの動作そのものも踊りのように洗練されて無駄のない動きだった。地面にうつ伏せに倒れこむクリフト。それをまたしても蹴って、無理矢理

マリア様の方へ視線を向けさせた。

「よく見てろよ、詐欺野郎。またイチビったら今度はお前がこういう風になるんだよ」

マーニヤの手から煙が上がったと思うと、そのままブスブスとか弱い音を立てて、マリア様はこの世から消失した。代わりに、マーニヤの手から絹のような手触りの灰がサラサラと舞い落ちた。

その灰の一片がクリフトの顔に落ちたとき、クリフトは思い出した。マリア様からもらった励ましの言葉の数々を。辛い日々の中でそれがどれだけ心の支えになったのかを。毎日寝る前にお休みのキスをしていたことを。たまにザーメンをかけて怒られたことを。そしてマリア様とさらに親密になると、一緒にお風呂に入ったことを。

自然と涙が出た。クリフトの人間的な何かと、非人間的な何かが混ざり合った涙が。

「キヤハハハハハ！ ねえ見て、ミネア。泣いてるよ！ お人形が消えただけで、マジで泣いちゃってるのー！？」

泣いちゃっていた。今ではもう、涙は完全に閥を切っていた。

「きやー！ー！！ テメエみたいなクソキモオタクでも流せる涙があるってことにビックリだわ！ テメエのケツを吹いた紙キレを免罪符とか言って売っちゃってる詐欺師のくせに！ チンポ以外の場所からも涙を流せるのね！ すごいわ、ホント、すごー

もし、このとき突然壁を突き破った剣がマーニヤの首を横から刺し貫かなかつたら、

クリフトはマーニヤの予想以上に豊穡な語彙力が味わえただろう。

言葉の代わりに、マーニヤは逆流した血をゴボゴボと吐き出した。剣は完全に骨と骨の間に滑りこんで頸椎を切断しており、マーニヤの頭は残った僅かな筋肉と皮によつて支えられているのみとなった。何者かが剣を引き抜くと、マーニヤの首から噴水が吹き出した。それは僅かな光の中では黒い飛沫にしが見えなかった。血がヒカリゴケに飛び散り、その血を通して赤くなつた光があたりを照らした。マーニヤが首をガクガクさせながら、自ら作つた血の海に倒れ込んだ。倒れ込んだ時に、首がねじれてミネアのほうへその切断面を向けた。

なぜかマーニヤとマリア様がミネアの中で重なつたのか、今はそのことを気にしてゐる場合ではなかった。何者かが壁越しに攻撃を仕掛けてゐる。奇襲で瞬く間にひとりやられた上、残つた相棒はMPも知能も足りない神官ときてゐる。

必至のかかつた王将——いや、もう詰んでゐるのかも。

と、そのとき壁が崩れて何者かが通路に侵入してきた。

バーサーカーだつた。ついに王手がかかつた。そんな感じがしたが、その考えを必死に頭から振り払つた。確かに、クリフトのMPはなくなつたが、それは時間がたてば自然に回復してゆく。MPさえあれば、マーニヤを復活させることは簡単だ。

そのためにも、このバーサーカーを倒さなくてはならない。

バーサーカーは一瞬神官の方を見たが、神官はもはや敵ではないと悟ると、ミネアの方へ向き直った。

このとき、もしミネアに観察力があれば、バーサーカーの握っている剣がライアンの持っていた「はじやの剣」そのものだったことに気づいただろう。ただ、そこから当然の結論をはじめ出したところでミネアに残された「手」は少なく、結局はこれが詰み開始の王手となった。

ミネアもバーサーカーを地上での戦闘で見たことはある。魔王時代のことだ。あのとときのバーサーカーは確か斧を持っていたように思ったが、まあ斧だろうが剣だろうがどちらでもよかった。

それにしても助かったわ——ミネアはまだこのときはそう考えていた。確かに壁の向こうから剣で攻撃され続けるよりは遥かにマシと言える。こちらは壁の向こう側には攻撃できないのだから。しかし目の前に出てきてくれれば別。地上の雑魚と同じように葬り去ってやるわ。

ミネアはバギクロスを唱えた。バギは「真空のカミソリ」と形容されるが、そこから言えばバギクロスは「真空のチェンソー」だった。それもチェンソーの嵐。

というわけで、ミネアは勝利を確信していたが、心配なのはクリフトがマーニヤを復活させてくれるかどうかだけだった。あれだけのことをやったのだから、ひよつとし



たら拒むかもしれない。そのときは適当に言いくるめて、それでもダメなら力づくでやらせればいい。どちらにせよ、次の階層ではトルネコと合流できる。最悪、トルネコならどうにかクリフトを制御できるはず。

だが、ミネアの華麗な勝利は実現しなかった。

バーサーカーは剣を大上段から振り下ろした。その振り下ろした剣圧で生じた真空波によって、バギクロスはモーセが紅海を切り開いたかのごとく左右にキレイに切り裂かれた。

バーサーカーも無傷ですんだわけではない。腕や肩など、体の外側は真空のチェインソーに触れたことよって無数の切り傷が刻まれていた。けっこうな深手ではあったが、全身がバラバラの肉片になることに比べれば軽傷ですんだと見るべきだろう。

ミネアは茫然自失した。今までマホカンタで反射されたことはあっても、これほど驚きはしなかった。まさか魔法を物理の力で無理矢理捻じ曲げるなんて――

しかしミネアは躊躇せずにもう一回バギクロスを唱えようとした。バーサーカーは完全に無傷ではないし、何回もやられればいつか多数の傷からの出血多量で死ぬはずだ。

だが、不思議のダンジョンでの二回目は許されない。ミネアはそのことを、頭が胴体から切り離された状態で漠然と悟った。

そう、それは人生と同じ。待ったなしで容赦なく詰めにかかってくるものなのだ。ミネアの首がドサリと地面に落ちた。そこで自分の胴体が血を吹き出すのをぼやけていく視界で何となく捉えながら、やがてすぐにミネアの意識のほうもぼやけていった。

切り飛ばした首は、先に倒した女魔道士のとれかけの首の隣へ転がっていった。それはただ単に物理上の偶然でしかなかったのだが、バーサーカーにはそれがとても意味のあることのように思えた。それを見て、急に思い出した。自分が魔族になって、最初にやったこと——勇者たち3人の埋葬。

あのとき誓ったことを覚えているか？

突然頭の中に鳴り響いたその明瞭な声に、一瞬バーサーカーはあたりを見渡した。だが、狂った神官らしき人間がうずくまっているだけで、あたりはどこまでも闇へとつながっていた。

いいから早く思い出せよ。

確か、3人を埋葬しながらいつかゾーマを埋葬してやろうと誓った。そして、それだけを糧に、魔族として生きながら修行に励んだ。しかしその誓はだんだんと忘れられていった、勇者たち3人の記憶とともに。

それからお前は一体どうした？

どうしたもこうしたもなかった。完全にゾーマの番犬となった。そして今、“ゾーマの仇をうつ”ために、こうして商人たちの仲間を殺している。

そんなくらい、もう分かるだろう？

頭の中の声に呼びかけてみたが、返事は帰ってこなかった。

ひよつとしたらこの女魔道士の双子の残留思念なのだろうか？ 人間は斬首されても10秒程度は意識があると聞く。まして魔力を持った人間なら、何か脳内にテレパシーを送り込むことも可能なのではないか？

だが、第一に時間が経ち過ぎていた。もう30秒以上にもなるから完全に死んでいるだろうし、それに頭の中の声は女ではない、男だ。

そこまで考えたが、考えても声が一体何なのかわからなかった。今はもうほうっておけ。それよりやらなければならないことがある——そう、神官の処刑だ。戦闘能力はないが、コイツもあの商人の仲間であり、始末しておく必要がある。

一歩ずつ、血の海を踏みしだきながら神官へ近づいていった。

「……………」

何かしゃべろうとしているが、言葉になっっていないかった。命乞いでも罵倒でもなささうだったが、もはやどうでもよかった。

うずくまる神官の首筋に向けて剣を立てたときだった。

「ねえ、声がするよ」

突然神官が顔を上げて言った。

「ああ、死んだ仲間の声だろう。俺も聞こえたことがある」

目を見てわかったが、この神官はどうていまともな精神状態ではない。もちろん、こんな状況でまともな神経を保っていられる人間がいたら教えて欲しいものだが、だがかしそれ以前に“こいつは狂っていやがる”。

「いや、違うよ。男の声だ。アンタにそっくりの」

一瞬、背筋に寒いものが走った。俺こそ狂ってしまったのではないか？ やめてくれ、頼むからやめてくれ。

「ここから声がするんだ。さっきからずっと」

神官が指差したのはバーサーカーの道具袋だった。神官は体を起こすとその道具袋に勝手に手を突っ込んで探り始めたが、バーサーカーはそれを止めることはしなかった、というかできなかつた。驚いたことに、袋から光が漏れていたのだ。ヒカリゴケよりはるかに明るい、まるでレミールでもかけられたような明るさの光が。

その光が陰った。おそらく、光を放つ物体をクリフトがついに掴んだのだろう。次に光は移動していき、道具袋から完全に外に出た。そして神官の影が壁にゆらゆらと映つ

た。

「ああ、この人だったんだね。この人が言ってるよ」

ゾーマ。バーサーカーが彫ったゾーマの荒い彫刻。今やその石像は、神官の指と指の隙間から光を投げかけていた。神官はゾーマの石像を優しく手で包みながら、耳元へ持つていった。壁に映った神官の影が、ゾーマに変形していくように見えた……いや、見えたただけだ。そう見えたただけだ。もうやめてくれ、こんな狂ったロールシャツハテストなんて受けたくない！

「うんうん、そうなんだ……」

ひとしきり話が済んだのか、神官は立ち上がった。

「なんかね、君は矛盾してるんだって。それもだんだんと君をおかしくさせる方向に矛盾していつているみたいなんだって」

聞きたくない！ やめろ！

「しばしとどまれ、永遠にとどまれ……」

やめろ！

「お前が裏切った時代に向かって歌え……僕にはよく分からないよ……だから直接話してみて」

神官が生まれたてのヒナの鳴き声を聞いてみなよ、といった調子でその光が漏れる手

をバーサーカーの耳に近づけてきた。声は鼓膜を通り越して、バーサーカーの脳細胞へ直接突き刺さった。

——お前は俺のものだ！ お前は魔族だ！ そしてなによりお前は埋葬人だ！ 墓守だ！ お前自身の魂の葬儀執行人だ！ お前にもう安らかな眠りは訪れない！ なぜならお前にもはや魂など存在しないからだ、お前はしなびた精神の住む腐ったアバラ屋にすぎない！——

耐え切れなくなったバーサーカーは、神官を張り倒して一目散に逃げ去った。どこまでも続く闇の奥へと。

鉄の塊になりながら、トルネコは無残なライアンの死体を眺めていた。

あれは今思い出しても鳥肌がたつ……とはいえ、今は鉄化の種の効果で鉄の塊と化している。鳥肌など立ちようがないのだが、精神に残った皮膚の感覚では完全に鳥肌が立っていた。そして冷や汗が噴出する感覚も。

バーサーカーはこちらが戦闘態勢に入る前に、急激に接近してきた。それは完全にトルネコの予想外だった。こいつは銃の射程を十分よく知っている——はずだ。確証はなかったものの、トルネコはあのバーサーカーは、かつてゾーマの手下だったあのバーサーカーに違いないと確信していた。その後、スライムの挑発に乗ったところを奇襲さ

れたのは、今となっては苦い思い出だ。

とにかく、銃の射程を知ってこちらに飛び込んでくることはないだろう。そうタ力をくくっていた。その結果どうなった？

目の前に転がるライアンの死体だ。愛用のはじやの剣を奪われ、それで肩から胸にかけて袈裟斬りされた、無残な死体だ。

ライアンの無残な様子を観察しながら、トルネコは今までの戦闘をまさしく長考していた。あの時点で、俺に何ができた？

まず考えられるのは銃で攻撃することだろう。だがバーサーカーの素早さを考えると、恐らく銃撃はかわされていただろう。前に遺跡で戦ったときより格段に諸々のステータスが上がって、強くなっている。

——草はどうなんだよ？ メダパニ草なんかを投げてやればいいし、他にもなんか色々使えるのがあつただろ？——脳内のもうひとりの自分がそう言ったが、それは却下だ。草の命中率も100%ではない以上、確実な作戦とは言い難い。一回外せば、それで終わり。それにメダパニ草でバーサーカーが混乱しても、攻撃を喰らう可能性は十分ある。一発喰らえば、今の状態だと一撃でやられていた。なにせ向こうは力も半端なく、さらにはじやの剣まで持っているのだから。

そのほかの杖や巻物も考慮してみたが、どれも確実ではなく、あのバーサーカーを倒

すには尋常ならざる幸運が必要になる。

そんなもんがあればそもそもこんな場所に来ることもなかったろうな。脳内のもうひとりの新たなトルネコがそう呟いた。

残った手段はひとつだけしかなかった。

自分が鉄化の種を飲んで、その間に誰かしら階段を見つけてくれるか、もしくはどこかに移動したバーサーカーを誰か倒してくれるか。それ以外に期待しよがなかつた。

バーサーカーはトルネコが鉄化の種を飲んでからも執拗に剣で切り続けたが、効果がないことを悟ると一瞬だけこっちの目を見て——明らかな殺意を込めて——立ち去っていった。

マーニャやミネアなら魔法でどうにかしてくれるかも。ただ、あのバーサーカーがポポロを襲いに行く可能性を考えると、さすがのトルネコも胸が締め付けられるような、そして冷や汗の噴出する感覚をまたしても味わった。それと深い後悔。

結局仲が悪くても、ポポロは自分の息子なのだ。もうネネとの間に新しい子供が生まれることなどあり得なさそうだし、そうなると正真正銘自分のたつたひとりの息子なのだ。

この状況を考えると、思わず神のケツの穴にばくだん岩を突っ込んでやりたい気分させられた。



とにかく、鉄化の種の効果からして、あとの戦術が他力本願になることは致し方ない。問題は鉄化の種の効果が切れたときだ。

その時、俺はどうすればいい？

鉄化したトルネコの頭の中では、何人ものトルネコが熱い議論を戦わせていた。

## 25. ダンジョン50階層にて6

あれほど急かしていたのに、突然アリーナの背中が止まった。

「どうした——」

ブライがそうたずねようとした瞬間、アリーナは強烈な蹴りでブライを弾き飛ばした。ブライは今までやつとこさ歩いてきた通路を逆に吹っ飛んでいって、壁に激突して止まった。一瞬、意識が遠くなりかけたが、何とか意志の力で踏ん張った。なぜ突然アリーナが？ 混乱の罫を踏んだのだろうか？ それとも惑わしガスでブライを敵と見間違えた？ 答えはアリーナが握っていた、通路の壁から突き出た剣だった。

「ごめんね、じいじ。でもああしなきゃ、じいじ多分死ぬと思ったから」

要するに、自分はまたしてもアリーナに命を救われたようだ。ただし、今回は蹴られた胴体と、壁に激突した背中からジワジワとやってくる鈍痛というおまけ付きだった。鈍痛はタンスの角に小指をぶつけたような痛み、あれを腹と背中全体に広がったものと考えればそれほど間違いではないだろう。

こういうときにクリフトがいれば——そう願ったが、いないものはいないでどうしようもない。とにかく、ブライは自分の体に鞭打って何とか立ち上がろうと思ひ、そこら

へんに転がっていた杖を拾い上げようとしたが、それだけで全身の骨と筋肉が悲鳴の大合唱を奏でた。レミーラの効果が切れかけて、杖の先の光が点滅しはじめている。

杖が点滅するたび、世界は死と再生を繰り返した。

剣は相変わらず引つ込められることもないままだが、おそらく剣の持ち主とアリーナとの間で壮絶なちから比べが行われているのだろう。レミーラの杖がまたしても明滅したとき、アリーナの腕が変化していた。腕はさらなる力が加えられて全体が膨らんで丸太のようになっていた。常人なら剣を掴んで止めることすらできないだろうが、このアリーナはもはや常人ではなくなっていたので何の問題もない。アリーナはさらに壁に片足を当てて、そこから全身の力を込めた。

明滅。

背中筋肉が何か別の生物のように盛り上がっていた。その光景は、勝手に焔に入り込んで巨大な根野菜を勝手に引っこ抜こうとする、いたずら好きな子供のように見える。『大きなかぶ』のお爺さんは最初にアリーナ姫を呼べばいい。多分一人で引っこ抜いてくれるだろう。

暗転。

壁のヒカリゴケが動いた。最初はゆっくりとした動きで幻覚とも思ったが、確かに動いている。

光。

壁がひび割れ、完全に盛り上がっていた。噴火寸前の活火山のように見えたそれは、やがてメキメキと音を立てて——噴火した。

ヒカリゴケのついた岩をまき散らしながら姿を現したのは——  
暗転。

「じいじ、ここは私が食い止めるから、早くあのもんじやを追いかけて！」

それから咆哮。アリーナではない。多分、あの剣で自分を殺そうとしたモンスター（おおよそ地獄の鎧あたりじやろ）の咆哮だろう。それからまたしても壁を突き破る音。くぐもった戦闘音。肉と肉がぶつかり合うような音。

光。

照らし出されたのは何もない空間だった。アリーナも謎のモンスターもいない。通路の壁にぼっかり空いた穴だけが、何が起こったのかを物語っていた

はやくあのもんじやを追いかけて！

アリーナの声が、おそらくブライの頭の中でだけ木霊した。体中の痛みを何とか抑えながら、ようやくブライは杖を拾い上げた。

またしてもどこからともなく咆哮があがった。咆哮は迷宮の中を乱反射して、まるでダンジョン全体が声を上げているかのように聞こえた。

本当に早く急がなくてはならんな。

ブライは意を決すると、一歩ずつ引きずるようにして歩き出した。

実際にあのもしんじやが出口を知っているのかどうかも分からない。ただ、姫のあれだけ必死の頼みを断れるほど、ブライはアリーナを見放していたわけではなかった——そう、いつまでたつてもアリーナは——ワシの大切な姫なんじや。

ブライは歩き続けた。アリーナが消えていったと思われる壁の穴の中を照らしてみたが、そこにはもはや誰もいない。向こうの壁のあちこちには、激闘の跡を思わせるクレーターが出来ているだけ。

いや、それよりももしんじやだった。

今更姫を心配しても始まるまい。姫は一度言い出すと周りの言うことを聞かなくなるから。それに、元々強かった姫が、あのモンスターに負けるわけがない……と信じたかった。

今では、姫の戦闘力を何よりも信じたかった。神のご加護よりも。

杖を再度かたむけて、自らが進むべき通路の先を照らすと、そこにはいつの間にかももんじやが佇んでいた。その背後の壁には、さらに大きな黒い平面のももんじやがユラユラと揺れていた。ヒカリゴケの付いた部分がちょうど目のように見えないこともない。

しばらく我を忘れていると、ももんじやは通路の先へと曲がついていき、巨大なももんじやの影絵はダンジョンの闇と一体化して消えた。

相変わらず全身が痛んだが、それを無視してブライは歩き始めた。

このバーサーカーは強い——戦士としての直感でアリーナはそれを悟った。こいつが私のところに来てよかった。もし他の人のところに行つてたら、多分やられていただろうし。

いや、ひよつとしてもう他の人のところに行つたのかも。さらにひよつとすると、クリフトはもう——そこまでアリーナが考えていたところに、バーサーカーの強烈な正拳が顔面に飛んできた。ガードしようとしたが、間に合わなかった。そのまま数メートル吹っ飛んで——

——くるりと宙返りして着地した。

「へえ、かなりやるじゃん」

かなりやるじゃん、どころの騒ぎではない。自分の最高の力を込めて、最適な角度で、最強のインパクトで顔面に叩き込んだ正拳突きをくらったら、普通の人間、ここでいう普通とは種族として普通の人間であつて、要するに屈強な男でも人間であるなら一撃で

頸椎骨折は免れ得ない。今の自分が見ている光景はマヌーサか何かの幻覚か？ さっきも神官のところでも妙な幻覚を見た——このことを思い出したとき、壁に映る神官の影がゾーマの形をしていたことも思い出しそうになって、必死に打ち消した——だが、拳に残っている手応えが「これは幻覚ではない」と訴えかけている。

「女の子を殴るなんて、あまり関心しないなあ。それに今の威力、私じゃなきや死んでたよ？」

「ああ、最初から殺すつもりだったんだよ。ようやく気づいたか？」

自分でもビックリした。あまり戦闘中にしゃべることはなかったはずだ。台詞はもっぱらゾーマの役割だった。自分は魔王劇場の脇役Cに徹するのが仕事であり、それが最もゾーマの望むことだったからそうした。昔はゾーマの部下にバラモスとかいうアホな、竜になりそこねたような顔をした奴がいたが、あいつは目立とうとしてしゃりり出てくるため、ゾーマからも内心は嫌われていた。まあ、アホについていくアホも多かったから、地上攻撃軍の先鋒に指名されたりもした。事実上の左遷だが、本人はアホなので勝手に名誉だと思つて舞い上がっていた。案の定、勇者にかませ犬としてブチ殺されるまでは。

「うん、今気付いた」

どうすればコイツを倒せる？ 体はどう見ても女の子ではない。むしろバーサー

カーより「いい体」をしているくらいだ。鍛え抜かれた筋肉に思わず嫉妬すら感じる。どんな肉體改造をすればこうなれるのか、こんな状況でなければぜひとも聞き出したいところだ。

「なんかうれしいよ。ようやく本気が出せるから」

それは本気で言っているのか？ 思わずそう言いかけたが、情けないので止めた。それにこの人間の少女の顔を無理やりくつつけたような化物は、くだらない嘘をつけるほど賢くないだろう。バラモスはそういう点では頭が回ったつけ。

バーサーカーはさっきの戦闘で吹き飛んだはじやの剣をちらりと見たが、それを使うことは諦めた。剣を素手で掴む相手に剣で攻撃しても無駄だ。

バーサーカーはゆっくりと拳を握りなおした。

要するに、これから本気の戦いが始まる、というわけだ。

長いあいだ鉄の思考機械と化していたトルネコだったが、それもはや終わろうとしていた。もうすぐ鉄化の種の効果は切れるだろう。

結論は出ていた。多少のリスクはある——いいや、多少なんてよく言うぜ、これは致命的リスクなんだよ——でもな、この迷路を解く究極の答えはもうこれしかねえよ——まだ議論は白熱していたが、何にせよもうアストロンは解けてしまうのだ。



アストロン解除後の一手はあれしかない。確かにリスクは伴うし、それは致命的にもなりうる。だが、リスクの綱渡りをせずにどうやって向こうにある人生にたどり着ける？ どうせこのまま生きて帰ったところで、悲惨で残酷な人生しか残っていないというのに。

とにかく、アストロンが解けたら——考えに考えた一手を実行する。あとの戦略はいくつかの状況を大まかに想定して考えてあるが、それはどうなるかわからない。

——だからいきなり50階からスタートなんて無謀だって言っただじやない——  
レミの声が響いたが、「黙って水晶いじりでもやってろ、クソババア」と一喝して黙らせた。

アストロンの解けようとする感触が伝わってくる。鉄の密度によって地面に縛り付けられていたのだが、今それからゆっくり解放されようとしていた。鳥が飛び立つ瞬間も、きつとこのような浮遊感を感じているのだろう。

いつまでも安全な鉄の檻にとどまっているわけにはいかない。ああ、そうさ。俺はここを脱出して見せる。それでネネに見せつけてやるのさ、俺の全てを。俺の商才はお前には全くかなわなかったよ。でもな、商才以外の才能だって俺にはあるんだぜ？

思えば、トルネコの人生はネネという迷宮の中をさまよいつつ続けただけなのかもしれない。今回の冒険で果たしてその迷宮から出られるのだろうか？

指の関節がじよじよに動かせるようになってきた。  
どうやら、すでに賽は投げられたようだった。

手先、足先の感覚はもうすでに消えていた。頭に岩の破片を食らってここが現実か夢か——もしかしたら虚無なのかもしれない。ポポロはかろうじて残った意識でゆつくりとそれだけ考えることができた。それから壁のヒカリゴケが変化して様々な文様を描き出し、やがてそれは見たこともない星座へと変化した——と思うと、今度はさらに明るさを増して真っ青な空になった。そこに映ったのはかつての幸せな自分だった。トルネコとネネと一緒に釣りに行ったときの思い出。天井に映る自分が、釣った魚を入れた保存の壺を覗き込んだ。だが壺の中は真っ暗で何もなく、ひたすらその闇の中へと、落ちていくのか上昇していつているのか分からないまま包まれていった。壺の中の暗闇は空気の色をした水のように感じた。体の末端部の感覚喪失が、どんだん体の中心部へ近づいてゆく。そして光が灯った。ひとつ、ふたつ。最初はヒカリゴケだと思ったが、そのうちいくつかは移動している。

まだアイアンアントが生き残っていた。もはやどうでもいいと、宇宙の外側を考えるようにポポロはそう考えた。たぶん、こちらが死ぬまで待っているのだろう。さらに体の感覚が失われていった。

それとともに、いかなる色も感情も、ポポロの精神から徐々に失われていった。

カリカリカリ……音のする方へレミーラの光を投げかけると、ももんじやが壁を必死に掻いて掘ろうとしているところだった。だが硬い岩を掘れるのはバーサーカーやアリンコ共など、一部のモンスターだけ。ももんじやにその能力はなかった。

ももんじやが顔を上げてブライの方にその目を向けた。目では明らかに「この先に出口がある」と示唆していたが、もはやどうすることもできない。ブライだって壁を掘るのは無理だ。結局、このモンスターは出口など知らなかったのだ。いや、知ってはいた。大体の方向は。野生のカンというやつだろうか。ただし、肝心の迷宮の答えまで知っていたわけではなかった。

カリカリカリ……

それでもももんじやは諦めないというかのように、また顔を伏せて壁を引つ掻きはじめた。

きつとこいつも姫と同じような性格なんじやろうな。ブライは何となくそう思った。そう、一度言いだしたら周囲が何を言っても止められない……

それは魔王討伐までは美点だった。ところがそれ以降は——ひよつとしたらそのせいでこんなアリの巣穴で立ち往生しているのだろうか？

別に姫に責任転嫁をして批難しようというわけではなかった。たとえ姫に責任があつたとしても、それをどうにかしてやるのが教育係のブライの仕事だ。

まずはこのももんじゃをどうにかして壁から引き剥がして、それから迷宮の答えを探さなくてはならない。すぐそこにあるはずの出口が、ブライには遥か彼方にあるかのように感じられた。

クリフトは血の海に膝まづきながら、ひたすら嘆きの壁に頭を打ち付けて自分専用の神へ祈りを捧げていた。その神は、今やクリフトの胸の前で組まれた手の中に収まっている。

ゴツンツ……

ゴツンツ……

ゴツンツ……

メトロノームのように定期的に響く鈍い音は、迷宮全体を利用した神へのモールス信号と化していた。まさに今、クリフトは救いを必要としていた。ここから脱出するため、全ての救済を。

祈りが最高潮に達し、今までより大きく頭を仰げ反らせた。そのまま頭を壁に打ち付ける——はずだったのだが、なぜだか壁を通り越してそのまま地面へと勢いよく倒れ込

む形になった。想像以上の勢いがついていたこともあって、そのままクリフトは額を強く打って気絶した。理由はわからなかった。だが、そもそもすでに重度のトランス状態にあつたクリフトにとって理由などどうでもいいことではない。

そもそも、今までの人生に“理由”なんてあつたのかよ……俺にとっての生きがいとかモチベーションなんてものは、ママのマンコの割れ目からザーメンと一緒に流れ出していったんだろうな……

世を愚痴りながら、その意識はゆっくりと薄れていった。

全力で戦ったにも関わらず、もはやバーサーカーは敗色濃厚なことを悟った。

まず、力で負けていた。これまで力には自身があつたし、ゾーマが死んで以降もレベル上げは怠っていない。戦士の得意分野である力のステータスはカンスト、つまり限界まで上がっているはずだ。だから、この世に自分以上の力を持つ存在などいないはずだ。だからさっきのギガンテスの攻撃も受け止めることができた。

その力を、この小娘の顔をした化物は余裕で上回っている。剣を素手で掴んで引っこ抜くなど、尋常な握力ではない。

桁違いとは言え、向こうが力だけ上回っているならまだ戦術でどうにかなりそうだったが、それも通路という地形のせいでもなりそうにない。どうしても真つ向から

の力勝負になってしまふのだ。穴を掘って逃げることも考えたが、かくれんぼでもない限り、そんなことを許すほど敵は待つていてくれないだろう。それにコイツは素早もひよつとしたら自分と同じかそれ以上かもしれないのだ。

もはや全身の打撲傷で、体は悲鳴をあげていた。最後の一発。渾身の力を込めて拳を突き出す。こんな奴に負けてたまるか。

「ん、今のはちよつと雑な攻撃だね。ダメージを喰らって焦っちゃったのかな？」  
腕ががちり掴まれているのに気づいたのはしばらくたってからだ。

「一体、てめーは何者なんだよ」

「サントハイム王国のマスコットキャラ、アリーナ王女だよ」

聞いたことのない名前だった。サントハイムという国名すら初耳だったが、それが何か考える間もなく体勢を変えられ――

「じゃあ、今の攻撃をちよつと反省してみよっか」

掴まれた腕が、建物が潰れる直前のような軋み音を立てた。痛みを感じる間すらなく、そのまま渾身の一本背負いで投げ飛ばされた。

ももんじやを持ち上げた瞬間、ブライは自分の目を疑った。そこにはまるでさも当然というかのように階段が鎮座していたからだ。どこまでも続くように見える階段――

これが次の異世界へと通じる次元を超える道だ。

誰か知らないが、おそらく大部屋の巻物を読んだのだろう。迷宮が攻略困難なら、もはや迷宮そのものを消さなければいい——こんなことを考えられる人物は限られてくる。多分ダンジョン慣れしているポポロかトルネコあたりがやりそうなことだ。ポポロも昔は巻物を読むことはできなかったが、最近では勉強して一通りは読めるようになったという話を、トルネコと将棋の対局中に聞いたことがある。

やるなら最初からやってくれ、という思いは正直少しあった。しかしそんな感情は目の前の階段で吹っ飛んでいた。心なしか、ブライを見上げるもんじやも嬉しそうに見える。

ね、あつたでしょ？

ようやくこれで肥溜めから出られる——そう思つて一步を踏み出した——ところでブライの背中に衝撃が走り、そのまま階段の横を吹っ飛んでいって、壁にぶつかった。そのときに運悪く頭から壁に突っ込んだため、頭蓋骨は卵の殻のように一瞬でひしゃげ、中の脳みそ（一生かけて詰め込んだ魔法やその他学問の知識が入った高級品）は壁に飛び散つて異世界の地図のような模様をどんな画家より素早く一瞬で描いた。

## 26. ダンジョン50階層にて7

最初は状況がよく飲み込めなかった。自分は薄暗い迷宮の中にいたはずで、それがひらけた明るい場所にいる。最初はとうとう地獄にでも落ちたのかと思ったが、全身の痛みがそれを否定していた。

立ち上がって見ると、老人が倒れていた。壁に描かれた赤い文様から察するに、衝突して死んでしまったに違いない。ただ、そのおかげで自分はまだ戦える。あのまま壁に叩きつけられた場合、自分ならやわな人間の老人と違って死にはしなかったと思うが、それでも重傷を負うことは免れ得なかっただろう。

死んだと思った老人の死体が少し動いたように見えた。

それは幸運にもクツションで吸収されたとはいえ、衝撃を喰らった後遺症の幻覚かと思っただが、地面を搔く様な音も聞こえる。

老人の下から、何かが這い出してきた。

ももんじやだった。

人間に捕らわれていたのだろうか？ 人間の中にはモンスター使いと呼ばれる、モンスターを飼い慣らして使役する職業もあるらしい。この老人自体に戦闘能力はあるよ



うに見えないから、もしかしたら噂のモンスター爺さんなのかもしれない。

バーサーカーが見つめていると、ももんじやが爪を立ててこちらを威嚇していた。

別に放っておいてもどうでもいい敵だったが、そこまで人間になついているのは、何となく気に食わなかった。ましてやそれが「あの商人」の仲間ならなおさらだ。それに人間側のモンスターを倒すと、無条件でレベルが上がる。ここはちよつとでも強くなっておきたい。

一歩近づいて、足を上げた。バーサーカーの影がももんじやの顔を覆ったところで、思いつき踏みつけた。

トルネコはタイミングを見計らって場所替えの杖を振った。あのももんじやらしきモンスターが具体的に何なのかわからなかったが、バーサーカーが殺そうとしていることから察するとポポロの連れてきたモンスターだろう。だとしてもこの状況でなぜももんじやを解き放ったのか、そしてそいつをなぜブライが持っていたのかは謎ではあるが。

杖選択では少し迷った。むしろライフルで撃ち殺してしまうのもひとつの手だが、この距離を一撃で仕留める自信はトルネコにはなかった。

とにかく、早くしないとバーサーカーはまたモンスターを殺してレベルアップしてし

まう。あれ以上強くなってしまおうと手のつけようがなくなる。それにバーサーカーを倒すことは、トルネコたちの目的ではない。もちろん、倒せるに越したことはない。後の探索が楽になるのだから。

ただ、仲間も何人かやられているような状況では、倒しにかかるのはいくらなんでもリスクが大きすぎる。下手をすれば生き残っているのはトルネコ一人、という状況かもしれないのだ。一応、世界樹の葉は何枚も用意してあるから、その状況からでもクリフトを復活させればすぐに態勢を立て直すことは可能だ。

それにしても、この世界樹の葉はまるでぼったくり価格だった。エルフの里直送で無農薬だつて？ 3時の紅茶を嗜むブルジョアの主婦にはウケそうなキャッチコピーだぜ。その値段のせいでネネの財布に寄付しているような感じもしたが、ここは冒険に必要と割り切って買って置いて良かった。

杖を振り終わってから、元いた場所を振り返って見てみた。そこでバーサーカーは地面から足を持ち上げており、そこに本来あるはずのももんじやの潰れた死体がない状況を、一瞬理解できないでいた。

ようやく状況が飲み込めたのか、バーサーカーもハツとした表情をしてトルネコのほうへ振り返った。

てめえは肝心なところで“詰み”を逃したんだよ。

心の中でそう呟いた。多分、バーサーカーにも聞こえている——そんなことを考えながら、トルネコは階段に足をかけた。

バシルーラでワープする感覚。だが、バシルーラと違ってはるかに心地いい感覚だった。階段は冒険者のあいだでは「ファーストクラス」のバシルーラと呼ばれている。

でもまあ、たとえエコノミークラスであっても地獄から抜け出せるなら十分ファーストクラスだぜ。

薄くなっていった周囲の世界が、完全に光に飲み込まれてゆく中、トルネコはあらためてそう実感した。

もはやヒカリゴケすら照らさなくなった漆黒の空間を、白い線が切り裂いた。その白線は徐々に太くなっていき、やがて女王の丸焼きの死骸を完全に照らし出すまで大きくなった。それから、その光の筋を何かが横切った。

天井に開けた穴から着地してきた、ライオネックだ。

入った瞬間、ライオネックは自分の侵入した場所が異様な空間であることを悟った。

元々、このアリの巣穴に入り込んだには、近隣に住むモンスターからの苦情があるからだ。とはいえ、それはすでに苦情の域を超えてはいたが。モンスター農場で生産された農作物はすでに何回も壊滅的打撃を受け、その経済的被害だけでも尋常なもの

だった。だがそれではアイアンアントたちは飽き足らなかつたのか、さらに村民のものもんじゃないまでさらっていった。ことここにいたり、ようやく村も重い腰を上げたが、なにせ、アイアンアントの巢は山全体に膨れ上がっており、その圧倒的蟻海戦術の前に逆に返り討ちにあつてしまう。幸い住民側に死者こそ出なかつたものの、もはやこのままでは生活すら危うい。

そこまで話を聞けば、魔勇者と自他共に認める自分が黙つていられるはずはなかつた。俺が行つて駆除してやる——そう言い終わらないうちにすつ飛んでいって、巢穴に入り込んでみたのだが——

今こうして眺めてみると、村民の言つていたのとまるで様子が違う。

アイアンアントの巢はもつと複雑に入り組んだ迷宮になっているはずだ。ところが、今はがらんどうで、冷たい空気が充満している。降り立つたところには、ひときわ巨大なアイアンアントの死骸。おそらく女王のだろう。触つてみると表面がパリパリと音を立てた。中々うまい焼き加減だ。ライオネック痛恨のギガデインでもこれほどこんがり焼くことは難しいだろう。焼け具合から見るにベギラゴンを使つたと思われたが、近くに散らばっている親衛隊の死骸を見ると、焼けたというより溶けたといったような、異様な死骸をさらしていた。

これを成し遂げた者は、きつと相当な魔法使いに違いない。そして性格も魔法と同じ

く歪んでいる。それには溶けて奇妙なオブジェと化した、親衛隊の頭部も賛同してくれているかのように感じた。

とりあえず、フロア中を歩き回ることにしてみた。調べれば何か手があるかもしれない。

そう考えて、魔勇者ネットクは剣を抜いてレミーラを唱えた。剣が光を帯びて黒い空間を慎み深く切り取った。

しばらく歩いていくうちに、大きな血のシミを発見した。これは何なんだろう？ どうみてもアイアンアントのものではない。同じようなシミは他にも何箇所か存在した。虫の体液では断じてない。モンスターか、人間の血……問題は、これがアイアンアントの巣を壊滅させた者の血なのだろうか？ だとしたら、こいつは出血多量で死んでいるはずだ。それか、「襲撃者”は複数いた、ところが、アイアンアントとの激しい戦闘で何人かの死者、あるいはけが人が出た。これなら血の量には説明がつく。

空洞になったアイアンアントの巣を探索していると、ギガンテスの死体を発見した。こいつがひとりでやったのだろうか？ 血の量については説明できるが、だがそれならこいつは今頃アリの餌になっているはずだし、それにアリの巣そのものを消し去る、ということにはまだ説明がつかない。

とはいえ、はじめて見つかった有効な手がかりだ。もっと近づいて調べてみたのだ

が、そこで信じられないことを発見した。

このギガンテスを、知っている。

まだ貧しいモンスタール村に住んでいた頃、自分に武術を教えてくれた先生だ。間違いない。村では鍛冶屋をやっていたが、時にそういつたことも教えていたのだ。体の傷跡は記憶よりはるかに多くなっているが、それでもあのギガンテスだ。相当戦いに明け暮れたのだろう。

顔の方に回り込んで確認してみるが、そこには本来あるはずの目はなく、そこにもさらに暗い空洞が広がっているだけだった。このとき奇妙な好奇心で、空洞の眼窩を照らして覗き込もうとしたのだが——中に光を当てて覗き込んだと同時に、アイアンアントが一匹、突然顔を出した。あともう少しで大アゴに噛まれそうだった。アイアンアントはそのまま体も引きずり出すと、気持ちよかった寝床から一目散に逃げていった。

薄気味悪さで思わず後ずさってしまったが、そのおかげで眼窩から血涙のように流れ落ちた血の筋が、地面に線を引いてそのままある場所へ向かって伸びているのを発見することができた。このままなんの手がかりもなく探すより、この血痕を追いかけていった方が何かありそうだ。

とりあえず、ネックは気になった一本の血の筋をたどっていくことにした。今まで見てきた血痕は、どれも血の海のありかを示すものだったのに対し、これは少量の血がた

どたどしく線を引くように繋がっている。

その地面の黒い線をたどっていくと、一本の剣が血の海に突き刺さっていた。さながら威厳のある死の塔。光の加減で、ただのはじやの剣がこのときばかりは本当にそう見えた。

ネックが死の塔の頂上に手を置いたとき、何者かがネックに話しかけた。

「お前の本当に探しているものはここにはない」

暗闇からいきなり話しかけられたが、ネックはそれに全く驚かなかった。それはあたかも闇自身が発したかのように自然で当たり前、といった感じで響いたからだ。

こいつが「襲撃者」なのか？

一瞬考えたが、もしそうだととしても襲撃者が声をかけてからこちらを攻撃してくるわけがない。周囲は真つ暗で、奇襲には絶好の機会だというのに。それに、声自体に敵意が感じられなかった。

「それより、おまえこそ一体何者なんだ？ まさか、ここを襲撃して俺の代わりにアイアンアントを全滅させた者ではないだろ？ それか、村に雇われた用心棒なのか？」

「どれも違うな。俺は、サントハイム王国のマスコットキャラに殺されかけた最古にして最大の魔王ゾーマの忠実な下僕だったものだ」

「なるほどな、ゾーマのしもべか」

サントハイムについては初めて聞く名前だった。ゾーマの名前は聞いたことはあるが、こいつが本当にそうだとはい信じ難かった。それはもう、神話時代の昔の話であるし、いくら高位魔族には永遠に近い寿命があるからといっても、大半のこういった話は埋蔵金程度の信ぴょう性しか持ち合わせていないからだ。ネックはかつて同じように「ゾーマ第一の部下だった」といつも自慢する魔物を知っているが、そいつの言動は愚か者のそれで、周囲の気を引くためとプライドのために嘘をついているとしか思えないものだった。

「俺にもゾーマの部下で一人知っているやつがいるぞ。確か——  
「バラモス」

聞き取りにくかったが、確かにそう聞こえた。ネックの額にある三つめの目が驚きに見開かれる。

なぜその名前を知っているんだ？

その問いかけを読み取ったように、闇の中の声は言葉をついだ。

「俺の元同僚だ。けっこうアホなやつだろ？ でもまさか、生きていたなんてな」

「いいや、生きていますというか、亡者となって現世にしがみついている、といった感じだ。バラモスはゾンビなんだ」

そういうと、闇の中から乾いた笑い声が木霊した。ネックはレミーラの光を声のした



方に収束させたが、闇の中の人はそれを避けているようだった。まだ、こちらに姿を見せる気はないようだ。襲撃者ではないらしいが、これだけの素早さを持つているならそうであったとしても十分おかしくない。

「バラモスらしい。最後までゾーマに認められなかった、かわいそうなやつさ。嘘ばかりでうんざりするだろうが、あいつの話だけでも聞いてやってくれ。あいつだつて誰にも話を聞いてもらえないなんて寂しいだろうからな。そう思うだろ？」

「そうだな」

「ひよつとして、バラモスは自分が地上攻撃軍の先鋒で、魔王随一の部下だった、なんて言つてなかつたか？」

「ああ、その通りだ。俺はその話を何回も聞かされた。当然嘘だと思つていたんだが、どうやら俺のほうの間違つていたらしいな」

またしても乾いた笑いが木霊した。今度はさつきより大きい。ネックはまた声のした方へ剣の光を向けるが、そこには壁に描かれた血の文様があるだけだった。

ひよつとして俺は何かの幻覚に飲み込まれてしまったのか？

「いいや、ある意味間違つてはいない。というか、あいつは誇張して話すタイプだからな。地上攻撃軍先鋒というのは本当だが、それは左遷されたからだ。先鋒という名の事実上の捨て石だ。決して魔王随一の部下ではなかつた」

「まあ、昔話はあとでゆつくりバラモスとするといい。彼も旧友と会えて喜ぶだろう。それよりききたいことがあるから単刀直入にきく。ここにあったはずのアイアンアントの巢を壊滅させたのは、お前なのか？」

しばらく間があった。あまりに長く感じたので、ネックは今までの会話は全て自分ひとりで闇に語りかけていただけなのか、とも思ったくらいだ。

「いいや、違う」

「では、だれがやったのか知っているのか？」

今度はすぐに返答があった。まるでそう聞いてくれるのを待っていたかのように。

「知っている」

「では、もうひとつきかせて欲しい。ここに来る途中にギガンテスの死体があったが、あの人は今回の事件となんの関わりがあった？」

「あの人？ 知り合いなのか？」

「俺の武術の師匠だった」

「どうやら、俺たちは互いに必要な情報を持っているようだな」

ネックの照らす光の中から、闇自身が形を持って生まれだ。やがてそれはネックに向かつて近づくうちに、光に洗われて徐々に本来の姿を取り戻していった。

「確かに、そうみたいだな」

闇から彫り出されたひとりのバーサーカーに向かって、ネックはポツリと言った。

クリフトが目を覚ますと、目の前にトルネコの顔があった。

「よお、やつと目を覚ましたようだな。心配したんだぜ。気分はどうだ？」

頭がズキズキ痛んで、とてもではないがそれに答えられるような状況ではなかった。

「クソみたいな気分って感じだな。ちよつと待て、今俺が治してやるよ」

トルネコがどうやって治すのか、と疑問に思う暇もないうちに壺の中に手を押し込められた。壺の中には何やらよく分からない感触の物体があるようだったが、それを押しと額を中心とした頭の痛みが吸い込みのツボで吸い出されたのかと思うくらい、速やかに消えていった。

「回復のツボってやつだな。ギャハハハハ！」

くだらないオヤジギャグ未満でなぜここまで笑えるのか？ ぼんやりした頭ではつきりそう思った。

「それで、怪我也も治ったところで頼みがあるんだがよ」

トルネコがそれを言おうとしたときだった。

「わあー！ 無事だったんだね、クリフト！」

アリーナの強烈なハグが、クリフトを締め付け、またしても意識が朦朧となった。そ

れに今、背骨から嫌な音も聞こえたような気がする。

「おいおい、感動の再会はまだまだもうちょつと後だぜ」

ようやくトルネコが話して止めてくれなかったら、そのまま天国へ吸い込まれていたかもしれない。

「まあ、とにかくよ、死んだ仲間を得意のザオリクでスパッと復活させてやってくれよ」  
クリフトはその前に自分自身にそれとなくベホマをかけた。まず自分の治療が先だ。

「ほら、こつちの棺桶に死体は入ってるからよ。なんかよ、勇者時代にやってたことを思い出さねえか？ あいつも全滅したときまつ先に教会でクリフトを生き返らせて他の仲間を復活させてただろ？」

「ああ」

「あいつ、いつも俺だけ最後に復活させてやがったよな」

条件反射でつい「ああ」と言いかけたがそれはなんとか押しとどまった。かといってこんなときになって返答すればいいのかもしれない。ザオリクを何回も使うとMPがなくなるが、そうなると宿屋へ泊まって回復しなければならぬ。一回宿屋に泊まると、また復活させるのにMPを使うのがもつたいなくなってしまう。そうなるのとトルネコを復活させるのは臭ってきてからでいいや、というパーティー内の奇妙な多数決が無言のうちに行われ、決定される。それに宿屋も死人からは宿泊料を取らないか

ら、さらにいつそうこのままでいいや、ということのを助長する結果にもなる。もつとも、レベルが上がってMPも増えれば一気に全員復活させることができるので、そんなこともなくなったが。それでも勇者は容赦がない性格だったため、復活させるのは（復活役のクリフトを除いて）「役に立つ順」か「好きなキャラ順」になっていたのは確かだ。

とにかく、クリフトは肯定も否定もせずに、その続きを待つことにした。

「まあ、そんなことはどうでもいいことだけだな。実際、俺は大した特技もない落ちぶれた商人さ。とにかく、早くこいつらを復活させてくれや」

トルネコはズラリと並ぶ棺桶を指して言った。

「全部で4人……ですか……」

「そうさ。まさか初っ端からここまでやられるなんてな。レベルも女王アリを倒した時点でそれなりに上がってたから普通、即死はありえないHPだった。まさかその初っ端からアイツに会うなんてよ、ツイてなさすぎだぜ」

アイツ……辛うじて思い出した。あのときはもうひとりの自分、まともでない方の自分が表面に出ていたから、本来の人格の自分が覚えているはずはない。だが、あまりに強烈な経験だったため、もうひとり（頭文字をとってK、とだけまともなクリフトは呼んでいた。もちろん、キチガイ、狂人のKという意味もある）には手に負えなくなったのだろう。だから自分に人格交代した。長らく人格の交代は行われていないから、かな

り珍しい。

トルネコが棺桶のフタを開けてビックリした。中の死体はマーニヤだろうか。ほとんど首がとれかけている。驚く暇もないくらい、トルネコは次々と棺桶のフタを開けていった。

ミネア——完全に首と胴が離れている。なぜかデジャブを感じた。

ライアン——肩から胸へ袈裟斬り。傷跡から判断するに、即死はしなかつただろう。相当の苦しみを味わいながら死んでいったのが容易に想像できて、またしても気分が悪くなった。

そして、ブライ。最近教会の方針などで何かと意見の対立も多かった。本当に尊敬できる人間なのか、疑った時期もあった。だが、頭の半分が割れて中身がチラチラ露出している様子を見ると、暗闇の中で急に松明をなくしてしまったような不安感がこみ上げてきた。自分はこの人なしでまともな道へ戻れるのだろうか。やはり何があっても、自分にとって頼れる師だったのだ。

「ねえ、この人、本当に大丈夫なの？」

声をした方に振り返ると、見慣れない少年の姿があった。しばらく思い出すのに時間がかかったのだが、間違いなくポポロだ。トルネコの息子を見るのも久しぶりのことだから、時間がかかってしまった。

ポポロが明らかに非難の目を向けてきた。それは自分が呆然として、その間じつとポポロの顔を眺めていたことに対する不信感だろうか。その割には少しキツイ目つきのような気がした。

「まあ、見てろよ。クリフトの“死人もビツクリマジックショー”、開幕だぜ」

そう言つてから、トルネコひとりの拍手がダンジョン中に響き渡る。その虚しい拍手の最中、ポポロのクリフトを眺める目つきがさらに厳しくなっていくように思えたが、これは自分の気にしすぎだろうか？ それにこの状況、以前にも一度体験したことがあるような気がする。それとも勇者時代の経験とオーバラップしているだけなのだろうか……

クリフトはしばらくそんなことを考えていたが、拍手が止んでも肝心のマジックショーが始まらないのでトルネコが催促してきた。

「おいおい、何を悩んでるんだよ。それとも緊張してきたのか？」

「いや……」

ただ単にブーツとしていただけなので、言い訳を思いつくのにはしばらくかかったが、思いついた言い訳はなかなかいい出来ばえだ。

「復活させる順番はどうするのかと思つてさ」

「順番？」

「そう。順番。勇者みたいにさ」

ここで免罪符を売る時に使用される渾身の笑顔（おばあちゃん、大丈夫ですよ、この免罪符さえあれば便秘みたいに溜まりたまった現世の罪もスッキリ爽やか！）をトルネコに見せた。トルネコは一瞬あっけに取られているように見えたが、それがクリフトにある懸念を巻き起こした。

ひよつとしたら、これはまずかつたかもしれない。勇者がトルネコを最後に復活させていた、ということであらためて思い出させたかも……

「ああ、そうだったな。適当にやってもらって構わないんだが、俺もたまには勇者待遇っていうのもいいかもしれねえ」

勇者に勝っているのは体脂肪率程度だろう。勇者は残虐性と悪知恵だけは群を抜いていた。おそらくトルネコでもかなうまい。魔法もある程度使いこなすし、知能という点においてもむしろトルネコを凌駕しているかもしれない。

ただ、そんなトルネコ、ネネに捨てられるまでは愛嬌のあったトルネコだったからこそ、本当に勇者待遇も「アリ」だと思えた。

ホント、俺もアンタもよくこんな神っていう売女のひり出したくつさい下痢グソ以下の世界で頑張つてくれたよな。

それに対して少しくらい報いてやってもいいはずだ。きつと神——この概念を思い



出すとき頭の中に何か暗黒の想念が沸き起こったが、なにせ一瞬のことだったので無視した——もお許しになるだろう。

「それで、誰からにするんだい?」

クリフトが再度質問した。

「そうだな。やっぱ年功序列でライアンからにしてくれ。トルネコ軍団は古き良き雇用形態なんぞでな。ネネが聞いたら大笑いするぜ」

「別にもちろん反対するわけじゃないんだけど、年功序列ならブライさんが先になるんじゃないのかい?」

「そりゃ年齢じゃ確かに長者だが、トルネコ軍団はあくまで勤続年数による年功序列なんだ。ライアンは前の冒険の時から一緒だったから、一番勤務が長いんだよ」

「そういうことね」

「そういうことだ」

だったらそうするしかない。

クリフトは気が進まないながらも、ライアンの棺桶へ近づいていった。やっぱり痛ましい傷跡は変わらない。

早く復活させて終わらせよう。そしてみんな楽しんで冒険へ出かけよう。そうさ、ワクワクするような冒険へ。

涙が出てきそうだった。ワクワクすることなんて今後一生ないだろうって分かりきっていたから。

とにかく、クリフトは柩の上に手をかざし、呪文を詠唱した。仲間がいれば、冒険も楽しくはならずとも、少しはマシになるはずだ。

——クリフトはザオリクを唱えた！

——ライアンは復活した！

棺桶から立ち上がるライアンを見て、トルネコはまたしても拍手を浴びせかけた。

「トルネコ軍団、軍団長さまのお帰りませー！」

ヒューー！ パチパチパチ！

やったね、トルネコちゃん、仲間が増えたよ！

一体なんのネタだ？ 自分の心の中で言っていて、自分で疑問に思った。

最も遠い世界からの帰還を祝って、二人は固い握手を交わし、肩を抱き合った。必ずしも目の保養になる光景ではないが、それなりに胸を打つものがあった。多分、教会の説教よりかは幾分感動的な光景だ。

「じゃあ、次は誰にするんだい？」

「そうだな。じゃあ、アンタが好きを選んでくれ。今度はアンタが勇者待遇だ」

「ではお言葉に甘えて」

クリフトはそそくさとブライの方へ歩み寄った。自らの師匠。後年は決している師匠とは言い難かったが、それでも自分にとって大切な師だ。

「またもや棺桶に手をかざした。」

「クリフトはザオリクを唱えた！」

「ブライは復活した！」

「ブウウラポオオオオー……ヒュー……！」

トルネコが歓声を上げて、拍手した。今度の拍手にはライアンとアリーナもいつの間にか加わっていた。まあ、社交辞令だろうが、それでもこれだけ持ち上げられると気分がいいものだ。勇者はやって当然といった態度で、あまり褒めてくれずらしなかった。ザオラルしか覚えてない頃に、3回連続でミスったときなんて明らかかな批難の目を向けた。神がイカサマサイコロを振ったせいであって、クリフトのせいではないのは分かっているくせに……

「まあ、昔話はもうウンザリだ。みんなもそうだろうか？」

「残りの二人も適当に復活させて終わりにしよう。」

クリフトはトルネコに言われた通り、ミネアの棺桶の上に手を掲げた。マーニャよりミネアの方がマシだと判断したのだろう。それはクリフトにもよく分かった。マーニャなんて魔法が使えなければただのギャンブル狂の売女に過ぎない。再就職（ていう

かアイツ就職したことあったっけ？ つま、どうでもいいや）するときには履歴書の「資格・特技」の欄に「売春（中出し最高！）、ギャンブル（スロットでスルのが得意です！）」とでも書いておけよ。俺の大切な……大切な……なんだこれは？ 頭が痛くなってきた。こんなときに……こういう風に気分が悪くなってきたとき、俺はいつもどうしていた？ 酒——最初は浴びるように飲んでいたが、その内効果がなくなってきた。飲み始めはいい。酒の味が分かるうちは、アルコールで気分が良くなっている時間だ。そのうち酒の味が曖昧になってくると、もうダメだ。だんだんと気分が悪くなって行って、飲む前より気分が落ち込んで死にたくなってくる。それが街中へ出て行ってザラキを連発したい気分か、どっちかだ。でもそんなことをできるわけがない。いいや、街中でザラキ連発はできないことはないが、あとあとザオリクで復活させるのが面倒だから嫌だ。となるとできることは限られてくる……

「おい、クリフト、一体どうしたんだよ？ 気分が乗らなくなったのか？」

「いいや、何でもないさ、何でも……」

「どう見たって何でもありそうじゃねえか」

「クリフト、何か苦しそうだよ……」

アリーナが昔と同じ声で言った。昔と違ったアリーナと会った後。俺はどうした？ 最後の希望もその希望自身によって打ち砕かれたとき、俺はどうした？ あの後……

城下町を一目散に逃げた後……カジノの裏側……怪しげな商人……白い……

クリフトの意識は禁断症状によって過去へと飛んでいった。そこではあの時たまたま出会った商人が立っていた。だが、今回の売人は格好はそのまま、顔だけトルネコの顔をしていた。

「よう、どうしたんだい？」

「気分が悪いんです……なんだかとても」

そう言うと、そこらへんにあった井戸——と思っていたのだが、実はミネアの分解済みファイギュアの入った棺桶——を覗き込むようにして座り込んだ。ほとんど倒れる寸前のような動きだったに違いない。

「どうしてなんだよ？」

「理由は……わかりません……」

ギヤハハハハ！ 売人がトルネコのような笑い声を上げた。

「わかるよ、それ。青春の悩みは原因不明の不治の病なんだよ。おとなしく年を取るしか治療法はねえ。でもな、その悩み、一つだけこの場でスッパリ解決できる方法があるかもしれないねえぜ？」

「どうやって？」

顔を上げて売人の方を見やった。

「いれやい」

売人は懐から透明なビニール袋に入った白い粉を取り出した。

ああ、これじゃん、これ。クリフトは懐かしい気持ちでいっぱいになった。久しぶりに昔の恋人と再開したような感じ。お前がいないと、やっぱり俺、ダメなんだわ。

「これ、欲しいんだろ？ ん？」

ああ、そうだよ。早くその魔法の砂で人生をバラ色に塗りたくってくれ！ 俺の栄光の人生！ すばらしい冒険が待ってるあの世界へ！

「だよな。その力で俺たちも一緒に栄光へ導いてくれよ」

売人はクリフトに粉と吸引用の紙製ストローを渡した。

なんて気が利くやつなんだ。こりやもう吸うしかねえわ。魔法の力でレッツ・プリキユアだぜ……

クリフト、いや、Kは喜び勇んで麻葉を吸引した。吸った瞬間の芳香で最高級のソレッタ産のものと分かった。内部では吸引を押し止めようとする声が出たが、それはもはや虚しい努力でしかない。だんだんとその内部の声は井戸に沈んでいくように小さくなって、吸引した瞬間に完全に消え去った。

「おう、それで、気分はどうだい？」

「すっげえいい気分だぜ！ 今世紀最大級のビッグウェーブが現在音速で北上中ううう」

ううううう！」

「そりやすげえや」

いつの間にか売人は完全にトルネコになっていた。

「ところで、そのビッグウェブにあやかつて、こいつらをサクつと復活させてやつてくんねえかね？」

「ハイハイハイ！ ホントにそんなことしちゃつていいの？ 復活させるだけだから性格は以前のまま！ 最悪な売女のままだぜ？」

「まあ、仕方ねえな」

「ああ！ なんてこつた！ 俺の魔力じゃオツパイも大きくできねえ！」

「まあ、十分でかいと思うからそれでいいんじゃないやねえかな」

「アンタすげえ優しいぜ、優しさの塊、優しさ油田、優しさアラブ王だよ！ マザーテレサのウンコくらいに崇高な香りがしてくるぜ！」

「そりやどうも。俺みたいにな奴がウンコ程度でもマザーテレサに近づけるなら望外の喜びつてやつよ」

「マジで優しいよおおおおお！ こんなクス、普通死んだらそのままほつたらかしかだぜ！ それをそのままでもいいから復活させようつてんだから、マジでやさしいいいいい！ 正直に答えても俺は湖の妖精じゃないから金の斧も銀の斧ももらえないぜ

？」

「別にかまわねえさ。俺は優しいから元の二人が復活してくれるだけでいいんだ。見返りを求めるなんて、人間ごときに許されることじゃねえ」

「スゲエエエエ!! 名言キタコレ! あんたマジでマザーテレサのウンコだぜ! 花壇にばらまけば幸せの花が満開全開イイイイイイイイイ!」

「じゃあ、そろそろやつてくれねえかな? 花壇にばらまいてやろうぜ。そんで幸せの花で埋め尽くしてやろうぜ」

「ああ、そろそろやつてやるぜ! 見てな、俺の会心の魔力とオッサンの優しさのコラボレーション!」

——クリフトはザオリクと絶叫した!

——ミネアとマーニャは完全に復活した!



## 27. それぞれの陣営

気持ち悪い墓場に来ていた。そこらじゅうに朽ちた墓石や、厚いコケに覆われた木像——もはや元の形もおぼろげにしかわからない——が林立している。その中の一つに止まっていたゾンビカメラが、骨をカタカタ鳴らしてからどんよとした空へと飛び立っていった。

ゾーマの墓場の方が、まだマシだ。いや、あれは単純に墓場ではなく、復活のための祭壇という役割も兼ねていた。だから禍々しい中にも神聖な雰囲気もあった。思い出すと、未だにあの墓守時代のことが懐かしく感じる。もうとつくにゾーマとの主従の縁は切れているのにも関わらずだ。今、こんなモンスターの墓場に来ていることに、全く現実感がなかった——俺の守るべき墓はここじゃない。

先頭を歩くネットクの足が止まった。

「おい、持ってきてやったぞ！ お前の大好きなあばれうしどりの手羽先塩焼きだ」

ネットクの呼びかけにバタバタと腐食食いの大ガラスが、骸骨を抱えて飛び去っていた。しばらく待っていたが、あたりは完全な静寂に包まれており、墓石の間を徘徊する風の音だけが虚しい返答になった。

どうやら今日はダメらしい。

ネットクも諦めかけたときだった。

背後の草むらからガサガサと音がした。風が草むらを揺さぶっているのではない。やがてドラゴンらしき骸骨が草むらからひよっこり出てきた。骨格にもバラモスの面影は十分残っている。

「ああ、またアンタか」

「なんだよ、その言い草は。せつかく大好物を持ってきてやったのに。それに今日は客人も一緒なんだぞ」

「へへっ、ようこそいらっしやいまし」

明らかに歓迎するムードはないようだ。ネットクがあばれうしどりの手羽先を渡すと、礼も言わず奪い取るようにしてむしやぶりついた。ゾンビだから食事は必要ないが、味は楽しめるのだろう。事実、食べた肉は肋骨の間からポロポロ流れ落ちていた。

「ああ、うめえよ……すごくうめえ……地上侵攻したときにさらってきた人間の子供には劣るけどな、へへっ」

「お前にそんな度胸はないだろ？」

思わず口に出してしまっていた。そうだ、いつもこいつは口だけで『言うこと』だけは達者だが、『実行すること』はアレフガルドへ置き忘れてきたようだった。

「なんだよ、おまえは」

「覚えてないのか、バラモス？ お前のことを俺は覚えてやってるのに」

「へへッ、俺はゾーマ様随一の部下だったからな。いわゆる有名人つてやつよ。お前みたいなたつ端と一緒にしないでくれたまえ」

バラモスはサビ放題でもはや形さえおぼろげになった銀の首飾りをいじりながら、精一杯威厳を出そうとして言った。本来宝石がハマっていたであろう場所はバラモスの眼窩同様、虚ろだった。

「魔王随一の部下？ 地上攻撃前の捨て石役なのにな？」

「あん？ なんだよ、さつきから」

手羽先を食べる動きがようやく止まった。

「君ねえ、さつきから言っていることと悪いことがあるよ。もうね、なんていうか、言っていることが完全に嫉妬丸出し。君みたいな若い子、まず魔王とか知らないでしょ？ 魔王ってすごく偉いの。ボクはその部下なの。その時点で君みたいな勇者の肥料用モンスターとは一線を画しちやつてるの。そのうえ随一の部下で地上攻撃まで任せられちやつてるんだから、君とは人格からして違うっていうか、もはや存在自体別次元だから。嫉妬して他人を無理矢理引きずり下ろそうとする時間があるなら、もっと自分で努力して上を目指したほうがいいんじゃないかなあ」

数千年たとうが、ゾンビになってようが、根拠なく勝ち誇ったバラモス独特の表情は容易に見分けがついた。この腐りきった様子を見てみると、眠りにつくさいに墓守に指名してくれたゾーマに対する感謝の念がより一層強固なものとなった。昔の美化された思い出に浸って、たまにもらえる供え物を食うふりをしている……こうなるくらいなら、本当に死ぬ権利を行使することも視野に入れねばなるまい。と言っても、もはやその権利はどれだけ望もうと行使されることはなくなったのだが。

「何が地上攻撃軍だ。本当はただの偵察だった。本当は左遷されたんだよ。それをお前が勘違いして——いや、集まったモンスターに持ち上げられたんだろう。そいつらを抑えておくことができずに勝手に地上攻撃をやらかしたんだ。ゾーマの本当の命令を無視してな」

「おうおう、負け犬の遠吠えは気持ちいい音楽だなあ。ま、この手羽先にはかなわないけどね。それにしても、昔のことをよくそれだけ調べたね、エライよ。先生ハナマルつけちやうー！」

「それだけじゃない。地上攻撃までやらかしまったお前は、もう後戻りできないと悟った。いや、ゾーマの支配下から出たことで気が緩んだのだろう、こともあるように地上で“魔王”を僭称しだした。しかも偵察としての報告もしてこなくなった。そのときは、ゾーマもアレフガルド攻略で消耗した魔力を回復させている最中だったから良

かったものの、地上に出たら殺すとまで言っていたぞ」

「いやあ、そんなの作り話でしょ。君みたいな下つ端がゾーマ様と直接話せるわけないし、どっかで聞いた噂っしょ」

バラモスはまだ余裕ぶっていたが、やがて手羽先を食べる手が止まった。明らかに動揺している。きつと今になって初めてゾーマが怒っていたことを聞いたのだろう。

「あー、もう、嫉妬くんの愚痴でまぶくなっちゃったよ」

そう言うのと、手羽先を墓石の森へ放り投げた。肉はベチャツツという音を立ててどれかの墓石に着地した。そのすぐあとに、肉の着地地点にキメラや大ガラスが集まり、けたたましい叫び声を上げて争奪戦を始めた。

「誰もお前に嫉妬なんてしない。ただ、ゾーマが完全に復活したら、見せしめとして酷い方法で殺されるだろうから、むしろ哀れにしか思ってた。きつとお前の手足をもぎ取って手羽先にしてお前自身に食わせただろうな。お前の一番の功績は勇者に殺されたことだ。そのおかげでゾーマは“真の魔王”として人類の前に初めて姿を見せ、そのことで人類により大きな絶望感を与えることができた。全部お前が勝手に魔王を名乗ってくれたおかげだと、感謝していたよ」

「えーと、ごめん、君、もしかして親衛隊のひとつ？ だったらさ、俺、実はバラモスじゃないんだ。ちよっと調子に乗ってただけでさ、ゾーマの部下、とか言っちゃえば有名に

なれると思って……」

「いや、お前はバラモスだよ。なるべく生かして連れて来いと言われてな」

「いやいや、ゾーマってもう死んでんじゃない？ 何も昔の命令を律儀に守ることはないよ。皆で仲良く平和に暮らしていこう、ね？」

「実は最近復活された。それで俺もこうして裏切り者の捕縛を任された、てわけさ。どうしようか、このまま頼んでもおとなしくついてきてくれそうにはないしな……」

「いやいや、マジで違うって、俺じゃない！ 人違いっていうかモンスター違いだよ！ っていうかゾンビ化してるから時効！ 時効だつて！ ネットクもそう思うだろ？」

もはや言っていることがメチャクチャだった。

「んー、まあ、魔王の命令なら仕方ないんじゃないの？」

ネットクはどうでもよさそうにそう返事をした。

「えー!! そんな、助けてください、お願いします！ なんでもしますから！」

バラモスの必死の懇願は叫びになっていった。その声に驚いたのか、さつきまで肉を漁っていた鳥やキメラたちが一斉に飛び立った。

「なんでも？」

「なんでも！」

「本当になんでもするんだな？」

「なんでもします！　ゾーマ様のケツの穴でも舐めます！」

「だったら、ゾーマの仇を取るのを手伝ってくれないか？」

「え？」

墓場が静まりかえった。まあ、墓場とはだいたい常に静まり返っている場所だが、それが特に静まり返ったのだ。まるで墓場全体がひとつの墓石と化したように。

「ゾーマの仇？　どういうこと？　さつき復活したって……」

とりあえず、今までの事情をバラモスに話した。

「そうかあ……そんなことになってたんだ」

「そこで、だ。魔王随一の部下に助力を頼みに来たわけだ」

ネットクが付け加えた。

「でもその商人、かなりやばそうだね。いくら弱っていたとしても、あのゾーマ様を一撃でやっっちゃうなんてマジいかれてるよ」

「むろん、危険は承知している。だから何も無理に頼みはしない。ただ、俺もそのバーサーカーもバラモスについてきて欲しいと思っている。仲間は少しでも多いほうがいいしな。向こうは現在8人もいるのに、こっちは二人だ」

ネットクが後を引き継いだ。人材引っこ抜きは勇者に任せておくのがいい。戦士は黙って戦うのみだ。

「人数でも負けているってわけね」

「まあ、人数についてはおいおい補充していくつもりだ。このバーサーカーが他に一緒に戦ってくれそうな者の心当たりがあるそうだ」

「ふくん、そうか……」

「まあ、さつきは脅すようなことを言ったが、あれは冗談だ。そうだろう？」

「ああ。こつちのことを覚えていてもくれなかつたんで、ちよつと脅してみたくなくなつただけさ」

これは、まあだいたい本心だつた。そんなことより自分でも驚いたのが、このバラモスに仲間に加わつて欲しいと思つている、ということだつた。それもこんなゾンビ化しているような状態にも関わらず、だ。友情に時効はないが、こいつとは友情すらなかつたのに。

「うくん……」

バラモスはしばらく考えていた。その間、二人は口を差し挟むようなことはせず、黙つて待つていた。やがてバラモスの方から口を開いた。

「俺さ……なんていうか、今までずつと墮落していったんだ……どうせゾンビだしつて思つて楽な方へ、楽な方へ、自然と流されていったのさ」

「過ぎたことだ、あまり気にしすぎるな」



「本当は怖いんだ……そんな奴らと戦っていけるのか。俺は勇気のないヘタレ野郎だからな……」

バラモスはそこで言葉を切った。しかしまだ続きがある様子なのは、表情がなくとも雰囲気でもとなく読み取れたので、二人とも黙って続きを待った。

「でも、俺は最後まで臆病者で死にたくない。俺だつて薄々感じていたよ、本当はゾーマから嫌われていたんじゃないかって。でもさ、最後に一回くらいは本当に『随一の部下』になつてやるんだ」

「少しだけ見直した。少しだけな」

そう言つてからバーサーカーも思わず口元が緩んだ。それから思った。俺は笑つてゐる。それも自然な笑いだ。きつと勇者時代以来に違いない。俺は長らく人間としての心を捨て、モンスターになつていた。墮落していたのは、本当は自分の方だったのかもしれない。

「おっと、でもあまり期待はしないでくれよ。前より戦闘能力は落ちているだろうし、ブルランクも長いし」

戦闘能力というより、バラモスには悪知恵の方を期待していた。自分は戦士だから戦闘しかできない。ネックは魔勇者というだけあつて魔力も武力もかなり高い水準であつたが、高潔すぎる精神の持ち主で、むしろ策略などにはハマリそうなタイプに見え

る。

そう、戦闘力だけでは商人とそのパーティーを倒すことはできない。不思議のダンジョンに必要なのは、知恵。戦略を持ち、狡智に長けた者が勝つ。

「大丈夫さ。冒険に必要なのは戦闘能力じゃない、勇気だ」

ネックがそう言い、手を差し出した。バラモスはしばらく自分がそれに値するかどうか躊躇したものの、最後には骨の露出した手でそれを握り返した。

「ようこそ、魔勇者ネックのパーティーへ」

バラモスが仲間になった！

さてさて、それではみなさん、トルネコ軍団経営戦略会議にお集まりいただき、誠にありがとうございます。当軍団の株式をなけなしの命で買い取っていただいた株主兼従業員の皆様には、誠に心からのお礼を申し上げるとともに、つきましてはこれから当軍団が目指す順当な――よりよいでしょうか、これは非常に順当な利益なのです。我々、かつて勇者とともに世界を救った英雄が受け取るにふさわしい、本当に順当な利益なのです。この順当かつまっとうな利益を得るために、これからどうすればいいのか、株主様のお知恵を拝借したい所存でございます。とはいえ、まずは私からの意見を述べたいと思いますので、そちらをご傾聴くださいますよう、お願いいたします。

まず第一にレベル上げ、でしょうか。先のフロアにて女王アリなど、いくらか便所虫のお掃除によってレベルは上がりました。もうこのレベルなら十分即死はありえない、というところまで上がりました。ところが、思わぬ強敵に出会い、危うく全滅の危機を招くところだったのは皆様、記憶に新しいかと存じます。そこで、私はまずこのレベルを上げることによって、その危険を少しでも減らすことが肝要であると考えました。これは従業員の労務上の安全確保にも通じますし、ひいてはアイテム集めの効率化にもつながり、油田発見までの必要経費の確保にもつながります。つまり、この冒険を総合的に楽に進めるための基本的な要素、それがレベルといえます。第一にレベル上げ。これに関しては当軍団従業員兼株主である皆様にも異存はないかと思われます。おや、ミネアさん、何か質問でも？ ああ、そうですね、確かに。レベル上げの具体的な方法について、ですが、これも難しいですね。同じフロアで稼げる経験値には限りがある……考えなしに階段を降りていくのは危険……これは確かにそうです。しかし、それについてはある程度安全性も確保しつつ、効率的に経験値を稼げる方法を私が考えてあるので、また後で皆様にそれを検討していただきたいと思えます。ここではいったん次の議題へ進みますね。

第二に重要なのはアイテムでしょう。これは道中の経費を稼ぐとともに、こちらの戦力を強化できるのですから、言わずもがなです。ただし、私の経験から老婆心ながらに

言わせてもらおうと、あまり目先のアイテムに目がくらんで肝心なことを忘れないでください。

いえ、これは自分にも言い聞かせています。そんなバカな、何兆ゴールドもの油田が待っているのに、なぜそんな目先の数千ゴールドぼっちの指輪に目がくらむのか？ 皆様、そうお考えでしょうが、それは不思議のダンジョンの「不思議さ」を経験なさっていないから、でございます。不思議のダンジョンでは、その目先の「数千ゴールドぼっちのアイテム」が、億単位の価値のある品物に見えてしまうのです。「これさえあれば！」という人間の心理が働くのです。「これさえあれば、ダンジョンの奥の富と栄光にたどり着ける！」そう思わされるのです、他ならぬダンジョンの魔力によって。ギャンブルで「ここで当たりさえすれば」という心理と同じでしょう。さらに悪いことに、先このフロアでは当軍団・軍団長ライアンさんのはじやの剣が奪われてしまいました。これによって、ライアンさんの戦闘能力が落ちてしまうことは仕方ありません。しかし、これは何らかの形で早急に補うべきでしょう。ここで必要なのもアイテムです。武器を集めて、合成する。このことで、オリジナルの最強兵器を生み出そうではありませんか。それに忘れてもいますが、我々を守る盾もそろそろ用意しておくべきでしょう。様々なりスクに備えて、準備を整えるのです。このあたりのアイテム管理は商人である私に一人任していただければ、と言いたいところですが、私もひとりの弱い人間に過ぎません。

先ほど述べたような「ダンジョンの不思議」に引つかかってしまうことも正直言っています。そこからへんは、みなさんの意見もその都度腹藏なく話していただきたいと思っております。

とはいえ、アイテムなど、基本的には私が管理させていただきます。というのも、誰が管理するか決めておかないと、余計に何がどうなっているのかわからなくなるからです。肝心なときにアイテムがない、では困ります。ですから、誰かがそれを管理する必要があります。そしてその管理に最も適任なのは、最も不思議のダンジョンを熟知している私において他にない、と僭越ながら担当させていただきますが、その点、皆さん異論はないでしょうか？ 無論、必要な場合には従業員それぞれにアイテムを支給しますし、えこひいきももちろん一切致しません。ただ、ダンジョン攻略に必要なかどうかだけで判断させていただきますので。もし私よりアイテム管理が上手にできるという方がおられれば、遠慮なく手を挙げてください。

……

はい、それでは、私がアイテム管理をする、ということと決定しました。まあ、途中で不満があればまたこうした株主総会で遠慮なく言ってください。

まあ、前置きが長くなりましたね。では、これから最初に述べた比較的安全と思われる経験値稼ぎのやり方を説明しますので、是非とも頭の中に忘れず入れておいてください。

い。

まず、ここにワナの召喚スイッチがあるので、これを踏んでもらいます。そう、ひたすら踏んでもらいます。本当は階段の近くが良かったんですが——すぐに次のフロアへ行けるので。でもここも中々いい場所なのでここでやりましょう。あまり選びすぎているは何もできませんし、多少のリスクは覚悟の上です。

で、後はマーニヤさんに、この召喚スイッチの上で、華麗なダンスを踊っていただきたいのです。いえいえ、そう遠慮なさらずに。いつも通りの華麗なダンスを見せて頂ければ。大丈夫です、引き寄せた瞬間にこのサブマシンガンでモンスタ―は蜂の巣です。なので、モンスタ―がマーニヤさんを傷つける心配は全くありません。あつたとしてもすぐベホマで治療できますし、最悪死んでも大丈夫なのは先ほど体験なさった通りです。トルネコ軍団は従業員の安全には常に最大限、気を使っています。

そうそう、ちなみに私の弾丸がマーニヤさんに当たることも、心配無用です。フレンドリー・ファイアーはオフなので、銃弾は仲間にあたる寸前に消える仕様になっています。武器屋のシレンさんには、この設定だけでけっこうな金額を払いましたが、なかに、これから手に入れるモノに比べればスライムの屁みたいな先行投資額です。そんな端した金より、冒険中の考えうるリスクを少しでも減らす、この事の方がよほど重要です。さらにこのFFオフ機能、ロケットランチャーやグレネードランチャー、及び手榴

弾にも適用されているみたいなので、途中で武器を替えて試してみましようか。あ、スイッチを押す係りも、マーニヤさん以外にやりたい方がいらつしやれば、ぜひ申し付けください。

あと、この召喚スイッチ、『ワナ強化の巻物』で強化されているので、はぐれメタルであろろがなんであろろが、どこにいようとにかく引き寄せちやうスグレモノのワナでございます。あ、ちなみにこのワナ強化の巻物、シレンさんが巻物開発部からこっそり拝借した貴重な品物だそうです。まあ、もう二度と使うことはないでしょうが。こちらもけつこう高かったんですが、莫大な利益のための先行投資、と考えれば躊躇してはいられないでしょう。

あと、各自のメンバーは、それぞれ万一のモンスター撃ち取りこぼし、不測の事態に備えておいてください。特にクリフトさんは貴重な回復役なので、アーリーさんの愛の力でガツチリ守ってやってください、お願いしますよ？

……

いやあ、頼もしい返事ですね。あまりにお熱い愛の炎でクリフトさんを火傷させないように、気をつけてくださいね。

それでは、皆さん、準備はよろしいでしょうか？

これからが正念場です。皆さんの力を、パーティーの力を合わせて、この修羅場を乗

り越えましょう。まずはモンスタアの屍山血河を築きあげましょう。

その先に待っているのは限らない富と栄光です。そう、我々が、いや、むしろ我々こそが受け取るにふさわしい、正当な報酬が、その先にはあるのです。

それでは、各自準備はいいですか？

では、これよりトルネコ軍団、経験値稼ぎを開始します。

ネットクはさつきからずっと墓場に向かって手を合わせている。その墓に眠っているのはなんだろう？ きつと彼の大切な人だろう。ではそれは誰だ？ 家族、友人、恋人？

実際にはどれだろうと関係ない、たったひとりの人間が墓には埋葬されている。これはバーサーカーにはよく分かった。

己自身の、過去の亡霊……



## 28. グレイト・ヴィレッジ1

昔々、魔界のあるところにモンスターハウスがありました。モンスターたちが集まって生活している場所です。生活といっても、寝床のようなものでした。眠っているときは危険です。いつ襲われるかわかりません。だから、みんなが集まって眠れば、誰か悪い奴が侵入してきてもすぐ気づくことができる、そう考えてモンスターが集まったのがモンスターハウスです。

しかし、そのうち寝ている間だけでなく、起きている間もみんなと協力して生活していけば、みんなが安全で豊かな生活を送れるようになるのではないかと考えるようになりしました。

そうやってできたのがモンスター・ヴィレッジです。やがてヴィレッジはタウンへと大きくなり、やがていくつものタウンが連合してモンスター・カントリーが出来上がりました。カントリーはさらに発展していった、モンスター・キングダムになりました。

そしてモンスターはみんな仲良く暮らしていければ良かったのですが、そもいきませんでした。

悲しいことに、モンスター・キングダム同士で争うようになったのです。さらに同じ

キングダムの中でもひどい差別やイジメが起きました。弱いモンスターは、強いモンスターに支配され、酷使されたのです。命を奪われるようなことはありませんでしたが、命と同じくらい大切な尊厳を奪われました。

しかし強いモンスターの中にも、そんな現状を見かねた者がいました。グレイトドラゴンです。

彼は若い頃、理想に燃えてあるモンスターの王国を変えようと思いました。自分の力で差別やイジメをなくそう、せめて少なくともしようと思って、いっぱい勉強し、体も鍛えました。

結果、彼は誰もが認める偉大なドラゴンになりました。その噂が広まり、王族ではないのにキングダムの要職につくこともできました。彼は地方の行政長官となり、ある地方を治めるよう、派遣されました。彼はそこで今まで思い描いてきた理想を実現するため、全力を尽くしました。

まず、新しい法律を作りました。地方議会からは反対がありましたが、強権を発動して無理矢理法案を通したのです。本当はこんな強引なことをしたくなかったのですが、国を良くするために必ず必要だったと思ったので仕方なかったのです。それに奴隷制度は非人道的です。元々の性質として自由を好む魔物を、無理矢理仕事に縛り付けるのはよくないことです。そんな制度は廃止すべきです。彼の友人だったドラゴスライム

は、奴隷の強制労働に耐え切れず死んでしまいました。死体はゴミ捨て場に無造作に捨てられ、雨晒しになっていました。それを見たグレイトドラゴンは雨の中、墓を掘ってそつと埋葬してあげました。そして誓ったのです、他の死んだ奴隷は埋葬できなかつたが、必ず彼らのために奴隷制度をなくしてやろうと。それこそが彼らに対する最大の鎮魂だと。

そうやって反対は大きかったものの、理想への第一歩を踏み出したグレイトドラゴンですが、そんな彼にさつそく試練が立ちふさがりました。

中央から派遣されてきた監督官、ゴールデンゴーレムです。こいつはとつても嫌な奴で、強さと権力を傘に威張り散らすだけが能の一番嫌いなタイプのモンスターでした。それでも魔王の使者である以上、丁重にもてなさなければなりません。

とりあえず、使者に椅子を勧め、召使に命じて紅茶を出しました。かつては奴隷を使っていました、もう解放されたので新たな召使を雇ったのです。

「遠いところからご苦労さまです。まずはご一服を」

使者はギロリとグレイトドラゴンを睨みました。体は鉋物でできているはずなのに、その目だけは生物のような感じがして気味が悪かったのですが、そんなことはおくびにも表情にださず、愛想笑いでお返ししました。

「ああ、ホンマおおきにやで、グレちゃん」

言葉とは裏腹に、声は必要以上にドスが聞いていました。それにグレちゃんとは一体なんでしょう。友達でもないのに、大人としての礼儀も欠けているな、とグレちゃんは思いました。それに喋り方も気に入りませんでした。

「でもな、ワイはこんななりやから」

と、ゴールドデンゴレムは自慢の四本足を見せながら言いました。

「椅子はいらんのや」

代わりにこいつが魔王の椅子にでもなればいいのに、とグレちゃんは思ってしまったが、ひよつとしたら本当にそうなっているのかもしれない。だとしたら、この使者にもキツチリと道理を話せば自分の考えが通じるはずだ——そう思つて氣力を奮い立たせました。

「砂糖はいくつにいたしましょう?」

召使のドラキーが遠慮がちに訪ねました。

「そうやな。わしや甘党やから、3つ入れてくれや。あとレモンもたつぷりと頼むで」

召使は言われた通りにしました。チャポン、チャポン……と砂糖が赤茶色の渦の中へ飲み込まれてゆきます。召使が砂糖を入れ終わって、立ち去ろうとしたときです。

「ごめんやけど、やつぱりもう一個入れてくれへんか? なんせワシ、甘党やからな」

召使は言われた通りにしました。

「最後にレモンももうちよつと入れてくれへんか？ ストツプ、て言ったら止めてや」

一体、こいつは何をしたいのだろう？ よほど紅茶にこだわりがあるのだろうか……グレちゃんにはその意図がわかりませんでした。

「ストツプや！」

ちよつと大きな声だったので召使のドラキーはビクツとなつてレモンを絞る手を止めました。

「おお、ちようどいい、ちようどいい。いや、悪いな、わがまま言うてもうて。ホンマにありがとうな」

召使のドラキーは空中で深々とお辞儀をすると、気を利かせてそのまま黙って立ち去りました。

ドアがゆつくりと閉じてしばらくしてから、グレちゃんは軽く咳払いしながら話を切り出しました。

「それで、どういったご用件ですか？」

「ま、そやな。お互い隠し事せんと、単刀直入にいこうや、な？ それがええやろ」

「ええ、そうですね。もちろん、私も正直になんでもお話しますよ」

突然、パリンツ、という音が執務室に響き渡りました。あまりに突然のことだったので、それはゴールデンゴームが紅茶の入ったティーカップを、一口も飲まずにグレ

ちゃんに投げつけたからだと知るまでに数秒かかりました。

「アツアツの紅茶の味はどうや?」

ゴールドデンゴーレムは今日初めて見せた表面上は満面の笑みで、表面上は優しくそう言いました。

グレちゃんの皮膚は灼熱の炎も通さないもので、紅茶ぐらいの熱さではなんともありません。砂糖でネバネバになった紅茶のせいで皮膚のウロコにシミができたのも、少しイラツとしましたがそれほど気になりはしませんでした。

ただ、グレちゃんはこの行為によつて自分の肉体ではなく、自分の精神そのものが冒流されたように感じました。あの若い頃から持ち続けてきた理想を、自分を偉大たらしめているものを。それはとても嫌な感覚でした。体の奥から湧いてくるドロドロした熱い物体が、グレちゃん自身の皮膚を突き破りそうで、自分でも少し怖くなりました。

「なんや、さつきアンタ言うたよな。なんでも隠し事せんと正直に話すつて。正直に言うてみいや、え?」

グレちゃんは困り果ててしまいました。正直に感想を言えば、必ず争いになってしまいます。と言つて、何か適当に言い繕うアイデアも思い浮かびません。

気まずい沈黙が流れている間に、ノックとドアの開く音がしました。入ってきたのは、さつき紅茶をついだ召使のドラキーです。

「失礼します、いま何か大きな音がしたもので、様子を伺いに……あつ……い！」

召使いはグレちゃんのに体に紅茶がへばりついているのを見て絶句しました。

「ひどい……一体何があつたんですか！ 大丈夫ですか？」

「ああ、私は平気だよ」

「すぐに掃除しますから、動かないで待っていてください——

ボカツ！ ドラキーは最後まで言う前に、気絶して床に伸びてしまいました。そう、ゴールデンゴールムが長斧の柄を目にも止まらぬ速さで振つて、ドラキーを叩き落としましたのでした。

「へへッ、見てみいや。こいつちよつと小突いただけで泡食つて転がつとんで」

そう言いながら痙攣して床に寝転がるドラキーの脇腹を、さらに柄で軽くつつきました。

「いい加減にしろ！」

そう叫ぶと、グレちゃんは思わず長斧の柄を掴んで止めました。

「なんや、王の使者やぞ？ 逆らうつちゆうんか？」

「こんなことが許されるわけがない！」

「はっ、何いうとんのや。許されへんつちゆうのは、お前のやつた奴隷の解放のことやで——」

「なら私に直接言えばいい！ 王の使者なら勝手に暴力をふるっていいのか？」

「へへッ」

ゴールデンゴーレムはいやらしい笑みを浮かべると、そつと長斧を下げました。

「やつと腹割って話す気になったようなや」

ゴールデンゴーレムに、もはや攻撃する気はないようです。

「ああ、もう大丈夫だよ」

グレちゃんはずつきまで長斧を掴んでいた手で、やさしくドラキーを包み込みました。意識はありませんでしたが、心臓の鼓動が厚い鱗からでも感じられ、グレちゃんはちよつとだけ安心しました。

「アンタは大甘や。甘党のワシからみても大甘なんやで」

「お前のようなケダモノが何を言うか！ 今すぐここを立ち去れ！ これ以上何かしでかすなら——」

「じゃあ何するつちゆうんじやい!!」

ゴールデンゴーレムはグレちゃんの言葉を斧で切るみたいに断ち切りました。

「いいか、よく聞け。魔界はな、いま何人もの魔王が互いにしのぎを削つとるんや。それは激しいドンパチがそこかしこで起こつとる。弱い者は生きていかれへん、厳しい世の中なんや。強いもんかてな、厳しい戦いに勝ち抜いて生きる権利を得とんねん。



ホンマ言うたらこんな雑魚モンスターに生きる権利はあらへん。それでもうちの魔王様の温情で奴隷としてなら生かしてもらえるんや。

それをなんや！ お前のやったことは魔王様の温情にも唾を吐きかけとる。強いもと弱いもんを平等に扱うやと？ それやったら、今まで厳しい戦いをくぐり抜けてきた強いもんは、いったい何のために戦ってきたんや！ お前こそ、その頭の中のしようもない屁理屈を押し付けんな、ドアホが！ お前の言つとることなんか、砂糖入れすぎた紅茶ほどの価値もないんやで！」

「そっちの言っていることこそ、強者のための方便ではないか！ このまま弱者を虐げている、結局は同じことの繰り返しだ！ 強い者もいつ追い抜かれるか、そんなことに怯えながら生きていくのが、そんなにいいことなのか？ そんな移ろいゆく一部の強者のための体制が、長続きすると本気で思っているのか？」

「もうええわ。だいたいワシは魔王の使者であつて、お前さんと政治談義するために来たわけちゃうねん。さっさと要件だけ伝えておくから、いい加減目覚ましたほうがいいで」

ゴールドデンゴーレムは、机の上にバサッと便箋を投げました。

「魔王からの召喚命令や。お前さんがなんでこの地に派遣されたか知つとるか？」

もちろんグレちゃんは知っていました。グレちゃんの任地は前線から離れた後背地

で、主に武器、食料といった兵站を担っていました。しかし最近になっていろんな物品の生産が落ちてきていたのです。

「それをお前にどないかせえつちゆう話やったんやけど、お前のせいでそれもガタガタや。奴隷を解放してもうたせいだな」

「確かに、急に奴隷を解放すれば生産は落ちるだろう。だがこれ以上奴隷に強制労働させたところで、生産の回復などできるわけがない。長期的な視点で見れば、奴隷制度をなくした方が生産は伸びる。未来に希望があれば、みんなもつとやる気をだして働いてくれるのだ」

ドシンツ！ 大きな音が、執務室の中で反響しました。ゴールデンゴーレムが自慢の長斧でテーブルを両断してしまったからです。

「お前の経営哲学はもうええつちゆうとんねん。長期的とか言うけどな、物資が必要なのは今、この瞬間なんや！」

「現場を見てもらえば私の言ったことが分かってもらえるはずだ」

「お前こそ戦場の現場を見てみい！ なんべんでも言うたるわ、武器や食料が欲しいのは今、この瞬間なんや！ お前のいう長期的視点に立ったら全員討ち死にじや、クソボケッ！」

ゴールデンゴーレムは便箋を指しながら、さらに言いました。

「まあ、とにかく、魔王から召喚命令が来とる。もうお前はこの瞬間から地方長官の任を解かれることになるつちゆうわけやな。お勤めご苦労さんやで」

もちろん、その言葉に労わりの気持ちなど微塵もありませんでした。

「せいぜい魔王様の目の前でも今と同じことが言えるように、よう練習しとけや。あと一応言つとこか。ワイも鬼やない。包んでくれたらちよつとは手加減して報告したるけど、どうや?」

言わずもがなでしょう。ただでさえ賄賂などという汚らしい行為が大ッ嫌いなのに、こんなチンピラみたいな奴に渡すわけがありません。

「ふん、交渉決裂みたいやな」

ゴールデンゴレムはそう言うってから床に刺さったままの長斧を引っこ抜くと、四本足を器用に動かして走り去ってゆきました。

ようやく一難立ち去ったことを認識すると、グレちゃんはそのドラキーに目を落としました。

「う……ううん……」

「大丈夫かい?」

そつと優しく声をかけます。よかった、無事なようでした。怪我ならホイミスライムを呼べばすぐに治してくれるでしょう。

「うう……ん……ああ、シーザーさん……ぼく、また役にたてなかったみたいですね……」

「いいや、お前は本当によくやったよ。私が自慢に思うくらいにね」

「いいんです、もう……」

「なんのことだい？」

「もういいんです……結局、ぼくたちは平等じゃないんです……」

シーザーは、一瞬言葉に詰まりました。

そんなことはない！

シーザーは心の中で叫びましたが、それはどうしても口に出てきませんでした。

「みんな同じ形をしている人間ですら平等じゃないんです。違う姿かたちをしたモンスターなんて、絶対平等じゃなかったんだ……」

「本当の価値は、姿かたちの中にあるわけじゃない」

「ええ、そうですね……でも、もう諦めさせてください。ぼくたちは、シーザーさんみたいに強くない……それに……」

シーザーは、ただ黙って次の言葉を待ちました。

「シーザーさんが傷ついていくのをもう見たくない……シーザーさんの中にある本当の価値や、希望や、理想とかが……汚されてゆくのを……本当に偉大なものが落ちていく

のを……」

「本当の価値のために傷つくなら、私は本望だ。そんなことを気に病む必要なんてないよ。さ、もうお休み。今日はちよつといろんなことが起こったから。傷を治してゆっくり休むんだ」

「ぼくも、解放してもらった奴隷も、みんな忘れません……シーザーさんが戦ってくれたことを。たとえ一瞬でも自由になれたんだ……もうそれだけで、十分です……」

「もう休むんだ。今日のこととはまた後で考えよう……」

シーザーはホイミスライムを呼んで治療してもらおうと、ドラキートを医務室のベッドに運び込みました。

ドラキーは安らかな顔で眠っています。

自分にこの先、彼らを守ってゆくことができるのだろうか？

帰り道、シーザーは自問自答しました。しかし、答えは見つかりませんでした。いえ、正確にいうと、答えはもう出ていました。ただ認めたくない一心で今まで考えてこなかった。ただで、本当はもう分かっていました。

結局、自分の考えていたことはただの夢に過ぎないことだと……

その夜、シーザーは今までにないくらい泣きました。静寂の中、ただただ涙だけが流

れ続けました。

結局、シーザーは地方長官を解職されました。一応、魔王の前でも必死に持論を述べましたが、それが魔王やその側近の心を打つことはありませんでした。

魔王はかつて心優しい魔族で人間とも交流していたと聞いていたので期待したのですが、それも無駄でした。

魔王から厄介払いされたシーザーは、どうしようかと迷いました。このまま自分の理想を捨て去って、夢を夢として諦めてしまうのか。

諦めるのは辛いことですが、そこさえ乗り越えれば後は楽でしょう。シーザーの力と知恵なら、他にいくらでも生きてゆく術はあります。戦場で戦果を求めるのもいいでしょう。魔王にも今度は兵士になってみることを勧められました。

しかし、それで自分は満足するのだろうか。強さだけを求めて自分を駆り立てて、ひたすら殺戮するマシーンに徹する……そんな状態こそ、死んでいるのと何ら変わらないのではないか？

シーザーはそう思いました。では、だから何かアテがあるかというのと、それもありません。

シーザーは困り果てました。

シーザーはしばらくどうしていいか呆然としていましたが、理想や夢のカケラが彼を自然と突き動かしました。いま自分に出来ることはなんなのか？ なるべく理想に適つて、それでいて今すぐ始められることは一体なんなのか。

そうしている内にも、元の任官地では奴隷制が復活していました。シーザーはさらに焦りました。とにかく図書館へ行つていっばい本を読んで勉強し直しました。さらにいろんなモンスターにもいい知恵がないか聞いて回りました。

そうした結果、シーザーはこの魔物社会がどうやって出来上がったのか知りませんでした。そうだ、だったら最初から自分の理想とする社会を作つてしまえばいい。

シーザーはそう結論を出しました。無論、長い時間がかかるでしょうが、幸いにも魔物の寿命は無限に近いのでいつかは夢の叶う日を迎えられるかもしれません。それにこれなら今すぐ奴隷をちよつとずつでも助けることができます。一気に全部の奴隷を救うことはできませんが、それなら徐々に救うモンスターの数を増やしていけばいい。そのうち自分の作つたグレイト・リパブリック（とシーザーは呼ぶことにしました。本当はヴィレッツほどの規模もなかったのですが、どうせなら名前だけでも景気よくいきたいと思つたのです）が認められれば、他のキングダムもその制度を真似するかもしれません。もつと発展して本当にリパブリックになるかもしれないませんが、そこまでは今のところは考えないようにしました。とにかく、まずはなるべく多くの奴隷を救い出して

生活していけるようにするのが先決です。

そう決めると、シーザーはすぐに行動に移しました。

まず、村を建設するのに必要な資金を集めることから始めました。戦闘には参加したくなかったのですが、やはり実入りがいいのも戦闘関連です。とはいえ、直接参加することは嫌だったので、得意の飛行能力を生かして輸送部隊で働くことにしました。シーザーの輸送能力ならたくさんのワールドを稼ぐことができました。さらにこの輸送部隊は戦闘とは直接関係ないので、弱いモンスターが奴隷として使われていました。また、怪我などの後遺症で戦闘に参加できなくなったモンスターもいて、シーザーに色々考えさせるきっかけになりました。いろんな土地を移動するので、その土地々々で様々なモンスターとも会うこともできました。

シーザーは出会った奴隷のモンスターに自分の理想を語り、この新しい集落に参加しないか、と呼びかけていきました。

むろん、まだ形にもなっていないものなので、大半は胡散臭く思っただけで信じてくれませんでした。しかし、中にはシーザーの語る理想に惹かれて参加したいと答えてくれるモンスターも、まだまだ少数ですが確実に増えていきました。

そうやって資金やモンスターを集めながら、村を経営するノウハウなども着実に学んでいきました。



そして、ついにそれを実行に移す時がやってきたのです。

そこは辺鄙な土地でした。かつては大規模な農園が経営されていたのですが、土地のことを考えない無理矢理な増産によって、今は荒地と化していました。

まずはここを農地として再生し、生活の糧を得られるようにすることが先決です。

最初は数匹のモンスターと一緒に、シーザーは頑張って働きました。自分も奴隷と、いや、元奴隷と全く同じ仕事をして、みんなでこの村のために頑張りました。

結果、最初の収穫でとりあえず最初にやってきた十数匹のモンスターが食っていける分は確保できました。あとはこれをどんどん広げていけばいいのです。

収穫物のうち、食べる分は蓄え、来年に種として蒔く分は残しました。残りは売ってゴールドに替えました。ゴールドはわずかですが、それを全員で平等に分けました。

「もらってもいいんですか？」

いたずらモグラがそうたずねました。

「いいに決まってるじゃないか。君たちは文句も言わずによく働いてくれたんだ。これくらいの報酬は当然だよ。それに、君の土を掘り返す技術は、荒地を耕すときに大いに役に立った。これからも頑張ればもっと増えるぞ」

「やったあ！」

みんな大喜びです。シーザーも笑顔でそれを眺めていました。本当に見たかった光景が、ここにはありました。

しかし、シーザーの心の中には不安がありました。最初にある程度の成果が出たのは喜ばしいのですが、来年に天候不順などに見舞われればすぐに村は潰れてしまうことでしょう。本当はゴールドも分け与えずに村の貯蓄として貯めておきたかったのですが、どうしても理想の方が優先されてしまったのです。それに全部村のものとして貯めてしまえば、結局やっていることはキングダムと同じになつてしまいます。

最初は理想を曲げてでも村を軌道に乗せるべきかと悩んでいましたが、みんなの笑顔を見るとこれはこれで良かったのだ、と思うことにしました。少なくとも、自分の理想は正しかったことは証明されたのですから。

ところが、翌年にさつそく心配したことが現実になりました。

天候不順で雨が全く降らないのです。困り果てましたが、そこは輸送隊時代に知り合つた井戸魔人やあめふらしを呼び、また前年の報酬でやる気を出したモンスターの方のかいもあつて、見事に前年以上の収穫を上げることができました。また、農地を少しですがさらに広げることができたのも大きいことでした。

このときの決議によつて、収穫物の一部をいざというときのために蓄えておくことも決められました。決議は全員の平等な投票によつて決められました。

モンスターたちはみんな喜びました。

それを見た井戸魔人やあめふらしも、本当は報酬だけもらって帰るつもりだったので、村に残ることにしました。

こうして村のほしいの形が出来上がり、やがてシーザーの偉大さと、それを盛り上げるモンスターたちの噂が、さらにモンスターを呼んで村は大きく発展していったのです。

(『グレイト・ヴィレッジの歴史』より)

ポポロはそこまで読むと、紅茶を持ってきたドラキーンに視線を向けました。

「ひよつとしてここにでてくるドラキーンって君のことなの？」

ドラキーンは少し照れくさそうにしつつも、

「まあね」

と笑いながら答えました。

「やっぱりバレちゃったか」

「当たり前じゃないか。僕がこの村に初めて来たとき、君が言った『姿かたちに本当の価値はない』という台詞は、ここからきていたんだね」

「うん、そうなんだ」

「すごいや。人間でも中々そう言う人はいないよ」

ポポロの感心極まりない視線を身に受け、ドラキーはますます恥ずかしくなりました。しかし、それは全然不愉快ではありませんでした。ちよつとくすぐられるような感じに似ています。

「いや、僕だつて最初は半信半疑だつたんだ。だけど、シーザーさんが本気でこの村づくりにとりかかつてから、僕たちもだんだんそれを信じるようになっていったのさ」

「人間にもシーザーさんみたいな人がいればなあ……」

ポポロは遠くを眺めるような目つきでしみじみとそう言いました。並ぶ本棚の向こう側に、憧れそのものがあるかのように。

「君がそうなればいいんだよ」

低い、威厳のある、それでいて限りない優しさがこもった声がそう語りかけました。

「あ、シーザーさん！ おかえりなさい。今日の買い出しはどうでした？」

ドラキーはシーザーのところへ喜んで飛び寄りました。ポポロも微笑ましい表情でこの光景を眺めています。

「最近は何価が上がって大変だよ。そんなことより、ポポロ君。君はまだ若い。これから努力すればもつと偉くなれるさ。もちろん、私なんかよりね」

「僕には多分無理ですよ。シーザーさんみたいに強くないから」

ポポロはため息混じりにそう言いながら、パタリと本を閉じました。そこには諦めがありました。シーザーにはよくわかります。自分が何の価値もなくなつたような、そんな喪失感を。

「私のどこが強いというのかね？」

「灼熱や吹雪を吹いたり、空を飛んだり、力や身の守りのステータスも高いし、それに頭もいいじゃないですか」

「そんなことは全部表面的な強さに過ぎないんだよ。『本当の強さ』はまた別なのだ」

「それでも表面的に強いだけだとしても『弱い』よりかマシでしょう？」

「いいや、そんなことはない。私は見てきたんだ。『本当の強さ』を失つたものが、やがて修羅と成り果てて朽ちてゆくのを……昔から、嫌というほどね。『本当の強さ』に裏付けされない表面的な強さなど、むしろ害悪でしかないんだ」

「じゃあ、その本当の強さってなんですか？」

ポポロがシーザーの目を見つめながらそう問い返しました。その瞳の中に宿る切実な思いを見ると、シーザーは昔の自分を思い出しました。あの、挫折した昔の自分を。

「それは言葉にするのは難しい。ただ、一つだけヒントを言えるのなら、それは『受け入れること』だと思っている」

「受け入れる？」

「そうだよ。みんな違っている、その違いを受け入れるんだ。これが簡単なようだけれど、みんな姿かたちで判断してしまうんだ」

ポポロはそれを聞くと、何か深く考えるようにして目線を本の表紙に落としました。

「まあ、ポポロ君にはまだ分からないだろう。今はわからなくても仕方ない。これから学んでいけばいいのさ」

「でも、僕には受け入れられない人がいます。あの人だけは何があっても絶対……」

沈痛な空気が辺りを支配しました。

「実をいうと、私にもそういう者がいるんだよ。だから、私もまだ完全に強くはない。いや、もしかしたらそんな『完全な強さ』を持ったものなどいないのかもしれない。でも、そこになるべく近づけるように努力していくことが大事なんだよ」

シーザーはいまだにあのゴールデンゴレムの話を夢に見るときがあります。彼は今頃どうしているのだろうか？ やっぱりあのままなのだろうか。それとも彼はもう、強さを求めることに挫折したのだろうか。

「この本、ちょっと借りてもいいですか？ シーザーさんの言っていること、正直って僕にはまだよく分かりません。でも、この本を読んでシーザーさんがやってきたことを知れば、何かわかってくるかもしれない、と思うんです」

ポポロはまたシーザーのほうに視線をあげてそう言いました。その目には相変わら

ず切実な表情がありました。ちよつとだけ希望もありました。この希望に応えられるだろうか。それだけが不安でした。自分のやってきたことで、はたしてこの子を救えるのだろうか。でも、今更心配ばかりしても仕方ありません。最後はこの子自身の足で歩いていくしかないのですから。その時にどんな結論を出したとしても、自分は受け入れてやろう。シーザーはそう思いました。

「ああ、もちろんいいとも。君は勉強熱心ない子だね」

「どうしてこんない子が虐待なんか……」

ドラキ―は思わず口にしてしまいました。

「あ……ごめん、思い出させるようなこと言っちゃって……」

急にポポロの目が曇り、それからすぐに視線を落として、まるで本に語りかけるようにしてポポロは言いました。

「いいんだ。僕は悪い子だから……」

それつきり、アストロンで固まったように動きません。シーザーは本当に思い出しましたのかもしれない、と心配になりました。

「こら、そんな自分を責めるようなことを言つてはいけないよ。君が悪い子なんて大嘘  
キ」

「だっていつもそう言われてたから……」

「とにかく、ここでもうそんなことは忘れるんだ、いいね。悪い子なんて、何の意味もないただの言葉に過ぎない」

「ええ……そうですね。それじゃあ、ちよつと小屋に戻つてじっくり読んでもいいですか?」

「ああ、今日はもう仕事もないし、そうしなさい」

グレイトドラゴンは微笑を浮かべてポポロを送り出しました。途中、ポポロがこちらを振り返つて微笑を返しました。それを見て、何が何でもあの子を守つてやろう、とシーザーは決心しました。

そうしてポポロはモンスターたちから与えられた小屋に入り、後ろ手にしてドアを閉めて鍵をかけた。借りてきた本を乱雑に机の上に放り投げると、ランプに火を灯した。

椅子を引いて腰をかけ、足を机の上に置いて組んだ。

しばらく顔を手で覆いながら、震えていたが、それは今までのつらい経験を思い出したからではなく、さっきのやり取りを思い出して笑つていたからだつた。

「あははははー!」

思わず声が漏れてしまった。今の自分の演技が思つた以上に完璧だつたことに深い満足感も覚えた。



それにしても、このモンスターどもはバカばかりだ。

『姿かたちに本当の価値はない』

思いついて口元が歪んだ。まあ、これが「見た目で判断するな」という意味ならこの言葉は非常に学ぶべきものになるだろう。それはおいおいこのモンスターが高い授業料を払って学んでいくことになる予定だが——学んだところでそれを生かすことはきつとできないだろうなあ、とポポロは考え、そこまで考えるとまたしても笑いが止まらなくなった。

それにしてもあのドラキー、まるで巨大なウンコにたかるハエみたいだったな。

あれはいらないモンスターだ。ただし、ポポロは今までどんなモンスターも受け入れてきた。『強さ』を持っているので、用済みになるまでは受け入れてやろうと考えていた。

そう、今までモンスター使いとしての素質を生かして様々なモンスターを役使してきたが、そのどれもが戦力というには決め手を欠いていた。冒険者駆け出しのポポロはただダンジョンの低い階層しか探索できず、それゆえ弱いモンスターしか仲間にできないから当然といえば当然なのだが、ポポロは焦っていた。

じっくり時間をかけてダンジョンを攻略していければ、それにこしたことはない。だが、ポポロにはその時間が惜しかった。そんなチンタラしては、ネネ——あのクソ

ババア——が全ての商店街の店を駆逐してしまうだろう。そうになったら自分の負けだ。負けないためには、何が何でもダンジョン深くまで潜れるようにならなくてはならない。しかも、それは前提条件であり、そこからさらにレアアイテムを集めなければならぬ。

が、何にせよまずはダンジョンの奥に潜れなければ話にならない。ポポロ自身の戦闘能力はそれほど高くないのは、自覚していた。だから仲間モンスターの出番なのだが、それが弱いモンスターしかないのだ。弱いモンスターでも、将来レベルを上げれば強くなるモンスターもいる。スライムナイトはその代表例だろう。ポポロも何匹か仲間にしているが、強くなるまでには膨大な経験値が必要だ。それに装備させる武器や防具も。それらを全て揃えている暇が惜しい。どこかに強いモンスターが転がっていないか——そう躍起になって調べてたどり着いたのがこの村だった。すでにモンスター使いの間では噂にはなっていたのだが、なにせグレイトドラゴンが守護神のように守っているせいで、普通のモンスター使いには近づくこともできない。

だが、ポポロはここで自分が子供であることを感謝した。か弱い子供を演じれば、もしかしたら入れてくれるかもしれない——読みは的中した。噂から、すでにこの村が弱者保護のための村だと分かっていたからだ。懸念といえば「人間」を受け入れてくれるかどうかだけだったが、それもあのアホドラキーが「姿かたちに本当の価値はない」と

いう、自分から言いだせば胡散臭くて信用されなかったことをわざわざ言ってくれたおかげですんなり村に迎え入れられることができた。さらに作り話で両親から虐待を受けて家出してきた、という設定にした。実際は暴力的な虐待などは受けたことなどないのだが、冒険者は生傷がたえないため、冒険でついたあざなんかを見せてやれば一発で信じた。

まあ、とにかく、村への潜入は見事成功したし、信用も早期に得ることができた。

第一歩としては上出来だろう。

あとはどうやって目当てのモンスターを仲間にするか——それが最大の課題だ。

通常、モンスターを仲間にするには一旦倒さなければならぬ。そうやって強さを認めさせ、弱ったところにつけこんで洗脳する。これが一番確実な常套手段なのだが——あのグレイトドラゴンには、それは通用しそうになかった。あいつを倒せるモンスタ―を、ポポロは持っていなかった。

本丸の守備が硬いなら、外堀から埋めていく——この作戦でいこう。細部はまだ詰め切っていないが、だいたいこの計画はできていた。あとはこの村に他に使えるようなモンスターがいまいか調べておくことだろう。ターゲットをあぶり出し、絞り込む。そしてさらに計画の細部を詰めるために、この村の歴史にも目を通しておかねばならない。

このくだらない、説教臭い本にまた目を通すのははつきり言っただけの骨の折れる作

業だった。学校の教科書でももう少しマシな書き方をしてるものだが、まあこれも仕方ない。さつきも思わず眠気に負けそうになって気分転換に周囲を見たらドラキーが紅茶を持ってきたから、さらに信用を得て親密になるために話しかけた。そこにタイムングよくシーザーまでやってきたのはますます都合がよかった。一気に目標のモンスタ―との親密度を上げることに成功した。

だが、反省点もある。最後に振り返ったとき、あまりにそれまでの演技がうまくいったので微笑むつもりが思わずほくそ笑んでいたことだ。距離が遠かったから気づかなかったものの、あのような致命的ミスをやつらの目の前で犯したなら、これはもうかなりヤバイことになりそうだ。いくら信用を得たといっても、まだまだ日は浅い。今一度、気を引き締めて慎重にことを進めなければならぬだろう。

よしと。

ポポロはそこまで考えると、机の上で組んでいた足を下ろして、本の表紙を開いた。この本には、まだまだ学ぶべき情報がある。それだけは確かなのだから。

だから、しばらくは眠気を抑えて我慢しなきゃね。

さつき読んだところまでページを繰ると、ポポロの目線はまたしても文字列を追いかけ始めた。

## 29. グレイト・ヴィレッジ2

そうして村はどんどん発展していきました。農地も広がり、単位面積あたりの収穫量も大幅に増えました。しかし、一つだけ問題点がありました。モンスターが増えてくるに連れて、生活必需品を買い集める必要が出てきたのですが、これを農作物の収入だけで補うのはかなり無理がある、ということでした。たとえば農業で使う鋤や鍬を作ってくれる鍛冶屋のような人がいれば、助かるのに……そう思っていたところ、ひとりのギガンテスがやってきました。ギガンテスは魔物の中でもトップクラスの屈強さをほこる種族です。まだ魔界は乱世だったので、ギガンテスみたいな戦闘種族がやってくるのは誰も思っていないませんでした。最初はこの村を襲いに来たのかと思って、シーザー以外のモンスターは家の中に引っ込んでしまっただけです。

ところが、シーザーがよくよく話を聞いてみると、このギガンテスはいかにも面白いような境遇だったことがわかりました。

ギガンテスのギーガは、最初はみんなが思っていたような凶暴な兵士でした。魔界の魔王同士の戦いに明け暮れ、どれだけたくさんのモンスターを殺して戦果をあげるかが生きる目的でした。それがある日、崩れ去ってしまったのです。

ギーガは、ある砦の守備を任されていました。しかし、その任務自体が仕掛けられたワナだったのです。敵軍の前線に近いところで、僅かな守備兵しか与えられませんでした。それでも、命令なので断ることはできません。

案の定、敵の大軍が砦に攻めてきました。ギーガは友人と一緒によく奮戦しましたが、多勢に無勢。さらにマヌーサなどの魔法のせいで思うように攻撃することすらできなくなりました。それでもさすがに腕に覚えのある兵士なのでしばらくは敵軍を食い止めてはいましたが、やがて奮戦虚しく負けてしまいました。その際に大切な友人を失いました。敗戦の責任は問われなかったものの、戦闘中の怪我でしばらく戦えないようになってしまいました。そんなギーガを、仲間のモンスターは慰めるどころか逆にライバルを追い落とすチャンスと思っていたのです。陰湿なイジメが始まりました。役立たずは飯を食うなと言われ、兵糧すらもらえなかったときもありました。

そしてこの砦守備作戦そのものが、ギーガの功績を妬んだ上司が仕組んだものであることを知りました。他のモンスターも薄々感づいていましたが、落ち目のギーガを助けるよりも上司のほうへゴマをすったほうがいいに決まっています。

ギーガはそんな様子を見て、自分はこんなくだらなくならないことのために戦っていたのかと痛感したのです。そしてこんなくだらなくならないことはもうやめにしよう。それより何か死んだ友人に喜んでもらえるようなことをしようかと心に決めました。

ギーガは昔からの夢だった鍛冶屋になろうと思いい立ちました。元々力はあるのでそういう仕事は得意ですし、いつか伝説の武器を作れるような、伝説の鍛冶屋になるのが夢だったのです。時代の要請で兵士になりましたが、それに愛想が尽きた今なら鍛冶屋も悪くないでしょう。

ただ、鍛冶屋といっても戦争の道具として使われる鍛冶屋なら嫌でした。くだらない戦争のために武器を作るなら、やっていることは何ら変わりありません。何かもつと夢を実現するにふさわしい場所はないか、魔界を放浪しながら探しました。

そうしているうちに、ギーガはグレイト・ヴィレッツジの噂を耳にしたのです。ここなら何か期待できそうだとギーガは思いました。少なくとも戦争に駆り出される、利用されることはないのだけは確かです。

最初は半信半疑で訪れたのですが、シーザーと話し合ううちにこここそ、自分の残りの魔生を捧げるにふさわしい場所だと感じました。

しかし、それでも最初は不満がありました。それというのも、ときどき村を大きくするために農業に駆り出されることがあるからです。好きに鍛冶に打ち込みたかったギーガにとつて農業はさして興味のないことでした。

元々寡黙であり表情を表にださないタイプだったので、そんなギーガがムスツとしながら作業していると、他のモンスターは怯えてしまいます。

しかし、農作業用の農耕具などを作ってもらったおかげで作物の出来は上出来でした。

今年の豊作はギーガの活躍があつてこそだったので、みんな収穫物を惜しみなく分け与えました。また、子供たちが花壇で作った花などもプレゼントしました。そうしていくうちにだんだんとギーガも村人と打ち明けていくようになりました。

そうやって、ギーガは初めて気づきました。自分の心がそれまでどれだけ荒んでいたのか。そういう生きていて当然味わえる喜びというものを、戦闘に明け暮れていたギーガは初めて知つたのです——（『グレイト・ヴィレッジの歴史』より）

それから先も夜がふけるまで眠気に耐えながら本を読んでいたが、使えそうなモンスターは村長のグレイトドラゴンとギガンテスくらいだった。もう少しくらいいてくれても良かったのだが、まずは二匹で十分だろう。他はこの二匹を仲間に引き込むための撒き餌と割り切つて行動すべきだ。

さて、まずはその撒き餌を手懐けるところからはじめるとするか……

ポポロは保存の壺を取り出して、中を覗いた。

あるある。新鮮な霜降り肉がわんさか。味付けにはちよつとした麻薬を使つてある。これはマタタビのようなもので、人間には効果がないが、モンスターには効果抜群、と



いうスグレモノだった。

この麻薬漬け霜降り肉、高かったなあ。ぼったくり価格だよ。でもまあ、いつか。父さんも言ってたしね。「先行投資でケチる奴はいい収穫祭を迎えられない」って。

そしてこれと同じ保存の壺はまだ6つある。それを見て、ポポロは盛大な収穫祭になりそうだと期待に胸をふくらませた。

「おはようございます」

ポポロは、爽やかな朝の陽光を受けて黄金色に輝くシーザーに元気よく挨拶しました。

「やあ、おはよう、ポポロ君。借りた本は読んだのかい？」

「ええ、もう全部読んだので、返しに来ました」

「全部？ えらく早く読み終えたんだね」

シーザーはちよつと驚きました。

「ええ、全部読みました。特にギガンテスさんの項目は、かなり印象的でした。元兵士の心の再生が語られていて、本当の強さがなんなのか、なんとなくですけどわかったような気がします」

「ああ、それはよかったよ。ただし、それはあくまで本を読んで得た知識に過ぎない。本

当に理解できるかどうかは、ポポロ君のこれからの行動しだいなんだ」

「ええ、それはもちろんですね。僕も、読んだだけで全部分かったわけでもないですし」  
きつとこの子ならなんとか立ち直っていけるのではないかとシーザーはちよつと明るい気持ちになりました。それは爽やかな朝日の影響もあつたのかもしれませんが、ここまで聡明な子供はシーザーも見えたことがありませんでした。

「本、返しときますね」

「ああ、それは私が返しておこう。それより、ギーガ本人に会いたくないかい？」

「え……うーん……」

「おや、どうしたんだい？」

「いえ、なんていうか、ギーガさん、けつこう気難しい人なんじゃ……初対面だし、新入りの僕にちゃんと会ってくれるかなって……」

やはり虐待の経験からでしょうか。シーザーはそう考えると少し悲しくなりました。子供が無条件で一番信頼している親が、その子供を裏切るなんて——とても信じられませんが、それが子供を人間不信にさせる——少なくとも、ポポロの場合はその一歩手前までできていたのかもしれませんが。そう考えると、なんて酷いことだと思わずにはいられませんでした。そして、自分や村が立ち直るために少しでも手助けができれば、とも。

「なあに、そんな心配は無用だ。確かに、少し気難しいところはあるが、それ以上に優し

い人だ。そんな心配は全くの杞憂だよ」

「ならぜひ会ってみたいです」

「ああ、早速会いに行くといい。ポポロ君はまだ来たばかりだし、村のこともよく分からないだろうから、まずはこの村がどういう村なのかを知ってほしい。仕事はそのあとゆつくり覚えていけばいい。とはいえ、ひとりで行くのも確かに気が引けるだろうから誰か案内役を付けるとしようか」

シーザーはそばにいたドラキーに命じてネックを呼びに行かせました。

「やあ、おはよう、シーザーさん。今日は朝から魔法の稽古をつけてくれるのかい？」

出てきたのはライオネックでした。人間年齢で換算するとポポロよりいくつか年上という程度でしょうか。まだ完全に大人にはなっていませんが、すでに堂々とした体格をしています。

「お前は本当に戦うことばかりだな。もう少しポポロ君を見習ったらどうだ？ あの本もポポロ君は昨日借りて今日には読み終えて返してきた」

「ええ、あんな面白くもない本を一日で読んじまうなんて頭がどうかしてるぜ！」

「こら、目の前にいる作者にも読者にも失礼ではないか！」

シーザーがちよつとだけ怒りました。まあ、案外本気で怒っていたのかもしれないが。

「それよりネック、君に頼みたいことがあるのだよ。最近村に入ってきたポポロ君の案内をしてくれないか？」

「なあんだ、そんなことですか」

ネックはつかつかとポポロの目の前に歩み寄ると、たくましい手を前に差し出しました。

「俺はネック。あんたの案内役を務めさせてもらうことになった。よろしくな。わからないことがあつたらなんでもきいてくれてかまわないぜ」

しかし、ポポロは呆然とネックを眺めるだけです。その様子はどうしていいか分からない、というよりも本当に心ここにあらず、といった感じでした。

「あ、ごめん。まさか本物のライオネックをこんな間近で見られるなんて、ちよつとビツクリしちゃって」

そういうとポポロはネックの差し出した手をガツチリつかみ返しました。

「村の歴史を書いたあの本にも君のことは載ってなかったから」

「ああ、まだ俺の輝かしい歴史が刻まれてないっていうのかよ」

シーザーはため息をつきました。

「お前は本当に性懲りもないやつだな。自信家ぶるのは、せめて私より強くなつてからにした方がいいぞ。それにお前はこの村に来て3年も経ってないじゃないか。まだ歴

史にするには早すぎるだろう」

「ああ、シーザーさん、すげえいい人だけどちよつと頭が硬すぎんぜ。あの本、俺のことを書いてもつと面白くしたほうがいいと思うんだよ。だいたい、デスピサロによる魔界統一までしか記録してないっていうのもおかしいし。それ以降の魔界も色々あつたし、村人も色々入ってきたんだからさ、もつと書く事あるじゃんかよお」

「ううむ……まあ、お前のことを書いたところで面白くならんとは思うが……魔族は寿命が永遠に近いし、私も忙しくて書く暇がないからな。つつい執筆が後回しになってしまう」

「まあ、仕方ねえか。いざとなつたら俺が自伝を出版するまでだ」

「なら今から勉強を教えようか？ お前の文章では自伝を書くどころか自己紹介も怪しいところだ」

「いやー、それは遠慮しまーす！ それより、ポポロの案内があるんだろ？ さつさと出かけようぜ」

「おつと、お前と話をしているとついつい長話になってしまう。そうだな、早くいっつておいで」

「とりあえず、最初はどこに案内すればいいんだ？」

「ギーガさんのところへ、お願いします」

ポポロが遠慮がちに言いました。

「ああ、あのオヤジのところか。アイツも相当ヤバイやつだよなあ。まあ、俺には及ばねえけどよ」

「ネツクさんはそんなにヤバイんですか？」

ポポロはとても関心があるようでした。

「ああ。俺は将来、魔勇者になってこの世の魔王を全部倒してやるんだ。だから、将来の魔界の貴公子と仲良くなるなら今がチャンスだぜ。なつた後じゃあ、もう取り巻きがうるさくて到底仲良しにはなれないだろうからな」

「え、でも魔王はもう死んじやつたんじゃ……デスピサロも、その後に生命の秘法で魔王になったエビルプリーストも……」

「まあ、人間じゃそこまでしか知らないよな。実は、その後魔王の執事であるヘルバトラーたちが魔界を勝手に分断して戦争を始めやがったんだ。しかも勝手に魔王を名乗ってる。俺から言わせてもらおうと、所詮執事は執事だから魔王として力不足で——

「こら、ネツク！ 朝早くに君を呼んだのはポポロに演説を聴かせるためじゃないんだぞ。口ばかり動かししないで、早く案内してあげなさい」

「あー、そうでした。すぐに案内します！ まあ、ポポロ、続きは道中でゆっくり聞かせてやるよ」

「うん！」

ポポロの顔にも屈託のない笑顔が戻ったみたいで、そこだけシーザーはホツとしました。

二人は並んでギーガの家へ歩いて行きました。その後ろ姿がだんだんと遠ざかって小さくなってゆきます。

その光景を眺めていくうちに、シーザーの不安も少しずつですが小さくなっていききました。

ネットクは若者にありがちなうぬぼれ屋ですが、それ以上に明るく魅力的なので、本当ならこんな心配する必要はないのです。しかしシーザーとドラキーだけは知っていませんでした。

ネットクがヘルバトラー同士の戦争に巻き込まれた戦災孤児だということを。

両親を殺されて、命からがら逃げ出してきたのを偶然に救出したのでした。

最初は塞ぎ込んでいましたが、若者特有の回復の速さで、すぐに元気になった……ように見えました。確かに性格は明るく人あたりもいいのですが、シーザーにはそれが傷口を隠すために無理に元気に振舞っているように見えて仕方がありません。

実際にネットクは魔法や武術に尋常ではない興味を示しています。本人は村の防衛のためと言っていますが、本当の目的はシーザーにはよくわかりました。

復讐……

永遠の生をもつ魔族が復讐にとりつかれれば、現し世を彷徨う永遠の幽鬼となるだろう……魔族に古くから伝わる格言です。思い出して、これほど格言というものに現実感を覚えたのはシーザーが生きてきて初めてのことでした。

ネツクの復讐の念はシーザーにもよくわかりました。だからもし復讐に生きることを決めたとしても、止めるつもりはありません。

ただ、なぜかネツクがバカなことをしでかさないか、それだけが心配で、小さくなった不安はまた大きくなって、その重さでシーザーの胸を締め付けたのです。

ネツクが強くなったとき、果たしてネツクに「本当の強さ」が備わっているでしょうか？ それができなかったら、他ならぬ自分も後悔することになるでしょう。

そう、永遠に……

カン！ カン！ カン！

小屋の中からリズムミカルな音が響いてきます。鉄と鉄がぶつかり合う音です。激しさの中に繊細さもあり、聞いただけで職人の技を感じさせました。

カン！ カン！ カン！

ネツクが扉を開けて小屋に入って行きます。



「よう、オッサン！」

小屋の天井に届きそうな場所にあった頭が、ゆつくりとこちらに振り向ききました。

「なんだ、ネツクか。全くお前は、挨拶もちやんとできないのか？」

「まあ、そんな固いこというなって」

「何を言うか。いつも言っているだろ。武は礼に始まり礼に終わる、と。もう武術を教えてやらんぞ」

「今日は武術を習いに来たんじゃないんだ。新入りのポポロを案内してやってるんだよ。オッサンの素晴らしい仕事を見学にきたってわけさ」

「ふん、まあいいだろう」

一つしかない目が、ポポロのほうをギョロリと睨みました。

「気が済むまで見ていくがいい」

そう言うと、また金床に振り返ってカナツチを振るいました。

カン！ カン！ カン！

ネツクは肩をすくめて両手を広げました。

「ま、あんなこと言ってるけど、そこまで愛想悪いオッサンじゃないから、大丈夫さ」

ポポロもネツクも、しばらくは一緒になって鍛冶場を眺めていました。カナツチが振り下ろされるたびに、赤い火花が飛び散ります。それは破壊的であると同時に、創造的

でした。無機的であると同時に、生命的でした。

それは何も語っていませんでしたが、同時に今までのギーガの魔生を雄弁に語っていました。一撃一撃に、生きていく悲しみと辛さ、苦痛、悔恨、憤怒、憤怒、絶望……そしてそれに負けない歓喜、希望も。

いつもはあんなにお喋りなネックも、この時ばかりは見入っていて、つつい喋るのを忘れてしまいました。ギーガの無言の演説に聞き入っていたのです。

ギーガが真つ赤に燃えたぎる金属を、水の中に突つ込みます。

ジュウツ！

「これは井戸魔人が掘ってくれた最良の井戸から汲んできた水だ。山頂から流れてくる雪解け水が、地面を伝って濾過されて生まれ変わったのがこの水だ。遠いところから旅をして、いろんな経験を経てようやくここにたどり着いた」

まるで自分のことを話しているかのように、ギーガは淡々と言いました。

やがてもうもうと立ち上がる水蒸気が収まりました。

「さて、今回の出来はどうかな？」

取り出してみると、そこには見事な脈を打つ剣がありました。一つ一つの紋様が、剣の角度を変えるたびに様々な煌きを放ちます。それは浜辺に打ち寄せながら太陽の光を乱反射するさざ波を思い起こさせました。そう、永遠に打ち寄せ続けるさざ波、引く

ことのないさざ波。一步も引かない、強い意志が感じられました。  
「すげえ……」

ようやく、ネックが口を開きました。

「まあまあだな。今回はもうちよつといいところまでいくと思っただがな」

「いやいや、それすげえよ。まるで生きているみたいだ、その剣」

「前よりはマシな出来だが、まだまだ伝説の武器には程遠い」

「いつか、俺の剣も作ってくれよ」

いつもは軽い口調のネックですが、このときの言葉には切実な思いがありありと感じられました。

「ふん、誰がお前のくだらない戦いのために剣など作るか」

「えー、オッサンのケチ野郎。将来の魔界の貴公子だぜ？」

「それはありがたい。俺も執事にくらいしてもらいたいものだな」

「執事どころか公爵にしてやるよ。それで専用の助手もいっぱいつけて——いくらでも伝説の武器作りをしてもいいんだぜ？」

「お前は昔の俺にそっくりだな」

「え、どこが？」

「まあ、そのうち分かるさ。嫌でもな」

ギーガの口調には有無を言わさないものがあり、ネックも反論しようとしたが、すぐに諦めました。

「それよりさ、出来た剣、ちよつと触らせてくれよ。せつかく今日は客人もいるんだし」  
「そうだな。ほら」

そう言うのと、ギーガはポポロの近くの金床の上に、剣をそつと置きました。

「いくらでも眺めていいぞ。触つてもいいが、怪我をしないようにだけ注意しろ。後で俺がシーザーに文句を言われるからな」

「おう、分かつてゐるつて。ほら、見てみな、ポポロ。すごい剣だと思わないか？」

「うん……僕は武器に関してシロウトだけど、これほど見事な剣は見たことがないよ」  
ポポロはまじまじと剣の描く紋様に見入っていました。

とそのときです。急にネックがポポロの手を取ったかと思うと、さつきまで真つ赤に燃えていた剣に押し付けたのです。

「ほら、熱——い！」

「ぎゃっ！」

そんな叫びにもならない叫びを上げながら、ポポロは慌てて手を引つ込めました。

「あははははは！」

ネックは大爆笑です。

「もう……！ ビックリしちゃったじゃないか！ ネットクのせいだぞ！」

しかしポポロの手はどうともありません。すでに剣は雪解け井戸水によつて十分冷えていたからです。そもそもそんな火傷するような熱い剣を、ギーガが渡すわけがありません。

「お前、面白いよ！ 今までで一番面白かつたぜ！」

「全く、くだらんことをする奴だ。これだからお前に剣を作りたくないというのもよく分かるだろう？」

「はい、もう二度としませくん。でも、今のは俺の自伝にぜひ書いておきたいな。マジにこの剣もろとも『傑作』だったぜ！ あははは！」

「もう……いい加減にしてよ！」

ポポロはプリプリ怒りながら言いました。

「あ、ごめんごめん」

いつもどおりの軽い口調でしたが、それでも少しだけ申し訳なさそうでした。

気を取り直して、ポポロが剣に指を近づけます。ネットクもその様子を、今度は何もせず黙って見守っていました。

ポポロの指が、剣のお腹をそつと撫でます。それは剣に込められた傷ついた精神そのものを癒そうとしているかのようにネットクには見えました。いえ、剣そのものが傷つい

た精神なのです。そして、その剣が前作よりだんだんと美しくなっていく様子は、ギーガの精神の再生をあらわしているかのようでした。

ポポロの指が、さぎなみの間を踊るようにすり抜けていきます。

「すい……」

ネックも同じようにして剣に触れました。紋様の波打つ様子は、剣が自力で鼓動しているように感じられました。この剣を作ったものの精神が、よく伝わってきます。

「武器じゃねえ、芸術作品だよ、これは」

ネックは思わずそうもらしました。

「ああ、そうさ。戦いのためではない。友に捧げるための、不完全すぎる芸術作品だ」

もういいだろ、というようにギーガは剣を掴みあげると、そのまま戸口のほうへ移動していききました。

「お前たちも来たければ来るがいい。ただし邪魔だけは絶対するなよ」

ひとつしかない目玉が、本気でそう言っていました。それから、すぐに戸口を開けるとギーガは小屋の外に出て行きました。

「ついていこう」

「でも邪魔するなって……」

「黙って見ていればいいだけさ。それほど難しくもない。少なくともあんな面白くもない

本を一日で読破するよりもね」

そこまで言われては、ポポロも断れません。ネックは音がしないようにゆつくりと戸口を押し開け、ポポロの手を引いて一緒に外に出ました。

そこではギーガがひざまづいていました。剣の前で。

「これは友人の墓だ。俺のたったひとり、本当に友と呼べる友人のな」

ギーガは誰に語りかけるともなく、そう言いました。

「もちろん、遺体はない。ただ、あいつの遺品が遺体がわりに眠っている。俺はこの墓に剣を捧げる。あいつが、最期に一番欲しがっていたであろう剣をな」

剣は朝日を受けてキラキラと輝いています。随分長いあいだ野ざらしにされていたのに、それは全く錆びてはいませんでした。

「今日はもつといい剣ができたから、交換しにきたぞ」

ギーガは剣に、いえ、剣に宿る友人に向かって言いました。

「最後の剣がナマクラだったから、地獄の鎧の盾に叩きつけたときに折れてしまった。さぞ無念だったろう。これならきつと折れることはない」

ギーガは立ち上がって地面に刺さっていた古い剣を引っこ抜くと、さつき新しくできたばかりの剣を地面に突き刺しました。

それからまた剣の前でひざまづくと、長いあいだ両手を組んで無言の祈りを捧げまし

た。新しい剣は、さらに朝日を反射して燦然と輝いていました。

ポポロもネックも、二人とも黙ってそれを眺めていました。そうやってできた静寂のキャンパスに、小鳥のさえずる声と、風の揺らめき、森のざわめきが、荒ぶる魂を鎮めるためのレクイエムそつと描きました。

やがて長かった祈りも終わりました。

「ギーガさん……」

「どうした、ネック。いつになくあらたまつて」

「これ、村のみんなから、どうしても受け取って欲しいって」

ネックは小さな袋をギーガに手渡しました。

「おお、これは……花の種か」

「そうです。ギーガさんの友人が、とても好きだったと聞いていたので」

「ああ、そうだったよ。あいつはギガンテス一族には珍しく、花が好きだった。本当は花の味が好きだったんだがな」

「味？」

「そうだ。あいつは随分変わったやつで、花を食うんだ。最初は食いものとして好きだったんだが、やがて見る方にとって変わっていった。でも、そんなあいつが戦闘では誰も手をつけられないようなつわものになるんだ。敵も味方も、誰も触れられない……」



まさしく戦場に咲く花だったよ。まあ、その割にはちよつと臭かったけどな」

「ギーガさんより強かつたんですか？」

「強かつた。俺はいつかアイツに追いつこうと思っていた。今じゃもう、どうやったつて追いつけないが。ありがとう。村のみんなに感謝していたと伝えてくれ。俺も、アイツも」

「ええ、伝えておきます」

「では、さつそく土に埋めておくとするか。そうだ、いい機会だからお前たちにやつてもらいたい。俺はどうもこういうことは苦手だな」

最初はポポロも新入りの自分がこんな大事なことをしているのか、戸惑っている様子でしたが、ネツクはかまわず種を植えさせました。そしてネツクも、一緒に種を植えました。

植えたあと、もう一度三人で祈りを捧げました。

「ちゃんと咲いてくれるかな？」

お祈りが終わったあと、ネツクがそうつぶやきました。

「ああ。きつと咲くだろう。なんせアイツが守ってくれているんだからな」

ギーガは今まで一番満足そうな表情でそう頷きました。

「食つてしまわないかな？」

「ありえるかもな」

ギーガが安らかな微笑みを浮かべました。

「そのときは感想をきいといてやるよ」

## 30. グレイト・ヴィレッジ3

買い出しに行った帰り道のことでした。

向こうから、ライオネックの子供が走ってきました。それは走っているというより、倒れる前に足を前に出しているだけ、と言った方が正確でしょう。こちらへ近づいてくるにつれ、彼が体じゆうに怪我をしていることが分かりました。

やがてシーザーの目の前まで走ってくると、糸が切れた人形みたいに地面に倒れ込みました。

「ひどい、一体誰がこんなことを……!」

ドラキーが駆け寄ろうとするのを、シーザーは手で制します。彼の背後には兵士らしき一団の姿が見えたからです。

「下手に手を出すとこちららも巻き込まれかねない。村のこともあるんだ、わかるね?」

ドラキーはわかっていました。この魔界の中において、村は常に中立を保っていないくはならないということ。どこかに加担してしまえば、あるいは加担したとみなされただけでも、村の安全は脅かされるということを……

分かってはいるが、納得はできない——ドラキーの表情はそう言っていました。それ

にはシーザーも同感ですが、村の住民の顔を思いだし、本当に自分が守るもののために一時的とはいえ非情になるべきだ——そう自分に言い聞かせ、奮い立たせました。

ライオネットクを追いかけて登場したのは、典型的なムシケラでもあります。魔界のダニといってもいいでしょう。

数人のオークとトロルの群れが武器を持って追いついてきました。槍や剣には血糊がべつとりこびりついています。

「へへッ」

トロルのひとりが、ゲップが発酵したような笑い声を舌の間から漏らしました。

「お前さんも一緒に楽しんでいくかい？」

しゃべる声もまのびして間抜けに聞こえます。

「遠慮しておくよ。私にはそんな趣味はないのでね」

ダニどもは最初こそ無表情でしたが、やがて全員の顔が嘲笑に歪みました。

「へへっ、とんだ腰抜け野郎だなあ」

「俺たちの邪魔だけはするんじゃないぞ、ファッキンドラゴンさん」

オークが汚い鼻をヒクヒクさせながら言いました。

「邪魔なんてするわけないさ。クツにたかるハエの食事を邪魔するなんて、不潔だろう？」

「おやおや、心遣い痛み入りますぜ。まあ、いい。邪魔しねえなら俺たちの望み通りだ。さっさと失せな」

「ああ、そうするよ。さっさと失せるよ」

「へへっ、たつぷり可愛がつてやろうぜ。せつかく残しといたんだからさあ」

トロールがライオネットの角を掴んだので引き上げようとしたのかと思いましたが、あの程度の高さまで引き上げるとそのまま地面へ顔面を叩きつけました。地面に叩きつけた瞬間の音は、水分の多い果実を叩き割った音にひどく似ていました。

あのときは久々の豊作を祝う収穫祭でした。みんなで村の収穫物を割って食べました。それと同じような感じで、こいつらはダニの収穫祭をライオネットの頭で行っている——いや、止める、考えるのはやめるんだ。別のシーザーがそう言っています。

今はこいつを救う時期じゃない。いいか、こいつを救うにはここにいるダニどもをクリスピーな焼豚にしなくてはならないんだ。そんなことをしたら、ヘルバトラーAかBかCか、どれかはよく分からないが、こいつらを率いている軍団に目をつけられることになるんだぞ。そうなったら村はおしまいだ。目の前のかわいそうな子を見捨てるのは忍びないが、そのせいでさらに多くの犠牲を出すことは避けなければならない。それが村長の義務だ、分かっているな？

それはシーザー自身いままさら言われなくてもよく分かっています。誰よりも。

「おいおい、どうしたんだ？ さっさと失せるんじゃないのか」

オークがまたしても突っかかってきました。早く失せたいのは理性では分かっていた。しかしライオネットクが地面との長いキスを終えてこちらに顔を上げたのを見て、そこから目をそらすことができなくなってしまったのです。彼の瞳には明らかに恐怖が混じっていました。だがそれ以上に復讐を成し遂げたい、何もしないうちに死んでたまるかという、暗いながらの希望が、まだこの状況からもありありと発せられていました。自分はもう夢を諦めてしまった、少なくとも妥協してしまっただけに、このライオネットクの子供は、まだ諦めない気でいます。そして今、自分はまたしても自分に対して妥協しようとしています。

「それにそのドラキーの目つき、気に入らねえなあ」

「ははっ、そうだな。この俺たちを非難するような目、気に食わねえよ。雑魚モンスターのかせに。なあ、みんなもそう思うだろ？」

後ろにいる幾人かのモンスターたちが首を縦に振りました。

その下卑な目つきを見ると、シーザーの体の奥底から、熱く、同時に冷たい何か湧き上がってきました。だが、今はそれを抑えなければならなりません。

「そう思うんだとよ」

「ああ、そう思うのかい。それで、どうするつもりなんだ？」

「こうしてやるのかい」

オークが血糊をついた槍を構えたかと思うと、見た目からは想像もつかない俊敏な動作でドラキーに向かつて投げつけました。それは正確にドラキーの胴体を貫いていたでしょう、シーザーが手を出して守ってやらなければ。

「ああー、シーザーさんー！ そんな……」

ドラキーは完全に度を失いました。シーザー自身も、まさかこの槍に自分のウロコを切り裂くような威力があるとは思っていませんでした。槍はドラキーの代わりにシーザーの手のひらを完全に貫いていました。血がドクドクと鼓動を打って流れ出します。槍を作った鍛冶屋の腕が良かったのか、それともこのオークがレベルの高い戦士だったのでしょうか。きつと両方とも当てはまっていなければ、それは無理だったに違いありません。その内、槍の刺さった場所から焼けつくような熱さと刺すような冷たさが同時に這い上がってきました。それは体内へ入り込み、また別の場所からシーザーの皮膚を突き破って外に出ようとしています——ダメだ、それを外に出すな！

「クソ生意気なドラキーにファッキンドラゴン。めんどくせえ、全部ぶつ殺しちまおう」  
オークの号令とともに、トロールが鋭利な大鉈を持ち上げ、アークデーモンは自慢の三叉槍をかしげました。他の同種のモンスターたちも、それぞれに自慢の武器を装備しました。

——やめろ！

その叫びは目の前のダニではなく、シーザー自身に向けられていました。ゴールデン  
 ゴーレムのときは何とか抑えられた、だから今回も抑えられるはずだ——自分の中に眠  
 る、いいえ、グレイトドラゴンの中に眠る獰猛さ、凶暴さ、凶悪さ……それらを解き放つ  
 てしまったらもう以前の自分には戻れなくなりそうで、それだけが怖かったのです。

“やつちまえよ。”

ライオネツクの子供が、目でそう語りかけてきました。明らかに死を覚悟していま  
 す。それと引き換えにダニどもを殺せば十分なのでしょう。

“頼むからやってくれ。こいつらを道連れにできるなら本望だ”

もはや、シーザーの目はライオネツクの目に釘付けでした。3つ目の目玉がギョロリ  
 とシーザーを見つめ返します。

シーザーの中の「何か」が急速に皮膚を突き破ろうとしました。一瞬だけ止めたが、も  
 はやここまですぐれば溢れ出した洪水を止めることは不可能です。

もうダメだ、と思った瞬間、周囲がまばゆい光に包まれました。それはシーザーが輝  
 く息を吐いたからだと知ったのは、立ち並ぶ氷の彫像を見たときでした。中でもトロル  
 の彫像は素晴らしい出来で、滴り落ちようとするヨダレも見事に再現していました。

シーザーはそれらの彫像をしばらく眺めていたが、その後汚らわしいものを振り払う



ように尻尾を旋回させました。

さつきまでいたダニどもは、いつの間にかキレイな赤い宝石になって地面を転がっていました。

もうシーザーの中にあつた『アイツ』は、完全にどこかへ消え去りました。

「シーザーさん……！」

ドラキーがようやく終わつたことを確認するかのように言いました。

「私のことなら大丈夫だよ。それより、その子を頼む。すぐに治療してあげないと」

「え、ええ……」

ドラキーは一瞬シーザーの手を見やりましたが、すぐに倒れたままのライオネツクの子供に急いで駆け寄ると、買ってきたばかりの薬草で応急手当を施しました。

(それにしても、危なかった。さつきは思わず灼熱の炎を吐いてしまうところだった……)

ライオネツクには炎半減の耐性があるというものの、まだ子供ならその半分の威力でも十分死んでいたでしょう。しかも重傷を負っているのです。ただし、冷気にはライオネツクは無類の耐性を有します。冷気は無効にできるのです。

直前で自分が『アイツ』に負けながらも、かろうじて残つた理性でなんとかライオネツクの子供は助けることができました。あのまま『アイツ』に飲み込まれていたら、きつ

とシーザーは深い後悔を味わうハメになったでしょう。シーザーの想像力により、灼熱の炎に飲み込まれながら苦しむライオネックの姿が目には浮かびました。その豊かな想像力は、なまじ耐性があるゆえにすぐには死ねず、だんだんと皮膚が溶け、額の目玉が破裂して飛び出し、そして最後に骨だけ残して灰になる過程を、目の前で起こったことのように見せつけました。

だが、実際にはそうはなりませんでした。

自分は『アイツ』に完全に負けたわけではありません。

だが、『アイツ』は完全に消えたわけでもありません。ずっとシーザーの内部で表に出る機会を狙っています。

ずっと、ずっと……

シーザーはハツとして目を覚ましました。

シーザーがもし獣系のモンスターだったなら、蒸されたような盛大な寝汗をかいていたことでしょう。しかしシーザーはドラゴン系のモンスターなので、寝汗をかいたりはしませんでした。

それでも、自らの心臓がドクドクと素早く打つ音が響いています。

やがて時間が経つにつれて、早い鼓動もだんだん遅くなってゆき、いつも通りに戻り

ました。

朝でしたが、爽やかな小鳥のさえずりさえ聞こえません。空を見るとどんよりと曇っており、これからの天気を示唆していました。

（それにしても、なぜあんな嫌なことを思い出したのだろう……ましてや夢に見るなんて）

おかげで起きたばかりなのに、ぐったりと疲れたような気分です。こんなに気分の悪い日なのだし、今日ぐらいはゆっくり休んでもいいのではないか——そういう考えが頭の中をチラツとよぎりましたが、こういうときこそ自分に鞭打って頑張るべきだと思い直しました。

気分を切り替えて、まずは朝の買い出しに行くことにします。この村もどんどんモンスターが増えて、村で生産される農作物以外に必要な物品もどんどん増えてゆきます。ここは辺鄙な土地なので、誰かが買いに行かなくてはなりません。空も飛べて重い荷物も運べるのは、結局自分しかないのです。

シーザーは重い体をようやくと動かすと、ドラキーを呼んで必要なもの——ゴールドの入った財布、ゴールドに換金できる物産、荷物を入れるカバンに保存の壺など——を用意させると、暗い大空に向かって飛び立ちました。

「はあく、マジかったりいぜ〜」

グレートドラゴンのトリシーがいかにもめんどくさそうに言いました。グレートドラゴンは「グレイトドラゴン」と似ていますが、実際には一文字違いで大違いでした。まず体の大きさが違います。シーザーなど、本当の「グレイトドラゴン」はどんなモンスターも見上げる高さで堂々とした体躯です。顔にも知性と威厳が感じられます。

しかしグレートドラゴンの体はせいぜい人間の子供と同じくらいです。見た目もドラゴンというよりウーパールーパーに近く、顔にも威厳は全く感じられません。さらに空も飛べませんし、強力なブレスも吐けません。ただし酒に酔ってゲロばかり吐きま

す。  
でもこの村に来てからトリシーにそんなことはなくなりました。それはシーザーと「本当に偉大なドラゴンになる」と約束したからです。それからは酒を飲まないように、また飲んでも酔うまでは決して飲まないようになったのです。さらに、それまでの自堕落な生活を見直して真面目に働くようにもなりました。

そんなトリシーですが、それでもどんよりとした曇りの日に畑に出て働くのは、何となく気分が乗りません。しかし、かと言って農作物は待つてはくれません。しかるべき時に、しかるべき世話をしてやらねば満足できる収穫は得られないでしょう。

なのでブツブツ文句を言いながらも農具をふるって耕作に励んでいるのですが――

「やっぱかったりいぜ〜」

やはりイマイチやる気がないようですね。

「トリシーさんってば、本当に怠け者なんだから!」

いつの間にかドラキーがそばに飛んできていたようです。

「なんだ、ドラキーかよ」

トリシーはちよつとめんどくさそうな顔をしましたが、内心では話し相手ができよかったです。話していれば、何かと気が紛れます。

「シーザーと一緒に買い出しに行っただんじやなかったのか?」

「シーザーさん、今日はどうしても一人で行きたいっていうから、僕は留守番をしているんですよ」

「へえ、そりや頼もしいな。いざつてときはドラゴラムで変身してか弱い俺とかその他大勢を守ってくれよ」

「もう! こんな人がシーザーさんと同じグレイトドラゴンだなんて信じられません!」

ドラキーはもはや怒るといふより呆れるような感じですよ。

「正確に言うと、俺は『グレート』ドラゴンだからなあ。シーザーはグレイトだよ。マジで」

「そんなことくらいトリシーさんに言われなくてもわかってますよ。だいたい、シーザーさんとの付き合いは僕のほうが長いですし。それにしても、一文字違うだけでここまで違うものなんだなあ……」

「そりゃ、俺はドロップアウトした落ちこぼれだからな。どつかの偉い学者が分類するためにそういう名前を考えたんだろうよ」

「今からでも頑張れば追いつけるかもしれないですよ?」

「無理無理。俺って努力したら死ぬから。それに差がつきすぎて埋めるのもめんどくせえし。それなら酒でも飲んで寝てる方がマシってもんよ」

「はあ……典型的なダメドラゴンですね。せつかくちよつとはマシになったんだから、もう少しだけ真面目に頑張ればいいのに……」

「そういうのってなかなか難しいよな。俺も酒さえあれば頑張れるような気がするんだが、実際酒を飲んだらもつとめんどくさくなるんだよな」

「もう、本当にどうしようもないドラゴンだなあ」

ドラキーもちよつとトリシーの口癖が移ってしまったようです。

「それじゃ、僕はそろそろ次のところへ見回りに行きますから、ちゃんとサボらずに仕事してくださいよ。分かっていますね」

「へいへい、任せとけて」

「もう、トリシーさんの地区だけ、他より作業が遅れてるんですよ。本当に頑張ってくださいよ」

「大丈夫だつて。俺はスタミナのないスロースターターだからな。へへっ」

トリシーは自慢げに言いました。

「それって結局全部ダメつてことじゃないですか！　あなただけ餓死しても知りませんからね。自業自得ですよ」

そう言い残すと、ドラキーはピューっつとどこかへ飛び去っていききました。

トリシーはしばらくその様子を眺めていました。暗い雲の中へ、小さな黒点となつてゆくドラキー。やがて見えなくなると、トリシーはようやくつぶやきました。

「やれやれ、アイツも心配性だねえ。ちよつとは気楽に生きていけばいいのによお……」  
もちろん、それはドラキーには聞こえませんし、むしろ聞こえないからこそそう言ったのです。トリシーは知っていました。ドラキーが元々どういう経緯でシーザーと知り合ったのかを。

自分もああいう師匠のような、友人のような、頼れる存在がいれば、今のよう落ちぶれてはいなかっただろう……そういう考えが頭の中をよぎりましたが、今はそれらを全て払い除けました。今さら過去のことにも愚痴を言つても仕方ありません。愚痴の多い自分の性格はトリシー自身も知っていました。心の中でまで愚痴で満たされると、

何か嫌な気分になります。愚痴で心が満たされると、自分でも灼熱が吐けそうな衝動に襲われるときがあります。

そう考えると、自分がグレイトになりそこねたのは、むしろ幸いだったのかもしれない、とも思いました。もし本当のグレイトドラゴンになっていたら、炎を吐きまくらないと気がすまなかったでしょうから。

とにかく、トリシーは作業に戻りました。確かに早く作業を終わらせないと、村のみんなに迷惑をかけることになってしまいます。トリシーでもそれは心が痛みますし、みんなの優しさにいつまでも甘えてはいけなことも分かっていました。

そう、全部分かっています。酒を飲みすぎて墮落した時も、きつとそうなるだろう、自分の偉大さを失うだろうと、分かっています。

それでも、止められなかったのです。分かっていても、何も止められなかったのです。

そこまえ考えて、トリシーはため息をつきました。多分、今日こんなにも気分が悪いのは天気の良いだろう。だから、とりあえず今日の作業は早く終わらせよう——そう考えて無理矢理自分を納得させると、忙しく手を動かして鋤で土を盛り返していきました。

ザクツ、ザクツ、ザクツ。



そうやってリズムをとっているかのようには、鋤を動かす音と、気分を紛らそうとトリシーが吹いた口笛だけが、あたりに虚しく響きました。

そのうごくせきぞうには片腕がありませんでした。さらに体中にはコケがむしていますし、体の彫刻もほとんどポロポロになつて消えかけていました。鼻も根元から折れていて、ドラキーは見えているだけで痛ましく思いました。

かつて、うごくせきぞうのアポロンはそこらじゅうを動きまくっては敵の魔物を殺しまくっていました。相棒のマドハンドが捕まえて動けなくなつた獲物を、自慢の怪力で撲殺していったのです。二人は最強のコンビとして敵軍から恐れられていました。それに浮かれたのでしょうか、アポロンは自分こそが最強である、と考えるようになりました。

その結果、相棒のマドハンドを使い捨てにできるようになりました。マドハンドは大した戦いでもできませんし、実際に殺すのはアポロンでないとできません。アポロンは自分がトドメを刺しているのだから、勲功をもらうのは自分だけでいい、こんなマドハンドなんかにちよつとでも勲功をあげるようなことはしてやるか、と思うようになりました。

「そう、そうして私は仲間を使い捨てるようになったのだよ」

ドラキーは黙ったまま、沈痛な表情をしています。その様子はまるでドラキーのほうが石像になってしまったかのようにした

「頃合を見計らって、マドハンドたちをわざと見殺しにしているんだ。マドハンドが助けを呼んでも、一回では行かない。何回も私を呼ぶ声が出て、そのうちようやく行くのさ。そうやって助けに行くと、すでにマドハンドだった泥の塊がそこらへんに転がっているだけさ。私はマドハンドとの死闘で体力を使ったモンスターを殺すだけで済む。その内、それが楽しみになってきた。自分が他人の生命を握っているような気がして、とてつもない優越感を味わえるからだ。ただ、その優越感が私を狂わせてしまった。

私がアームライオン10頭分くらいのマドハンドを犠牲にした頃、ついに私はその報いを受けることになった。そのマドハンドは、私がいつか頃合を見計らって見捨てると分かっていたんだらう。すでに敵のモンスターと内通していた。私はマドハンドの何回も仲間を呼ぶ声に、ようやく重い腰を上げて助けに向かった。向かった先に待っていたのは、敵モンスターの群れと、本当ならすでに死んでいるはずのマドハンドだった。

そしてその結果が、今の惨めな私の姿、というわけさ」

そこでアポロンは一息つきました。石像なので呼吸する必要もないのですが、一息つくという心理的な休息がアポロンには必要でした。

「私は犠牲にしたマドハンドたちに会いたい。会って謝りたい。私は愚かだった。だ

が、今では彼らは全てただの土くれになってしまった。そして私も、彼らと同じになるうとしていた。自殺することもできたが、せつかくの奇跡で生き延びた命だ。私は、その時がくるまで、こうして後悔に沈むことにしたのだよ。マドハンドたちが私を地獄へ連れ去るまでね……」

ドラキーはこの話を、実は何回も聞いていました。それでも、毎回初めて聞くかのようふるまいました。それが自分の仕事だと分かっていたからです。そして、アポロンの話を黙って聞くことも。

いつもはこれで話は終わりなので、ドラキーは次の仲間の元へ飛びさろうとしました。ところが、アポロンは今日、初めてその続きの話をしたのです。

「もうすでに仲間を呼ぶ声は聞こえている。ただ、私は一回では行かない。かつてもそうだったように。何回も呼ばれてから初めてそこへ向かおうと思う。実をいうと、もうすでに何回も呼ばれているんだ。しかも呼ぶ声はますます頻繁に聞こえてくる。」

そこで頼みがある」

ドラキーはちよつと驚きました。アポロンはすでにうごかない石像に成り果ててしまっていました。まだまだ本当にただの石像になり果てるのは先のことだと思つていたので。

アポロンの目が、確かに動きました。おそらく最後の力なのでしょう。

「その時がきたら、私を埋葬してくれないか」

「うん……もちろん、当たり前じゃないですか。村のみんなもきつと協力してくれますよ」

「私にとってそれに何の意味もないのは分かっている。ただ、怖いんだ……」

何が怖いのか、言わなくてもドラキーにはよく分かりました。

死んだあとの孤独。特にかつての見捨てた仲間在地獄へひきずり下ろされるというなら、せめて肉体だけでも安らかな眠りにつかせてやりたいと思うようになって不思議ではないでしょう。

「本当にムシのいい要求だ……私の魂は確実に地獄へ行く。だから肉体だけでも安らかにこの村に安置して欲しいなどと……かつて私は自分が一番勇敢だと思っていた。一番でなくとも、かなり勇敢だと。今ではこの雲に怯える小鳥より臆病だということがよく分かったよ……」

その声は泣き入りそうになりながら段々と小さくなっていました。

「大丈夫、絶対に埋葬するよ。村のみんなで。シーザーさんも祝福してくれると思うから」

返事がないので、一瞬、ドラキーはもう『その時』が来たのではないかと思いました。「あの偉大なドラゴン……彼に会えたのが我が魔生で最良の出来事だった。彼に伝えて

おいてくれ。あなたのおかげで、善良な魔物として死ねて感謝している、と。そして地獄でもあなたのおかげで希望を持って業苦に耐えることができるだろうとも」

「伝えておきます、必ず」

そのとき、ポツポツと地面に黒いシミができました。どうやら、雨が降ってきたようです。雨はアポロンの苔むした体にも降り注ぎました。雨が目に降り注いだとき、アポロンは静かに目を閉じました。そのまま眠ってしまったのかのように。もう、今までの全ての嫌なことを忘れて、安らかな眠りにつきたいというように。

「必ず、そうします」

もう一度そう言うと、ドラキーは次のモンスターのところへ立ち去りました。

この雨なら誰もが小屋の中へ引っ込んでしまっているの見回りなど必要ないので、今はそれとは別の理由で一刻も早く立ち去りたかったのです。

## 31. グレイト・ヴィレツジ4

「あ、ドラキーさん！ 今日も見回りお疲れ様です」

「ああ、スラ吉さんじゃないですか！」

ドラキーはスラ吉のところへ降りていきました。そこにはスライムとアメフラシが雨の中だというのに頑張つて鍬をふるつていました。トリシーもこの真面目さをもうちよつとは見習つてくれればいいのに、とドラキーは思いました。

「こんな雨の中なのに……泥だらけになつて大変じゃないですか？」

「いや、いいんだよ。泥よりもつと汚いものにまみれてきたから、こんな何ともないよ」

それが何かは深くは聞いたことはありませんでした。多分、聞かない方がいいことなのでしょう。ポポロのときも余計なことを言つて気まづくさせたことを思い出して、それについては忘れることにしました。

「アメフラシさんは大丈夫なんですか？」

「ああ、俺はむしろ雨が降っていると元気が出るんだ」

そう言う元気で元気に跳ねながら鋤を下ろしました。

目の前には広大な畑が、整地されていました。これをこんな小さなモンスター二人でやったとはとても思えませんでした。日々の努力の積み重ねが、このような成果になるのです。それを見たせいでしようか、ドラキーはいついさつきトリシーのことを引き合いに出して、愚痴を言っていました。トリシーはグレートドラゴンですが、それでもこの二人よりは遥かに大きいのです。トリシーは本人の希望によつてひとりで耕作をしています。どうみてもこの二人の三分の一以下しか耕せてないでしょう。

つまり、働きはスラ吉やアメフラシひとり分よりも少ないのです。

「あまりそう言つてあげるのもかわいそうだよ」

スラ吉はドラキーの話の聞いてそう言いました。雨の中の立ち話も何なので、すでに三人は木陰に入つて雨をしのいでいました。

「トリシーさんには、僕らにない才能があるんだ。それは他人にはわかりにくいかもしれないけどね」

「仕事をサボる才能ですか？」

「ははは、それもあるかもね。でももつとすごい、精神的なものだよ」

そう言われたところで、あのトリシーから精神的なものなど感じられたことが、ドラキーにはありませんでした。

「音楽の才能さ。彼にはそれがあるんだ」

「それは本当なの？ まさかあの口笛が音楽だなんて言わないよね？」

「ああ、彼はあまり人に聴かせたがらないんだよ。だからここにいるモンスターたちも、トリシーの音楽を聞いたことがある人はほとんどいないはずだよ」

「う〜ん……」

ドラキーはスラ吉の言葉をまだ完全に信じきれていないようでした。

「なんでも姿かたちで判断してはいけないってことさ」

とスラ吉は締めくくりました。

「いいえ、決してそういうわけではないんですが……そういう才能があるならまっ先に自慢しそうなドラゴンだと思っんですよ。話を聞くと隠しているみたいだし、その理由がよくわからなくて」

「トリシーは、むかし音楽家になろうとしていたんだ」

スラ吉がゆっくりと口を開きました。

「でも、時代はヘルバトラーたちによる戦争の時代で、グレイトドラゴンに誰も歌の才能を求めてはいなかった。周囲がトリシーに求めたのは、戦闘と殺戮の才能だったんだ。それでもトリシーは自分の生き方を変えなかった。自分の生きたいように、自由に生きることにしたんだ。」

周囲には小雨がシトシトと樹の葉を打つ音だけが響いていました。



「彼は音楽祭に出て、その才能を認めてもらおうとした。彼の口から吐き出されるのは音でできた灼熱や吹雪だった。それは会場を沸かせたり、逆にしんみりさせたりした。彼の歌はすごかったんだよ。でも途中で当たった対戦相手が悪かった。天才吟遊詩人のホイミンさ。僕は決してトリシーが負けていたとは思わないけど、結局ホイミンの音楽が受けた。才能、技量では伯仲していたと思うんだけど、結局音楽性の違いが勝負を分けた。ホイミンの方が受けが良かったんだ。多分、それで挫折しちゃったんだろうね。あの姿かたちから察するに。僕もそれ以降の経緯は知らないけど、この村に来た時にまさかあのトリシーがこんなところに……と言っても別にこの村をけなすつもりはないけど、とにかく驚いたよ。それからときどき会っては音楽談義に花を咲かせたりとかしてるんだ」

トリシーの意外な才能にもびっくりしましたが、まさかスラ吉にそんな趣味があったというのにもドラキーは驚きました。ただ、そんな才能があるからといっても、ときどき仕事をサボったりするには辟易してしまいます。

「でもねえ……」

ドラキーは言いました。

「それでももうちよつと村の仕事を頑張ってくれたら、文句もないんだけど……」

「まあ、ドラキーさんの言いたいこともわかるよ。確かに、トリシーさんにはちよつとひ

ねくれたところがあるっていうか、斜に構えた部分がある。でも、それは深い挫折からきたものなんだ。誰にも音楽を聴かせたがらないのも、みんなから少し離れた場所に一人で住んでいるのも、もしかしたらそれが原因かもしれない。でも、彼は完全には諦めてないよ。この前、トリシーさんの家に行ってみたら、音楽関係の本が山積みになっていたし、しかも新譜はそれ以上に山積みになっていったんだよ。トリシーはきつと復活する。灼熱と吹雪の音楽家として、前以上に熱く、冷静になつてね」

そう言つて最後にスラ吉は微笑みました。スラ吉が言うからには、きつと本当にそうなるんだろう、とドラキーは思いました。今まではトリシーはただの怠け者だと思つていたのですが、今日のスラ吉の話聞いてドラキーはちよつとだけトリシーを見直しました。きつと仕事をサボつていたのは、新譜の山を築き上げるためなのでしょう。もちろん、だからと言つて仕事がサボりがちなのが許されるわけではありません。ただ、トリシーもきつきはあんなことを言いながら、実は自分の求める偉大さに向けてしつかり努力していた、ドラキーはそのことで評価を新たにしましたのです。

「まあ、とにかくそういうことだからさ、あまりトリシーさんにも厳しく当たつてやらないで欲しいんだ。彼は彼なりに昔の自分を乗り越えようとしている。それはもうすぐできるはずなんだ」

「おい、そろそろ仕事を始めようぜ。いつまでも話してるといつまでたつても終わんね

えよ」

アメフラシが舌をチロチロさせながら言いました。アメフラシはあまり音楽などに興味はないのでしょうか。会話の中に入ってくることも全くありませんでした。

「そうだね、じゃあ、ドラキーさん、こちら辺でちよつと失礼するよ。畑が広くて、ちよつとしんどいけどね」

ドラキーは無理をしなくてもいいんですよ、と言おうとしましたが、それは言わない方がいいような気がしたので、黙って木陰から二人を見送りました。

スラ吉はあえて自分に鞭打つようなことをすることによって、自分自身の心の傷をごまかそうとしているのかもしれない。何となく、ドラキーにはそういう風に見えました。そもそも、ドラキーが雨の中に見回りをしているのも、よく考えれば同じようなことです。

ドラキーはしばらく、雨の中で鋤や鍬を振るう二人を眺めていましたが、やがてそつと木陰から移動すると、またしても次の場所へ飛んで行きました。

雨の中、様々なことを考えながらドラキーは飛んでいました。眼下にはモンスターのいなくなつた耕作地が残されているだけです。スラ吉たちを除いて、みんな家の中へ入ってしまいました。

もう自分も戻ろう、そろそろシーザーさんも帰ってきているかもしれない——そんなことを考えていた時です。どこからともなく香ばしい匂いが漂ってくるではありませんか。

眼下を見やると、屋根の下から煙が出てきています。まさか火事かとも思いましたが、臭いで明らかに違うことが分かりました。これは、何かの肉を焼いているような匂いです。それもかなり高級そうです。

(……は誰の家だったっけ?)

ドラキーは降下しながら、しばらく思い出そうとしました。どこに誰が住んでいるかは全部把握しているつもりでしたが、なかなか思い出せません。

そうして屋根の下まで降りてきました。

「あ、ドラキーさん。一緒にどうですか?」

ポポロが笑顔でそう勧めたので、ようやくドラキーは思い出すことができました。そういうえば、ここはポポロの家でしたね。新入りだったのでまだよく覚えていなかったのです。

「これ、すげえうめえよお」

イエティのイエツタが箸を休める暇もなく、肉を大きな口の中に放り込んでいます。周りのイタズラもぐらやキラースコップたちも同様です。スコップをそこらへんに

放り出して、忙しそうに箸を動かしています。肉のほかには、畑で収穫された野菜なども一緒に焼いていました。どれもが香ばしい匂いを放っていますが、とりわけ強烈なのは肉の匂いでしょう。ドラキーも思わず唾を飲みました。

「ああ、そんな慌てなくても、ちゃんとお肉はいっぱいあるから！」

もはや網の上では軽い争奪戦が繰り広げられていました。

「そうそう、ドラキーさんは何の肉が好きなの？」

「え？」

ドラキーは少し呆然としながら争奪戦を眺めていたので、面食らってしまいました。

「ドラキーさんはどの部位が好きなのかな、て思ってたさ。カルビ？ ロース？ それと

もタン？」

「ああ、いや、今日はちよつと遠慮しとくよ。シーザーさんと昼ごはんを食べる約束をしていたしね」

「うーん、残念だけど、それじゃあ仕方ないですね。でも、一口だけでもどうですか？」

「一口くらい食っていけよ！」

いたずらもぐらの一人が言いました。

「そうだ、そうだ！ マジですげえうまいんだぜ、この肉！ 全く、ポポロはどこで買ってきたんだよ。このまま焼肉屋をやれば大儲けだぜ！」

ギヤハハハハハ!

肉をついばむモンスターたちが一齐に笑い声をあげました。ドラキーも「そうだね」と愛想笑いを返しておきましたが、自分でもかなり不自然な笑いになっていたことでしょう。それは自分でも疑問でした。新入りのポポロが、みんなと打ち解けるために微笑ましい焼肉パーティーをやっているだけなのですから。

しかし、ドラキーはこの雰囲気はどこか異常を感じたのです。あのキラースコップたちが、普段は肌身はなさず大事に持っているスコップを、そこらへんに無造作に放り投げていました。スコップはもはや完全に雨ざらしになっています。しかもあの中にはギーガが丹精込めて作ったスコップもあるはずなのに……

普段のキラースコップたちの行動からは考えられないことでした。別に雨に濡れたからどうこうということはありませんが、なるべく道具は大切に扱うようにしてきました。ずです。

「じゃあさ、とりあえずこれ、食べてみてよ」

ポポロが薄い肉片を網から箸で持ち上げました。せつかくの肉を落とさないように、ゆつくりとドラキーの方へ持っていくきます。ドラキーは最初こそ断ろうと思っていたのですが、肉が自分の口元へ近づいていくにつれ、肉の放つ強烈な芳香に逆らえなくなっ てしまいました。口からヨダレが湧き出てくるのが、自分でもわかるほどです。

「一番高級な部位だから、きつと気に入ってくれると思うよ」

ポポロがにつこり微笑みながらそう言いました。ドラキーもいつの間にか笑っていました。それは滴る肉汁よりだらしない笑みだったでしょう。そして口の中に肉が、美味しさの塊が放り込まれようとしたときです。

横から赤い蛇が突然飛び出してきたかと思うと、肉を丸呑みしてから素早く引つ込んでしまいました。

「やっぱりうんつめえええ！」

イエツタが雄叫びにも似た感想を言いました。赤い蛇だと思っていたのは、実はイエツタの舌だったのです。あまりに突然、かつ素早いことだったので、赤い蛇に見えたのでした。

「あ！ おめえ、するいぞ！ ドラキーさんの分を横取りしやがって！」

イタズラもぐらたちも批難を浴びせかけました。

「ごめんよお。でもこれは味見だったんだよお」

「オメエさんは味見しすぎだぜ、もうちよつと遠慮というものをわきまえたらどうなんだよ。それにドラキーさんの肉はどうするんだ？」

「大丈夫だよ、大丈夫。そんなの、また焼けばいいだけだから、ね？」

ポポロはそう言って周囲のモンスターをなだめながら、またしても肉を置き始めまし

た。

「ドラキーさん、ごめんなさい。またすぐ焼けると思うから、その間に少しこの村の歴史でも聞かせてもらえませんか？ どうやら本に載ってないこともたくさんあるようですよ」

「う、うん……そうだね。でも、ちよつと、なんていうか……」

「どうしたんですか？」

「うん、もうそろそろシーザーさんが帰ってくる頃だから、ぼくも帰らないと」

ポポロの返事も聞かずに、ドラキーは素早く振り返って背を向けました。そうしないと、鼻に鎖をかけている肉の芳香から逃れられそうにもなかつたからです。

そしてポポロの引き止める声も振り切つて、ドラキーはそのままピューと上空へ舞い上がつてゆきました。

十分な距離を飛んだと思つてから、そつとポポロの小屋の方へ振り返つてみました。ポポロの家は思ったよりだいぶ小さくなつていました。一目散に飛んで逃げたからでしょう。しかし、雨の中だということにもうもうと煙が立ち上つています。

ポポロが差し出した肉の匂いを思い出すだけで、また生唾が湧いてきました。

やはり、何か様子が変わだと思つたのは自分の思い過ごしかもしれない——そう考えると、肉を食べずに逃げてきたことが非常に悔やまれました。なんなら今から戻つてあの



肉を一口もraitたい——でも、いまさらそんな変なこともできません。

ドラキーはただ名残惜しそうに、雨に打たれながらその場を立ち去りました。

それから、ドラキーはシーザーの屋敷に戻りました。屋敷といつても、周囲の家より大きいだけで、作りは質素な館です。シーザーの、村長としての執務室も兼ねています。

ドラキーが屋敷に帰ってみると、戻ってきたばかりのシーザーと出くわしました。

「おや、ずぶぬれじゃないか。どうしたんだい？」

ドラキーは今まで見回りに行っていたことを話しました。

「おやおや、無理をするのはよくないよ。雨に打たれると思ったより冷えて、風邪をひくかもしれないからね」

「シーザーさんも雨に打たれているのに、僕だけそんなこと言ってもらえませんよ」

ドラキーはちよつと安心しながら言いました。自分の目の前にいるのは、ただのグレイトドラゴンではなく、自分の理想や希望そのものだからと実感できたからです。そして、それは変わることがないでしょう。これからもずっと。

「まあ、私は雨に打たれても、すぐに乾かすことができるからね」

そういうと、シーザーは口から激しい炎を自分自身へ向けて吐きました。これでも手加減しているのですが、ドラキーには離れていてさえ熱さを感じました。さっきの

焼肉パーティーの肉片になったような気分です。

たちまち炎がシーザーの体を包み込みました。全身が覆われて、炎と一体化したようでした。数秒後に炎が消えたとき、シーザーは不死鳥のように生まれ変わりました。

「ほらね、これで体についた水は全部なくなっちゃよ」

シーザーの体の表面の汚れは、全て消え去っていました。

「さあ、風邪を引くといけない。君はすぐに風呂に入って暖まるんだ。私が暖めてあげよう。なに、黒焦げにならないように手加減してあげるから、心配いらなよ」

風呂に入るときに、たまにシーザーが炎を吐いてお湯を沸かしてくれました。もちろん、熱すぎないようにちゃんと調節してくれています。自分で沸かすより、シーザーに沸かしてもらった方がちょうどいいくらいでした。それくらい、シーザーの炎の調節は見事なのです。シーザーが沸かしたお風呂に浸かっているとき、ドラキーはいつもシーザーが戦争にいかなくて良かったとしみじみ思うのでした。

それからシーザーは、先にのっしのっしと館の奥へ入っていききました。

ドラキーは、自分の理想の人がわざわざ沸かしてくれたお風呂に入るのにちよつと気が引けましたが、それ以上に嬉しい気持ちの方が強かったのです。

(こんな理想の人はシーザーさん以外にいない)

炎が消えてだいぶ経ちますが、まだドラキーは体の中から温かみを感じました。それ

は炎とは別の温かみです。

(シーザーさんは理想の人)

そう、かけがえのない存在です。この村の魔物なら、誰もがかけがえのない存在と思  
うでしょう。

(僕の理想の、大好きな人)

ドラキーはすぐにシーザーを追って、館の中へ入っていきました。

それから幾日が過ぎた頃です。村のモンスター全員が、とある丘の上に集まっています。その日の天気は抜けるような晴天で、アポロンの魂もこの青空に吸い込まれていったのではないかと思われるほどです。

ガタゴト、ガタゴト……

縄で台車に縛られた重そうな棺を、シーザーが黙って引つ張っていきます。イエツタや他のモンスターたちは、後ろからその台車を押してゆきました。

斜面の途中、地面から突き出した大きな石に車輪が乗り上げるたびに

ガタン！

という大きな音を立てて、柩を揺らしながら台車が上下に揺れました。長く悲痛な葬列が半時間ほど続いた頃、ようやく丘の頂上にたどり着きました。丘の頂上にはポポロ

やネツクをはじめとする村の住民たちが、葬儀の準備を終えて待つていました。ギーガは直前まで柩を収める穴を掘つていました。アポロンはかなり大柄なモンスターなので、墓穴も大きなものが必要でした。

みんな、何も喋りませんでした。深い群青の下で、小鳥の囁きだけがときどき聞こえる程度です。そういえばアポロンは小鳥が大好きでした。

一息つく間もなく、台車から柩が下ろされました。そしてフタを開けると、そこにはいつものアポロンが眠っていました。しかし、もうアポロンは喋ることはありません。それは昨日と同じに見えても、すでに違うモノに過ぎなくなっていました。

モンスターたちが花束を持って、柩の傍へ寄つてきました。

まずはギーガが柩へと歩み寄りました。上から柩の中を長いあいだ見下ろしていましたが、やがて意を決して口を開きました。

「アポロン、お前にはずいぶん助けてもらった。井戸魔人が水脈を探し、お前が掘った井戸、あれのおかげで今までよりいい剣が作れるようになった。いや、剣だけじゃないな。この村ではいい作物が育つようになった。特に剣については、俺の未熟な腕のせいで完璧には程遠いが、友人にはなんとか満足してもらえる仕上がりにはなったと思う。俺と、俺の友人から、アポロンに、改めて感謝の念を捧げる」

そう言つて、繊細な魂を傷つけないかのように、手に包み込んだ花束を柩の中へそつ

と置きました。

ギーガが後ろに下がると、今度はスラ吉とアメフラシが前へ歩み出しました。スラ吉が言います。

「アポロンさん、まさかこんなに早く逝去してしまうなんて、とても残念です。アポロンさんは他の井戸も掘ってくれましたね。今ではその井戸は、村の大事な財産です。不思議と、アポロンさんの掘った井戸水を使うと、作物の育ちが良くなりました。きつとアポロンさんの心がこもった水だからでしょう。村で火事があったとき、誰よりも勇敢に火の中へ飛び込んで行きましたね。あの時の様子を、僕はまだ昨日のことのようによく覚えています。誰よりも勇敢で、優しかった。僕は、アポロンさんは本当の強さを手に入れたんだと思います。それが、まさかこんなに早く逝ってしまうなんて……でも、僕は信じています。アポロンさんは死んでも、アポロンさんが残していつてくれたものは、死んではいないと」

スラ吉とアメフラシが、花束を柩の中へ入れました。

今度はドラキーが歩み出しました。

「アポロンさん……」

ドラキーは涙を流していました。それが頬を伝って、地面の掘り返した土の上に黒いシミとなって落ちました。

「アポロンさん、最後に言いたかったことを言いますね。もう後悔しないでください。確かに、アポロンさんの言うとおり、過去の過ちは変えられないし、罪は消えるものではないのかもしれませんが。僕には難しい話はよくわかりません。ただ、ひとつだけ忘れないでいて欲しいんです。アポロンさんが行った善い行いも、決して消えないということ。」

ドラキーはそつと花束を置いて、後ろに下がりました。

それからは他のモンスターも同様のことをしました。柩の中に花束が満ちてゆきま  
す。ポポロとネックも花束を捧げました。

そして最後に、トリシーが歩み出ました。しかし、花束は持っていないません。代わりに持っているのは見事な竖琴です。

「俺が村からちよつと離れた場所で一人で暮らしたい、って言ったとき、アンタは文句も言わずに森を切り開いて俺のために畑を開墾してくれた。ありがとう。理由も聞かなかったよな。普通は理由を聞くけど、アンタは誰しも秘密にしたい過去があるから、つて俺のわがままを文句も言わずに受け入れてくれた。それについて、感謝の念を口で表すことは、口下手な俺にはちよつと無理だ。だから、代わりに俺の音楽を捧げようと思う。俺のわずかばかりの才能を、アポロンの勇敢で慈悲深い魂に捧げる」

そういうとトリシーは竖琴にドラゴン族とは思えない優雅さで指を這わせました。

豎琴の音色はどこか悲しげで憂愁を帯びていました。それに反してトリシーの歌は力強さがありました。その歌には、どこか煩悶するような響きがあります。きつと、トリシーの魔生をアポロンの魔生に重ねているのでしょうか。

悲しい歌ですが、悲しいだけでない、確かな力強さがありました。まさにアポロン自身を表現した見事な歌と言っていいでしょう。その場の全員が、我を忘れて聞き入っていました。

そうして、最後の音符が天へ登っていききました。これが音楽祭だったなら、割れんばかりの拍手が沸き起こったでしょう。トリシーの才能は「わずかばかり」どころか、溢れんばかりでした。特に、村のスラ吉をのぞくモンスターたちはトリシーの歌を実際に聞いたことがなかったので、この見事な葬送歌にただただ内心で驚嘆するばかりです。みんなの心の中の静かな拍手に包まれながら、トリシーはゆっくり後ろに下がりました。

そして最後に、シーザーが歩み出しました。シーザーはみんなと同じようにアポロンがどれだけ村の発展に役立ったか、またその高尚で優しさに満ちた人格者を切々と説いたあと、お祈りの言葉を言つて、冥福を祈りました。

「さあ、そろそろ、始めようか」

シーザーがそう言うのを合図に、柩の蓋が閉じられ、アポロンは永遠の安らぎについ

たように思われました。その後、柩は穴の中へ下ろされてから、村の全員によつて少しずつ土をかぶせられてゆきました。

完全に柩が隠れてしまうと、最後にギーガの作った墓石がそこに置かれました。墓石にはアポロンの顔の見事な浮き彫りがなされていました。そのアポロンの彫刻は、鼻も欠けていない、完全なアポロンの顔でした。

その後、モンスターもポポロも、全員が墓の前で手を合わせて、ひとりの高尚なモンスターの魂を鎮めるため、長く静かな祈りを捧げたのです。



## 32. グレイト・ヴィレッジ5

葬儀以来、最初の満月が墓に刻まれたアポロンの顔を照らしていた。ポポロはそこに手懐けたモンスターたちを集めて、何やら集会のようなものを開いていた。ようするにポポロによる株主総会のようなものだ。

「で、これからどうするの?」

ポポロは集まったモンスターに問いかけたが、その態度は友人としてではなく、飼い主が飼い犬を叱るような有様だった。

「どうするって言ったって……」

いたずらモグラが何か言いたそうだったが、何を言えばいいのか分からない様子だ。そりやそうだろう、あれからポポロは何回も焼肉パーティーを催した。そのとき、あまりの争奪戦の激しさに有料会員制にしたのだ。おかげで新たな肉の補給もできたし、これからどんどん村のモンスターをポポロの側に取り込めそうだった。一応、この有料会員制パーティーは秘密ということにしておいたが、秘密にすれば余計に言いたくなるのが心理というものだし、こんな娯楽のない田舎ではこの程度の噂でも急速に広まってゆく。それも全て計算通りだった。そう、そこまでは計算通りだったのだ。

だが、そこから想定外のことが起こった。焼肉パーティーの最中に、シーザーが駆けつけてきたのだ。ポポロは内心ヒヤツとしたが、平静を装ってシーザーに肉を勧めた。シーザーは笑顔を浮かべて「もつと肉を並べてくれないか」と言った。嫌な予感を感じたが、もちろんポポロに拒否権などない。言われた通り、大量の肉を並べた。それから、シーザーは口から炎を吐き出した。炎はポポロを焦がさないように、でも肉は真つ黒焦げになるように、絶妙な調整がなされていた。

この炎の言葉を要約すると、物で他人を釣るな、ということだろう。さらに驚くべきことに、金銭のやり取りがあつたこともバレていた。最初のうちはチャリティーだった。金の卵を産ませるには、黄金の餌を食わせる必要があることをポポロは知っていたからだ。麻薬の効果が始めたのを見計らつてから、きつちり有料で囲い込んだのだが——とにかく肉を焼き終わると、シーザーは無言のまま翼を広げて立ち去つていった。黒焦げになつた肉はシーザーが残していつた無言の警告だつた。

「まさか君たちがチクつたの？ お金がなくなつたから？」

「まさかまさか！ 俺たちがそんなことするわけないだろ！ 俺たち以外の誰かだつて！」

「う〜ん……」

確かに、ポポロもこいつらがチクつたなんて思えなかつた。もはやすでに忠実な番犬

であり、焼肉を食べたくてしようがないのだ。考えている間に、月の一部が雲に隠れた。丘から見下ろす畑は月光に照らされながら、風が吹くたびに収穫物の海面が大きく波打ち、銀色の反射が幾何学的な動きをした。

「あ、そうか」

「何かわかったのかい？」

いたずらモグラや、その他集まった有料会員が一齐にポポロの方に注目した。

「きつとあのドラキーだよ。シーザーの周りをハエみたいに飛び回ってるやつ」

「ああ、そうか」

一部のモンスターはそれで納得した。納得していないのは、あの日焼肉に参加していなかったモンスターたちだけだ。

「たぶん、あいつが密告しやがったんだ」

ポポロの口から思わず漏れてしまった。

「クソツタレ」と。

「そーいや、あの日の言動は何か怪しかったよな。アイツ、村で噂されてるんだぜ」

「なんて？」

ポポロはさっさと喋れよ、と思いつながらも、ここは我慢して相手の思い通りに相槌を打ち、先を促すことにした。

「アイツはシーザーに惚れてるんじゃないかってな」

「あの日の言動については、俺はいなかったから知らねえけどよ」と最近会員になったのもんじやが言った。

「あくまで俺が友人から聞いた噂だけ？ 何の証拠もない噂だけだよ——」

こういう噂に限って、言っている本人は信じていたりするものだ。どうせくだらない噂だろう、ポポロはそう思っていた。

「ある日の晩、この村の住民が森の中へ入っていったらしい。それが具体的に誰なのかは知らないし、まあ、どうでもいいことなんだが、とにかく、そいつは森の中へ入っていった。そこで寝ている間に溜まったものを盛大にぶちまけてたわけよ。まあ、こっちは具体的に何かは、言わなくてもわかるよな？ それで、一通り出しおわってスツキリしたし、そろそろ小屋へ戻ろうとしたときのこつた。森の中から何か囁くような声が聞こえてきた。最初は悪霊か何かかと思つてすぐに逃げようとしたんだが、そいつは勇気を振り絞つて声のする方へ近づいていった。もちろん、絶対に音を立てないように、声の主にはバレないようにだ。」

んで、近づいたところでビツクリしたわけよ。なんと声の主はあのドラキーさんだったわけよ。そいつはドラキーさんも立ちションつていうかドラキーの場合は飛びションか、まあそれはよく分かんねえけど、きつとそんなことをしているのだろうと思つて

いたわけよ。まあ、俺だって同じ状況ならそう思うわな。ところが、だ」

このももんじやは話がうまいな、とポポロは思った。すでに他の集まったモンスターも釘付けだった。どうせくだらない情報なんだからさっさと結論だけ言えよ、という気持ちでもないではないが、このまま話をさせておくのも悪くないかもしれない。場の空気を和ませることも必要だ。

「そいつはちよつと驚かそうと思つて茂みに隠れて待つてたんだが、ドラキーさん、なかなか長いようなんだ。それでもあまりにも長すぎるつてんでよく耳を澄ませてみると、ドラキーさん、何やら呼吸が荒いみたいだ。んで、そいつも何をやっているのか、ちよつと好奇心が抑えられなくなった。危険を承知で茂みから顔を出してみると、ドラキーさん、何やら励んでいるようなんだ。そのうち、ようやくドラキーさんが呟いたらしい。小さな声だったが、確かにそう言ったそうだ。『シーザーさん』つてな。しばらくのあいだは、森の中には虫の鳴き声とドラキーさんの荒い呼吸音だけが響いていた。そのうちその荒い呼吸も収まってから、ドラキーさんはどこかへ飛び去つていったらしい。んでよ、みんなはこれをどう思う？ 俺はあれしかないと思うんだけどよ」

「絶対マスターベーションだろ！」

いたらずらモグラが口々にはやし立てた。

「うへえ、マジかよ！ ドラゴンのケツ穴想像してよくできるな！」

「大自然と一体化してオナニーとかいい趣味してるぜ！」

「やっぱあの二人怪しいと思ってるんだよねー！」

その場の全員が口々に思ったことを口にしました。そのせいで、神聖な墓場は一瞬にして雑言卑語のバーゲン市と化した。

「おいおい、お前ら、俺がせっかくポポロさんに配慮してオブラートに包んでおいたのに、そんなきたねえ言葉を使うんじゃないやねえよ！　ポポロさんの教育にもよくねえだろ！」

ももんじやはその注意したが、本心では汚い言葉を代わりに言ってもらってスッキリしていることだろう。

「まあまあ、みんな、言いたいことはよくわかったから」

ポポロがそう言うのと、バーゲン市は急速に静まり返り、元の神聖な墓場に戻った。

「その噂の真偽はよく分からないけど、ただひとつ確実に言えるのは、たぶん密告したのはあのドラキーだよ。そして、裏ではシーザーが糸を引いている」

「でも金を渡してたのもバレていたんだろ？　あの日は金の受け渡しなんてなかったはずだぜ」

「いたずらモグラの言うとおりでった。」

「可能性として考えられるものは、あのドラキーだけさ。そうじゃないと、君たちを疑う

ことになる。僕も自分の身内を疑うようなことなんてしたくないんだ。わかるよね？」  
ポポロの問いかけに、モンスターたちは月光に目をらんらんと輝かせながら首を縦に振った。もうひと押し。もうひと押しで、このモンスターはポポロの完全な操り人形と化すだろう。

「多分だけど、あの日、ドラキーは何か気づいたんだと思う。それをシーザーに報告した。シーザーは何か怪しいと思ったけど、別に悪いことじゃないからそのときは特に咎めることはしなかった。でも、それからドラキーは密かに僕らを見張っていたんだと思う。たぶん、シーザーの命令を受けて。まさか見張られていたとは思わなかったから、金銭のやり取りもあれから普通に行っていた。それで発見されたんだ」

ポポロの推理はほとんどの中していた。

「問題は、なぜあの日のことで見張られたか、てことなんだよね。あの日、特に怪しい言動はなかったと思うんだけど……」

ポポロはじつと考えていたが、やがて月光の下、一匹のいたずらモグラが歩み出た。

「俺、心当たりがあるんだ……」

「心当たりって？」

「もしかしたら、っていう程度なんだけど……あの日、俺たちはスコップをそこらへんに放り投げていたと思うんだけどよ、あの日いたみんなもどう思う？」

最初は黙って頭をひねっていたはずらモグラたちだったが、やがて思い出したものが口々に「そうだ」「そうだったよな」と肯定の合唱がはじまった。そのときにはポポロも思い出していた。確かに、そうだったような気がする。

「でも、それがどうしてそんなに怪しいことになるんだい？」

「ああ、ポポロさんは知らねえか……実は、あのスコップはギーガさんに作ってもらったものなんだよ。だから、俺たちも大切に使用していたんだ。それが、あるときだけは……なんていうか、匂いを嗅いだだけでいてもたってもいられなかつたっていうか……なあ、そうだろう？」

「そうだ、そうだ！」と他のモンスターたちが唱和した。

「それで、かなり怪しまれたんだと思う。まあ、俺たちの推測だけだな」

それならありそうなことだった。しかし、ポポロは実感した。しよせん、自分はこの村の新入りに過ぎないということに。まだまだ知らない歴史がいくらでもある。雑魚モンスターでも、こういう情報を仕入れるのには十分役に立つ。いや、噂話などはむしろこういう雑魚モンスターほど詳しいだろう。

ポポロは情報をもたらしたいはずらモグラの目の前まで歩み寄ると、しゃがみこんで頭をゆつくりとなでた。

「よしよし、よく思い出してくれたね」



いたずらモグラは、最初はこの思いがけない報酬に戸惑っていたが、やがて思いがけないほどの安らぎを感じるようになった。

感応能力。ポポロがモンスター使いとして備えている才能の成果だった。普通は戦闘で弱らせたモンスターの弱った精神につけ込むようにして使うのだが、ここでは懐柔して精神を無防備にすることで使用した。要は精神さえ無防備にしてしまえば、ポポロはそこにつけ込めるのだ。そして精神を無防備にする方法は、戦闘だけはなかった。

「そうそう、焼肉のことだけど」

ポポロはなでる手を止めると、立ち上がって言った。

「君たちも食べたいでしょ？」

当たり前のことだった。すでに目の前のモンスターは、重度の麻薬中毒患者なのだから。

「でも場所がない。何とかして場所を作ってくれたら、次の一回だけは無料で招待してあげるけど、どうかな？」

「おぉー！ さすがポポロさん！」

という歓声が一斉に上がった。

「じゃあさ」

いたずらモグラの棟梁が言う。

「とりあえず地下を掘って部屋を作ろうと思うんだけど、どうよ?」

「いいね。でも煙はどうするんだい?」

「それはバツチリ考えてあるぜ。部屋から小さいトンネルを排気口として掘って、村の窯に伸ばすんだ。煙は全部窯から出て行くって寸法よ。窯から煙が出たってなんにもおかしくないからな」

「うん、それはよさそうだね」

実際にこれでうまくいきそうだ。

「あと、招待するモンスターだけど、シーザーの息のかかってそうなモンスターは避けてよね。一番怖いのは、それだから」

逆にスパイを送り込まれて、内部から、というのもありえない話ではない。肉さえ食わせてしまえば問題なさそうだが、一回くらいではシーザーのような高位魔族はそこまでの中毒にならないだろう。彼らの強靱な肉体は、弱小モンスターと違ってそれくらいの刺激に溺れるような、ヤワな作りではないのだ。

「ネットクやギーガとか、かなりやばそうだよ」とポポロは言った。

「そうだな。あいつらは、きつとシーザー組だろうな。もちろんドラキもそうだし、意外にもトリシーなんかも。トリシーのやつ、最近じゃシーザーの屋敷に出ずっぱりなんだぜ。葬式のときの歌でよっぽど才能が認められたらしい。あとはスラ吉だな。あい

つはドラキーと仲がいいし、それに頭の固いやつだからな」

シーザー組。そういう発想が生まれ始めたことにポポロは内心ほくそ笑んだ。もちろん、今回は表面には出さない。

こうやって村の魔物たちを分断していくことだ。もはやこいつらの所属意識は村ではなく、ポポロに向けられているはず。全てポポロの狙い通りだ。

「じゃあ、とにかく後は任せたまよ。僕は君たちに喜んでもらえるよう、腕をふるって焼肉パーティーの準備をしておくからね」

ポポロはそう言うと、またしてもしやがみこんで、いたずらモグラの頭をなでた。

なで終わると、ポポロは解散を告げて立ち去った。モンスターたちもしばらく話をしていたが——ああ、早く肉を食べてえよ——その前の穴掘りだな。ちよいとばかり骨が折れそうだぜ——んなの皆でやれば一発よ——リーチ一発ホモ！——ぎやはははは！——やがて夜も更けてきたので各々の小屋へと帰っていった。

後に残された墓石だけが、物言わぬ証人として満月に煌々と照らされていた。

「早くかかってこい」

ギーガはもう一時間以上向かい合ったままのネックに向かつてそう言いました。

「早く、って言われても、俺はひのきの棒でオッサンはそのバカデカイこん棒、ていうの

「はちよつとずるくないか？」

そのこん棒は、嵐の時に根こそぎ倒れた木を削って作られたものでした。

「何を言っている。戦場では——」

「不利な状況でも戦わなくてはならないときがあるんだろ？」

「師匠が喋っているときは黙って聞け。たとえ分かりきったことでもな」

「だからつてこりやあねえぜ」

ネックは軽口を叩いているように見えますが、その実、打ち込む隙はないかと常に狙っていました。しかし、そんな隙はありません。いや、あることはあるのですが、それらは全て、ネックを誘い込むためにわざと作られた隙でした。鍛冶だけでなく、戦場の駆け引きも上手なのです。

「お前には魔法が使えるだろ」

「使ってもいいのかよ？」

「当然だ」

「死んでも知らねえよ？」

「お前の魔法をくらった程度で死ぬなら、今頃生きてはこの村におらん」

「へへっ、言ってくれるじゃねえか」

ネックは早速ライデインを唱えました。晴天の空に雷鳴がとどろき、稲光があたりを

不気味に照らしました。

しかし、ギーガには直撃しませんでした。わざと外したのです。ギーガが稲光に視界を奪われた隙に、ネックは足元に潜り込んで真空斬りで足を叩こうとしました。

「ふんっ！」

それを読んだギーガがこん棒で地面を払います。地面の一部をえぐり取るような、豪快なスイングです。

あたりがのどかな昼の光景に戻った頃には、地面に仰向けに倒れているネックの姿がありました。

「くっそく、やっぱダメだったか〜」

「いいや、そんなことはないぞ」

「マジで?」

ネックが首だけ持ち上げながら言いました。

「ああ。本来攻撃に使うライデインを、視界を奪うという補助に使用するという発想。すかさず行つた真空斬りも、俺の弱点を的確につけてきた。お前はまだ魔力より武術のほうが強いの。だからその選択は間違っていない」

「それでも勝てなきや意味ないぜ……」

「お前の攻めは直線的で読みやすいからだ。攪乱するなら、もつと攪乱に徹しろ。攻撃

はそれからでも遅くはない。せっかちで勝ちを急ぐのも悪い癖だな。だが、俺は嫌いではないが」

「昔の自分に似ているから？」

ハハハ、とギーガは高笑いしました。

「お前なんかと一緒にするな。さあ、今日はこのくらいでいいだろう。さっさと飯にしよう」

飯、という単語でネックは上半身をむくりと持ち上げました。

「そーいや、今日はポポロが飯を作ってくれるんだよな。あいつが何を作るか楽しみだぜ」

そういうと、さっそくポポロが鍋を持って出てきました。

「あいつ、何するつもりなんだろう？」

「さあな。今日は天気がいいから外で食べるつもりなんだろう」

事実、その通りでした。二人は適当に練習用の武器をしまうと、ポポロのところへ行つて食卓の準備を手伝いはじめました。

ピシャーーン！

突然の雷鳴が、アポロンの墓へ来ていたシーザーとドラキアの鼓膜を震わせました。

しかし、空は雲ひとつない晴天です。はて、おかしいな、と思つてシーザーが丘から眺めてみると、向こうに見える小屋の近くでギーガとネックが試合をしているではありませんか。つい最近まで試合はまだまだ早すぎる、などと言われていましたが、もう試合を行えるほどの腕を身につけたということでしょうか。一見ちゃらけたように見えて、実はかなりの努力家なのでしょう。シーザーの教える魔法も、どんどん上達していきます。このまま成長すれば、いつかは自分も追い抜かされるかもしれないかもしれません。それ思つて、シーザーはうれいような、悲しいような、なんともいえない複雑な気持ちになりました。シーザーは家庭をもつたことはありませんが、きつと子供がいればこんな気持ちになるのでしょうか。

「シーザーさん、今のは一体……?」

ドラキーが怯えながら墓石の影から這い出してきました。どうしたのでしょうか。あのドラキーが、珍しく地面をはっています。

「あれはネックのライデインだよ。それよりどうしたんだい、地面をはったりして」「うう……笑わないって約束してくれませんか?」

「ああ、もちろんさ」

ドラキーはしばらく黙っていました。ようやく口を開きました。

「今ので腰が抜けちゃったんです……」

それを聞いて、シーザーは大きな笑い声をあげました。

「ああ！ もう、笑わないって約束したのに！」

「いやあ、ごめんよ。つつい、ね？」

「ね、じゃないですよ。他人が苦しんでいるっていうのに」

「すまないね、お詫びとしてはなんだが」

そう言うときシーザーは両手で包み込むようにしてドラキーを持ち上げました。

「このまま屋敷まで送ってあげよう」

シーザーの手に包まれて、ドラキーは安堵したようです。笑われた怒りもどこかへ飛んで行きました。

「ねえ、シーザーさん」

「なんだい？」

「前にも、こんなことがありましたね」

魔王の使者がやって来たときの出来事を言っているのでしょう。あのときは今でもはつきりと覚えています。ずいぶん昔のことになりますが、まるで昨日のようにも感じられます。不思議な感覚でした。

「ああ、そうだね。あのときからの理想を、私は実現できたのだろうか。たまにそう思うときがあるよ」



彼は、今も生きていますのでしょいか？ なぜかそれがとても知りたいと思いました。彼にこの村のことを教えてあげたら、一体何と言うでしょうか。馬鹿にするでしょうか、それとも賛同してくれるでしょうか。

「シーザーさん、理想がすごく高いからね。でも僕は、この村にきてから前のときより遙かに幸せです。いや、幸せというのを初めて知ったような気がします。それは全部、シーザーさんのおかげだと思えます。だから……」

ドラキーはなぜかそこで言葉を切ってしまいました。

「だから？」

「だから……その……シーザーさんは……もつと自信を持ってほしいと思いますー！」

「自信を持つまでには、まだまだ足りないよ。でも、お前がそう言ってくれるのは、すごくうれしい。おかげで、これからより一層理想の国作りへ向けてやる気が湧いてきたよ。うだ」

「僕も、その役に立ちたいです。それで、できたら一緒にそれを見てみたい……」

「きつと見えるようになるさ。自信を持って頑張ればね」

「なんか聞いたことある言葉だなあ」

あははは！

二人の笑い声は晴天に吸い込まれてゆきました。

「それじゃあ、もう一回、アポロンにお祈りを捧げてから戻ろうか」

「ええ、そうですね」

お祈りを始めた頃、シーザーはポポロが料理をテーブルの上に広げてゆくのをチラッと見ました。最初はあれだけ気乗りしなかったのに、今ではギーガとも分け隔てなく接している……ように見えます。そう考えだすと、お祈りどころではなくまりました。ポポロがあんなこと——焼き肉で金銭を巻き上げる——をするなんて、シーザーはとても信じられませんでした。きつと、今までのつらい経験から気に入られようとしてやったことが、だんだんエスカレートしていったのではないだろうか、と考えていましたが、自分の中で何かそれ以上の不吉なものが感じられたのです。シーザーはそれを考えると、目の前の牧歌的な光景さえ崩れ落ちていくよう気さえしました。

「シーザーさん？」

「ん？ どうしたんだい？」

「いやだなあ、もう。お祈りの最中に他人の昼ごはんの方を眺めてるなんて」

「ああ、ごめんよ。今日は朝から何も食べてなくて、つい」

「食ばなきや、理想も実現できませんからね。でもお祈りのときくらいは集中してくださいね！」

「ああ、すまなかった。アポロンに悪いことをしたな」

「でもまあ、僕たちもお腹が空いたし、そろそろ戻りましょう」  
「ああ、そうしよう」

シーザーは飛び立つ間際、もう一度チラツとポポロたちの方を見ました。ネック、ギーガ、三人は楽しそうに食事をしています。何も問題は発見できませんでした。

何も問題はないはずなのに、シーザーの内心では不安が積乱雲のようにもくもくと湧き上がり、胸を圧迫していきます。

それから、なるべく何も考えないようにしてシーザーは墓場から飛び立ちました。

「なあ、ポポロさん、みんなから頼みがあるんだ」

いたずらモグラの棟梁が、村のモンスターを代表して交渉してきた。

「一体何なの？」

言わなくても分かることだった。どうせ焼肉の値段交渉だろう。

「もうちよつと値下げしてくれないかな？ 俺たちももうスツカラカンなんだ。分かるだろ？」

「うんうん、確かによく分かったよ。それじゃあ、タダにしてあげるよ」

「本当にいいのか……？」

「うん、いいよ。その代わり、肉がなくなったらそれでオシマイだけだね」

「いや、待つてくれよ、それじゃあ困るんだよ」

「別に僕は困らないからいいよ」

ここはちよつと突き放しておこうと思った。ポポロの小屋は粗末で狭い場所だが、ここに村中からモンスターが詰めかけていた。当然、そんなには入りきらないが、入りきらない分は地下で待つている。以前、いたずらモグラが作ると言っていた地下バーベキュー会場だが、そこからポポロの家まで、直通で通路が伸びていた。ポポロがバーベキュー道具を担いで移動してはどう見たつて怪しいし、途中で地下に潜るとなる場所を悟られる可能性もあった。ドラキーの警戒が解かれているかどうかとも分からないのだ。できる限りのリスクは避けたかった。これはポポロとモンスター側の合意の上でなされたことだった。

そして今、そのバーベキュー会場への通路は、ポポロの家から溢れた直訴団の長蛇の列、というわけだった。地下通路にいるモンスターたちは、ポポロとの交渉がどうなるか、まさに固唾を飲んで待つていることだろう。

「いやいや、そんな冷たいこと言わないでくれよ。俺たちとポポロさん、今まで仲良くやつてきたんだからさあ、これからも仲良くやつていきたいというのが、俺たちの正直な思いなんだよ」

そこんとこ頼むよ、というわけか。

人情と神に頼るな、知恵と戦略に頼れ。

これも父親であるトルネコの言葉だったが、まさにその通りだと思った。だいたい、この村のモンスターたちはあまりにも平和ボケしすぎている。

——弱いのは罪ではない。ただし、弱くて馬鹿な者はもはや神でも救いようがない。トルネコの格言が次から次へと思い出されていくが、どれも見事に的を得ていると感心するばかりだ。それならおとなしく畑でも耕していれば平穩な一生を過ごせただろうが、簡単に欲に溺れるチョロい精神の持ち主ときている。

当然ながらポポロは神ではないので救いようもないし、救う気もなかった。

「本当にお金持っていないの?」

「そりゃあ、一銭もないわけじゃない。ちよつとはあるさ。でも全然足りないんだよ。それか、後払いにして欲しい。今年はきつと豊作だから、売ればゴールドもガツポリだぜ! な、みんな!」

棟梁の問いかけに、部屋に詰めているモンスターたちが一齐に賛同した。

「ふくん、確かに、作物の実は良さそうだね」

「値段は割増でも構わねえ。後払いにしてくれ、頼む! この通りだ!」

棟梁は低い位置にある頭をさらに低く下げた。そのまま放っておいたら地面にめり込んでいくのではないかと、ポポロは本気で心配した。

「まあまあ、顔を上げてよ。言ってることは分かったけど」

「けど……？」棟梁はポポロを見上げた。

「それってうまくいくのかな？ 豊作ってことは、大量の作物が市場に出回るから、作物の値段は下がるんだよ。だから大量に売っても、収入はいつもとそれほど変わらないと思うんだけど」

「え……？ そうなのか？」

「こいつらはこんな簡単な市場原理も分からないらしい。金融屋と先物契約でもしておけば儲かるところだが、もちろんリスクはあるし、何より魔界にそんな金融商品があるわけもなかった。」

「じゃあ、一体どうすればいいんだ……頼むよ、みんなの期待を背負って、今日は交渉しに来てるんだ。箸にも棒にもかからねえじゃ、誰も納得してくれねえよ」

「まあまあ、君たちの気持ちは、僕もよく分かってるから。君たちはお金を持っていない、でも肉が食べたい。そこで何とかしたいってわけだよ」

「そうそう」

「そうだよ。だつたら、お金を手に入れば何の問題もないじゃないか」

「いや、だからそれが大問題なんだって。誰も金なんて持ってねえもん」

「そんなことないでしょ？ 村の中に、お金を持っているモンスターは他にいないじゃないか」

いか」

「……あ、そうか」

ようやく気づいたようだった。鈍感でトク臭いが、ようやくここまで誘導できた。

「このバーベキューに参加してないモンスターなら、たくさんお金持つてるんじゃないかな。スラ吉とか、ドラキーとか。それに村のお金もあるでしょ？ シーザーの屋敷の金庫の中にはガツポリ入ってそうだと思うけどな」

「でもでも、それはちよつと……無理があるっていうか……それじゃまるで泥棒っていうか……」

「大丈夫、借りてから、後で作物を売って得たお金で返しとけば、借りたのと同じことさ」  
「そうか、ただ借りるだけだな……」

「そうそう、別に泥棒なんて、そんな悪いことするわけじゃないんだ。ただ単に、お金を一時期借りとくだけさ。どうせ後で元に戻すんだから、そんなに気に病む必要はないと思うよ」

「そうだな……そうだよな……」

モグラの棟梁はもはや自分に言い聞かせているようだった。まだ若干の迷いはあるが、もはや金を生み出す方法は泥棒しかないのだから、手段を選んでる暇はないだろう。

後はこいつらの行動しだい。うまく盗み出せば、収穫祭までは時間が稼げる。さらにこいつらの洗脳を強固にできることだろう。もし今バレたら……そのときは状況を見て判断するしかなさそうだ。誤魔化せそうなら、なんとしても誤魔化す。それが無理ならやや気が早いのが、作戦を実行に移すしかない。それでも多分成功するだろうが、ここはジワリと外堀をキツチリ埋めきって——内堀も埋めきって、最後にむき出しになった本丸を攻めたいところだ。

「まあ、どうするかは君たち次第だね。お金が用意できたら、またいつでも声をかけてね」

ポポロは期待に口の端を歪めながら、居並ぶモンスターたちにそう言った。その表情は、親子だからだろうか、トルネコの表情に似ていた。トルネコが虐殺のときに浮かべる、あの表情に。

それからモンスターたちは、これからのことを話し合うために地下の通路からすぐすぐと引き上げていった。

後で聞いた話によれば、モンスターたちはスラ吉のゴールドを盗んだらしい。ネットワークはまだそんなに財産を持っていないし、ギーガは万が一の報復が怖いのだろう。シーザーの屋敷はガードが固くてダメだった。



それで、結局は一番弱つちいモンスターのスラ吉が狙われることになったらしい。スラ吉はよく働いたために、家にいない時間はいくらでもあった。モンスターたちはその時間を見計らって悠々と家に侵入し、楽々とゴールドを盗み取った。

なんとも意外なことに、あのスライムはかなりの貯金を持っていた。それはモンスターたちの腹を収穫祭まで満たすのに十分な額だった。

「全く、なんで着色ゼリーごときがこんなに金持ってたんだよ!? この村はおかしいんじゃないのか?」

モグラの棟梁がそう言って不満をあらわにした。

着色ゼリーが金を持っているのは、その労働に見合った収穫をあげているからであつて、別に不公平ではなかった。そんなことはポポロですら、というより、部外者のポポロだからこそ分かった。おそらく魔界で弱者として虐げられているうちに、くだらない差別意識が染み付いてしまったのだろう。そんな差別をなくそうと思つて作られた村でも、所詮はこういう風になつてしまうのだ。

シーザーは賢い、とみんな言う。賢くて強い、と。

確かに賢い。ドラゴン族はノータリンが多いが、今まで見てきたドラゴン族の中でもダントツで賢く、生まれてくる種族を間違えたのかと思うくらいだ。

そんな魔法や学問的な賢さはあつても、結局のところ弱者の本当の心理などは悲しい

ことに全く理解できなかったのだ。

今回の事件、多分大丈夫だ——ポポロはそう確信した。あのお人好しのシーザーでは、村のモンスターを疑うことなどできまい。また、できたとしてもかなりの時間を捜査に費やして、覚悟を決めてから、ということになる。どちらにしても、ポポロにまだ時間的余裕は与えられそう。

それにもつといいことに、こんだけ着色ゼリーが金を溜め込んでいた、ということは、普段は全く金を使わない生活をしているということだ。つまり、着色ゼリーが金を盗まれたと気づくのは後々になって、久々に金を使うときが訪れた場合、ということになる。盗難の露呈も遅れて、その捜査も遅れる——となると、時間的なことは心配しなくて良さそうだ。今のうちに、洗脳をより強固なものとしておこう。

ポポロは鼻歌を歌いながら、肉の壺をのぞき込んだ。

大丈夫、まだまだある。

鼻歌はトリシー作曲の葬送歌だった。ポポロはこれが気に入った。

これから滅ぼすものへと捧げるのに、滅ぼされるものが作った歌ほどふさわしいものがポポロには思いつかない。

近づく収穫祭にますます期待を膨らませながら、ポポロはベッドに横になった。

ポポロが眠りについて、ようやく鼻歌は止まった。

## 33. グレイト・ヴィレッツジ6

〃 〃 〃 その島は太陽のきらびやかな光を浴び　はるか遠くの丘は灰色のマントを  
羽織る

孤独な風が木々を揺らして囁く　ただひとり、過去を目撃したもの　〃  
……トリシーによる、ハープの弾き語りでした。スラ吉の話では、今トリシーが歌っ  
ている歌こそが音楽祭でトリシーを打ち負かした天才、ホイミンの作った曲なのです。  
悲しい歌でした。

悠久の時間と、それに埋もれる想いの、悲しさと残酷な美しさ……

それでもそれを乗り越えようとする魂の、雄大さと儂さ。希望、強さ。

本来はボーイソプラノの歌なのですが、そこらへんはトリシー風にアレンジがなされ  
ているため、やや力強くアレンジされていますが、それでも十分に悲しい歌でした。

ドラキーは自分でも驚きました。まさか自分が音楽を聞いて涙を流していたなんて。

「おや、どうしたんだい？」

帳簿をつけているドラキーの様子がおかしいのに気づいたのでしょう。シーザーが  
声をかけてきました。

「いえ、なんでもありません」

そう言つて、何とかシーザーに涙を見せないように、体の向きを変えて後ろを向きしました。また笑われるかと思つたからです。しかし、シーザーは意外なことを言いました。

「この歌を聴いていると、昔に死んでいったものを思い出すんだよ」

「ねえ、シーザーさん」

「なんだい？」

相変わらず、ドラキーはシーザーに背を向けたままです。

「天国とか地獄とか、つて本当にあると思ひますか？」

「君はどうも思う？」

ドラキーはしばらく考えあぐねていました。そもそも、分からないからシーザーにきいているのです。

「僕は、シーザーさんがどう思っているか知りたいんです。それと、もしあるとしたら、アポロンさんは一体どっちに行つたのか、気になつて」

シーザーも黙つてしまいました。窓から差し込む光が二人を柔らかく、歌詞にもあるようにきらびやかに照らしました。小鳥のさえざる声だけが、この世で導き出せる唯一の答えのように聞こえました。

歌も終わりにさしかかり、最後のハーブの音がどこかに溶け去りました。

それからようやく、シーザーは口を開きました。

「実は、私にも分からないんだよ。アポロンは……一体どうなってしまったんだろうね。彼にしか分からないことだ」

「それでも僕は知りたいんです」

ドラキーはそこでようやくシーザーの方に向き直りました。

「だって、いつかはみんな死んでしまうから」

「ああ、そうだね」

魔族には永遠に近い寿命があります。人間50年、魔族は5千年。それでも、永遠ではないのです。かなり長いというだけで、永遠ではありません。老衰で死んだ魔族、というのも実際に存在します。様々な理由はありますが、魔族でも衰弱して死んでしまうこともあるのです。とはいえ、天寿を全うするのはかなり稀な例で、ほとんどは戦乱や闘争の果てに死んでいきます。もしくは、魔法の力で歪められた奇妙で恐ろしい疫病や呪いなどによって。

そして自分自身の手によっても。

「僕、そんなの嫌です！」

アポロンはこの村が始まって以来の、最初の死者でした。そのことがドラキーの心に

大きく影響を与えたのでしよう。普段はこんなに取り乱すようなことはなかったはず。死を間近に見たことによって、ドラキーはそれに取り憑かれたといつてもいいでしょう。

しかし嫌だと言われても、それはどうしようもありませんでした。死神はいかなる炎や吹雪でも追い払えないのですから。

「みんな死んでしまうなら、一体なんのために生まれてきたんですか……?」

「それも、分からないことだ。ただ、私の生まれてきた目的なら分かっている。それは、みんなが安心して平和に暮らせる社会を作ることだ、とね」

「その平和も、いつか死んでしまうんじゃないですか?」

シーザーは言い返そうとしましたが、完全に言葉に詰まりました。そこまで言われるとは思ってなかったからです。確かに現状でシーザーが死ねば、村を守るものは何もなくなり、あつという間に魔界の暴力にさらされてしまうでしょう。現状のままではシーザーの死は、そのまま村の死であるということです。

「シーザーさんは自分の生きた目的を果たせるのかもしれない。けど、それも死んでしまったら? 魔族も死ぬなら、村だって死んでもおかしくないはず。生きていた証拠は何もなくなるんですよ?」

「以前にも言ったとおり、私だって強くない。その意味が分かったかい? とにかく、生

き物は明日を信じて今日を生きていくしかないということだ。一つだけ言えるのは、そこに強いも弱いも関係ない。それだけは断言できる」

ドラキーはゆっくり頷きました。

「……ええ。すいません、シーザーさんにこんなこと言ってしまった。でも、なぜか急に気になっちゃって……」

「気を使うことはないさ。アポロンの死に最も動揺していたのは君だった。ちよつとでも私にその気持ちをつづけてくれて、楽になつてくれればいいさ」

「すいません……確かにちよつと動揺していたかもしれないです……」

「いや、いいんだ。君がそこまで考えてくれていると分かつて嬉しかったよ」

きらびやかな陽光に照らされながら、シーザーはそう微笑みました。

ドラキーもそれに微笑み返しかしたが、内心では気まずく思つて、

「収穫祭も迫っているし、早く帳簿を見直そうと思います」

と言つてくるりと机に向き直りました。と言つても、さっきの話が気になつて帳簿どころではありませんでした。

しばらくして背後からシーザーがノシノシ歩いて部屋から出ていく音だけ、聞こえました。ひよつとして、また気を使わせたのかもしれない——そう思うとますます申し訳なくなつてきました。

それからしばらくしてようやく気分が落ち着いてからは、一心不乱に帳簿をつけていきました。その様子はシーザーとの会話を忘れたかのように猛烈な勢いでした。

コーン！ コーン！ コーン！

斧に木を打ち付ける音が、軽快な音楽のように森の中に響き渡りました。

………

おや、急に音が止んでしまいました。どうしたのでしょうか。

そこには荒げる息を何とか鎮めるネツクの姿がありました。最初は斧を半分地面に預けるようにしていましたが、やがてそこらへんに完全に投げ出してしまいました。

「もう無理！」

そういうと、自分自身も草むらに身を投げ出してしまいました。

ポポロはそれを見て呆れました。

「どうしたの？」

横たわるネツクの顔を覗き込むようにして言いました。

「休憩だよ」

ちよつと不機嫌そうに、ネツクは言い返しました。

「まだ全然切れてないよ。それにまだ10分くらいしかたつてないと思うけど」



「ポポロ、代わりにやっといてくれ。俺はもう疲れた。ていうか飽きた」

「ポポロはそれを聞くと、ネットクの投げ出した斧を拾い上げて、大上段に構えました。『怠け者は——こうだ！』」

その斧をネットクの首筋に叩きつけようとしたが、斧を振りかぶったままバランスを崩して後ろに尻餅をつきました。斧はポポロの背後の地面にドスンと鈍い音を立てて落ちました。もちろん、本当にそんなことをする気は最初からありませんでした。ネットクにも分かりきっていましたが、特に驚くこともありません。

「はあ……なんか、僕も疲れちゃった」

ポポロがそのまま座り込んで言いました。

「そうだろ。こんな気持ちいい日にわざわざしんどいことしようつて発想が間違ってるよな。お前も横になっちゃえよ」

「うん、そうするよ」

ポポロも集めていた山菜やキノコを入れた籠をそこらへんに投げ出すと、森の芝生の上に仰向けになりました。

しばらく二人はたわいもない話をしていましたが、やがてそれも途切れしました。それから、二人は示し合わせたように目をつぶり、仲良く夢の世界の玄関へ入り込もうとしたときです。

それまで和らかった陽光が、いきなり強烈になって、二人のまぶたを突き刺したのです。何事かと思う間もなく、落雷のような音と地響きがありました。

ネックが飛び起き、ポポロは小動物が頭をもたげるようにして辺りを見渡しました。「全く、二人して何をしているんだ。俺が悪い奴だったらそのまま押しつぶされてあの世行きだっただろうな」

ギーガがポポロ自身と同じくらいの大きさはあろうかという斧を肩に引つぎ立てていたのです。見てみると、ネックが切ろうと奮闘していた木は地面に横たわっていました。あの雷鳴も、地響きも、全部このせいだったのです。

「やっぱオッサンはすげえや。俺が手伝う必要なんてねえだろ」

「全くお前は どうして そうなんだ。これが 武術に 必要な 基礎的な 筋肉を つける ための トレーニングになると、 どうして 考え ない？」

ネックはこんな面白くもないことにそんな意味があつたのかと、また、ネックのためにギーガがこの仕事を与えてくれたのだと、初めて気づきました。そして、今までのことを思い出してみるに、同じように思い当たることが次々と思い浮かびました。

頭を使って戦え——ギーガが常に教えてくれたことですが、まさかこんなところにまで頭を使っているとは、思いもしなかつたのです。ネックは今までギーガに勝てないで悔しがっていた自分が馬鹿らしくなりました。それは才能の差でもなく、神の与えた天

分でもなく、当たり前のことだったからです。

シユンとして二人をしばらく見つめていたギーガですが、やがてもうこのくらいにしておいてやろう、と考えました。確かに、このきらびやか——この単語はなぜか天から降つて湧いたようにギーガの頭の中に浮かびました——な陽光の下では、誰しも仕事などサボりたくなるものです。それに、最近は普段の仕事に加えて、村の収穫祭のための準備もしなくてはならず、肉体的な疲労も相当だったでしょう。それに、正直言うときではないのです。一応、村の不文律のようなもので収穫祭にはお義理で参加していましたが、何にせよ気乗りしないことは確かです。それでも、村のモンスターたちが喜んでくれるのなら、ギーガはそれでいいと思つています。いや、だんだんそう思うようになったのです。

兵士の時は、無駄なことが大つきらいでした。しかし、この村に来てから、そういう今まで無駄だと思つていたものにこそ価値があると初めて知つたのです。友人の霊を弔うこともそうでした。今まで「死ねば土くれ」だと思つていたのですが、ギーガには友人が土くれだとはどうしても思えませんでした。ときどき、友人は実は生きていて、ある日ひよっこり——例えばこの瞬間に森の木の間からでも——顔を出すのではないか、という気が無性にしてることがあります。

「そろそろ疲れているだろうし、今日は特別にこのくらいにしておこう。それでも、お前らはたるみ過ぎだ。俺がアレをやって気合を入れてやる」

「え、マジで？ ポポロ大丈夫かな？」

ネックが心配そうです。その様子を見て、ポポロも不安が隠しきれないようです。

「まあ、死ぬ気でつかまっていれば大丈夫だ」

ギーガは何やらよく分からないことを言い残すと、切り倒した木の不要な部分を切り落として、瞬く間に大きな丸太に仕上げました。

「さあ、これに乗れ」

ネックはすでにギーガのやろうとしていることを知っているのでしよう。すぐに丸太に跨りました。ポポロも最初は不安だったのですが、ネックの様子を見て大体の見当がついたので、ネックの真似をして、ネックの反対側の端に跨りました。

「よし、すっかりバランスを崩すんじゃないぞ。一度乗った以上、落ちても責任は取らんからな」

ギーガは重そうな丸太をヒョイと持ち上げると、そのまま肩に担いで森の中を歩いて帰りました。

丸太はかなり揺れましたが、普段はありえない高さからの光景に、ポポロもネックも大はしやぎです。

やがて村に着いたとき、ギーガが言いました。

「よし、お前たち、命懸けでしっかりつかまるんだ、いいな。振り落とされたら軽いから村の外まで吹っ飛んでしまいかもしれん」

そう言い終わるやいなや、ギーガは丸太をブンブンと旋回させました。最初はそれほどの勢いでもなかったのですが、そのうち本当にすごい勢いになっていき、ポポロもいつの間にか命懸けで丸太にしがみついています。本当に村の外まで吹き飛んでいきそうだと思うたからです。

それから段々と回転は弱くなっていき、やがて完全に世界が静止しました。

そこには、丘の上の墓場に沈もうとする夕日が、笑い合う3人の姿を照らしているだけでした。

ただひたすら静かに、美しく、叙情的に。

ドラキーは収穫祭が近づくにつれて、だんだんとそわそわしてきました。それは収穫祭に対する期待なのか、とも思ったのですが、それほど簡単な感情ではありませんでした。心の底にあるのは、何とも言えない不安です。その不安の中心は、ポポロでした。なにしろ「姿かたちに本当の価値はない」と言つて、ポポロの受け入れに積極的に賛成したのですから、ドラキーも責任を感じていました。

まさかあのポポロ君があんなことをしていただなんて……

ドラキーは信じたくありませんでしたが、見たものは仕方ありません。結局はシーザーに報告し、それでシーザーが出向きました。具体的にどのようなことがあったのか、ドラキーは知らされませんでした。あれ以降ポポロの行動には何も異常はないように見えます。

「悪い子なんて大嘘さ……」

シーザーの言葉が木霊のように聞こえました。確かに、あのときの事件を除けばポポロはとつてもいい子に見えます。しかしドラキーにはポポロが悪い子なんて大嘘とは、とても思えませんでした。

(でもだからと言って本当に悪い子にも見えないし……)

何か不安な感じがしました。

そこで、ドラキーはいつもの仕事をいったん止めて、見回りに出かけることにしました。もちろん、主な目的はポポロの様子を観察することです。観察したところで何か成果があるとは思いませんでしたが、とにかくこの目でポポロの様子を捉えたくて仕方ない衝動に駆られたのです。

そうやって半ば衝動的に屋敷を飛び出したドラキーでしたが、まずはアポロンの墓場へお参りに行くことにしました。特に供え物も何も用意してなかったのですが、とにか

く墓地へ行きました。それは供養のためというより、祈りのためでした。祈って、アポロンの加護をもらい、そしてアポロンが持っていたであろう「本当の強さ」を、少しでも自分に分け与えてもらいたいからでした。

——ただの村の見回りに大げさな……

ドラキーは自分でもそう思いましたが、翼はそんな理性とは正反対に、感情のまま真つ直ぐ墓地を目指して行きます。

やがて丘の上に到着しました。そして長いか短いのか、自分でもよく分からない時間、祈りを捧げました。祈りがおわって顔を上げてみると、アポロンの端正な顔がこちらを見つめていました。それは大丈夫だよ、と励ましているようにも見えましたし、何やら悲しそうに引き止めているようにも見えました。

そうやって決心を固めて、ようやく丘から飛び立ちましたが、それでもすぐにポポロのところに行く気はしませんでした。

まずは気軽に会えそうなものから——そう考えると、まっ先にスラ吉の名前が思い浮かびました。

ドラキーは向きを変えると、今度は自分の思い通りに翼を動かして、天高く舞い上がって行ったのです。

「なんつーか、もう単刀直入に言うと、また金が足りねえんだ」

本当にこいつらに足りないのは、金ではなく知能だろう。知能さえあれば、いくらでも金を生み出せるのに。それはポポロ自身、嫌というほど実感していた。いや、ネネの金儲けはもはや一般の知能とか、そういうレベルではない。悔しいことだが、あれこそくすしき神のみ技と呼ぶにふさわしいと認めざるを得ないくらいだ。

「前にも言ったでしょ？ 本当にお金がないのかつて。本当にお金がないのか、よく考えてごらん」

モグラの棟梁はしばらく考え込んだ。ずいぶん長い間考え込んだあと、ポポロの顔から目線をそらす。

「もう簡単にとれるところはねえよ……」

ポポロにその意味はよく分かった。簡単には盗れないから、盗れるようにしてくれ、ということだろう。

「なるほどね、確かにそうかもしれない」

「クツツ、こんなことならアメフラシをメンバーに入れずに金だけ盗めばよかつたぜ。その分、もうちよつと食えただろうに」

スラ吉から奪った金を使い果たした会員たちは、すぐに次のターゲットを見つけた。それがアメフラシだったのだが、これ以上盗むのは気が引けたのか、逆にこちらの仲間



に引き込んでしまったのだ。アメフラシもスラ吉ほどではないにしても、それなりに金を蓄えていた。

それで会員の腹はしばらくもった。

だがもはや会員の腹は、腹減りの指輪を全ての指に装着しているかのような減り具合にまで到達している。あつという間に食い尽くし、またしても金の腐心をしている、というわけだった。

「あとはアレしかないんじゃないのかな？」

「ギーガの旦那か？」

「もつと大きいとこだよ。ギーガの持っている金くらいじゃ、また同じことになっちゃうよ」

「……でもなあ、村の金を盗んじまったら、もはや本当に終わりだぜ……俺たち、この村にいられなくなっちゃう」

モグラの棟梁は頭を抱え、声には泣きそうな響きすら混じっている。

そろそろ助け舟という名の地獄行きの泥船を出してやる時期だろう。ポポロは特に感情をこめずに言った。

「シーザーの金さえあれば、またどこかで暮らしていけるよ。それに——君たちもずつとお腹いっぱいいでられるだろうね」

「シーザーのやつ、いっぱい持つてやがるからな」

「そうだよ、いっぱい持つているよ。腐るほどね」

そこでポポロは意味ありげに微笑んだ。

「クソ、でもシーザーからギルなんて無理だよおおおおお……そんなことやってたら仏のシーザーもブチギレて俺たちが焼肉にされちまうぜ……」

「それは言えてるね。僕もそれは嫌だ。だから、何とかその作戦を考えようと思うんだ」  
ついに持ち駒を使つて、キングを詰めるときがやってきた。このときのために集めておいた、ありつたけの持ち駒を使つて。

「やつぱさうこなくつちや。さすがポポロさん、頼りになるぜ」

そう言う棟梁の目には、怪しい光が満ちていた。不浄なる、腐った精神から放射されるような光が。

## 34. グレイト・ヴィレツジ7

スラ吉とは久々に会いましたが、なんとそこにたまたまトリシーも居合わせたので、話も弾んでついつい長くなってしまいました。いろんな音楽談義に花が咲いたのですが、どうやらスラ吉も最近同じような異変を感じていることが分かったのです。なんでも、相棒のアメフラシが最近姿を見ないことが時々ある、ということでした。普段は無断で仕事を休むことなどあり得なかったのに、最近それが増えているということでした。仕事をしている間も、何があつたのか突然農地の真ん中でボーツと立ちすくんだり、話しかけても話をまるで聞いていなかったりすることが多くなつてきているようです。

ドラキーにその具体的な原因はわかりませんでしたし、そのときは「うゝん、どういふことなんだろう？」と答えましたが、内心ではきつとポポロのせいに違いないと見当をつけていました。実際にどんな手段を使っているのかは分かりません。しかし、ポポロが何か企んでいることは、もはやドラキーの胸の内では確実でした。

そこまで話が進むと、ドラキーもついに真相を確かめようという勇気が湧いてきて、やがて会話もそこそこに切り上げると、こうしてポポロの家の上空に飛んできたという

わけです。

しばらく、ドラキーはポポロの家の上をグルグル回っていました。

でも、ここまで来てまだ迷っている自分によく喝を入れると、勇気を出して家の戸口の前に降り立ちました。今日だけは、その何でもない貧相な木の扉が、強制収容所の分厚い鉄の扉より禍々しく無機質に見えたのです。あの最悪だった強制収容所生活を、なぜここで思い出したのでしょうか。ドラキーがその理由を考えるよりも早く、脳細胞はかつての忌まわしい記憶を時間の地層から掘り起こしていききました。日没と同時起床の鐘——ドラキーは夜行性なので、夜に仕事をさせられたのでした。そうやって昼行性のモンスターと24時間交代制の効率のよい労働に駆り出されるのです。この村に来てからは、シーザーと同じ昼行性の生活に馴染みました。しかしその前は……ひたすら果てしなく続く報われない労働、飛び交う怒号、振り上げられるムチ、そして収容所内での弱者同士の陰湿な争い……すべてが地獄でした。

それを開放してくれたシーザーは、ドラキーにとって神と同じでした。そして今、その神へ反逆しようとする悪魔が、この村を手玉にとっている……

ドラキーはそう考えましたが、本心ではそんなのは嘘であってほしいと願っていました。トリシーが言っていたように、自分は心配のしすぎなのだと思じたかったです。

それを確かめるためにも、ポポロとちゃんと会って話をしてみなくてはなりません。

改めて決心を固くすると、ドラキーは木の扉を叩きました。

それはすこし日が傾きかけた静寂の中で、異様に大きく響きました。

そうやってポポロはモグラの棟梁に村の攻略法を事細かに指示していた。

「とにかく、君たちにはシーザーを引き付けてスキを作つて欲しいんだ」

「スキを作つたつて、俺たちの戦闘能力じゃ、どう攻撃したつてかなわないぜ。それとも、ギーガカネットクを知らないあいだに仲間にしたのかよ？」

「いや、そうじゃないよ。僕には精神感應能力があるからね。相手に触れることで発動して、その精神を乗っ取るんだよ」

「てことは、スキを見てシーザーに触れて」

「そうそう」

「その能力でシーザーを乗っ取るつてわけだ」

「そうそう！」

「そりやすげえぜ！ シーザーさえこつちのものになれば、その気になればいくらでも金は稼げるからな！」

モグラの棟梁はシーザーを奴隷にできるといふ快感に、すでに酔いしれていた。そりやそうだろう、今までなんだかんだ言つてこの村を事実上支配していたのはシーザー

なのだ。みんな平等という建前だが、結局は誰かが誰かの上に立って支配しなければ秩序というのは成り立たない。ただ問題なのは、それが自分にとって都合がいいかどうかということだけだ。少し前まで、この村はモグラたちにとってすごく居心地のいい村だった。ところが、その秩序はもはや崩壊した。

こいつら自身の脆弱な精神によって。

そこでポポロはモグラの棟梁から目をそらして、机の上に広げているノートを見た。そこには村のモンスター全員の名前がズラリと並んである。

ひとり洗脳が済むたびに赤の横線を引いて名前を消していった。

今では、ほとんど全員の名前が赤線で消されている。

あともうひと押しだ。

ポポロがそこまで考えていたとき、突然何者かが扉をノックする音が室内に響いた。

ドラキーはノックしてから、静かに固唾を飲んで待ちました。

どれくらい待ったでしょう。ドラキーの時間感覚がおかしくなってきたからか、それはよく分かりませんでした。

あまりにも連続でノックすると失礼にもなるので遠慮していましたが、それでも返事が全くないのに少しイライラしました。それはポポロに対して、というより、この緊張

感に長くさらされていることに対する感情でした。

——あと10秒数えて返事がなければもう一回ノックしよう。

それから心の中でゆっくり10秒を数えました。

10秒がたちました。

扉は微動だにしません。

ドラキーは、意を決してもう一回ドアをノックしました。

「ちよつと賭けをしようよ」

ポポロが棟梁にもちかけた。

「賭け？ 何を対象に賭けるんだよ？」

「いまノックしているのは誰かって賭けだよ。もし僕が当てたらこれから言うことを実行して欲しい。外したら、君たちに一回だけ焼肉をおごるよ」

焼肉をおごるよ——すでにこの村モンスターにとって、それは食事以上の価値をもつ、生活必需品となっている。当然、棟梁はその賭けを受けた。外したところで結局は焼肉のためにポポロに従う他はなく、結局やることは同じ。つまり丸儲けという「おいしい」賭けだった。

「じゃあいくね、いまノックしているのは多分ドラキーだな。あいつ、いーーーーつつも

僕らのこと見張ってたんだもん。きつと今日だつて何かおかしいと思つてやつてきたに違いないよ」

「んで、もしドラキーだつたらどうすればいいんだい？」

ポポロは答えようとしたが、その時またしても二度目のノックが響いた。ポポロも棟梁も、とつさに扉の方に顔を向けた。今回はさつきより少し乱暴な感じだ。

——そんなに入りたいなら入れてあげるよ。それで、とつておきの収穫祭を見せてやるよ。お前らボンクラの平和主義者がびつくりするようなね。

「部屋に入ってきたら、とりあえず適当に話を合わせておけばいいから。後は、スキを見つけてドラキーを後ろからスコップで叩き落とすんだ。でも殺したらダメだよ？  
ちやんと手加減できる？」

「ああ、できるさ」

棟梁はうなずくとペツペと自分の手に唾を吐きつけてから、スコップを握り直した。

「しつかりやつてやるぜ」

「それじゃあ、行くよ？」

「おう」

完全にポポロの奴隷だった。

ポポロはほくそ笑みながら、そつと扉を開けた。



——ひよつとしたら留守だったのかな？

あまりに中から返事がないので、ついついそう考えてしまいました。しかしありえない可能性ではありません。

ドラキーはちよつと肩すかしを喰らったように感じました。

そして、急に冷静な考えが自分を支配しだしたことを感じました。

本当はドラキーには別の、やらなければならぬ仕事があるのです。それをほっぽり出してここに来ている——それを思い出すと、何かとてつもなく自分がバカらしくなってきたのです。しかも、途中でスラ吉たちと長いおしゃべりまでしてしまいました。仕事が遅ければ、それだけ収穫祭にも支障をきたすかもしれません。もう収穫祭まで日はないのです。ギーガだって祭り用のやぐらを組んだり、彫像をしたりしています。なんとあのネツクすら、今年は何を思ったのかもすごく真面目に収穫祭の準備に取り組んでいると聞きます。

それなのに——自分は何をしているのだろうか？ 根拠のない心配をもとに、わざわざ時間をかけて遠回りをして——今ここにいます。

——やっぱ僕はかなり神経質だったんだな……

ドラキーはそう思いました。ここまで考えると、村の一員であるポポロをことさら

疑ったことすらバカらしく思えてきました。いいえ、バカらしいだけでなく、自分は村の一員すら信用できないのか、と悲しくすら思いました。しかも、ついさつきまでポポロを悪魔のように考えていたのです。

——こんなことやつてないで、はやく帰ろう。どうせネックと収穫祭の準備でもしているんだらうな。

ドラキーがそう考えて立ち去ろうとしたときです。

あれほどビクともしなかった扉が、ゆっくりと目の前で開いたのです。

「あれ、ドラキーさん、どうしたんですか、こんな時間に？」

扉を開けたポポロの顔にはすでにあの笑みはなく、村の忠実な一員という仮面が張り付いていた。

「う、うん……」

ドラキーは一瞬言葉に詰まりました。完全に留守だと思い込んでいたので、逆に意表を突かれた形です。

それに要件も考えていませんでした。ポポロとは仲が悪いわけではありませんが、かといってスラ吉のように特別個人的な付き合いがあるというわけでも、気が合うという

わけでもないのですから。

「ひよつとして、収穫祭の準備がどれだけ進んでるか、とか見に来たの？」

ポポロがあどけない顔でドラキーを見上げながらそう言いました。こうしてあらためて見てみると、ポポロは本当に可愛らしい子供でした。そんな子供を、さつきまで悪魔呼ばわりして……

自分にはまだまだ “本当の強さ” なんて程遠いと、内心自分を責める気持ちでいっぱいでした。

しかし、ここまで来た以上、どうにもなりません。適当に話だけ合わせて適当に済ませて、屋敷に戻ろう。それから残してきた仕事を片付けよう——ドラキーはそう考えました。

「うん、そうなんだ。ちよつと最近、なぜか仕事に手がつかなくなっちゃって、それで見んなの仕事を見てちよつと自分を奮い立たせようってわけさ」

意外にもそれなりにいい感じに話を合わせることができました。

「へえ、ドラキーさんにもそんなことがあるんだ。スラ吉さんとドラキーさんは、絶対そんなことないと思ってたよ」

「いやいや、僕もまだまだなんだ。どうにも調子の悪い日ばかりで……」

自分でも何を言っているのかよくわからなくなってきました。

「まあ、立ち話もなんだし、中へ入ってゆっくり話でもしようよ。ちようどモグラの棟梁もここに来てくれているんだ」

ドラキーは、本当は適当に言い繕って屋敷に帰るつもりでした。モグラの棟梁がいれば安心だろう——そう思って、家の中を覗き込みました。

中には、確かにモグラの棟梁がいました。ただし、以前とはだいぶ違った姿で。今までは穴掘りの重労働に負けない、たくましい体だったのに、今では完全にお腹の突き出したブヨブヨの体です。

——こんな人じゃなかったのに……

ドラキーは気になりました。そして気になるとどうしても確かめられずにはいられません。直感的にこのまま家の中に入るのは何かまずいような気がしました。しかしここまで来て今さら帰るのも無理があります。

「それじゃあ、お邪魔するよ。大丈夫、ちよつと話をしたらすぐ退散するからさ。そんなにポポロ君の時間を取らせないから」

むろん、ポポロも時間をかけるつもりは毛頭なかった。

ドラキーが家の中に入ると、ポポロは後ろ手にドアを閉め、カチャリと鍵をかけまし

た。

「鍵なんてかけなくても、この村に泥棒なんていないよ」

ドラキーは笑ってそう言いました。

「うん、僕もそう思ってたんだ」

「そう思ってた？ てことはまさか……」

「そうなんだ、そのまさかさ。スラ吉さんの金庫からゴールドが盗まれたんだ。多分、この村の人たちじゃないとは思うけど、一応何があるか分からないからね」

ポポロはそう言いながら鍵がしっかりかかっているか、確認しているようでした。

それにしても、スラ吉のお金が盗まれていただなんて……意外な話でしたが、さっきスラ吉と話をしたときにそんなことは言っていないませんでした。

「それって本当に？ ただの噂とかじゃないのかな」

「本当だよ。ね、棟梁？」

「うん……ああ、まあ、そうだよ。みんな知ってるぜ。だからドラキーさんも、戸締りに気をつけるこつたな」

「うーん、そうなんだ……」

ドラキーは棟梁を見ながら、そう相槌を打ちましたが、何かおかしいと感じました。

なんだか棟梁が嘘を言っている？ ような気がしたからです。しかし、嘘にしてはお

かしいところがあります。そんな嘘をついても、棟梁は何の得もしないということです。

「でもまさかこの村の人たちが盗むなんて、信じられないし……」

それでもドラキーはショックを受けていました。さつきまでスラ吉と話をしていたが、そんな様子は全く感じられなかったからです。それにまさかこの村に住む人たちが……という思いも当然あります。

「うん、僕もそう思う。多分外部の犯行だと思うんだ。ルーラでやってきて、こつそり盗んでいるんだと、僕は考えている」

「なるほど……そう言われてみれば、そんな気がしてきた」

大体、村の中で盗みを働くようなモンスターがいるようには思えませんでした。みんな必死の思いで地獄のような日々から脱出して、この村にやってきたのです。そして不安の中、みんな必死に働いて、ようやく今の安定を築き上げたのです。

そう、ポポロ以外は。ポポロはまだこの村にやってきてそんなに日が経っていません。つまり、限りなく外部の人間に近いのは、ポポロです。

そこに思い至って部屋の中を見ると、全部が怪しく見えました。

「とにかく、このことは早くシーザーさんにも伝えてくよ。スラ吉さんにも話を聞いてみないと。もし嘘だとしても、こんな噂があること自体、あまりよくないからね」

「うん、僕も一刻も早く解決して欲しいと思ってるよ。村のみんなも怯えて暮らすのは嫌だろうし」

「そうだね、僕も戸締りには気をつけるよ」

そう言つて部屋を見ると、何やら怪しげな壺が置いてありました。ドラキーは気になったので、さりげなく言いました。

「そういえば、その壺の中には何が入っているの？」

「ああ、これ？ これはただの……しようもない壺だよ！ 本当にはなんもないから、多分見てもつまんないだけだと思うよ」

急にしどろもどろになったポポロを見て、これは完全に何か隠しているな、とドラキーは思いました。

「別につまらなくてもいいよ。ちよつと確認させてもらうね」

「いやいや、そんな必要ないよ、本当につまらないものだから。それに……」

「それに？」

「きつと見たら後悔すると思うから……」

ポポロはしゅんとしてしまいました。これで壺の中に何かあることはハッキリしました。でも、ポポロ君がお金を盗んでいたとは、いまだ信じられません。でもそれならそんなわざわざ疑われるような話をしないでしようし……となると何が入っているの

か見当はつきませんでした。きつと何かポポロに不都合なことに違いない、そう考えました。

ドラキーはサツと壺のところに舞い降りると、中を覗き込みました。

「あ……見ないほうがいいのに……」

絶対何かある——保存の壺の中は暗くてよく見えません。昼行性になれた自分が、この時だけはもどかしく思いました。そこで、思い切つて壺の中に手を突っ込んで、中身を取り出しました。

それは、ドラキーを型どつたちょうちんでした。

「収穫祭で使おうと思つて、作つてたんだ。本当は内緒にしておいて、収穫祭であつと言わせようと思つていたんだけど……」

ドラキーは自分がなんてことをしてしまつたのだろうと、自分で自分が嫌になりました。

ポポロを信用することもできずに、弱い自分に屈してしまつた……疑心暗鬼の虜になつてしまつたのです。

「ごめん、ポポロ君……最近……ちよつと疲れているのかな……」

ドラキーは、そのちょうちんをなるべく壊さないようにして、そつと壺の中に戻しました。



「なんて謝ればいいのか……」

ドラキーは壺に向かってため息をつきました。

「本当に疑ってごめんね」

そう言つて、ポポロがいるだろう方向へ振り向きました。そこには、ポポロではなくモグラの棟梁の顔がありました。

「きつと疲れてんだろ。しばらく眠つとけや」

なんとということでしょう、そう言うのと棟梁は振り上げたスコップを自分の頭に叩きつけたのです。

ボカッ！

ドラキーはそのまま床に倒れました。棟梁の影からチラリとポポロが見えます。その時、薄れゆく意識の中でドラキーがはつきりとみたのは、ほくそ笑むポポロの顔でした。

わけがわからないまま、ドラキーの意識は遠のいていきました……

## 35. グレイト・ヴィレツジ8

それからモグラの棟梁に指示して、気絶したドラキーを縄で縛り上げてから地下通路を通じてバーベキュー会場に運び込んだ。あそこならどれだけ泣き喚こうが、外部に音が漏れる心配はない。バカ騒ぎをしても大丈夫なように、モグラたちが丹精込めて作つてあるからだ。

シーザーも、結局は他人の動かし方を知らない。

利害で動かす。理想だけでは人間もモンスターも生きていけない、ということだ。

——それがどうして分からないかな。

ポポロはイスに座つて夕日を眺めながら、そう思った。収穫祭にはいささか早かったが、もう十分待つただろう。そのうちドラキーがいつまでたつても帰つてこないのを心配して、シーザーが村人を集めて搜索を開始することだろう。むろん、その中に真の村人は少なく、ほとんどはすでにポポロの忠実な飼い犬なのだが。

そんなこともシーザーは知らないだろうなあ……そう感慨深く考えていた。

ポポロでも、最後にこの村をぶち壊してしまうのは少しもつたいたいような気がした。できればこの村をなるべく残しておいて、集まつた中から好きなモンスターをスカ

ウトする、という風にできればベストなのだが、なかなかそんな都合よくいくわけもない。

それから、ポポロの思考はグレイトドラゴンの新しい名前を考えたり、今回新たに仲間にしたモンスターでどういう風に不思議のダンジョンを攻略していくか、という方向に発展していった。

ようやく日が沈んだ。暗くなったのでランプに火を灯そうとしたときだった。

またしてもノック。

扉を開けると、そこにはすでに忠実な番犬・キメラの姿があった。

「もしかしてやっつと?」

ポポロはそう言った。

「ああ、ようやくですぜ。本当にシーザーは鈍感な奴でさあ」

互いの笑い声が、薄闇の中で混じりあった。

「それで集合場所は?」

「屋敷の前の広場でさ。全員、直ちに集合とのこと、よろしくお願いませ」

「分かった、準備を終えたらすぐに行くよ」

「ところで、本当にこの作戦で大丈夫なんですか?」

ポポロのシーザー洗脳作戦のことだった。すでにモグラの棟梁を通じて、全ての忠犬

に作戦は指示してある。

「大丈夫さ。きつと、いや、必ずうまくいくから」

うまくいかなければ困る。

「うまくいったら全員で屋敷の前へ集合して、今までにない収穫祭をやるからね。そのためにとびつきりの肉を仕入れておいたから、楽しみにしててよ」

「ああ、ホンマにみんな楽しみにしてまつせ。それじゃあ、ワイはこれから他にも伝令に行かなあきまへんので、ここらへんで失礼しまつせ」

キメラはバタバタとどこかへ飛んでいった。

ついに収穫祭が始まろうとしていた。

それもとびつきり盛大なやつが。

完全に日が暮れてあたりに夜の帳が降りた頃です。屋敷の前に集まったモンスターたちは、みな一様に沈痛な面持ちをしていました。それもそのはずです、村の最古参にして、村を陰ながら支えてきたドラキーが行方不明になったのですから。なるべく本人の事情を考慮して、志願して集まってもらいました。それでも、結局はほぼ全員が集まったのです。ドラキーのためなら、仕事など放り出してみんな駆けつけてくれたのです。シーザーはその様子を見て、不幸中ながら少し頼もしい気持ちになりました。村

のみみんなで団結すれば、きつとドラキーも見つかるに違いありません。

「よし、全員集まったかい？」

シーザーのその言葉を聞いて、居並ぶモンスター全員が頷きました。ランプや薪の明かりによつて、赤く照らされています。

「もうすでに話は聞いているだろうが、ドラキーが行方不明になった。何でも、屋敷の者の証言によれば昼過ぎに屋敷を出て行ったきりだそうだ。何か他にドラキーの動向を知る者は、遠慮なくここで述べてくれ。情報がないと、捜索もできないからね」

さつそくスラ吉とトリシーが一步前へ歩み出ました。スラ吉が言います。

「そういえば今日の昼過ぎ、突然僕のところへやって来ました。別段、変わった様子もなく、僕とトリシーさんと三人で何気ない話をしていたんですが……」

「別におかしい様子はなかったと？」

「そうですね。少なくとも、話しているあいだはそんなことは全然感じませんでした。まあ、その日は珍しくかなりの長話になって遅くなつてしまつたようで、最後に別れた時には、早く屋敷に帰つて残つた仕事を片付けるつて言っていました」

話を聞いていると、非常にドラキーらしいことでした。きつとアポロンの死による衝撃、動揺が、未だに収まっていなかつたのでしよう。他の気の合う仲間と話をしに行つてそれを紛らわそうということでしょうか。

「そこで、何か変わった話題は出なかったかい？」

「変わった話題……?」

「そう。例えば、死後の話とか」

「ええ、少しだけですけど、そんな話をしました」

「それから俺の音楽談義の話になったんだ。音楽の着想が突然天から降って湧いてくるとかなんとか。ひよつとしたら、アポロンが俺に教えてくれてるんじゃないかって言ったら、少し安心したような感じに見えただ。それからは全然別の話になっちゃったけどな」

トリシーが言いました。

「少し前まで、様子がおかしかった。ドラキーは、一番アポロンの死に動揺していたんだよ。私もそれで何度か話をしたことがあるが、納得はしていなかった」

「そりゃ、納得できるような話じゃねえからなあ」

トリシーが言うことは最もです。それだけに、嫌な予感がシーザーはしました。魔族の死因で多いのは、実は自殺なのです。戦乱の時代なので自殺の数は少ないでしょうが、平和なときに最も多いのは、自殺なのです。長い寿命に耐え切れず、死んでしまうのです。

まさか、あのドラキーが……シーザーはそう考えると、背筋が寒くなりました。

到底自殺を考えるほど思いつめていたとは考えられません、もしかしたらということもあります。

「ちよつと待つてください」

今度はポポロが言いました。

それで一同が耳を傾けます。

「さつきスラ吉さんは、話が終わってから屋敷に帰った、って言っていましたよね？」

「うん、そうだよ。でも、実際には屋敷に帰ってないみたいだね」

「多分、その後に僕のところに来たんだと思います」

一同が意外そうな顔をしました。シーザーも意外でした。なぜ、ドラキーはポポロのところへ行つたのでしょうか？

「何か、おかしい様子はなかったかね？」

「おかしい、ていうか、なんていうか、ちよつと疲れているような感じでした。僕はその時、モグラの棟梁と収穫祭の段取りを話し合っていたんですけど、なんだかとても疲れたような様子でした。本人は元気そうに振舞ってましたけど」

シーザーの嫌な予感、その話を聞くとますます高まっていきました。

もしや……そう思うと、いてもたってもいられません。

「それはいつのことだね？」

「ええと……まだ夕暮れにはなつてなかつたと思います。でも、日はかなり傾いていました」

時間的にもスラ吉、ポポロの順番で回っていったのでしよう。

「それで、モグラの棟梁はここに集まってきているのかい？」

シーザーはポポロの言っていることを棟梁にもきいて確かめようと思いましたが。

「いえ、棟梁はアメフラシさんを看病しています。最近のアメフラシさん、少し体調が悪いようなので」

「そうか、分かった。まあ、何人かは村に残っておいてもらった方が安心できる。とにかくポポロ君の証言は、時間的にも矛盾がないな。それでは、この中で夕暮れ前後にドラキーの姿を見たものは他にいないかい？」

シーザーの問いかけに、みんなじつとしていました。それぞれが焚き火に煌々と照らされた、不気味な影のようです。

「ということは、ポポロ君を訪問したあと、何かあったということか……」

そこでスラ吉がワナワナと震えながら口を開きました。

「シーザーさん、落ち着いて聞いて欲しいんです……」

「どうしたんだい、急に」

「これから言うことには、真実と推測が含まれています。でも、落ち着いて聞いて欲しい



んです」

真面目なスラ吉がここまで切迫して言うのだから、何かあるのだろうと思い、とにかく黙って聞くことにしました。

「最近、僕の家からゴールドが盗まれたんです」

シーザーはかなりの衝撃を受けました。ちよつと不謹慎だと自分でも思いましたが、アポロンが死んだことよりも衝撃を受けました。生き物はいつか必ず死にます。それは

仕方のないことです。でも、この村で盗みがあつたなんて……最も信じたくないことでした。

「最近、というのは正確でないかもしれませんが。僕が金庫の中身を見たのが最近だけで、実際はもつと前に盗み出されたのかも……それは分かりませんが、とにかく、僕の金庫の中からゴールドが消えていたことだけは確かです……」

「いつ気づいたんだね？」

「2、3日前のことです」

「どうしてその時言わなかったんだ?！」

シーザーはもしかして自分が信用されていないのではないかと思い、少し語気が荒くなっていました。

「ごめんなさい……」

スラ吉は泣きながら懇願するように言いました。

「言おうと思っただけど……こんなことを言ったらみんなが楽しみにしていた収穫祭がなくなってしまうかもしれない——そう思つて……僕があともうちよつとだけ黙つていれば、そのうち収穫祭も終わる。僕がちよつとだけ我慢すれば……そう思つて、終わつてから相談しようと思つてたんです」

シーザーはそれを聞いていたたまれない気持ちになりました。確かに、もし気づいたときにスラ吉がシーザーに告げていれば、収穫祭はなくなつていたでしょう。スラ吉の板挟みになつた気持ちはよく分かりました。

「分かつた。もう、過ぎたことを悔やんでもしょうがない」

「きつと、僕の金庫から金を盗み取つた奴が、ドラキーさんを誘拐したんだ……僕が勝手に気を利かせたせいで、ドラキーさんをひどい目に合わせてしまつて……」

それまで言うのと、スラ吉は泣き崩れて、後は言葉になりませんでした。

他の村人たちも、ただ黙つてスラ吉を見守ることしかできません。全員、少なからず衝撃を受けているように見えました。

「そんな金を盗んだ奴、許せねえよ」

ネットクが勇ましく言いました。

「多分、村の者じゃない。絶対外部の奴が侵入して盗んだんだ。この村のやつが盗みながらするわけねえよ」

シーザーもそれだけを信じたいのは山々でしたが、今はドラキーを探すことが先決です。

「とにかく、今はドラキーを一刻も早く見つけ出さなくてはならない。わかっていると  
思うが、最悪な事態はどんなに手を尽くしても避けなければならぬ」

シーザーの言うことは村人全員が感じていることのようにした。

「とにかく、今までの情報を合わせてみるに、ドラキーは誘拐された可能性が高い。そしてその誘拐犯は、過去にスラ吉の金庫からゴールドも盗んでいる。あくまで推測ではないし、最悪な考えだが、今はこの最悪を想定した上で搜索を開始する。

そこで、ここに集まってもらった者たちに、一つだけお願いがある。それはこの搜索に命の危険があるから頼むのだが、一部の者を除いて、搜索から降りて欲しい。これは君たちの安全のためなのだ。犯人はスラ吉の金を盗み、さらにドラキーを誘拐した。むしろこれも推測でしかないから、もしかしたらドラキーがふらつとどこかへ出かけて迷子になっただけ、というのもありうる。しかし、最悪の事態を想定してそれに備えておかななくてはいけない。万が一にもこれ以上の犠牲を出してはいけないんだ。残るものは、屋敷で防衛の準備をして欲しい。それで後顧の憂いなくこちらも搜索できる。それ

にもし誘拐なら、犯人から何らかの要求があるはずだ。そのときのためにも、屋敷に誰かいた方がいいだろう。みんな、分かってくれたね？」

「分かりました」

とポポロが一段とハッキリした声で言いました。

「それをわかった上で、僕も捜索隊に参加します」

「ポポロ君、君のやる気はわかるが、あまりに危険なんだよ」

「大丈夫です、俺がしっかり守りますから」

ネットクが頼もしそうに言いました。

「人数はひとりでも多いほうがいいし、ポポロは頭がいいからきつと何か的確なアドバイスをくれると思うんです。ポポロも覚悟しているし、こんなときのために武術や魔法を学できたんです、今こそその成果を發揮してやりますよ」

もはやシーザーは何も言うことができませんでした。

悲劇が起きました。そのおかげでネットクの思わぬ成長ぶりを見ることができたのです。わずかですが、シーザーには慰めになりました。と同時に、自分を奮い立たせました。

「シーザーさん、僕も……！」

スラ吉は言いましたが、すぐにトリシーによって遮られました。

「スラ吉さん、俺が言うのもなんだが、あんたは少し休んだほうがいいと思うぜ。そんな消耗した状態じゃ、かえって足手まといだ。俺と一緒に屋敷に立てこもるんだ。それにアメフラシの面倒も、お前が見てやるのが一番いいだろ？」

普段は全く頼りにならないトリシーでしたが、このときばかりはトリシーの言い分が最もでした。

「……うん、分かったよ。僕はそうする」

「シーザーさん、というわけで、俺とスラ吉さんは屋敷に残るよ。なあに、俺だって一応はドラゴン族だ、炎や吹雪の耐性だけはあるから、いざって時は盾くらいにはなる。安心して捜索してくれ」

「ああ、それじゃあ、屋敷はトリシーに任せよう。よし、早速捜索を開始しよう。キメラはすぐに村の他のモンスターに今のことを言って、みんな屋敷に立てこもるように連絡してれ。ゴールドなど、貴重品だけ持って避難するように。武器防具は屋敷の中にあるから、立てこもったらトリシーの指揮に従ってくれ。」

私はひとりで探索する。ギーガ、ネック、ポポロは3人ひと組になって捜索、キメラは連絡が終わったら、すぐに上空から怪しいことはないか偵察。あくまで偵察だから、身の危険を感じたらすぐに逃げることに。もし何か発見したら、そのときは私かギーガ組へ連絡して欲しい。以上。何か疑問、質問はないかね？」

誰も、疑問の挟みようがありませんでした。

「それでは各自、身の安全だけは最大限注意を払うように！ これより搜索を開始する！」

シーザーの号令一下、各自がそれぞれの持ち場へ奔走しました。

むろん、その最中に闇の中でほくそ笑むポポロの顔など、シーザーにも他のモンスターにも見えるわけがありませんでした。

屋敷に集まったモンスターたちは、めいめいに武器や防具を取って、早くも臨戦態勢を整えました。そうやって、カメラが集めてきた他の村人も屋敷の中へどんどん招き入れました。シーザーは貴重品だけ持って、と言いましたが、ほとんどの村人はゴールドなどどうの昔に使い果たしていたので、持って来ようもありません。

そうした中で、屋敷への籠城が始まりました。

最初は不安の中で始まった籠城ですが、そのうち慣れてくると、だんだん退屈になってきます。それにお腹も空いてきます。いつもはそろそろ寝る時間ですが、寝ずに搜索組を待たなくてはなりません。

最初にその口火を切ったのはイエッタでした。イエッタは食料庫の樽や壺を持ってくると、豪快に食り始めたのです。

「うんめえ〜！ やっぱ腹減つてると何食つてもうんめえよ〜」

最初は集団で咎めていたモンスターたちですが、イエツタのあまりの食いつぷりに自分たちも我慢できなくなってきました。すぐに輪になってイエツタと一緒に食料庫の食料を食べ始めました。そうなると、当然ながら屋敷の警備は手薄になります。

この屋敷を任されているトリシーは、すぐに異変に気づきました。警備にあたっているモンスターの数が急激に少なくなったからです。

「一体、どうしたっていうんだよ?!」

「そういえば、アメフラシさんもないや」

さつきまでスラ吉が看病していたのですが、ちよつと目を離している間に、もういなくなっていました。まるで屋敷中が空っぽになってしまったようです。

これもまさか犯人の仕業か……!?

そう二人共そう考えました。そして屋敷を見回りました。

答えは簡単に見つかりました。

みんな、台所に集まってめいめいに食い散らかしていたのです。さすがのトリシーやスラ吉も、このときばかりはカンカンに怒りました。

「おい、お前ら！ 一体何やってるんだ!」

突然、トリシーがあまりに大きな声でそう言ったので、一同はビックリして食べる手

を止めました。大体、いま村のみんなが食い散らかしている食料は、収穫祭で振舞われる予定の、腕によりをかけた料理であるはずです。それをシーザーの許可もなく、勝手にくい散らかすなんて……しかもその中にはさつきまで病気で臥せていたはずのアメリカシマまでいます。

「なんでこんなことをやってるんだ？　これは収穫祭で食べるやつじゃねえか」

半ば呆れ、半ば怒りでした。こんな体たらくなら、村の中で盗みを働いたというのも納得できるというものです。みんなバツが悪そうにしている中、ひとりイエッタだけがガツガツとかきこんでいました。

トリシーはノシノシと台所を横切つて、イエッタの傍まで行くと、尻尾で料理を払い落としてしまいました。

「おいおい、どうしたんだよお、こんなもつたいたいなことしてえ」

「いい加減にしろよ、白豚野郎」

トリシーのあまりな怒りっぷりに、周囲のモンスターは息をするのもためらう心境でした。ただイエッタだけは、なぜトリシーがこんなに怒っているのか全く分からない、といった態度です。

「てめえ、今自分が食っているのが何か分かってんのか？」

イエッタは手についたソースを舐めてから、ゆっくり答えました。



「収穫祭で出される予定だった料理だろお。そんなくらい言われなくても分かってるよお。それより白豚野郎っていうのはオイラのことかい？」

彼以外、一体誰がいるというのでしょうか。

トリシーの、普段は竖琴を優雅に引く指が、全く同じ優雅さをもつてクロスボウの引き金にかかりました。クロスボウには矢がつかえてあります。

「おいおい、そいつを一体どうする気なんだよお」

しかしイエツタには全く狼狽する素振りは見えません。クロスボウの照準はイエツタの頭に向けられていても、です。

「お前、俺に撃つ気がないと思ってるんだろ……」

「そんなこと、できるわけねえよお。落ちこぼれのウーパールーパーによお。へへへえ」

そう言いながら、イエツタの舌はペロペロと動いて、皿にへばりついていた残飯まで綺麗に舐め取ってしまいました。それから、その皿を厨房の上に無造作に置きました。

「ああ、うまかったあ。どうだい、トリシーも一緒によお。ちよつと早い収穫祭つてやつ

さあ」

「お前は、ちよつとばかりし知恵の足りないところはあんだけど、正直でいい奴だと思つていたよ」

「急にどうしたんだよ、まるで葬式の時みたいな顔してさあ。あの時みたいにオイラにも専用の音楽作ってくれよお」

トリシーの指が震えました。おそらく怒りによって。そこには村人を殺してしまうかもしれないという恐怖もあったのかもしれない。

「今すぐに謝れ。いや、俺にじゃない。この村の代表であるシーザーにだ。今ここで謝れ。それから、すぐにお前たちが散らかしたものを片付けるんだ！」

「腹いっぱいになったらやるよお」

「今すぐにやれ！」

トリシーの怒号のあと、あたりはシーンとなりました。

トリシーは怒りに冷静さを失っていましたが、スラ吉はこのときはこの場の誰よりも冷静でした。少し前にシーザーにゴールドを取られたことを告白して、気持ちも整理もついたのでしょう。また、激昂するトリシーに対して自分だけは冷静さを保っておかなくてはならない、と用心する気持ちが強く働いたこともあるでしょう。何しろ、一歩間違えればトリシーは村人を殺してしまいかねないのですから。

そんなスラ吉が冷静に周囲のモンスターを見渡してみると、予想していた様子とは違いました。きつと激昂したトリシーを見て、みんなちよつとは反省の色を見せてシユンとするのではないかと考えていたのですが、どうやらそんな雰囲気ではないようです。

全員、怪しく目を光らせながらトリシーとイエツタを眺めているのです。

そこには悪意が満ちている——スラ吉はそう考えて、それを打ち消そうとしました。しかし気配で感じてしまうものは、どうやっても打ち消しようがありませんでした。

「早くやれって言ってるだろ!!」

トリシーが沈黙に耐え切れないように怒鳴りました。それはイエツタに向かって、というよりは静寂そのものへ向かって怒鳴っているように、スラ吉には見えませんでした。

二人を眺める周囲のモンスターたちは、相変わらずの冷たい視線でこの騒動を見つめています。まるで筋書き通りの芝居を見るような目つきで。

「プププツ」とイエツタ。

「……ははっ」とモンスターたち。

やがて何回か忍び笑いが漏れましたが、それはだんだん忍び笑いから笑いの洪水になって、屋敷中に響き渡りました。それは夜の空気の中でさらに狂氣的に響きました。

「ギャハハハハハハ！」

トリシーとスラ吉をのぞく、モンスターたちの大合唱です。

スラ吉はこの時点である予感を抱きました。ひよつとしたら、これは全て仕組まれていたのではないだろうか、と。

「何がおかしいんだよ、お前ら！」

「ギャハハハハ！」

トリシーの言ったこと自体が面白いとでも言いたいように、一層笑いの渦は激しくなりました。その渦の中に、トリシーは飲まれかけているように見えました。

そこで、スラ吉はトリシーに耳打ちしました。

(もうここは放っておいて戻ろう)

(……)

トリシーは答えませんでした。

その沈黙が、スラ吉の不安をかきたてました。彼もまたドラゴン族なのです。本来心の中に激しさを持つ魔族なのです。この場で冷静さを失って何をするか分かりませんでした。

ようやく、笑いの渦は収まりました。

「てめえら、いい加減にしろよ」

トリシーはボウガンを構え直しました。

イエツタはあの茫洋とした表情でしばらくトリシーを見つめていましたが、やがて薄笑いを浮かべると

「おいおい、ボウガンはあ」

そう言うとうボウガンを手でつかみ、自らの眉間にピッタリと寄せました。

「ちゃんと狙わなきやダメだぞお〜」

スラ吉は驚きを隠せませんでした。何よりトリシーもガタガタ震えています。こうなってしまうえば、本当に撃ってしまうしかないからです。向こうからのあからさまな挑発なのです。そして眉間に密着させてしまえば外しようもありません。その確実に村人の命を奪う状況にあらためて陥ると、トリシーの覚悟も揺らいできたようでした。

「俺に殺させるのか……?」

「何言つてんだよお。さつきまで本気でやる、みたいなこと言つてただろお? しつかりやってくれよ、みんな期待してるんだからさあ」

トリシーは助けを求めるように周囲を見回しましたが、その目は本当に黒い期待に輝いていたのです。トリシーは愕然としました。

それはスラ吉も同様でした。もはや、本当に村人たちは狂ってしまったのだと、悲しい気持ちにもなりましたが、今はこの窮地をどうやって脱出するかが心配でした。

「さあ、早くやれよお。もう待ちくたびれたよお」

イエツタの間延びした催促です。

トリシーはしばらくガタガタ震えるボウガンを眉間に向けて構えていましたが、しばらくすると諦めてそれを下ろしました。

「おいおい、どうしたんよお? 本気でやるんじゃないのかいい?」

「ああ、気が変わったんだ。済まねえな」

「いいやあ、別にいいよお。気が変わったんなら、オイラたちと一緒に宴会しようよお」

トリシーは力なく微笑みました。

「それは遠慮しとくよ。お前らだけで楽しんでおいてくれ」

そう言い終わらないうちに、トリシーはボウガンを振り上げました。

「ただし夢の中でな」

そしてイエッタの頭にふり下ろしました。ボウガンは、そのままイエッタの頭を直撃するかにスラ吉には思えました。普段のイエッタはトロクさく、機敏な動きなどできないから、きつとこのトリシーの攻撃を防げないだろう——しかし目の前の光景は完全にその予想を裏切っていました。まるでそう来るだろうと予知していたかのように、イエッタの毛深い両手はボウガンをがっしり捕まえていました。トリシーも必死に押し返そうとしますが、イエッタの方が単純な力では上なので、もはやどうしようもありません。

「へへっ、だから言っただろお、ちゃんと狙わなきゃダメだつてえ」

「クソツッ！」

「トリシーさん……!!」

思わずスラ吉もそう言葉を漏らしてしまいました。

「スラ吉、お前は今すぐここを抜け出せ！　そしてシーザーにこのことを報告するんだ。それから、容赦するな、とも伝えておいてくれ。こいつらはもう俺たちの知ってる奴らじゃない……中身は別人だ」

「そんな……」

そう言っている間に、イエツタはあの真つ赤な蛇を口の間から伸ばして、トリシーの首に巻きつかせました。そして徐々にトリシーを締め上げていったのです。トリシーは両手が離せないのも、もはやどうしようもありません。

「はや……ぐ……にげ……ぐえっ……」

スラ吉は逃げようか迷いました。しかし、トリシーを見捨てて逃げるなど、この時のスラ吉には到底できませんでした。

床に落ちたボウガンがひどく大きな音を立てました。トリシーの口が空気を求めてパクパク動いています。それを見たとき、スラ吉の体は勝手に動き出していました。

イエツタに必死に体当たりしたのです。しかしスラ吉の渾身の体当たりは、イエツタの分厚い脂肪と体毛に覆われた体に弾かれて全くダメージを与えられません。それどころか、体当たりするたびに弾かれて地面に転がってしまう始末です。

その様子を見て、またしても周囲のモンスターたちの間から嘲笑の嵐が巻き起こりま

した。

「ハハハ！ いいぞ、もつとやれ！」

「努力すれば夢はきつと叶う！ その調子で頑張れ！ ギヤハハハハハハ！」

「ヒューヒュー、お熱い友情だねー！ そのまま灼熱の炎だ！」

「ギヤハハハハ！ ギヤハハハハ！ アホらしいぜ、全く！」

もはや周囲の景色もかすんできました。それは自然と流れ出た悔し涙のせいでもありません。疲れて視点が定まらなくなってきたからでもありません。そしてこの異様な状況で、もはや周囲の情報を整理できないからでもありません。何回も床に叩きつけられて、意識が朦朧としてきたのもありました。

それでも、スラ吉は体が動く限り体当たりを続けました。すでにトリシーは完全に動かなくなっていました。それでも、体当たりを続けました。

そして最後の体当たりをしました。案の定、弾かれて床に転がりました。

もう、スラ吉は立ち上がることもできません。

最後に薄れゆく意識がとらえたのは、周囲から湧き上がるより一層大きな嘲笑だけでした。

負けるもんか……

スラ吉のまぶたがゆつくりと落ちました。



それでも僕は……—

## 36. グレイト・ヴィレッジ9

ギーガ組は、ギーガとネック・ポポロのふた組みにさらに分かれて搜索することにした。ポポロにとつては幸いだった。ブランクがあるとは言え、長年戦場にいたギーガは隙がない。しかしネックは自分をいまだに友人だと思っているのだから、隙だらけと言つてよかつた。

そろそろ、打ち合わせの時間が迫ってきている。

そこで、ポポロはネックに丘の上へ登るように提案した。高い場所に登ることによつて何か発見できないか、という名目だったが、これにはもちろん別の目的があつた。

突然ポポロが丘の上に登つてみようと言つたので、ネックは最初面食らいました。どうしてそんなことをする必要があるのか、分からなかつたからです。ポポロの言う目的を聞いてもそれほどピンとはきませんでした。

「うーん、でもなあ……上からならカメラが偵察してるだろうし、今さら俺たちが行つてもあまり意味がないと思うぜ」

「自分の目でも確認してみるべきだよ」

ポポロが力説しました。

「見落としてるかもしれないし、それにこのままアテなく探索するより、まずは情報を集めてからでない」と

そう強く言われてみると、それも最もな気がしてきました。確かに、このままあてどなく漫然と探索し続けても成果は得難いでしょうし、キメラが見落としていることでも、もしかしたら自分たちの目で見ることによつて発見できるかもしれないからです。

「それに今日は満月だし、明かりは充分だよ」

それが決定打になりました。正直言つて、このときすでにネットワークの心の中には持ち前の飽き性が頭をもたげてきたのです。この村人が盗みなどするわけがないし、どうせドラキーが一時的なショックを受けて家出ただけだろう——そういう風に考えていたのです。

そうやつて、二人は満月に吸い込まれるようにして丘の上へ登っていききました。

この村で一番高い丘——アポロンの墓のある場所です。昼間だと絶景に思えた場所でしたが、夜に登つてみるとこれ以上の不気味な場所はないと思えるような場所になっていました。そのうちアポロンの霊が化けて出るのではないか、と思つたほどです。

そして、ようやく丘の上から辺りを見回して見ました。木々を、家々を、月光がモノトーンで照らし出していました。普段は煌々と灯りの点っている家も、今日ばかりは全

部真つ暗でした。それは死んだ世界で辛うじて形を保っているだけの廃墟のように見えました。

そしてその光景はしばらくの間、ネックの目をとらえて離しませんでした。

しかし、どこを見ても何も異常は見つかりませんでした。

「ポポロ、そつちはどうなんだよ？」

クソツ、そろそろかと思つたのに、何やつてるんだ、あいつら。とつくに時間は過ぎたのに、まだ合図が上がつてないなんて。あれだけちやんと計画を決めておいたというのに、結局僕がいないとこれだ。決められたことくらいサツサとこなせよ、クズモンスタ―が。ああ、もう、ネックが話しかけて来た。これはまずいぞ。このまま何もならないで答えたら最悪だ。すぐに丘を降りることになるだろうし、森の中に入ったらさすがに合図があつても分からなくなるだろうし……とりあえずここは適当に取り繕つておこう。

「うーん……」

ポポロは曖昧な返事をしました。

「何か見つけたのか？」

「確証はないんだけど、あっちの方に何か見えたような気がするんだ……」

ポポロが指差した方を凝視しましたが、何も怪しいところは発見できませんでした。「ていうか、あっちの方はシーザーの屋敷じゃねえかよ。何もねえに決まったら」

シーザーの屋敷は、現時点で灯りの点いている唯一の建物なので見間違えようがありません。来た方向から考えても、ポポロが指しているのは屋敷であることは間違いありません。

「本当に何か見えたんだけどなあ……ネックは3つも目があるからよく見えないの？」

「ハハハ、目が3つあっても視力は人間と変わらねえよ。俺たちライオネック族の第三の目は、魔力の流れとか普通の目で見えないものを見るためにあるからな」

「へえ、そうなんだ、ふくん」

「なんだよ、もしかして疑ってるのか？」

「いや、別に。ただ、ひよつとしたらまたデタラメ言ってるのかなって」

「それを疑ってる、て言うんだよ！」

相変わらずネックは余計なお喋りが多かった。恐らく、この騒動にすでに飽き始めてきたのだろう。

——ああ、すぐに終わらせてやるよ。

ポポロは強くそう思ったが、肝心の合図はまだだった。

本当に、早く、しろよ……

もしできることならこの村をマダンテで吹っ飛ばしてやるかメドロアで消し去ってやりたい気分だった。ただ、今はこの計画で一番不確実な部分だ。ここを乗り切らないと、ポポロの将来は開けない。イライラしながら適当にネツクのお喋りの相手をして待っていると——ついに合図が見えた。

これで全てがうまくいったわけではない。しかし一番の難所は乗り越えた。

「ねえ、あれ！ あれ見てよ！」

ついついお喋りに夢中になってしまったネツクでしたが、やがてドラキーの探索のことが頭の中でまたしても気になり始めました。おそらく今頃はギーガかシーザーが発見していることでしょう。きつとたあいもないことに違いありません。そんなことより、ネツクはゴールドを盗んだ外部犯のことに思いを巡らしていました。

ネツクの想像上では、実行犯はケチな盗賊ですがその背後に魔族の大物組織が控えており、潜在能力に目覚めたネツクは見事その組織を叩き潰して残った人材、拠点などを乗っ取り魔界に一大勢力を築き上げる足がかりにするとところまで構想は膨らんでいました。その過程でギーガとシーザーはいつの間にかネツクの最重要幹部になっていま

した。

「ポポロはこの村のこと、どう思う？」

「うん、いい村だと思うけど」

「けど、何なんだよ？」

「けど……ネックは何か不満があるみたいだね」

ズバリと言い当てられてしまいました。

「俺もいい村だと思うさ。でもさ、この村は閉鎖的だと思うんだ。平和を実現するなら、

もっと外に出て敵対勢力を叩き潰さないとダメだ」

「でも、それをやったら平和じゃなくなるんじゃない？」

「戦争を終わらせるために戦争をするんだよ」

「ふくん、変なの」

ネックはそれが変でない理由を説明しようとした。魔界の勢力は全て自分の保身や利益のために戦争をしているだけで、誰ひとりとして戦争をやめる気などないことを。彼らはむしろ戦争が続いてくれさえすればいいのです。そうすれば、好き放題に暴れまわって略奪できます。そしてそれを止めるための戦争など、誰も行おうとしないことを。

しかし、あまりに多くのことを語ろうとすると人間は言葉に詰まってしまいます。そ

れは魔族も同じでした。ネックもしばらく何か言おうとしましたが、結局は常套句に逃げました。

「まあ、ポポロは子供だからまだよく分かんねえよ」

言われたポポロはたまったものではありません。全てお前の理解力がないせいだ、と言われたに等しいのですから。

「そんなことないよ!」

「そうやってムキになるところが子供なんだよな」

「だから違うって!」

「はいはい、違いますよ、大人ですね、ポポロ君は」

「もうー! 何なんだよ!」

ポポロは呆れてソツポを向いてしまいました。

いつもならここで大笑いしていたネックですが、この時ばかりは笑う気になれませんでした。むしろ自分の切実な志が理解されず、月夜の墓の前ということもあつて寂しきばかりが募りました。隣にいるポポロまでもが遠い異邦人に見えてきます。

——ま、いいや。

生来、あれこれのごとを深く考える性質ではありません。それより、今はドラキーを搜索することです。



「とにかく行くこうぜ。またオツサンに怒られるし」  
「……うん、そうだね」

ポポロはなぜかあまり乗り気でなきそうでした。

丘を下ろうと振り返ると、そこにはアポロンの墓石がありました。そこにはアポロンの完全な顔が彫られていました。ネックはしばらくうごくせきぞうの石像に手を合わせる——搜索がうまくいきますように——すぐに丘を下ろうとしました。

そのとき、ポポロが指差して言ったのです。

「ねえ、あれ！ あれ見てよ！」

言われた通りに振り返ってポポロの指差した方角を見ました。最初は何も見えませんでした。やがてそこから細い煙が立ち上がっているのが見えたのです。煙はみるみるうちに太くなってゆき、いくつにも枝分かれしていきます。それは屋敷から立ち上っていました。

そして、炎も遠くからでも見えるほど大きくなってきました。ネックには目の前の光景が信じられませんでした。中には村のモンスターたちが立て籠っているのです。

そしてそれ以上に、屋敷が燃えているという事実は、ドラキーがただならぬ状況であることも暗示していました。

「なんてこった……大変なことになってるじゃないか！」

「うん、そうだね」

「ひよつとして犯人のやつ、俺たちが捜索に出て手薄になった隙に屋敷を襲いやがったのか」

「うん、そうだよ」

ネックは聞き流すところでした。しかしその前に、その言葉の本当の意味が一瞬で、思考を経ずに理解して愕然としました。

「おい、ポポロ、まさか——」

振り向いた時には、ポポロの手がネックの顔に当てられていました。それは花でも摘むような感じですよ。

触れられた瞬間、ネックの精神はカーテンで閉ざされたようにその働きを失い、月光の照らさないとこころへ沈んでいきました。

スラ吉はパチパチという音で目を覚ましました。それは音楽会の割れんばかりの拍手の前に遠慮がちに始まるまばらな拍手のように聞こえました。しかしその後には続いたのはゴウゴウという地の底から響いてくるような唸り声だけでした。それはますます大きくなっていきます。

スラ吉が目を覚ましたとき、最初は何が何やら分かりませんでした。しばらくしてか

ら、ようやく目に映る映像を心が理解することができました。周囲は炎で完全に赤く染まっていたのです。まさか、ここはさつきまでいた屋敷なのでしょうか。

一体なぜ、みんなは屋敷に火を放ったんだろう……

考えましたが、その答えは目の前に転がっていました。トリシーの骸です。口からヨダレを垂らしたまま、絶命していました。顔は意外にも安らかな表情をしているようにスラ吉には見えました。

トリシーが死んで悲しい、という思いも当然ありましたが、今はそれよりここからどうやって脱出するか、それが先決で、頭の中から悲しみを追い払ってしまいました。

どうやら体は動かさそうです。しかしどこを見てもゴウゴウと燃え盛る火炎に、モクモクと立ち上る煙の柱しか見えません。しかもその包囲もどんどん狭まっているのです。

何とかしてここを脱出してシーザーにこのことを知らせなければ……

スラ吉はそのことだけを考えました。シーザーはまだ村人たちの本性が変わってしまつたことを知りません。このままではシーザーは騙されてしまうかもしれません。そして何よりも、ここを脱出してせめて一矢でも報いたい——そういう切実な思いもありました。

しかし火炎と煙はどんどん迫ってきて、屋敷を飲み込んでいきます。すでに火炎の熱

さは限界にまで達していました。このままではそのうち沸騰したバブルスライムみたいになって蒸発してしまうでしょう。

——なんとかするんだ！　なんとか……！

必死に考えましたが、事ここに至っては何も有効な手段は思い浮かびませんでした。そして炎が非情にも迫ってきました。

とりあえず、ネックには持てる限りの精神感應能力を流し込んで、幻覚を見せておいた。しばらくはあの場所で自らの幻影と戦っていることだろう。もつと本気を出せば洗脳できなくもないが、ここで能力を消耗するのは得策ではない。もしシーザーを仲間にできれば、シーザーに戦わせて弱らせてからで十分だ。

そうやって隙を作った間にポポロは村の屋敷に向かった。さあ、あとはむき出しになった本丸に攻め入るだけだ。

月光の中、屋敷の炎が大きくなるにつれて、ポポロの鼓動も緊張でだんだん大きくなっていった。

神様、どうかうまくいきますように……

「シーザーはん、大変でっせ！」

キメラが突然舞い降りてきて、シーザーに言いました。

キメラの話はシーザーにとつて信じられないことでした。色んな考えが頭をよぎりました。これはこの村を潰そうとした魔界の勢力が仕組んだことなのか……

いえ、それよりもシーザーが思つたのは、もしかしたら敵の策略にまんまと乗つて戦力を分散させた上に、一箇所に避難させたせいで余計に被害が大きくなつたのではないか、村人に死者（いないに越したことはないか、いてもおかしくない）が出たとしたら、自分の判断が間違つていたせいではないのか、と激しく後悔しました。

しかし、この緊急事態に自分を責めても何も始まりません。まだ村人はトリシーの指揮の元、シーザーたちの助けを待っているのです。今は一刻も早く屋敷へ駆けつけ、悪い侵略者を根絶やしにしなければなりません。そして敵は一体何者なのか、それも確かめなければいけません。

屋敷の炎は、すでにシーザーの位置からでも見えるようになりました。月光に照らされた煙まで見えます。本来なら、楽しい収穫祭を迎えていたはずでした。

——それすら許されないというのか……

しかし、今はその憤りをなんとか噛み殺しました。

「分かつた。私はすぐに屋敷へと向かう。君はすぐに飛んで行って、ギーガにも知らせてやってくれ。頼んだぞ」

「承知でっせ」

キメラの目の前で、シーザーは翼を広げて、目にも止まらぬ速さで飛んで行きました。キメラはどんどん小さくなって闇の中へ溶け込んでいくシーザーの後ろ姿を見ながら、ボソツと呟きました。

「ホンマ、単純なやつやな。こりや騙されて当然やわ」

ポポロのようにほくそ笑むと、キメラはそのままどこかへ飛び去っていきました。

そうやってポポロが燃え盛る屋敷にたどり着いた頃、すでにシーザーとモンスターのやり取りが始まっていた。今、シーザーはそのやりとりに集中している上、いくら満月とはいえ夜で視界もよくない。シーザーの視界に入らないように気をつけながら、ポポロはシーザーに隠れながら忍び寄っていった。

ネットクがハツと気づいたときには、すでにポポロの姿がありませんでした。それにしてもなんとということでしょう。まさかポポロが今回の騒動の犯人だなんて……

ネットクにはいまだにそれが信じられませんでした。いいえ、信じたくありませんでした。ポポロはそこらへんの小動物ですら殺せないような性格なのです。

よく見ると、燃えていたはずの屋敷はすでに真っ暗になっていました。どうしたとい

うのでしょうか。しかも村の広場では松明が煌々と照らされて、収穫祭が行われていました。チンドンチンドンと太鼓や鳴り物の音が聞こえます。ところが、広場に目を凝らして見ても何も人影が見えないのです。村の家々にもあかりが灯っていますが、おそらく無人なのだろうと思いました。しかし、収穫祭の騒ぐ音は確かに聞こえてくるのです。

ネットクは第三の目を使って見てみました。魔法で幻覚でも見せているのかと思っただけです。しかし、そこには何ら魔力の流れも痕跡も発見できませんでした。

「おい」

どこからともなく声がしました。最初は何かを空耳したのかと思いましたが、確かにはつきりと呼びかける声が聞こえました。

「いいからこつちを見ろ」

背後からです。ギーガの声ではありません。でもどこかで聞いたことがあるような気がしました。

言われた通りに後ろを見ると、そこには案の定墓石しかありません。

「よう」

墓石が喋りました。正確に言うと、墓石に彫られたアポロンの顔がそう言ったのです。

「俺と楽しいお喋りしようぜ。お前大好きだろ、そういうの。ぺちやくちや無意味なこ

とぼっかり喋りやがってクソガキが」

いきなりのことだったので最初は面食らいましたが、すぐに腹が立ってきました。

「お前、アポロンじゃないだろ？ 一体何者なんだよ」

「ハハツ、俺は一体何者なのか……なんて哲学的で深い問いかけだ。明日の朝までの宿題にしてもいいかな？」

「真面目に答えるよ。それに明日の朝まで生きていられると思ってるのか？ お前らが何者か知らねえけど、チンケな魔法で墓石から喋りかけているってことはきつと弱いんだろ？」

「強いかわいかなんて無意味なんだよ。そんなことはどうでもいい。問題は使えるかどうかだ。そこが重要なんだよ。てめえの脳みそは重要なことは何も把握できないし理解できない。そしてその目も重要なことは何も見ようとしない」

いい加減にネックもウンザリしてきました。

「楽しい話をするんじゃないのかよ。全然楽しくない説教しやがって」

「ああ、悪かったよ。俺も口が悪いもんでね。地獄に落ちるとみんなそうなるのさ……無礼を許してくれたまえ」

全然許してほしそうな口調に聞こえませんでした。むしろ言葉の隅々に嘲りや軽蔑が含まれていて、余計に腹立たしく思えました。



「まあ、ようやく話もほぐれてきたところで、だ」

アポロンの彫像が言いました。

「何の話をする？ 俺は何の話でもいいぜ」

「とにかく、お前は何者なんだ？ それから何を要求しに来た？」

「俺はただの石ころだよ！ それ以外の何に見えるって言うんだよ！ 石ころだから何もわかんねえ！ 何も知らねえ！」

ネットクはもう限界でした。何か情報を聞き出せると思っていたのですが、このままでは無意味な会話で時間だけが流れていくでしょう。

「そうか、お前みたいな馬鹿に聞いて悪かったよ」

「お前こそ馬鹿でした、て謝れ！ ただの馬鹿な石ころに話しかけてるんだからな！

ギヤハハハハ！」

ネットクは耐え切れなくなってアポロンの彫像を蹴ろうとしましたが、そこで急に体が後ろに倒れて、そのまま目の前が真っ暗になりました。

——おい！ 大丈夫か！

一体どれくらい時間が経ったのでしょうか。ようやく意識が戻って、ネットクは目を開けました。

「よし、大丈夫なようだな」

目の前にはギーガの大きな一つ目が満月と並んでいました。

「なんだ、オツサンじゃねえか」

「なんだとはなんだ。お前は幻覚に惑わされて一人芝居をしていたんだぞ」

「えっ」

「俺が助けてやらなかったら、今頃お前はアポロンの墓を粉々にしていただろうな」

「あ、いや、そんなことより——」

そこまで言つてネックは体を起こしました。まだかすかな頭痛がします。

「屋敷が大変なことになってるんだよ！」

「ああ、俺ももう見た」

「だったら早く出発しなきゃ！」

「待て、まずお前の身に起こったことを話せ。状況が分からないと行つても足手まといだ」

ネックはポポロと丘に来てからのことを話しました。

「でも、ポポロはきつと違うと思うんだ」

ネックは必死で言いましたが、ギーガは表情一つ変えません。

「ネック、よく聞け。ポポロは魔物使いだ」

魔物使い……それは魔物と絶対に相容れない存在です。もし相容れる時があるとするれば、魔物が洗脳されたときだけです。

「ポポロは魔物使いの能力を使って、お前に幻覚を見せたのだろう」

「そんなの、簡単にできるわけねえ」

「そうだ。簡単にはできない。人間を警戒している魔物相手ならばな」

ネックは何も言い返せずにただうなだれました。

「お前に一つだけ言っておく。お前はここに残れ」

「どうしてなんだよ。俺だって戦えるさ」

「無理だ。お前にはポポロは殺せない。殺せないなら行くだけ邪魔にしかならん。わか

かったな？」

「オッサン、むしろ俺にしかポポロを殺せねえよ。俺が殺す。俺にだけ殺す資格がある

んだ。だからオッサンこそ邪魔すんじゃねえ！」

ギーガはしばらく黙っていました。

「いいだろう。そこまで言うなら邪魔しないでおこう。お前自身で決着をつけろ」

「へっ、言われなくても分かっているさ」

ネックは立ち上がり、ギーガと一緒に急いで丘を下りてゆきました。

## 37. グレイト・ヴィレッジ10

シーザーが飛んで来た時には、もはや屋敷は完全に火に包まれてどうしようもなくなっていました。今から輝く息を吐いたところでほとんど無意味でしょう。

シーザーの頭の中には色んな考えがひしめき合っていました——犯人は誰なのか、その目的は何なのか、ここに避難させた自責の念、今まで必死に築き上げた努力の結果が無残にも消え去ってゆく虚無感、どうして自分たちはこんなにも辛い目に遭わなければならぬのか——そして何よりドラキーや村人がどうなってしまったのか。

シーザーが何も守れなかった無力感に打ちひしがれ、呆然と炎のダンスを眺めていたときです。周囲の茂みから音がしました。

とつさに振り向くと、そこにはももんじやがいました。ももんじやが合図を送ると、茂みの中からワラワラと村人たちが出てきました。

——よかつた！

どうやら神様は全てを奪い去ったわけではないようです。甚大な被害を受けましたが、まだ村人が生きている限りこの村の精神は死んではいません。

「もう大丈夫だよ」

半分はシーザー自身に言い聞かせていました。

「一体何があつたんだね？」

月光と炎に妖しく照らされた村人は、シーザーを見つめたまま何も答えませんでした。

「ああ、すまない、私が守ってやれなかったばかりに……」

きつと村人はあまりのショックに呆然自棄になっているのでしよう。シーザーはこのときはそう考えていました。

「頼む、なんでもいいから知っていることを話してくれないか？ 私も何が起こったのを知りたいんだ」

村人は相変わらず無言のままシーザーを見つめていました。いや、見つめているというより睨んでいるという感じでした。シーザーは今まで村人にこんな目で見られたことがないのでとても戸惑いました。

「一体何があつたんだね……？」

「ファッキンドラゴン」

「え？」

「お前はクソツタレなファッキンドラゴンなんだよ、今すぐ死ぬ」

「な……」

ももんじやが一体何を言っているのか、シーザーには全く理解できません。

「私の戦略ミスで屋敷に戦力を残していかなかったせいでこんなことになったのは、確かに私にも落ち度はある、謝ろう。とにかく、今、ここで何があったんだ？」

「てめえの落ち度はそれだけじゃないぜ。というよりそれ以前の問題さ」

一体何が問題なのか、シーザーにはいくら考えてもさっぱり分かりませんでした。

「この屋敷を襲ったのはな、あのドラキーなんだよ」

ももんじやの言ったあまりの内容に、シーザーは度を失いました。

「ドラキーは魔王軍のスパイだったんだよ。ドラゴラムで変身して屋敷を襲いやがった。トリシーが必死に庇ってくれたから、俺たちは何とか逃げる事ができた。でも犠牲者だつてたくさん出たさ。全部お前が一番信用していたドラキーのせいだな！」

「それは……本当なのか……？」

あまりに現実離れた内容に、シーザーはももんじやの言うことがすぐには信じられませんでした。ドラキーは昨日今日知った仲ではないのです。ドラキーが奴隷の頃から知っていたのです。そしてシーザーの理念に共感して、まっ先に村へ参加したいと言ってくれたのもドラキーなのです。そんなドラキーが……一体なぜなのでしょう？

「へッ、おい、聞いたか、みんな。本当か、だつてよ。俺たちが死にそうな目にあつた、というのにまだ自分のお気に入りの方が気になるんだな」

「待つてくれ、私はそういう意味で言ったのではない。君たちを疑いたくはない。ただ、ドラキ―をよく知っている私にはどうしてもそれが本当だと、すぐには信じられないんだ。だから、もつと詳しく話してくれないか？」

「これ以上何を詳しく話せばいいのか分かんねえよ。ただな、あいつは俺たちに金庫を渡すように要求してきたよ。きつと中の金が欲しかったんだらうな。他にも、もう魔王軍に寝返ったとかなんとか、よくわかんねえこと言つてたぜ。俺たちが断ると、激しい炎を吐いて屋敷ごと焼き払いやがった」

「そ……そんな……」

「お前は人を見る目がないんだ。ただのお人好しドラゴンなんだよ！ だからドラキ―にも騙されるのさ。せつかく強いのにそれを生かすことなく、ただ偽善者ごっこしてるだけのクソ野郎さ！」

「そうだ！ そうだ！」

「ももんじやに同調する歓声が、一斉に上がりました。」

「てめえには何も守れねえ！ てめえの本当の強さつてやつを信じた結果がこれだ！」

「てめえの言うことなんて全部嘘っぱちのバツタもんだつたんだよ。そのことにいい加減に気づけよ、このファアッキンドラゴンめ！」

ファツキンドラゴン！ ファツキンドラゴン！ ファツキンドラゴン！

ももんじやに続いていたずらモグラ他のモンスターたちも一斉にそう言い立てた。

それから先ももんじやの「お説教」は立板に水を流すように流暢に行われた。それは緩急をつけて周囲の群衆を巧みに操りながら行われ、ももんじやの才能にポポロも感心したくらいだった。事前に原稿を用意しておいたのならともかく、完全な即興演説なのだ。きつと、普段から不満があつたに違いない。あつても当然だろう。ここは事實上、シーザーの専制君主国家なのだから。当然えこひいきもそれとなく行われる。表面上だけ平等などと謳つたところで、結局本心の嫌悪や軽蔑は完全に隠しきれるものではない。

例えば買い出し制度などそうだろう。仮に二匹のモンスターが同じものを頼んで、またまそれが一つだけ買えたとしよう。それはどちらに渡すのかというと、結局はシーザーのお気に入りが優先される。絶対ではないが、そんなケースはポポロが村に来てからの短い期間の間にもよくあったことだ。手に入れられなかつたモンスターは不満に思うだろうが、それは「君の方が村に来た期間が短いから」というような、どうとでもいい理由を作り上げればいいだけだ。

ももんじやの演説には当然嘘が含まれていたが、そういう意味ではそれ以上の真実が含まれていた。



これは、紛れもない村人の本心なのだ。シーザーはそれを聞いて今、何を思っているのだろう。ポポロには分かるような気がした。というのも、ポポロもネネに商店街の惨状を話したときに、同じように説教されたからだ。

——まあ、ポポロは優しいのね。でも覚えておきなさい、商売というのは戦争なのよ。金をやりとりするか、命をやり取りするかの違いはあるけどね。そして最後に強い者だけが生き残るの。そうやって人間も社会も前へ進んでいくのよ。

——でも、あの人たち、店がなくなつちやつたら仕事がなくなつて死んじやうかもしれないよ？

——大丈夫、人間、命さえあれば何かやつて生きていけるわ。

——父さんがまだ店を持つ前に世話になった店もあるんだよ？ それも潰したつていいの？

——まあ、なんてことを言うの。まるで私が悪者みたいじゃない。私はね、ポポロやあの役立たずの豚のために一生懸命商売に打ち込んだわ。豚がそこらへんから仕入れてきた鋼の剣や鎧とかを、定価より高値で売りさばいて儲けを出していたの。朝から早起きしてお弁当も作りながらね。そして寝る間を惜しんで商売の本を読んで、自分の才能を磨き続けたわ。確かに、お店を持つまでは豚も頑張つたわね。でも豚の頑張りは所詮そこままでの。私が店を大きくした。それで、あの豚が世話になった店の店主は、私

より努力したと思う？

——うんうん。母さんは誰にも負けないよ。

——そうよ。でも逆に言うともしかしたら私たちだつて一歩間違えばあの店主みたいに なつて いた、つていうことなのよ。私たちが新しい店を買った瞬間から、戦争はすでに始まつていたの。戦争にみんなが納得いく結末なんてないわ。でも一つだけ言えるのは、昔の店が消えた替わりに、私たちの経営する、新しくて品揃えも値段も申し分ない店が出来たつてことなの。これが進歩なのよ。私たちのおかげで、買手はよりいい武器を安く買えるようになったし、経済も発展した。ポポロは店一件と全体の経済と、どちらが大切だと思う？

——全体の経済。

——そうよ。誰もがそう答えるし、私もそう思うから、そう信じて頑張つてきた。古い男たちがやる古い商売なんて、もはや時代遅れでしかないのよ。

——でも、あの人たち、やつぱりかわいそうだよ。

——それはもしかして豚の言つてることなの？

——父さんもそう言つてる。でも、僕もやつぱりかわいそうだと思うんだ。もちろん、母さんの言つてることとも正しいと思うけど……

——ポポロはまだ子供だから分からないのね。これだけはどれだけ言つても仕方な

い話だわ。どちらが正しいか、私たち二人を見比べながらよく考えなさい。ポポロにはそれだけの時間が充分あるから……

それで選んだポポロの答えが、今、この状況だった。結局、ポポロにはネネの言っていることはただの大義名分にしか聞こえなかった。実際には自らの金——それも膨大すぎてもはや使い切れないような金額の金——をさらに増やすために全体経済に痛みを押し付けているだけではないのだろうか？

まあ、今はそんな経済学の話をしていない場合ではない。

シーザーは完全にももんじやの演説に打ち負かされていた。今、本丸は完全なる無防備な姿をポポロの目の前にさらけ出している。今ならちよつと指でつついてやるだけでシーザーの心は簡単に崩れ去るだろう。

ここまで作戦通りに進んだのは、戦略と事前の準備が良かったからだろう。思い切った先行投資もよかった。それに忘れてはならないのがももんじやの弁舌の才能。人間でも人間でなくても、芸は身を助けるのだ。最も、こいつらは肝心の戦略がないので自らの身もすぐに滅ぼす結果になるだろうが。

ソロリと足音を立てないようにして、本丸に近づいていった。一歩ずつ、着実に。心拍が驚異的に早まっていったが、それになんとか耐えて一歩ずつ慎重に足を動かしていった。着実に距離を詰め、シーザーまであと数メートル。そのまま慎重に距離を詰め

る。

村のモンスターの中の何匹かは、ポポロの行動に気づいたようだ。目線をこちらに動かしている。

——何やってんだよ、クソザコどもが。

この目線の動きだけで気づかれる可能性は大いにある。ただ、今のシーザーは完全に茫然自失状態で、さらにももんじやの演説に聞き入ってしまったている。

とにかく、ポポロはなるべく動揺しないようにしてシーザーへと近づいていった。

そしてついにシーザーのしつぽを掴んだ。

と同時に、その弱った心も驚掴みにした。

シーザーはハッと目を覚ますと、そこにはもう誰もいませんでした。あれだけ盛大に燃え盛っていた屋敷もすでに冷たい死骸になっていました。周囲を見渡しましたが、村人たちもいなくなっていました。

明らかに様子がおかしい……

シーザーはとても不安になりました。もはや途中から罵倒になっていましたが、それでも見知った村人が急に消えたら不安になってしまいました。

しばらくは異様な光景に辺りを警戒していましたが、どうやら周囲には本当に誰もい

ないようでした。

シーザーはがつくりと肩を落としました。自分のやってきたことは、結局またしても失敗してしまつたのです。これからは一体何をしたいけばいいのでしょうか？ みんなシーザーのやることを貶しますが、では結局何をやればいいのかは誰も教えてくれませんでした。そんな中、必死の想いで見出したこの村づくりだったのです。それも否定されました。それでこれから何をしろというのでしょうか？

何も分かりませんでした。

とにかく、シーザーは屋敷の燃え跡を調べてみることにしました。

自分の過ごしてきた時間が、灰になつて横たわつていました。

——あの村の歴史書、結局完成させることはできなかつたな……

うつすらとそう後悔しましたが、村を完成させることもできなかつたのです。どちらにせよそれで良かったのかもしれない。

——村もいつか死んでしまふんじゃないんですか？

ドラキーの言葉が聞こえたように感じました。まさかこんなにも早く死んでしまふなんて思つてもみませんでした。それも言つたドラキー本人の手によつて灰塵になつてしまつたのですから、皮肉としか言い様がありません。

しかし、どうしてもシーザーはあの時のドラキーの言うことが嘘や演技に思えません

でした。あれが演技なら天空にいるというマスタードラゴンでも簡単に騙せるでしょう。

書齋に行ってみました。当然、全ての本が黒焦げになっていて、その中に読めるものなどありませんでした。

残った場所も、全て同じです。最後に、金庫のある部屋を覗いてみました。ドラキーンはいつもここで帳簿をつけていたものです。今となつてはもう二度と帰つてこない時間です。ドラキーンが騙していたのであれ、ああやつてドラキーンと過ごした時間は何よりもかけがえのない時間でした。違う種族のモンスターでも、心は通じ合える——今の魔界に生きていてそう思える、数少ない、あまりに少なすぎて頭がおかしくなりそうなくらい少ない時間でした。

シーザーは生きてきた時間のほとんどを、魔物の心の中にある、本当の魔物との戦いに費やしてきました。今、その戦いに完全に負けてしまいました。その戦ったことだけには何か意味があると、それだけは信じたいと思えました。そう、今まで誰も戦うことすら思い浮かばなかったのですから、それだけでも十分な戦果に思えました……

それでも——勝ちたかった。

切実にシーザーは思いました。

そのまま立ち去ろうと思いました。その時、何か物音がしたので。注意深く耳をす

ませました。この空間の中に、自分以外の誰かがいるかもしれないのですから。ガリガリ。

確かに聞こえました。音のする方向を探ってみると、どうやら金庫の中のようなのです。一体なぜ金庫の中から？

当然そんな疑問が湧いてきましたが、とにかく開けてみたいという好奇心、そして何かこの状況を打開する手がかりになるかもしれないという期待も同時にありました。

シーザーは月光だけを頼りに何とか暗証番号を入力しました。入力している間も、中から催促するようにカリカリという何か引つ搔くような音が聞こえてきます。

大丈夫だ、すぐに開けてやるからな。

カチツ。

シーザーはゆつくりと金庫の扉を開けました。

「やったぜ！ これでシーザーも俺たちの奴隷だな！」

ギャハハハハ！

モンスターたちが嬉しさのあまり狼雑に騒いでいた。きつと収穫祭のときもこれくらいの騒ぎなのだろう。残念ながらそれを見ることはできなかったが。

「シーザー、お手！」

ももんじやにそう言われても、シーザーだったものはジロリと一瞬睨みつけただけで、身じろぎもしなかった。

「お手だつて言つてるだろ！ シーザー！」

「シーザーつて名前じゃ反応しないよ。だつてもうシーザーじゃないんだから」

いい加減、こいつらにはウンザリだ。こいつは今や僕の大切なグレイトドラゴンであつて、お前らの奴隷なんかじゃないんだ。もうお前らの役は終わったんだよ。

「それもそうだな。じゃあ、なんか新しい名前を考えようぜ、なあ、みんな！」

うんうん！

もぐらたちも一齐に首を縦に振つた。

「僕は一応、グレ太にしようと思つてるんだ」

「グレ太！ ギャハハハハ！ いい名前じゃねえか。何の威厳も感じなくて奴隷にピツタリだぜ！」

てめえら、もう許さないからな。

ポポロは内心固く決心した。態度がよければ才能と忠義を見込んで使つてやろうとも思つていたが、この態度ではこれから「良き友人」でい続けることは難しいだろう。

「よう、グレ太、俺にチンチンしてくれよ！ でっかいやつを見せておくれ！」

まわりのもぐらたちも、ももんじやにつられてヤンヤとはやし立てた。



「いつも地面を掘ってるからさ、俺にもケツを掘らしてくれよ、グレ太！」  
「三回回ってワンと言え！」

しかし、何を言い立ててもグレ太は全く反応しなかった。グレ太はまるで面白くない動物でも眺めるような目線でももんじやもぐらたちを眺めていたが、やがてそれにも飽きてきたのか完全にそつぽを向いて大きなあくびを始めた。

「あ、こいつ、全然俺たちの言うことを聞きやがらねえ！」

当たり前だった。主人はポポロであり、ポポロ以外になつくようならポポロのコマとしてそもそも機能しない。

「おい、ポポロ、こいつ本当に俺たちの仲間になったのかよ？」

「うん、確かに僕たちの仲間さ」

「でも全然言うことを聞かねえじゃねえか」

「それは君たちが悪ふざけしすぎだからだよ。まあ、いいや。今からグレ太が本当に僕たちの仲間になったのか、その証拠を見せてあげるよ。ねえ、イエツタ、あいつを連れてきてよ」

そう言われてイエツタが持ってきたのは、麻の袋だった。

「そろそろ解放してあげて」

イエツタが紐をほどいて乱暴に逆さまに振ると、ポトリと何かが落ちる音がした。

ドラキーはいきなり逆さまにされたと思うと、気がついたときには冷たい地面にぶつかっていました。しばらくは冷たい地面の上を転がりながら、一体自分がどうなっているのか判断ができませんでした。

やがて体の自由が利くようになっていくことに気づきました。

とにかく、地面から体を起こしました。まだスコップで殴られたあとがズキズキと痛みます。

「うう……こは……？」

ドラキーには目の前で燃えているのが屋敷だとは、しばらくの間分かりませんでした。それはドラキーが見た頃には屋敷の炎はかなり弱くなってきており、屋敷もあらかた焼け尽くしたからです。今はただ、残り火がくすぶっているにすぎません。

ドラキーは目線を上げました。そこにはいつもと変わらない様子のシーザーがいました。

「あ、シーザーさん！ 無事だったんですね！」

思わずシーザーに再会できた喜びの方が大きかったのでしょう。すでにドラキーはスコップで殴られた傷の痛みも忘れていました。

「シーザーさん、このポポロとかいう人間は、本当は悪い人間だったんです！ 僕を……

僕をスコップで殴つて閉じ込めたんだ！」

ギヤハハハ！

周囲のモンスターが一斉に大声で笑いました。しかしそれはドラキーには聞こえていません。

「ねえ、シーザーさん、ポポロをやっつけてよ！ シーザーさん！」

必死に助けを求めました。しかし、シーザーはあまり興味のなさそうな目でこちらを見つめ返すばかりです。まるで何も知らない他人を見るような目つきでした。いえ、もつというなら、地面に這いつくばる死にかけの弱った虫を死ぬまで眺めている残酷な子供——ポポロのような——そっくりに見えました。

「シーザーさん、一体どうしたんですか？ 何があつたんですか？」

「悪いけど、シーザーはこの世から消えたよ。いや、まだ残っているのかもしれないけど、とにかくこいつは君の愛したシーザーじゃないんだよ。ちよつと——

そこでポポロはにやつと笑いました。その笑いのすぐ下には、どんな夜行性の目をも曇らせる、黒い闇がありました。

——君には悪いことをしたかもしれないけどね」

ギヤハハハハ！

そこで初めてドラキーは周囲の村人たちの存在に気づきました。

彼らの唱和する笑い声だけが頭上の真つ暗な夜空でグルグルと回り続けました。

「許さない！ シーザーさんに何をしたんだ！」

ドラキーは力の限り叫びました。自分でもこんな力がまだ残っていたのかと驚くほどでした。

「村を返せ！ この悪魔め！」

まだまだ言えそうでしたが、ドラキーの言葉をシーザーの手が遮りました。シーザーはドラキーを以前と同じように優しくその手で掴んですくい上げました。

ああ、きつとシーザーさんに僕の言ったことが通じたんだ……！ なんかちよつと様子がおかしいけど、シーザーさんがこんなことを許すもんか！

ドラキーはこれから死んでしまうというのに、まだそんなことを考えていました。

シーザーが金庫を開けると、中から光が漏れ出していました。ゴールドの輝きかと思いましたが、反射ではなく金庫の中から光が発せられているのです。

そつと金庫の中から発光しているものを引つ張り出しました。

それはドラキーの形をしたちようちんでした。

なぜ金庫の中に……？

シーザーは疑問に思いました。

疑問に思いつつ、ちようちんを持ち上げようとした時です。

村を返せ！ この悪魔め！

どこからともなくそんな声がしてきました。

確かに、自分は悪魔かもしれない——シーザーは何となくそう思いました。そしていつたんそう思うと、それはだんだんと確固たるものに思えてきました。そして今までの自分がバカらしく思えてきました。理想だのなんだの言つて、結局犠牲者を増やしただけです。

もう消えてしまいたい——

切実にそう思いました。

そう考えながら、ドラキーの形をしたちようちんを両手で包んで持ち上げました。それから、両手でドラキーの翼の部分をつまんで——

アホドラキーもようやく自分の死期を悟つたようだった。もちろん、死期を悟つたところで簡単に受け入れられるはずもない。見ていて滑稽なほどの命乞いが始まった。

「シーザーさん！ 目を覚ましてよ！ シーザーさん……！」

グレ太は両手でドラキーの両翼をつまんで中空に持ち上げていた。ドラキーは空中で磔刑にされたような感じになっていた。

「オラー！ もっと真面目に命乞いしろや！」

下のモンスターたちがドラキーをはやし立てる。ドラキーにはもはや何も聞こえていなかった。泣いてシーザーだったものに懇願している。

「どうして……!! どうしてこんなことするの?! 僕と一緒に理想の国を作る約束だったじゃないか！」

「天国で作つてろ！ ギャハハハ！」

「なんだか同じようなことしか言わないから、もう次で終わりにしようか。さあ、ドラキーさん、人生の最後を締めくくって何か一言」

ポポロはそう宣告した。

しばらくドラキーは泣きじやくっていただけだった。涙が月光に光り、ドラキーの体に銀色の筋を一瞬だけ描いた。屋敷の炎すら今ではほとんど沈黙して、夜という魔物全体がドラキーの言うことに耳を傾けているかのようだった。

「シーザーさん……今分かりました、どんな力でも魔力でも、あなたの理想を壊すことはできないんです……あなたの中の本当に大切なものは、誰も傷つけることなんてできないんだ……あなたの夢も、あなたの高潔な心も、そしてあなた自身も……全部僕たちの希望だった……シーザーさんがいなかったら、もつと前に死んでいたよ……僕たちはシーザーさんから本当の強さを教えてもらったんだ……ありがたう……僕の大好きな

シーザーさん……」

こんなくだらない物を壊すだけなのに、どうして涙がこんなに溢れてくるのでしょうか。シーザーにはさっぱり分かりませんでした。

グレ太が両手にほんの少し力を入れて引つ張ると、目の前の黒くて脆弱な生き物（黒いせいで闇の中で見にくい。本当に鬱陶しい生物だ）から絹を裂くような音がした。同時に、黒い生物の羽の根元が縦に裂けて、もつと黒い体液が月光の下に吹き出し、きらめいた。それはその生物の本質を凝縮した黒い宝石だった。

——なんて綺麗なんだ……

グレ太はそれを見て思わずウツトリとした。自分が今まで本当に求めていたモノがそこにあつた。それは今まで「アイツ」に押さえつけられていたせいで全然発散できなかったが、今や新しい主人がグレ太を開放してくれたから、これからは何も心配はいらない。

黒い生物の羽はほとんど裂けてしまっていたが、まだ僅かに裂けていない部分が残つていて、辛うじて地面に落ちないように体重を支えているらしかった。

もつと黒い宝石がみたい！

あまりに切実な欲求だったので、グレ太はそのままさらに力を込めた。本当は弱っていく様子を観察したかったのだが、黒い生物は「シーザー」とかいわいの分からない単語をつぶやくばかりで面白くなかった。それならさっさと自分の欲求を達成させた方がマシだ。

また絹を裂くような音。次の瞬間、待ち焦がれた黒い宝石が煌きながら月光の間を泳いだ。

なんて綺麗なんだろう……僕の新しいご主人様はこの美しい光景をこれからたくさん見せてくれるんだ——

そう考えるだけで、将来に希望というものが湧いてきた。今まで自分を押さえつけていたあのバカは、将来の達成できるかどうかも分からないことのために「今」という貴重な瞬間を浪費していた。これからはもっと「今」を楽しんで生きていけるだろう。

そう考えるグレ太の目の前には、指でつまんだ羽が残っているだけだった。羽の根元からはポツポツと黒い宝石が滴り落ちていた。

舌でその宝石を舐め取った。

月光を吸収した宝石の味に、グレ太は打ちひしがれた。

ちようちんが下に落ちて、その灯が弱まりながら消えていきました。消え去る直前だ



何かを主張するかのようについてそう輝きましたが、それも一瞬で消えました。シーザーの目は涙で曇って、もはや何もかもが溶けきってグニャグニャになっています。

シーザーは翼を広げて飛び去りました。無彩色のグニャグニャの中を、ただひたすら死ぬただけに飛び続けました。

いつまでも、いつまでも……

ギヤハハハ！

モンスターたちが、ダルマ状態になって地面に転がっているドラキーを見下ろしながら笑っていた。

「最後の愛の告白、グツときたぜ」

「今までシーザーのお気に入りでえこひいきされやがって変態野郎！」

「生きてさえいれば希望はあるよ」

「てめえなんてさっさと死んじまえ！ その前にたつぷり苦しんでな！」

「立ち上がって前へ進もう！ きつと楽しい未来が待っているから！」

「いい加減地獄に落ちてスッキリしたぜ」

しばらくモンスターたちは口々に嘲りと皮肉と罵倒を肉塊へと浴びせかけていたが、肉塊が今までに見たこともない形相で睨み返してくると何も言えなくなつて、そのうち

全員が黙ってしまった。

……………悪魔め……………

ボソリとつぶやいたただけだったが、異様に大きい音のように聞こえた。

マズイな。せつかく洗脳したのにまた元に引き戻されるじゃないか。

とにかく、こいつらに一瞬でも過去を振り返る余裕を与えてはいけない。最後まで幸せにしてやるのが魔物使いの勤めというやつだろう。

ポポロは肉塊に近づき、見下ろした。

ポポロから見てもひどい形相で睨み返してきた。

「どつちが悪魔なんだよ」

そう思うと今までこいつに振り回されてきたことが思い出されて、急激にムカついてきた。

ポポロは右足を動かして、肉塊の側面を少しだけつついた。肉塊は2、3回地面の黒いぬかるみを転がった。その度に鬼のような形相は消えたり現れたりしたが、最後は肉塊自身の力によるものだろうか、きっちり鬼の面を上に向けて回転は止まった。

「よし、分かったよ。こうしよう」

ポポロはもぐらたちに命じて集まったモンスター全員にスコップを配った。一通り配り終わるのを待ってから、ポポロは言った。

「みんな、僕のやることをしっかり真似するんだよ」

そして肉塊に向き直ると、スコップを思いっきり肉塊へ向けて振り下ろした。グシャツというくぐもった音が闇の中に響き渡った。ポポロがゆっくりとスコップを持ち上げると、スコップと肉塊の間に黒い糸が幾筋も絡みついた。

「うわ、きつたないなあ。いい加減にしろよ」

さつきと同じようにもう一回スコップを振りかぶって——叩きつけた。叩きつけた瞬間、かつて足だったものが空を引つ掻いた。数秒間じっくり押し付けてから持ち上げてみると、肉塊は異常な痙攣をしていた。おそらく完全に死んで、筋繊維だけが勝手に動いている状態なのだろう。それは死んだはずのものがなおも執念を持つてこの世にとどまっただけで、なんとか体を動かさそうとしているように、周囲のモンスターには見えなかった。

いつもの彼ら気の弱いモンスターたちならこの有様を見ればスコップなど放り出して逃げ出していただろう。すでに鬼の形相は完全にスコップで潰されていたが、それは逆に鬼も失禁して逃げ出すようなさらにおぞましい形相をむしろ作り出していた。そう、ポポロはギーガが100年かかっても作り出せないような芸術作品を意図すらせずにより上げていたのだ。もつとも、ギーガにしたところでこんなおぞましい像など頼まれたってもう作りたくもないだろうが。

だが、彼らは完全にポポロに掌握されている。しかも主人のポポロが率先してやっているのだ。彼らもやらないわけにはいかなかった。

誰か先駆者がいると人でも魔物でも安心してついてくるようになるものだ。それでも彼らはおぞましい物体に関わることをためらったが、最後にはポポロの言うとおり、めいめいにスコップを持って肉塊を囲み込むと、スコップを振り上げて——振り下ろして——少し黒くなったスコップを振り上げて——またもや振り下ろした。ドラキーはそれほど大きな体ではないため、スコップの上にさらにスコップが振り下ろされることになった。その度にギーガが大剣を鍛える時のような金属音が飛び散った。

こうなつてしまうと、あとはいくところまでいくしかない。しばらくの間、モンスターたちはただひたすらにスコップを振り下ろし続けた。

そして肉塊がもはやミンチと化した頃、ようやくスコップの動きが止まった。

しばらくの間、異様な興奮とミンチコネ作業の重労働の疲労によって荒い息づかいをしていたモンスターたちだったが、それもようやく収まってから誰かが発言した。

「これでやつとうまい焼肉が食えるな」

多分ももんじやだろう。

それで、もはや誰もミンチに興味を示すものはいなくなつた。

## 38. グレイト・ヴィレツジ 11

ネットクは全力で走ってギーガの後を追いました。凶体の大きさからこんなにも速く走れることが意外でした。それに速いだけでありません。そこそこの長距離を走っているのに、全く速度を落とそうとしないのです。持久力もなければ軍隊の厳しい行軍についていけないでしょう。

しかし今のネットクにはそんなことを考える余裕すらありません。ただひたすら、なんとかギーガの背中を追いかけていくだけです。

走っていく中、今まで村で暮らしてきた思い出が蘇りました。あのみんなが助け合っ  
て共同で生活していた村……多少の不満はあったものの、それがいまや存亡の危機に瀕  
しているととなると、絶対に失いたくないかけがえのないものだとようやく悟ることがで  
きました。そしてポポロと過ごしたかけがえのないと思っていた、いいえ、思わされて  
いた日々……

しかし今のネットクには情に流されるようなことはありませんでした。村全体とポポ  
ロ一人とどちらが重いのかは、はつきりとしています。ポポロが魔物使いと判明した  
今、全力でそれを排除すべきです。そう、ポポロを殺してでも。

走り続けていくうちに、ようやく屋敷の近くまでやってきました。

おや、屋敷のそばにシーザーが佇んでいます。そばにはポポロらしき人物が寄り添っていました。

まさかシーザーも……

こうなったら少し話は変わってきます。シーザーはこの村そのものと言っていい存在です。シーザーが死んでしまえば、たとえ村人が全員生き残っていても村の大したもの引き継がれないでしょう。ポポロだけでなくシーザーも殺すことになったら……自分にそれができるのか、段々不安になってきました。

さらにシーザーの目の前に集まっている村人、いいえ、元村人たちが何かを取り囲んでいる様子が見えました。しきりに何かを振り下ろしている？ ように見えます。

「クソツタレどもめ」

ギーガがボツリとそう呟きました。

「あれは一体何をやってるんだ？」

「公開処刑さ。見せしめのためのな」

スコップを振り上げるモンスターの動きが止まりました。それと同時に、ポポロが視線を上げて、こちらを見ました。ネックは、ポポロの目をはつきりととらえました。それは村に来た時と何も変わらない子供らしい目だったのに、井戸を見下ろすのに似た底

なしの闇にしか見えませんでした。

「やっと来たんだね」

本当に平和ボケしたとろくさい奴らだ。

「ああ。お前を殺すのには遅すぎたようだが、仕方ない」

ギーガの一つ目が静かにそう語った。兵士らしい、感情を感じさせない喋り方だ。そういうえば父さんの友達にもそんな人いたな。まあ、どうでもいいけど。

「ネックも、ネックも僕を殺しに来たの？」

「ああ、そうだよ。もう観念するんだな。苦しまないように一瞬で殺してやる」

意外にも即答だった。もうちよつと「これはお前がやったことじゃないよな!？」とか「今まで一緒に過ごしてきたじゃないか! 友達だろ……!」みたいな展開になると思ってたのに、ガツカリだった。せつかく完璧な演技をしたと思つたのに、なんだか残念。せつかくそれ用のセリフも考えてあつたのに。

まあ、いいや。もう茶番にはウンザリだ。とにもかくにも、強力な手駒が向こうからホイホイやつてきたのだ。今のポポロにはグレ太という強力な持ち駒がある。これを使つてちよつと痛めつけてやればすぐに洗脳できるだろう。

「そうか、お前たちもすでにポポロに洗脳されていたんだな」

ギーガが珍しく感情を込めて雑魚モンスターにそう言った。

「ギーガの旦那もポポロについてきたらどうなんだよ？ いろいろ楽しいぜ。それにシーザー、いや、元シーザーから奪った金もあるだろうしよ。焼け跡の中に埋もれた金庫を掘り出すのはちよつと骨が折れるが、今の俺たちには大金が目の前に転がっているようなもんよ」

「反吐が出るな。お前らのようなクズのためにシーザーがひどい目にあつたのかと思うと」

「おいおい、クズでも楽しく生きていかなくちや損だろうがよ。この村で何の楽しみもなく畑を耕すのか？ もういいだろ、そんなこと」

「よくねえよ！」

ネットクが叫んだ。

「お前ら、何をやったか分かつてるのかよ？ お前らも全員殺してやるからな」

やれやれ、勇ましいことだ。もつとも、別に殺してくれても何ら問題ないのであるが。むしろポポロの手間が省けて好都合なくらいだ。

「ネットク、少し落ち着け。敵のペースに乗せられるな」

「ああ、ギーガの旦那の言うとおりだぜ。ガキは黙つてな。これは大人のお話なんだよ。ガキはママのケツの割れ目に鼻突つ込んで寝てな」



これはいい煽り文句だとポポロは感心した。ネツクの両親はすでに死んでいる。

ただ、この煽り文句は結果的にももんじやの寿命を数分ほど縮める結果にしかならなかった。肝心なところで賢くなれる人間（じゃないけど）は珍しい。残念ながら。

次の瞬間、凄まじい雷鳴がしたと思つたときにはすでにもんじやは神のケツの割れ目に鼻を突つ込んでいた。きつと天国でもその弁舌の才能を生かして神に仕えることだろう、アーメン。

それを契機にして雑魚モンスターの中にパニックが起こつた。全員、一斉にグレ太の元へ走り寄つてきたのだ。グレイトドラゴンに集まるモンスターたちは、この状況でなければ牧歌的で心温まる光景だっただろう。目の前の黒いミンチがなければ。

全員がパニックで引き下がったせいで、ミンチはネツクやギーガの目の前にさらされることになった。

「この悪魔め。まさかここまでとはな」

「これ、一体何なんだよ?」

そろそろ教えてやってもいい頃だろう。

「ドラキーのハンバーグだよ。みんなで苦労してコネコネしたんだ。味見してみてもい

いよ」

「ポポロ、お前……」

「どうしたの？ ネットクは僕の料理好きだって言ってくれたじゃない。だから——

「もういい加減にしてくれ。こんなことやつて楽しいのかよ。人の心を弄びやがって……！」

「うん、すつごく楽しいよ！」

ポポロはいつも通りの笑顔でそう答えた。

しばらくの間、ネットクとギーガは全く何も喋らなかつた。その間、黒いミンチをそれぞれ個数の異なる目玉で眺めていた。

それから、ギーガが一步踏み出そうとしたネットクを引き止めた。

「どうして止めるんだよ」

「少し作戦を練ろう」

ネットクはそういうことか、と思つて納得したが、それはギーガの罠であり、また最後の頼みであり、また同時にネットクに課した訓練でもあつた。

ギーガはバシルーラを唱えた。まさしく驚く間もなく、ネットクは月のかかった夜空をどこかへと飛んでいった。

「バシルーラとか使えるんだ。ギガンテスなのに器用なんだね」

「まあな。戦闘で負傷した味方の兵士をとりあえず安全に退避させるために必要だつた。あとは火を熾すのにメラも覚えたが、俺の魔法の才能ではそこまでが限界だつた

な」

「ネックは負傷してなかったのに」

「アイツは完全に逆上していた。このまま戦えば必ず死んでいただろう。だから俺が安全に退避させた」

「けっこう弟子想いなんだね。もつとスパルタ方式なのかと思つてた」

ギーガから見れば自分がやったことは今までで一番厳しいスパルタ式訓練でした。暴力が支配する魔界で、またしても一人になって生き延びろ、というのですから尋常なことではありません。自分がネックの立場だったら、あまりに厳しい仕打ちに恨みを持つかもしれない。

——ひよつとしたら、このまま戦つて死なせてあげた方がよっぽど良かったのか……  
そんな考えが頭によぎりました。少なくとも、今の二人なら作戦次第で勝てる可能性は極めて低いといえども、ありえない話ではないのです。要は一番弱いポポロさえ殺してしまえばそれでいいのですから。もちろん、そのためにはポポロの周囲にいる雑魚モンスターが邪魔です。ポポロへの攻撃は全て肉の壁が身代わりになることでしよう。もつともそれ以前にシーザーの灼熱の炎で近づくことも難しいでしょう。

だから、可能性は極めて低いのです。

それなら魔界で生き残ることに賭けたほうがマシだと思えました。今のネットクは村に入ってきたばかりのひ弱な頃とは違います。この数年間で立派に成長しました。それは戦闘能力だけでなく、ネットクの精神もでした。

ギーガはネットクに全てを託したのです。今まで村人たちがシーザーと一緒に育んできたもの、全てを。勝手にそうしてしまうのは自分勝手な気もしました。

しかし、シーザーと誓ったのです。この村を全力で守る、と。こん棒を握り締める手に、自然と力が入りました。

ギーガは戦いのさなか、初めて心から神に祈りを捧げました。

ネットクを取り逃したのは痛かったが、そのおかげで確実にギガンテスを仲間に加えることができそうだった。いくら肉の壁を用意したとはいえ、ネットクのライデインに隙を突かれる可能性もありうる。その危険要素をわざわざ自分から排除してくれたギーガは、思っていたよりかなりいい人なのかもしれない。だとすれば洗脳するのも容易いだろう。

とにかくポポロはグレ太に灼熱の炎を吐くように命じた。

グレ太の口から炎が吹き出されると、それは原始の太陽より明るく熱く夜の闇を照らしました。取り巻きの雑魚モンスターたちは今までに見たことのない圧倒的火力に、早

くも勝利の喝采をあげていた。

もちろん、ポポロはこんなもので決着がつくほどギーガは甘い相手でないとなっていた。案の定、炎の渦が消えた後には汗でびっしょりに濡れたギガンテスが焼け野原につつ立っていただけだった。

「なかなかいい準備運動になったぞ」

なるほど、これから本気を出すってわけか。

「ど、どうするんだ？ まさか灼熱の炎が効かないなんて……」

雑魚モンスターの誰かがそう言った。

「効かないなんてことはありえないよ。多分、真空斬りかなんかの特技で炎をそらしただけさ」

「さすがモンスター使いなだけあるな。その通りだ」

「それで、他にはどんな技が使えるの？」

「軍事機密だ。知りたければ使わせてみる」

「うん、言われなくてもそうするよ」

今度は輝く息を吐かせた。ブレス系は通用しないだろうが、今は色々な技を試したかった。どの道、ギーガからこちらへ遠距離攻撃を仕掛けられるわけではない。今は固定砲台に徹して好機を待つ。それにギーガのあまりに強力な攻撃は、肉の壁など一度に

吹き飛ばしてしまうだろう。なるべくグレ太のそばにるのが安全だ。

ギーガはそれでもブレスの嵐を弾き返していたものの、やがて少しずつ体力を消耗していった。致命傷は避けていたが、ブレスの広範囲攻撃を完全に防ぐことは難しい。フバーハの魔法でもかけておけばもつと楽になっただろうが、残念ながらギーガに魔法の才能はなかった。

あるのは強烈な打撃攻撃、ただそれだけだった。

とにかく、ギーガはかろうじてブレスを防ぎながらその一撃必殺のチャンスをうかがっているようだった。痛恨の一撃が決まれば、恐らくグレ太でもひとたまりもないだろう。

そろそろ来る——ポポロはそう感じた。ギーガの腕や足のいたるところに凍傷や水膨れができていた。だが、まだ戦闘能力には支障はない程度だ。そうやって戦闘能力を温存しておいて——必殺の攻撃を仕掛ける、てわけか。ポポロはそう考えた。

だったら完全に僕の予想通りだね。

チャンスだと思ったのだろう、ギーガが突っ込んできた。

それを見て、ポポロは思いつきほくそ笑んだ。我慢しようと思ったが無理だった。雑魚モンスターが焼肉を我慢するのと同じくらい無理なことだった。

もうそろそろ仕掛けないとマズイな——ギーガは体の痛みからそう判断しました。ブレス系攻撃というのはそう連続でホイホイ吐けるものではありません。必ず息継ぎが必要です。ギーガは、今その隙間を見計らっていました。炎と吹雪の壁の継ぎ目を。そしてそのチャンスがやってきました。ギーガはここぞとばかりに踏み込みました。完璧な打ち込みです。戦士の勘で、痛恨の一撃になるだろうということが分かりました。痛恨ならいくらグレイトドラゴンのHPでも死を免れることはできないでしょう。もしもこの時のギーガにポポロの表情を見る余裕があれば、そのまま踏み込んでいかなかったでしょう。あのほくそ笑んだ表情を見れば、それこそ戦士の勘で何かあると気づいたはずです。しかしこの時のギーガにそんな余裕はありませんでした。

気づいたときには、ギーガの体はガクツと地面に落ち込み、狙いを外したこん棒は地面をえぐったただけでした。

「さあ、グレ太、とどめの灼熱だ」

ポポロが嬉しそうにそう言うのが聞こえました。こん棒で防ごうと思いましたが、体勢が固定されているため、さつきまでと違ってうまく避けることができませんでした。

それでもギーガの技量は優れていたもので、何割かは防ぐことはできました。しかし、いくら体力の多いギガンテスでもこれはかなりの致命傷になりました。

「まだ元気なの？ いい加減瀕死になってよ」

まだだ、まだ諦めない——ギーガは言葉でなくそう思いました。なんとかこん棒を投げて——しかし肝心のポポロはそれを察知したのか完全にグレ太の影に隠れてしまいました。

落とし穴は原始的な罠ですが、それだけに効果的な罠でもありました。

———そういえばもぐらどもを洗脳していたな……

まさか歴戦の戦士である自分が、いくらブランクがあるとは言えこんな子供と雑魚の罠に引つかかるなんて、信じられないことでした。同時に、自分はこうやって死んでいく運命だったのかもしれない、と思いました。いずれは自分が殺してきたものに殺される、そういうふう信じていた時期もありました。まさか今さらそれを思い出すことになろうとは、考えもしていませんでした。

グレ太の口がまたしても大きく開かれました。そして灼熱の炎。今度もこん棒の真空斬りで何割かは炎をそらしましたが、かなりが直撃しました。もうほとんど体力は残っていません。

こん棒を持つ手の感覚もなくなっています。もはや上体を起こしている力もなくなつて、地面に前のめりに倒れ込みました。倒れる前に地面に手を突こうとしましたが、思い通りに動きませんでした。視界もだんだんボヤけてきました。そのうち、グレイトドラゴンがシーザーに見えてきました。見えただけではありません。シーザーの



声で話したのです。

「やあ、ギーガ。どうしたんだい、そんなに怪我をして」

紛れもなくシーザーでした。村を築き上げ、暴力だけが支配する魔界のしきたりに反旗を翻した英雄。

「今日はギーガに新しく村に入ってきた仲間を紹介しようと思つてね。君もきつと喜んでくれるはずだ。こちらへきましたまえ」

ゆつくりと影が近づいてきました。

「まだ覚えているかな？」

シーザーが半ばからかうように、半ば嬉しそうに言いました。覚えているも何もありません。やってきたのは死んだはずの戦友だったのです。涙が自然に湧いてきました。さらに後ろにはどうやって戻ってきたのかネックもいいます。

「オツサン、心配したぜ。なんだか大変なことに巻き込まれたんだって？」

ああ、そうだよ、そうだった。俺は何かひどいことに巻き込まれたんだ。そしてお前を逃がして勝ち目のない戦いへ飛び込んでいったんだ……口にしようとはしましたが、言葉には出ませんでした。しかし、みんな何となく分かってくれたようです。

「もう大丈夫だよ、ギーガ。村のみんなも君が戻つて来てくれて喜んでいゝ。本当に良かったよ」

シーザーの影から村人がたくさん出てきました。それらは皆、きらびやかな陽光を浴びて輝いていました。シーザーも輝いていました。しかし戦友は逆光になっているのか、黒い塊のようでした。

戦友は倒れたままのギーガにゆっくりと歩み寄ると、そつと手を伸ばしました。

「さあ、みんなのもとへ戻っておいで。もう一度村を作り直そう」

シーザーが優しい声で言いました。

「オッサン、何もつたいぶつてんだよ。ひよつとして立ち合いで俺に負けるのが怖くなったから村に戻りたくないのか？」

ネットクが勇ましい声で言いました。相変わらず生意気な奴だな、と思いましたが、今ではそれがどれほどギーガを元気づけたことでしょう。

「ねえ、また皆の農耕具作つてよ！ やっぱりギーガさんのが一番なんだ！」

村人が元気よく言いました。

さらに涙が溢れてきました。まだギーガの目の前には戦友の手があります。

——ずっと待っていてくれたんだな……

ギーガはその手をしっかりと握り返しました。

こうして魔界からグレイト・ヴィレッジは消えさった。跡形もなく。

スラ吉はようやく屋敷が燃え尽きたことを悟ると、トリシーの死骸の中から這いずり出た。トリシーにはグレイトドラゴンと同じ、炎と吹雪を無効化する力があつた。それが死んでもからもそうなのか心配だったが、あの状況ではそれに賭けるしかなかった。

どうやらその賭けにはなんとか勝つたようだ。生き残つた安堵感があつたが、まだ警戒心は解いてはいなかつた。というのも村人ならざる者たちがそこらへんにいるかもしれないからだ。シーザーがどこに行つたかは分からないが、とにかくまずは村人に見つからないようにシーザーの元にたどり着く必要がある。シーザーなら何とかしてくれるはずだ。

そこまでなんとか考えを整理したところで、すぐ近くから歓声が上がるのが聞こえた。

——ニセの村人たちだ……！

危険なことなのは百も承知だったが、何をしているのか気になつた。幸い満月とはいえ周囲は闇で昼間より遥かに隠れやすい。その上奴らは何かに夢中になっているようだった。

スラ吉は絶対に気づかれないように茂みの影伝いに移動しながら——今度気づかれたら何をされるか分かつたものではなかつた——そつと近づいていった。

スラ吉は驚いた。そこにはニセの村人たちもいたが、探し求めていたシーザーもいたのだ。

(何をしているんだろう?)

切実な不安が突き上げてきた。まさかシーザーも偽物に入れ替わってしまったというのだろうか? もしそうなら——いや、信じるんだ、シーザーを。あの英雄を。彼が偽物になるなんてありえない。

しかしスラ吉はシーザーの前に出る気にはなれなかった。ただ単に頭でそう信じていただけの話だったのだ。そしてそれがむしろスラ吉の寿命を伸ばすことになった。

シーザーの近くにはギーガが倒れ込んでいた。ひどいケガをしているようだったが、すぐにポポロが壺から取り出した薬草類で治療したようだった。

「やったな! これでギーガも俺たちのもんだぜ!」

「俺たち無敵だぜ! こいつらを使えばいくらでも金儲けができるな!」

「イヤツホウ——! これからの人生バラ色だぜ。もう強い魔物に怯える必要なんてなくなるぜ!」

みんな口々に何やら喚いていたが、スラ吉には耐え切れない耳障りな騒音でしかなかった。何をやっているのか、全く想像がつかなかったが、今日の前の光景がとんでもなく不吉で汚らしいことだというのは何となく肌で感じ取れた。

そうこうしているうちに、怪我がある程度治ったギーガが立ち上がった。周囲からは拍手が巻き起こった。

ギーガはなぜか片足が地面に埋まっていたようだが、それを無理矢理引っこ抜いて立ち上がった。ギロギロ輝く一つ目は夜空にもうひとつの満月が掲げられたかのようだった。それはスラ吉を射抜いているような気がして、思わず身震いしながら茂みのさらに奥へと身を潜めた。

「あ、そうそう。せっかく新入りが来たんだからさ、みんなで特別焼肉パーティーやろうよ」

ポポロがそう言うと、周囲のモンスターが沸き立った。

「おおー！ いいぞ、いいぞ。盛大にやろうぜ！」

「さすがポポロさん、やってくれるぜ！」

「おお、これからが収穫祭本番だな！」

一体何をしようというのだろうか？ 分からないが、何かの儀式のようなものだろうか。

「村中のモンスターを全部呼んできてよ」

ポポロがそう命じるまでもなく、すでに全てのモンスターは集まってきていた。

「これで全員揃ったんだよね？」

「ああ、そうだぜ」

「本当に？ 遅れても知らないけど、もう始めてもいいのかな？」

「ああ、いつだってバッチリだぜ」

「じゃあ、このあたりでちよつと集合してよ」

「ここらへん？」

「うん、そうそう。もつと寄り添って」

「これでいいか？」

「うん、バッチリだよ。よし。それじゃあ、二人とも存分に食べていいよ」

スラ吉にはポポロが何をしたがっているのか全く見当がつかなかった。周囲のモンスターの様子を観察してみたが、いたずらもぐらやイエツタなど、みんなスラ吉と同じようにわけがわかっていないようだ。

「二人共？ 二人つて誰と誰だよ？」

誰がそう言ったのかわからないが、その直後にギーガのこん棒が振り下ろされた。轟音とともに集団の3分の1くらいは一瞬にしてミンチになった。

生き残った村人たちがようやく何が起こったのか把握しかけた頃、シーザーらしきグレイトドラゴンが灼熱の炎を吐いた。

ゆらめく炎の中を不吉な影絵が踊り狂った。それは絶叫しながらメリーゴーランド

のように炎の中をクルクル回ったが、一周するたびにだんだんとやせ細っていった。瘦せていくたびに絶叫は徐々に低く、小さくなつてゆき、やがて影絵が完全に消えたと同じ時に炎は闇の中へ消えていった。後にはチロチロと燃える熾火がついた真つ黒な灰だけが残った。スラ吉は気づかなかつたが、そのとき炎に赤く照らされたスラ吉はスライムベスのような体色になっていた。

グレイトドラゴンはその灰を砂糖菓子でも食べるように、ひとつずつ食べていった。まごうことなき、本来のグレイトドラゴンの性質。

スラ吉は恐怖し、物音を立てないようにして後ずさつた。

——慎重にやるんだ……

そう考えていたが、もはや体は制御不能になっていた。代わりに操縦席に座っているのは恐怖という名の不動の帝王だった。

スラ吉は一目散に逃げ出した。逃げる時に茂みの葉や枝が体に当たつて音を立てたが、もはや構つていられなかつた。

一步でも遠く、この惨劇の舞台から遠ざかりたい、そして二度と振り返りたくない——それだけをひたすら念じながら、スラ吉は走つた。ただひたすら黒く、宇宙のように真空中で息苦しい森の中を。

何か森の方から物音がしたような気がしたが、今のグレイトドラゴンとギガンテスを仲間にして上機嫌のポポロにとつては何ら問題にはならなかった。どうせ動物か何かだろう。そう思っていた。仮に雑魚モンスターの一匹や二匹が生き残っていたからといって、それが何だというのだろう。ただ無視して階段を下りるだけだ。

ポポロの本当の友達も、ポポロが用意してくれた“焼肉”に心から満足しているようだ。この時のために雑魚モンスターを麻薬漬けにして、その体内に麻薬の成分を濃縮させておいて良かった。入念な下準備こそが成功へ至る一番の近道なのだ。

ギガンテスに下半身を潰されたイエツタが、這いずりながら移動してきた。体毛の一部が焼けて黒く縮れていた。相変わらず、長い舌が口からだらりと垂れている。イエツタは最後の力を振り絞って首を持ち上げた。

そしてポポロを見た。

力尽きようとする瞬間、ニユつと手が伸びてきて、イエツタを掴み上げた。その間、蟻人形か剥製のような目をずっとポポロに向けてきた。ギガンテスはそのままだイエツタを口の中に放り込んだ。ギガンテスの口から飛び出したイエツタの頭は、窓から身を乗り出しているように見えた。無表情のまま、その目だけは相変わらずポポロを凝視していた。

もう死んでいるはずなのに。



ギガントスの手がイエツタの顔に当てられた。手で一気に口の中に押し込むと、バキと吸い込まれていった。最後にあの長い舌がギーガに口から伸びていたが、それもチュルリと吸い込まれていった。

それで、今回の特別焼肉パーティーは無事に終わった。

## 39. ダンジョンの深淵にて

ポポロの目の前にうずたかく積まれたモンスターの死体の山が、一瞬で燃え盛って灰になった。グレ太の盛大な焼肉パーティーだった。かなり久しぶりだろうから、すごくうれしそうだ。

もうもうと立ち込める煙。その中には一匹のベリアルが横たわっていた。中々のレアモンスターだ。レアなモンスターは残しておいてくれるように頼んでおいた。今までもすでに二匹ほどのモンスターを新たに仲間に加えている。やはり戦力は多いに越したことはない。

「クソツタレ……一体何だっただよ……」

ベリアルが跪きながらそう言った。膝のところを中心にして、黒い染みが広がっている。きつとトルネコの銃撃が命中したのだろう。

「クソツタレめ！ いきなりダンジョンに入ったと思ったら、何がどうなっただよ！」  
えらく威勢がいい。これはもう少し痛めつける必要があるそうさ。

ポポロのそんな気持ちを察したのか、いつの間にか近くに来ていたライアンが先ほど拾った棍棒で思いつきベリアルを打ち据えた。

「イオナ——」

小賢しくも呪文を唱えようとしたが、その詠唱はライアンの棍棒でベリアル意識ごと切斷された。

「これくらいでどうだ？」

「うん、ちょうどいいと思うよ。ありがとう、ライアンさん」

「いや、パーティーのために当然のことをしたまでだ」

ポポロは地面にうずくまって痙攣しているベリアルの後頭部に、そつと手を置いた。洗脳は一瞬で、完璧に済んだ。

「ああ、一体どうなってるんだ……すごい……いてえよお……」少し意識を取り戻してきたようだ。しかしベリアルの視点はまだ定まってない。

「大丈夫だよ、すぐに治してあげるから。ねえ、クリフトさん！」

いかにも渋々といった表情でクリフトがやってきて、面倒くさそうにベホマを唱え——一瞬にしてベリアルの傷が完全に治った。

「はい、じゃあ皆に紹介するね。今回また新たに仲間になったベリアルさんです、拍手——」

ポポロがベリアルの手を取って、上に掲げた。ベリアルは先ほどまでの悪態はどこへやら、少し恥ずかしそうに頭を下げながらトルネコその他諸々に愛想を振りまいてい

た。

「あ、はい、よろしくお願ひします、今日から皆さんの一員として恥ずかしくないよう、一生懸命頑張つていきたいと思ひます」

「まあ、そんなに緊張すんなつて」

トルネコが緊張でガチガチのベリアル肩を、肉厚の手で叩きながら言った。

「せっかくだし、ここらへんで他の仲間モンスターも紹介してやれよ」

「そうだね」

ポポロは短く返事をする、モンスターの壺を取り出して自慢の精鋭たちを解き放つた。

まずはグレ太。

「このグレイトドラゴンは僕のモンスターの中で一番お気に入り最強のドラゴンなんだ。体力、知力ともに最高クラスで、耐性も抜群。もちろん攻撃面でも尻尾のなぎ払いに噛み砕き攻撃、そしてドラゴンと言ったらやっぱりこれ！」

ポポロが合図すると、グレ太は灼熱を噴き出した。ベリアルの鼻先をかすめる。炎の熱気によって、向う側の洞窟の壁が崩れかけの肉塊のように歪んだ。

「ちなみにグレ太は普段はおとなしいけど、怒りっぽくてキレると大変なことになるから、少し気を付けてね。ええと、それから」

次の壺を取り出す。

「お次はスライムナイトのピエール君。彼はとっても真面目で礼儀正しい性格なんだ。回復魔法も使える頼れる万能戦士さ」

「はあ、どうもよろしくお願いします」

「ピエールはいろんな装備ができるんだけど、今はあまりいいのがないから、戦力的には決定力不足かな。器用貧乏って感じ。とりあえず、彼には一刻も早く何かいい装備をさせてあげたいな」

そこでまた次の壺を取り出した。

「ここからは君と同じ、今日仲間になったばかりの新入りたちだ。でもレベルはすでにあがっているから、君にとってはだいぶ先輩になるね。まずは新入りその一、ホークブリザードのホーク」

狂暴そうな鳥がベリアルの前に出現した。鳥類はどこを見ているかよく分からないあの目が好きになれない。かなりのレベルがあるようだが、グレイトドラゴンを仲間に行っているのになぜホークブリザードなどという微妙なランクのモンスターを仲間にしたのか……確かに強いほうではあるが、せいぜいミドルハイクラス程度の強さだ。レベルは自分よりホークの方がはるかに高いが、強さ的にはすぐに追いつける自信はある。なにせ自分は上位悪魔なのだ。魔王没後の魔界戦争では負け組のヘルバトラーについ

たせいで所領も財産も失い、それから不思議のダンジョン潜りで生計を立てる羽目に陥ったが、そうなる前は魔界の貴族だった——地位も実力も両方とも。部下のアークデーモンやミニデーモンたちを指揮して勇敢に戦った記憶を思い出す。あの時は俺も輝いていたな……思い出にひたっている間に、ポポロがもう一匹のモンスターを取り出していた。

今度はベリアルも目を開いた。

「そして最後に紹介するのがこちら。はぐれメタルのハグリン。仲間にするのは苦勞したけど、やっぱりレアモンスターと言えばこれだよ。全ての攻撃を防ぐ万能の盾。パーティー全体の盾になってくれる頼もしい存在なんだよ。以上でモンスターの紹介を終わります」

「オイオイ、肝心なのを一匹忘れてるぜ」トルネコが言った。

「俺たちの『命の恩人』を紹介しなけりやな」

ポポロもすぐに気づいてまた新たな壺を取り出した。

こいつらの『命の恩人』と聞いてどんなモンスターが出てくるのかと期待していたが、まさか出てきたのはももんじやだった。こんな雑魚モンスターが最後に登場するのは予想外だ。確かにレベルだけはマックスまで育てているが、元々弱い上に上限レベルも低いことも相まって今の自分より弱い。こんなモンスターが『命の恩人』と呼ばれ

ていることに若干の不安も感じたりした。もうどうしても負け組にだけはつきたくない。こいつらが弱いのなら……いや、そんなことはあり得ない。自分は手も足も出ずに降伏した相手なのだし、今までのモンスター軍団を見ても最強と言ってもいいくらいだ。魔王とすら張り合えるだろう。

きつと今までに何かあつたに違いない。ダンジョンではどんな不思議も起こりうる。それかただ単にペットなのだろうか？ 最初に仲間にしたモンスターを記念に置いておく魔物使いもいる。色んな考えが頭の中を巡ったが、ふと気が付いてみるとももんじゃが足元にいた。丁寧にお辞儀をしている。ももんじゃは見た目の割に好戦的で狂暴なのだが、このももんじゃはよく飼いならされているようだ。

自分も思わずお辞儀を返した。

「まあまあ、仲良くやってくれや」トルネコが言った。

「それよりもよ、とりあえずお前さんの名前を決めておこうじゃないか」

「うーん、そうだなあ……単純に『ベリア』でいいんじゃないかな。あまり変な名前を付けても覚えづらくなるだけだし」

それには全員が消極的に賛同してくれた。代案もないし、覚えやすいという点ではその通りだからだ。特に向う側に見える双子の人間の姉妹はめんどくさそうな顔をしていた。それが自分の前の名前を言おうかと思っただが、不思議とそれだけは思い出せない。

かった。親の名前も友人の名前も全て思い出せる。しかし自分の名前だけは思い出せない。

「ベリア、君の名前はベリアだよ」

そう言われて自然と跪いた。それはベリア自身も意識した行動ではなかった。

ポポロがベリアの額に手をかざし、もう一回名前を言った。

なぜだか心の中が安心感で満たされ、充足した気分になった。以前の自分には欠けているものがあつた。それを今、この人が与えてくれたのだ。俺の名前はベリア。今はもう、それ以外の何者でもない。

悪魔神官はどつかりと椅子に腰を下ろした。落胆しているのか、疲れているのか、怒っているのか、あるいはその全てなのか、無表情な仮面の上からでは何も分からない。「部屋の明かりを消しなさい」

声にも全く抑揚がなかった。多分、少し機嫌が悪いのだろう。そう勘ぐりながらアークデーモンは言われた通りに部屋の明かりを消した。狭い部屋は一瞬にして、無限の真つ暗な空間となった。ほどなくしてから、机の上に置いてあつた水晶玉が光り始めた。はじめは弱く、脈動しながら、だんだんと明るくなっていく。悪魔神官は水晶玉に手をかざしてブツブツ呪文のようなものを唱えていた。



呪文の詠唱が終わると、光の脈動が止まった。そして水晶玉の上の空間に、突如として人間の上半身が浮かび上がった。見た感じはどこにでもいそうな普通の格好をした女にしかみえない。ハイミドル階級の主婦、といったところだろうか。

「ご機嫌麗しゅう、マダム」悪魔神官は慇懃に頭を下げて言った。

「堅苦しい挨拶は抜きにして、本題に入りましょう。頼んだ仕事はうまくいったのかしら？」

悪魔神官は顔をゆっくりと上げた。

「いいえ、残念ながら。あと一步のところまで追いつめたのですが——

「そこからがしぶとかつたんでしよう？」女が割り込んできた。なぜか失敗したのに嬉しそうな口調ですらある。

「ええ、まあ、そうです。あと一撃、というところでうまいこと逃げられてしまいました」  
「あなたが開発したキラーマシンは？ あれの戦闘能力には期待していたのだけど、実際に使えそうなの？」

「敗れはしましたが、かなりの戦闘能力で相手に重傷を負わせました。試作段階ではまずまずといったところだと思います。さらに今解析したところチップも無事だったよ  
うなので、さらなる改良を加えることもできます」

「それにはいくらかかるの？」

「製造費も含めて二、三千万ゴールドあれば十分かと」

「量産化には？」

「私にはそこまでは分かりかねます。原材料の調達費や人件費などで変わってきますから」

「魔界ではどれくらいなの？」

「さあ、私は専ら研究職なので会計の方は……ただ、聞いたところによるとおおよそ数百万ゴールド程度でしょうか。さらに特殊な技能を持つ専門家や技術屋も必要ですし」

女はそこで何も言わなくなった。多分、先の悪魔神官の答えから、自分の事業にどれだけのコストがかかってどれだけの利益を生み出せるか、暗算しているのだろう。事業家にとって事業とは子供のようなものだ。出来がいいのか、悪いのか、きちんと予測して必要なら事前に教育しておく必要がある。長考していることから、ずいぶんと教育費が高くつく事業のようだ。

「あなたにもう一つききたいことがあるのだけど。キラーマシンは魔法使いに対してどう戦うの？」

「魔法使い？ ダンジョンに潜っているのは商人と戦士だけでは？」

「事情が変わったのよ。あの人、どうやったのか知らないけど元の勇者ご一行のメンバーをまた集めて、ダンジョンに潜ったそうなの」

「またまた珍しいことがあるものですね。ですが変わりませんよ。キラーマシンの戦い方というのは、目標を見つけたら最短距離で排除します。たとえ相手が誰であろうと」

「つまり、勇敢だけどワンパターンな戦いしかできないのね」

「ええ、まあ、おっしゃる通りですね。ですがどちらかが死ぬまで動きを止めることはありませぬ」悪魔神官は渋々認めた。

自分もあの戦いぶりを見ていたが、あれは勇敢とは違うと思う。恐怖心が元々ないものが勇敢になどなれるはずがない。あの無表情を見ているとまだ悪魔神官の方が愛嬌を感じるくらいだ。

それからはアークデーモンにとってはよく分からない会話が続いた。

「戦術思考A-Iの強化は？」

「トライ&エラーでデータを集めるしかありませんね。そのデータは魔界のキラーマシン製造大手3社で独占しており、今からそこに食い込むには――」

「特技の習得は？」

「新たにチップを搭載することである程度可能です。さらにチップ容量に余裕があれば、特技は後からでもある程度習得可能かと」

「今からじゃ時間がないわ。手っ取り早い方法はないの？」

「そればかりはなんとも……チップの増設にも限度がありますし、あまりチップが大きい

すぎると故障の原因にもなります」

「手頃な兵隊だと思っていたのだけど、けっこう手間のかかることね」

「ええ、魔界では子育てより大変だと言われていますよ」

「まだ子供のほうがマシだわ。子供はほっといても育つもの。これなら普通の冒険者を雇った方がいいかしら？」

「冒険者は集まっても言うことをきくかどうかわかりません。所詮人間ですから。しかしこいつの忠誠心は絶対です。裏切ることを知らないのですから。それに戦闘能力も並みの冒険者より遥かに上ですし、いくらでも強化できます」

「それにはずいぶんお金がかかるみたいね」

「まあ、何事も先行投資が重要かと思われまます」

「先行投資でケチる奴はいい収穫祭を迎えられない」

女が呪文のように呟いた。それは最初、まさしく呪文にしか聞こえなかった。

「はい？ 今、なんと……？」

どうやら悪魔神官も同様のようだった。

「いいえ、まあ、こつちの話よ」

女は腕を組みなおすと、大きく息を吐いた。もうこいつ、決心したんだ——アークデーモンがそう思った瞬間に、女は口を開いた。

「チップの改良に量産化、全部お願いするわ。お金はいくらかかってもけつこう」

「はい、わかりました。しかし、ずいぶんと大盤振る舞いですね」

「改良・量産化の準備段階として100億ゴールドほど銀行口座に振り込んでおくわ。詳しい技術的な話はすぐに専門家と担当の人間を派遣するから、そっちと話し合っ  
ちようだい」

「仰せのままに」

「念を押すようだけど、お金はケチらなくていいから。いくらかかってもいい。いくらかかってもいいから、あの人たちを確実に始末できるような精強なマシン軍団を作り上げるのよ」

「言わずもがな、ですわね」

「それじゃあ、私を満足させる結果を待ち望んでいるから」

女は女神のようであり、また破壊神のようでもある笑顔を浮かべていたが、やがてそれもだんだんと薄くなっていつて闇の中へ溶け去っていった。しばらく沈黙が続いた。

おかしいと思ったアークデーモンは照明のボタンを押した。明るくなった部屋に、闇に慣れた目が少しくらんだ。

もうすでに、悪魔神官の姿は見えなかった。